
幻象-Phenomenon

闇十郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻象 - Phenomenon

【Nコード】

N0226G

【作者名】

闇十郎

【あらすじ】

日常の隙間でひそかに起きている怪事や変事。その根源は人にあらざる存在、《幻象》。奴らは不気味なまでの自然さで、暴力的に我々の平和を乱してくる。明確な悪意を持つ者や悪戯好きな者。色んな奴がいる。憐れ、それらと一度出会ってしまえば常識に引きずり込まれ、泥沼の恐怖を味わうことになる。日常に突如ひらく小さな穴、その穴に落ちた者達の戦慄の体験を御覧いただく。感想・評価募集中。ツイッター始めました。よかったらフォローして下さい。@yamijyuro

ブログ：邂逅・madness visitor（前書き）

初投稿で、処女作です。至らぬところも多々あるでしょうが、お付き合いただければ幸いです。

ブローグ：邂逅・madness visitor

何が起きたか分からなかった。

壊れた電灯がチカチカと明滅し、とあるアパートの一室を照らしている。

そこはこの世の地獄だった。

腹を裂かれて中身をぶちまけた女性。男性とおぼしき死体は首から上を無くし、紅い液体を延々垂れ流し続けている。

その中心に少年と少女がいた。

黒地に紅いラインが幾つも入ったゴスロリ服。肩よりも長い灰色の髪と異様に白い肌、闇を称えて光る深紅の双眸。

ただでさえ異様な容姿の少女は2人の人間を惨殺し返り血を浴びて笑っており、ますます怪異な雰囲気醸し出していた。

対する少年は両親を殺されたショックから顔も上げられず、俯き震えるばかりである。

開け放たれた窓から月明かりが部屋に降り注いでいる。緩やかな春風が抜け、血と腐臭を沸き上がらせた。

異質な、けれども幻想的な美しさが漂う光景。生季節に吹く死の風に華奢な身体を任せる少女もまた、妖花のような美を誇っていた。

少女は感極まったように泣きそうな声で言った。

「ずっとずっと会いたかったよ。明ちゃん^{あき}」

死人同然の顔で少年は少女を見上げる。目が離せない。ほとんど思考はできないが、この少女に何か見覚えがあった。

「ゆっくりしていききたいけど、私には時間がないの。また会いに来るから。待っててね」

そう言っ て少女は名残惜しそ うに姿を消した。
静寂が辺りを包む。

少年は呪縛から解放され再び頭を垂れた。

少年の視界が歪んでノイズが混じる。 部屋の色々なモノが消えていく。

様々な家具、撒き散らされた両親の欠片、 床だけに留まらず壁さえも塗装している2人分の血液。

それは混乱の極みが引き起こした現象か。 はたまたこの悪夢の続きなのか。

考える暇もなく少年の意識は黒に閉ざされた。

第1話：蔽和 - peace (前書き)

隠蔽 + 平和 = 蔽和です。

第1話：蔽和 - peace

静かな朝。

普通の家庭なら人が廊下を歩く音や朝食を準備する音、挨拶なんかが聞こえるはずの時間帯。

しかし、榊原家は無音。耳鳴りも恋しいくらいに完全に沈黙している。

この家は半年前の悲劇から音と温度を喪失している。しかしながら、ここの住人はその実感がないのである。

「ふわぁあ……」

唯一の音源は事件の生き残りである長男、あきと榊原明人。彼の欠伸が静寂を破る。

「今日はクラシックでもかけてみるか」

リビングに出てオーディオのスイッチをいれる。安らかな曲が空虚なアパートの一室を満たしていく。

「今日もいい天気だな」

カーテンを開けると秋晴れの空が目の前に広がる。12階建てアパートの8階に位置するこの部屋は見晴らしはなかなかのものだ。

見る限りは緋森市は自然と文明が共存共栄する街という印象を与えるかもしれない。

だが実際は交通網を発達させ都会化するという計画が中途半端な状態で頓挫しただけなのだ。

「……おっと」

ちよつと物思いに耽っていた明人はトースターの音で現実引き戻された。そうして食事が終わるとすぐ支度して家を出た。

「いつてきます」

もちろん返事はない。だが虚しい挨拶が毎日の習慣になっていた。

それでも、虚しいとは思わない。やはり当人には自覚がないのである。

駐輪場まで降りてチャリに跨がる。

ケータイに繋がるイヤホンを装着して走り出す。

ディスプレイには毎朝恒例の新着メッセージがあつた。開くと音声が生再生されはじめた。

『おっはよー！ お兄ちゃん。今日も元気？ 今日米米国最後のテストが帰ってきたよ。数学以外は最高なんだ！ ラストだし、かなり気合い入れたから当然だよ。それじゃおやすみなさい。あともうすぐ会えるね！ バイバイ』

「ああ、もうすぐだ」

ぼそりと一人呟く。

朝から元氣過ぎる声に頭が痛い。頭は良いはずだが、アメリカとは時差があることをなかなか理解してくれない。案外わざとかもしれない。

これは男子たる者誰もが一度はして欲しいと思うであろう美少女からのモーニングコールという類いのもの。

そんなさやかな願いを叶えたのは明人の場合、現在アメリカに一年間だけ留学中の妹、藍^{あい}だった。

相手が妹なので明人に特別な感情は無かつた。

だが明人の友人で藍と面識がある奴らにこのサービスを知られた時は酷かつた。

ほんの数時間後には学校中の男共に広まり、散々茶化された。しかし最終的に奴らは嫉妬に狂っていた。

更には藍の熱烈なファンがケータイを強奪する作戦に出たりもした。

結局その騒動は明人の慈悲によって沈静化された。

次第に慈悲はエスカレート。

今ではたまに写メで送られてくる画像までも餌にしてリスペクトを大量獲得して明人はある意味教祖の立場に君臨していた。

今では落ち着きを取り戻し、犯罪になりそうなこれらの行為から足を洗った。

しかし、あと約2日で本人が帰国する。そうすれば必然的にばれてしまうだろう。

「ま、別にいいんだけどな」

藍にお灸を据えられること必死なのだが、その反応を見るのは楽しみである。

ニヤリと口元が緩んだ。

「何笑ってんだ？ 明人。変態の素質があるんじゃないのか」

「ふん。そんなこと知り合って一瞬で分かっただろ」

「それもそうか」

しばらくこいでいると友人が数人合流した。

交友関係は広く浅くがモットーだ。男子も女子も関係ない。

遊ぶ相手には事欠かさないが、親友と呼べる奴はいない。

「悲しいとは思わないな」

明人の口が勝手に言葉を紡ぐ。すかさず、友人がツツコんでくる。

「お前、独り言多すぎ。その癖何とかならねーの？」

「三つ子の魂百まで。直るもんじゃない」

「3歳からブツブツ言ってたのか、キモいな」

「そうじゃなくてだな……」

騒がしい登校。両親は長期旅行中、妹は留学で実質一人暮らしの身には嬉しい。

「有意義な生活だよな」

自転車小屋にチャリを置くとまた独り言が漏れた。

第2話・夢惨・tragic（前書き）

夢＋無惨（tragic）＝夢惨です。

第2話：夢惨 - t r a g i c

明人が2階にある教室に向かう途中で状況は一変した。

「キヤーーッ！」

突然女子の悲鳴が校内に響き渡った。

「なんだ？」

不安を感じながらも好奇心に駆られて走った。悲鳴は上の階から聞こえた。

2、3階は異常無し。4階の廊下に出ると1つの教室に野次馬が集まりつつあるのが見えた。

遠目からでもかなり恐々としているのが見てとれる。

「ごめん、ちよつと通して」

本能が行くのを拒否している。しかし、踏み出す足も人を掻き分ける手も止まらない。

そして4階の特別講義室にたどり着く。

「あ」

見てしまった。

朝の陽光に照らされ真紅に輝く教室の中央にそれはあった。

普通の教室よりかなり大きな部屋に大量の机を繋げた粗末な舞台ができていた。その上にそびえる巨大で醜悪な肉のオブジェ。

舞台の縁には10本の腕が環状に生えていた。肘から先を輪切りにされその断面を机にくつつけて。

その中心には誰だか分からない5人の生徒がいる。

そのうち4人の男子は頭部と両腕を無くしている。そしてそれぞれが外側に向かって無い頭を垂れ、そのグロテスクな切り口から赤黒い液体をこぼしつづけている。

その4人が作るさらなる輪の中に1人の女子がいる。やはり腕は

無い。

彼女は天井からぶら下がっている鎖に繋がった返し付きの杭に両肩と後頭部を貫かれ、支えられながら不安定に立っていた。

普通なら俯く頭を短い鎖が無理矢理あげさせている。それは憐れな女の子の表情を晒すためだろうか。

目を裂けんばかりに見開き、半開きの口からはだらだらと血を流す。そんな歪んだ顔を。

パシヤア

気の抜けた音に明人の思考が中断される。

振り向くと男子も女子もケータイで血のオブジェを写真に収めている。

「なにしてんだ！ やめ、うわ」

明人は誰かに押されて教室に放り込まれた。

血の海と化した床で滑ってひっくり返り、立ち上がることもままならずもがいた。

その間生徒達は明人と血のオブジェを耳障りな音と共に撮り続ける。

前後のドアだけでは足りないらしく廊下の窓をぶち破りスペースを確保する奴もいる。

狂気のカメラマン達は飛散したガラスなど気にも留めずすぐにその場所を埋め尽くした。

明人を見つめる顔顔顔顔。誰も彼も気が触れた面持ちで撮影を繰り返す。

突然シャッター音が止んだ。そして狂人達は一斉に黒板を指差した。

気持ち悪いくらい息が合っている。

明人は恐る恐る指差された場所を見た。

『SOON』

緑、黄、赤、白と色とりどりのチョークでさも楽しい落書きのよ
うに描かれた単語。

理解不能だった。何が『すぐに』なのだろう。

「キネンサツエー」

誰かが奇声を発した。

パシャパシャパシャパシャパシャパシャ

すぐさま撮影が再開された。

あまりの意味の分からなさで、何かが切れたような気がした。

明人は意味不明な言葉を叫びながら狂人の群れに飛び掛かろうと
した。

しかし、血で滑って激しく転倒する。暴れて起き上がろうとした
時机を蹴り倒してしまった。

それは、オブジェの崩壊を招いた。

時の流れがゆるやかになっていくようだった。

腕と男子の体がゆっくりと落ちてくる。

ただ1つ。吊るされた女の子は足場を失い、ぶらぶらと揺れてい
る。

明人と女の子の目が合った。抜け殻の瞳。

完全に命を失ったはずの女の子は表情を変えて、嗤った。

「うああああああ！」

椅子と机が弾き飛んだ。

「ど、どうした！？ 榊原」

教師の質問。不思議そうにこちらを見つめるクラスメイト達。黒板には訳の分からない数式。

「……………へ？」

状況が飲み込めず突っ立ったままの明人の口からは驚くほど間抜けな呟きしか出なかった。

「ブツ、ヒツハツハツ」

「何だよ、明人、つく、ははっ」

「キモイ」

誰かが吹き出したのを皮切りに教室中が爆笑の渦に巻き込まれた。数学教師まで堪えきれず、くつく、と笑っている。

明人は体温が急上昇するのが分かった。

「ああクソッ！」

全力で教室から飛び出した。

授業中にも関わらず廊下は何があつたのか確かめようとする教師と生徒で溢れていた。みな好奇心旺盛な視線を投げ掛けてくる。

今なら陸上競技で全国を狙えそうな速さで明人はその中を駆け抜けた。

「失礼します！体調が悪いのでベットを借ります」

明人はスライド式のドアを破壊せんばかりに開け保健室に飛び込んだ。

「え、ちょっと！待ちなさい」

校医の制止を振り切り空いていたベットに突進しカーテンを閉めた。

カーテンの向こうで校医はしばらくおろおろしていたが、結局何も言わずに仕事に戻った。

（んだよ、夢かよ。もう最悪。引きこもりたくなっちまったよ）
恥ずかしさと酸素を求める脳の指令と今後の学校生活の事で頭は
カオス状態だった。

頭が整理されてようやく冷静さを取り戻したのは10分後。
ケータイを確認すると本日最後の授業の真っ只中だった。
それが終われば明人の恥態が電光石火で全生徒に知れ渡るだろう。
明人は放課後、生徒が全て出払うまでここに居ようと決心した。
そして残りの時間は誰も面会に來ないことを祈った。まあ、授業
をサボってまで來るわけではないのだが。

終礼開始のチャイムが鳴った。

それからもう数分後、帰宅する生徒や外で活動する部の部員達の
話し声が聞こえ始めた。

幸運にも保健室は1階、昇降口のすぐ近くにあるのでそういった
状況は手に取るように分かる。

校医の先生も「榊原くん、帰る前に机の上のプリントに書いとい
てね」と言っていなくなった。おそらく職員会議に行ったんだと思
う。

保健室には明人1人が残された。

昇降口から人の気配が消えるのを今か今かと待っていると唐突に
保健室のドアが開いて誰かが入ってきた。

（まさか、クラスの悪魔共が來た！？）

夕日に照らされたカーテンに少女のシルエットが大きく映る。

「特別講義室に來て」

「誰？」

飛び起きてカーテンを開けたがその女の子はいなかった。

「しかし特別講義室とはまたタイムリーな」

特別講義室は4階にあり主に補習に使われるため普段人は来ない。密会にはうってつけだろう。

しかし明人が先ほど見た夢。はつきりとは思いつけないがあれも4階が舞台ではなかっただろうか。

背中に悪寒が走った。

やめてしまおうか。でもたかが居眠りして見た夢にびびるのも不甲斐ない。それに女の子に誘われて行かないのもどうかと思う。

「分かったよ。行つてやる」

散々悩んだ末、明人が決断した時にはもう校舎に人気^{ひとけ}はなかった。

第3話：幻実 - feel like heaven (前書き)

現実 + 幻 || 幻実

feel like heaven 《天国みたいな感じ》

一部文字化けを意識して書いているところがあります。

第3話：幻実・feel like heaven

保健室を後にした明人は無駄に階段を時間をかけて登っていた。足が震えてるし気分は最悪だ。

「なんで自分の学校をこんな怖がつてんだよ。バカみたいじゃん。でもなあ……」

あの夢を思い出そうとすると頭の片隅がチリチリと痛んだ。しばらく考えてあんまり鬱々していると今から会う女の子に嫌われるだろう、という結論に至った。

明人はぐだぐだ考えるのをやめた。

「やっぱり……」

特別講義室のある4階は夢で見たのとはほぼ同じだった。

あの光景から人混みを取り除いただけ。そして窓からは昇る太陽ではなく沈む太陽が見える。

「もう、どうにでもなれよ」

意を決してドアを開けた。

茜色に染まる無人の教室。そこには、もちろん机で作られた舞台も血の海もない。

ただ窓の外を見つめる1人の少女がいた。

「俺を呼んだよね？」

明人は踏み込んでドアを閉めた。

少女がゆっくり振り向く。

豊かな茶髪をアップに纏めたポニーテールが揺れる。小柄な顔に愛嬌のある八重歯と大きな瞳が印象的な美少女だった。

（この子初めて見るなあ）

明人は人間関係において広く浅くをモットーにしていた。

そのため学校でかなり顔が広い明人にとってはこういう事態は珍しいことである。

しかも相手はかなりの美人。噂くらい聞いたことがあってもいいものだ。

「はじめまして、だよね？ 榊原くん」
凜とした声が響いた。

「こちらこそはじめまして。俺は榊原明人、よろしく」

堅苦しい挨拶なんかする気はなかったが何故かやってしまった。
しもさきはるか
「霜崎遥っていいいます。こっちこそよろしく」

2人は軽く会釈を交わした。

「それで用は？」

今の聞き方は少々無愛想だったかもしれない。

妙に緊張しているのは、悪夢で出てきた場所にいるからか。

「ちよつと聞きにくいんだけど…榊原くんのご両親って今どこにいるの？」

遥はそんなこと気にしていない様子で奇妙な質問を投げ掛けてきた。それを聞いた途端、明人はひどい頭痛を覚えて顔をしかめた。

「俺の親？ …… 2人とも長期旅行に出かけて日本にはいない、けど？」

明人は自分の喋る言葉がやけにたどたどしいことに気付いた。しかも立ち眩みに似た感覚まで襲ってきた。熱でもあるのかと思ってしまう。

「ちよつと榊原くん、顔色悪いよ。大丈夫？」

心配そうに顔を覗きこんでくる遥。それは嬉しいのだが本当に体調が優れない。

明人は遥から視線を逸らした。

黒板の前に首がない男と切り裂かれた腹から臓物を覗かせている女が目飛び込んできた。

「ッ！」

「榊原くん！ 落ち着いて！」

遥は急に暴れたした明人を正面から抱いた。この可憐な身体のと

ここに男を押さえる力があるのだろう。

しかし、そんなことを考える余裕は明人にはない。

「大丈夫、私がついてるから」

遥は母が子供にしてやるように優しく抱擁し続けた。

しばらくそうしていると明人も正気を取り戻してきた。

明人は正気になると今しがた知り合ったばかりの美少女に抱きつかれているのに気付いた。

「うわ！　ちよつ、と霜崎さん！？」

明人は正直焦った。初対面で積極的過ぎやしないか。

「え？　……あわわわわ！？　イタッ」

遥も明人の声に自分のしていることが分かったらしい。

顔を赤らめものすごいスピードで後退って見事に転けた。

乱れたスカートから見えるスラツとした太ももが男共に対して凶悪な破壊力を持っていた。

「だ、大丈夫？」

危ない妄想を60%断ち切り明人は手を差しのべた。

「ああ、あの、ありがとうございます」

手を握ったままぶんぶん振って礼を言う。

忙しい子だなと思う。第一印象と中身がだいぶ違うので変な感じがしたが、こんな子も面白いと思う。

明人は遥の手を離し、ちらりと黒板の方を見た。さっきの幻影はもう無かった。

「あまり思い詰めるのは身体に毒だな」

そう思っと思案を止める。何だか心地よい諦めを感じた。

その時、突如遥が手を握ってきた。同時に明人の頭痛も退いていった。

「ありがとう」

遥のおかげかは分からないがとりあえず礼を述べた。

「気にしないで。それより、あなたのご両親亡くなったんでしょ？半年前に」

また変な質問が繰り返される。

さつきは居場所を聞いたのに今度は親が死んだのか、と聞かれる。しかも確信しているように聞こえる。

「いや、だから半年前に旅行に行ったんだよ」

遙は嫌いじゃないが意味が分からない質問はやめて欲しかったので、今度は語気を強めて言い返した。

「よく思い出して。旅行になんか行ってないはずだよ」

遙は動じず手を握る力を強めた。不思議な感覚が明人に流れ込んできた。

「違う違う。確か夜中に家を出、て、うつ」

封印したはずの出来事が首をもたげはじめた。

それは暗い暗い闇の中。

『ずっとずっと会いたかったよ。明ちゃん』

「女の子が、家に来た」

人間味のない不気味な少女。どこか懐かしい女の子。

「そいつは今どこにいるの？」

遙の声が鋭くなった気がする。

「分からない。でも…」

『また会いに来るから』

彼女は予言を残して消えた。

「また来るらしい」

「そう…。他には何か思い出せない？」

遙は詰問するように尋ね続ける。

「それから…」

この先の記憶は更にぐじゃぐじゃだった。それでも無理に過去の映像が再生される。

『f y 戯 R s w c アイち@ | / か い ないわね』

不気味な少女は狭いアパートの部屋を物色するように見て回っていた。

『時間がかNり経ったし藍ノ*〕??変わって*よね』

空港で別れる直前に家族で撮った写真。それを少女は持っていた。

「藍……」

明人は混濁した記憶の海から1つの名前を掬い上げた。

「藍って誰？」

遥が聞いてくる。彼女は真剣そのものだ。

「俺の妹だ。今アメリカにいたがもうすぐ帰ってくる」

整理されてきた頭はあの事件の絶望的な部分を掘り出した。

『彼女を探しに行かなくちゃ。それから連れ戻して明ちゃんの目の前で殺してやる』

「藍が危ない！」

何かが全身を突き抜けて身の毛がよだった。イヤな汗が流れ出る。

「榊原くん！ し！Q x 齒 e f . # & a m p ; 榊」

遥が叫んでいるがよく聞き取れない。もつとハッキリ喋ってくれ。すぐに遥の姿も朧になり、そして影も残さず消滅した。

特別講義室の風景も変容してきた。

部屋中の『表面』と言うべきものが剥がれ落ち消えていく。

そしてその裏に隠されていたものが姿を現した。

黒板には『S O O N』の落書き。廊下には人が湧き始めた。

何も無い空間に机と5人の男女が出現し、何者かに次々と腕を切断されていく。あつという間に血のオブジェが造られた。

昼間の夢、幻とは一味違う惨劇の舞台が完成した。

それは現実以上のリアリティーを有していた。少なくとも明人はそう感じた。

そりたつ影。

明人が見上げたのは血のオブジェ。その悪趣味の程度を倍増させる吊るされた女の子。

明人は彼女を見たことがある。いつも一緒にいた。それは妹だった。

「そんな……藍」

困惑、理解、混乱、錯乱、狂乱、激昂、悲壮、消沈、そして絶望。明人は身も心も魂さえも損失したかに思えた。

「くくつ、誰もいないじゃないか」

明人はカタカタと笑い血の海に座り込んだ。家族は皆死に、天涯孤独になってしまったのだ。

その目は抜け殻。死体と同じ。

「大丈夫だよ。これからは私がずっと一緒にいてあげるから」

少女は明人の傍に寄り添い、優しい響きが目一杯詰め込まれた言葉を囁く。

彼女は榊原家の家族を皆殺しにした張本人。

どす黒いゴスロリ服においては目立たないが、驚くほど白い肌を返り血で紅く汚している。

「本当か!？」

明人の目に闇から発せられた希望の光が射した。

「でも条件があるわ」

「なんだよ？ 俺何でもするから、一緒にいてくれ」

支えを喪った者は弱い。

「私は明人の過去の過ちを赦してあげる。だから明人も私の行いを赦してね」

支えを得る条件は至極簡単。

「赦す、赦すよ」

弱い人間が飛び付くのも無理はない。

「良かった。これからはずっと一緒だね、明ちゃん！」

「ああ、もちろんさ。小夜」

少年とその家族を殺した少女。不和の関係にあるはずの2人は今

やお互いに名前を呼び合い、抱きしめあっている。

「キネンサツエー！」

パシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャ

いつの間にやら黙って2人を見つめていた狂気のケータイカメラマン達が一斉にフラッシュを焚いて乱写する。

「オメデトー」「オメデトー！」「オメデトーウー！」

バカみたいな喝采がカメラマン達から沸き起こる。

白い光と祝福の奇声で視覚も聴覚も役に立たなくなってきた。

明人は少女を抱き寄せた。少女の温もりだけがこの異形の世界で確かなものだった。

そして2人は深淵の暗黒に堕ちていった。

第4話：魍魎 - Lord of Elysion (前書き)

ちみちりょう
魍魎魍魎 + 妄想 II 魍魎

第4話：翹想・Lord of Elysion

顔はちよつと良いかな。これが遙が明人に抱いた第一印象だった。だが彼を人の来ない教室に呼び出したのは、特に恋愛感情を持っていたからではない。

もとよりこの学校の人間ではないし、明人と会うのも初めてだった。

明人が持つトラウマ。そこから《幻象》の情報を得るためである。遙は調査の末、確信に近いものをもって明人にコンタクトした。案の定、彼の様子がめまぐるしく変わるのを見ると自分は間違っ
てなかったと思えた。

どうやら明人は事件に関する記憶を別のものに置き換えているらしかった。

彼の両親が行方不明だと確かにこの地方の新聞で見た。こんな中規模都市ではあまりない事件なので結構大きく載せられていた。

しかし、明人は両親は旅行中だと言う。

酷い事故や災害に見舞われた時、人は記憶を失ったりその記憶を封じ込んでしまうことがある。それは人間の防衛本能の1つでさほど珍しいことではない。

明人はそれと似たようなもので嫌な記憶をマシなものにすり替えてしまっているようだ。おそらく現実では彼の親は天国に旅立っているのだらう。

だが、説明のつかないこともある。

遙がこの学校で聞き込みをしたところ、教師も生徒も明人の親は旅行で家にいないと答えた。しかも彼らは誰も遙の存在に違和感を覚えていないしかった。

誰もが明人を気遣っている、と考えてみたがそんなことはあるわけがない。

やはり認識を弄るような《幻象》が校内にいるのは明らかだった。

「藍が危ない！」

不意に大声を出されて遥はちよつとビビった。聞いてはいたが意識は半分以上思案に流れていた。

明人はさっきまで鬼気迫る表情で何やら呟いていたが急に現実に戻されたようだった。

遥が思い出した内容を詳しく聞こうと口を開けた時、遥と向き合う明人の背後から白っぽい光弾が発せられた。

それは驚異的なスピードで明人に迫った。遥が明人を突き飛ばそうとしたときにはもう光弾はその背中に吸い込まれていた。

明人は何かが全身を突き抜けたようにぶるつと一度震えた後、目が虚ろになり糸のきれた操り人形マリオネットのようにだらりと座り込んだ。

「榊原くん！　しっかりして」

遥は周囲を警戒しながら明人を足でつついてみた。何の反応もない。息もしているようで、少なくとも生きてはいるようだ。

遥は少し安堵した。苦勞して見つけた情報源に簡単に死なれては困る。

「はやく出てきなさいよ。いるんでしょ？」

いつの間にか夕日は山の輪郭を赤く染めるほどに沈み、部屋は暗がりに支配されかかっていた。

遥は素早く視線を走らせた。

整頓されていない机の群れ、教壇、閉め切られたドアと窓の外。

誰もいないが確かに《幻象》の気配を感じた。

「うわゝ戦うヒロインがいるよぉ」

耳元で馬鹿にしたような女の子の声が聞こえた。刹那、遥は振り向きざまに蹴りを放った。手ごたえはなく細い足が力強く風を切る音だけが聞こえた。

「ちっ」

遥が舌打ちすると四方八方からケラケラと笑い声がした。

「いい動きだねえ。ついでに言うとミニスカで回し蹴りは気を付けたほうが良いよ」

「ふん」

遥は気を緩めない。

「そうキレないでよ。お詫びに姿見せるから」

少女の声は遥の怒声など気にかけず余裕たつぷりに言った。

「呼ばれて飛び出て…はじめましてだね」

気付いた時には見知らぬ少女が教壇の上にいた。

色とりどりのヘアピンをつけたミディアムショートの黒髪。奇抜な髪型である。服装こそこの学校の制服だが、シャツのボタンは上2つほど外れておりネクタイはぶら下がっているだけで機能を果たしていない。

その隙間からブラと別段大きくない乳房が見えている。

露出狂なのかだらしないだけなのか。どちらにしろ遥は少女に女性として嫌悪感を覚えた。

「反応薄いよ。なにやってんの」

少女は遥の厳しい視線に気付きもしない。子供っぽい笑みを浮かべ文句を垂れている。

「ああ、そうか！ 自己紹介してないからか。私は綾瀬、ひろはしあやせ広橋綾瀬と申します。……これで良いよね？」

スカートの裾を摘んでなかなか優雅にお辞儀した。

「アホ丸出しのところすまないけど榊原くんは何をしたの？」

あきれた遥は綾瀬を無視することにした。与太郎の話をまじめに聞くほどお人好しではなかった。

「あんただって頭のおかしい戦うヒロインのくせにアホとはなんぞ！？ アホとは？！」

「あのさ、さつきから言ってる戦うヒロインって何なの？ アホみたいだからやめなよ」

「うわヒドッ。くそアマが……」

前言撤回。遥は綾瀬を挑発して隙を窺うことにした。

綾瀬は教壇の上をウロウロしながらぶつくさと何やら毒づいている。傍から見なくても十分異常である。

そんなただのアホかと思っただが、遥が『普通』ではなく常人なんかより数倍優れた戦闘能力を持っている、まさに『戦うヒロイン』だということを一瞬で看破したのは少々驚いた。

こいつが事件を隠蔽しようとしている幻象ね、と容易く結論は出た。

「……私ね、夢があるの」

綾瀬は独り言を止め、語り始めた。

意味が分からずおもわず首を傾げてしまう。

「それはね・・・戦う女の子をぶち殺すこと」

「っ！」

言うのが早いか綾瀬が壇上の机を蹴飛ばした。矢のような速さと鋭さで机が飛んでいく。

遥は虚を突かれながらも間一髪それを横に転がって避けた。同時に金属のへしゃげる音がして背後の壁がへこんだ。

「うんうん。イイねイイね。常人は死んでるよ、今で」

しきりに頷いて満足そうな綾瀬。やっている事と煌めく笑顔が相当ミスマッチである。

遥は呼吸を整えながら、綾瀬を憎悪を込めて睨みつけた。自分の奇襲が成就する前に攻撃されたのが悔しかった。

「怖いわぁ。そんな顔しないでよ、遥」

綾瀬が愉しそうな声を出す。全然怖がっていない。

「あんだこそ、その緊張感の無い笑顔止めたら？」

馴れ馴れしく名前を呼ばれたことにムツとしながらも、冷たく挑発する。遥としてはさっさと綾瀬を片付けて明人の記憶を探りたかった。

「性格悪いね。そんな悪い遥ちゃん私の妄想劇場で肅清してやる！」

後半の意味不明な部分を声を荒げて強調した。綾瀬はこれでキレ

ているらしかった。

「性格だもん仕方ないでしょ。それにやれるもんならやってみなさいよ」

遥は不敵に応えた。その右手にはどこから出したのか夕闇の中でも鏡のような輝きを放つ西洋風の剣があった。敵と戦うため、斬り殺すために洗練されたフォーム。

「おお！？ 剣が出た！ これは雰囲気出るね。遥分かってんじやん。じゃあ早速戦う美少女惨殺ごっこをはじめよう」

歡喜を抑えきれない様子で綾瀬が開戦を告げた。

「……え？」

次の瞬間綾瀬はすっ頓狂な声をあげていた。その腹部には剣が突き刺さり後ろの黒板に彼女の身体を留めていた。

剣を伝って鮮やかな血が床に滴る。

「もう終わり？ 開始して1秒も経ったかしら」

遥は剣の柄を握って笑っている。

先ほど綾瀬が教台をどかしてくれたおかげで刺突を遮るものは無くなっていた。開幕の余韻に浸っていた綾瀬には凄まじい不意打ちであった。

「くっ、これくらいで、死ぬわけないじゃん」

そう言って血の唾を遥の顔に吐きつけた。

「汚っ！ この……」

眼には入らなかったのは幸いだが相当不快だった。怒りに任せて遥は綾瀬を突き刺したままの剣でなぎ払った。

剣は黒板を削りながら綾瀬の胴体をへその辺りから分断した。綾瀬は声も無く崩れ落ち教壇を赤に染めた。

「全然たいしたこと無いわね」

呼吸を乱しながら毒づいた。これでまた1体幻象を滅ぼした、遥は満足感に浸っていた。

「どこ見てんの？ 私はこっちだよ」

「な……」

さつと振り返ると動かない明人の隣で綾瀬が小躍りしていた。

遥は剣を構えなおした。

「私死んでるじゃん。カワイソ、あつ」

今度は綾瀬の身体が袈裟斬りにされた。様々な内臓と大量の血が床を飾った。それでも綾瀬の声は止まない。

「あはつ。まだだよ。もっと殺してえ」

その望みはすぐに叶う。遥は剣を振るいどこからともなく湧き出る綾瀬を斬殺していく。

同じ顔の死体が絨毯のようになっても切り裂き続ける。

いつの間にか部屋中の物に綾瀬の顔が浮き出て騒ぎ立てる。

遥はその全てを叩き斬った。身体が疲れを覚え始めても綾瀬を斬りつづける。

「霜崎さん。こっち向いて」

突然静止していた明人が立ち上がった。その顔は綾瀬だった。コンマ数秒でその身体は解体された。

明人から得られる情報は今やどうでもよかった。今は広橋綾瀬を殺すことのほうが重要だった。

「もういいでしょ！　こんなに殺したんだからいい加減死んでよおおおお！！」

遥は絶望的に絶叫した。そして尚も斬り続ける。これは現実じゃないと頭の片隅で思っているにも、殺戮は止まらない。

綾瀬に明人、壁につけた亀裂、挟まれた天井、窓ガラス、机、カーテン、時計、照明……。

遥が斬ったありとあらゆるものからどろどろと紅い液体が流れる。遥自身も頭の先から靴の先まで真っ赤になっていた。

「最後の私はここですよ」

その声は遥の口から出ていた。遥は剣を首に当てた。

もう何もかも壊した。だから最後は自分なのだと何となく理解した。

「これで終わりにしてやる」
そして寸分の躊躇もなく頸動脈を素早く断ち切った。紅い噴水は
実に美しかった。

綾瀬は虚ろな瞳で床に転がり悶えている遥を楽しそうに見ていた。
《虚構の樂園》エリュシオン

自分の因子を埋め込んだ相手を自分が妄想した悪夢的な幻覚に陥
らせる能力。

肉体には無害だが、精神を崩壊させるくらいはたやすい。危険極
まりない力だ。

我が身に授かったこの異能には何度感謝したか分からない。

最近はずっと明人の周りをいじくって榊原家の事件が明るみに出
ないようにするのに使っていただけだった。今朝は気まぐれで明人
をからかってみたり、この部屋の因子を他の場所より濃くしておい
たりしたのだが。

だから、遥の介入は綾瀬にとって好きではないが暇つぶしには最
適の戦闘になったので喜ばしいハプニングだった。

「遥は生き返って次は……あつ電話鳴ってる」

死んだように動かない明人から飾り気の無いプリセットの着信音
が聞こえてきた。

綾瀬は明人のズボンからケータイを引っ張り出した。ごちゃごち
やとついてきた邪魔なイヤホンを外す。開いてみるとディスプレイ
には『藍』の文字があった。

「藍？　どつかで聞いたことあるなあ……ま、いいか、もしもし？」

面白そうなので電話に出てみた。

「お兄ちゃーーーーーん！」

「うわああ!？」

大音量で可愛い声が部屋中に響き渡った。心臓が止まるくら

いびきで思わずケータイを取り落としてしまった。

「ごめん大声出しちゃって。もう会えるまで24時間きつたから嬉しくて。今から友達とお別」

「驚かせるないでよね、まったく」

ほっておいてもうるさいので綾瀬はケータイを切った。

「遊ぶ気削がれちゃったなあ。もういいや殺しちゃおう」

綾瀬はポケットから小振りのナイフを取り出し遥に歩み寄った。

綾瀬では能力で心は殺せても肉体は無理なのである。人間以上に腕力なんかもあるのだが、拳で撲殺なんてしなかった。

綾瀬はなんか邪魔になりそうな遥の制服を脱がしにかかった。

「別に百合っ気があるわけじゃないんだからね！ 最期に弄ってみるのも面白いかな、なんて」

この世界には明人とゴスロリ服の少女しかいない。見えるのはお互いの姿だけ。聞こえるのもお互いの声だけ。

そんな生活がどれほど続いただろう。それは永遠ともいえるし須臾ともいえた。

だが終わりは唐突にきた。自分を呼ぶ声が世界を揺らし始めたのだ。しだいに世界は変容していった。

目のまえにいる少女の姿が家族を殺した殺人鬼の姿と合致した。明人の中に怨嗟が溢れ、思い切り少女を殴った。

するとガラスが砕けるような音がして殺人鬼である少女は粉々になった。

そして目が醒めた。

外はすっかり暗くなっていた。窓からの月光が部屋を明るく照らしていた。

段々と意識がはっきりしてくると窓際に人がいることに気付いた。誰だか分からないがはだけた服の女の子がナイフを持って仰向け

の遙に馬乗りになっていた。

遙の服が邪魔なのか制服の上着とカーディガンを脱がせている。

どういうわけか抵抗ひとつしない遙が気になったが殺そうとして
いるのは誰の目にも明らかだった。

「やめる！」

無我夢中で叫んだ。驚愕で呆けたような表情の綾瀬がカクカクと
振り返る。全く状況を理解できていないようだ。

本当のところ、明人がエリュシオンから解放されたのは綾瀬が出
た電話のせいで自業自得なわけである。

明人は素早く綾瀬の腕を掴んだ。

「イタッ」

力を入れると小さく悲鳴を上げナイフを手放した。

「何してんだよお前！」

「うそよ……私の力がただの人間に破られるわけない」

綾瀬は震えながら理解不能なことを呟いている。明人の叱責は聞
こえていないようだ。

何かで心を病んで凶行に走ったのかもしれないと明人は思った。

「はっ?! まだ生きてる」

遙も寝言みたいなことを言いながら目を醒ました。

「ほら君。立って、どいてくれ」

明人が脇に腕を通し引きずるように遙の上から綾瀬をどかして傍
に座らせた。その間も女の子は何かをぶつぶつ言っている。心ここ
にあらずといった感じた。

「霜崎さん、怪我は無い？」

「なんとかね」

「そりゃよかった」

明人は遙の手を取り立たせてあげた。半分脱がされた上着から見
える白い肌が目に入りおもわず視線を逸らした。

「どうしたのよ? 顔が赤いわ」

全く気が付いていない遙が不思議そうな顔をする。

「と、とりあえず服着たほうが良いと思う……よ」

「……やあああ！」

世界が回転して明人は床に突つ伏していた。頬をひっぱたかれたと理解するには遥の力は強すぎた。

「なあ。あの子お前を殺そうとしてたけど何なんだ？」

しばらくして落ち着いた明人はまだ力なく座っている綾瀬をちらちらと見て聞いた。

「聞きたいの？ 聞いたらもう日常に戻れないけど、それでもいい？」

遥は脅しの色を含んだ声で確認を求める。明人に迷いは無かった。

「ああ。なんか知らないといけない気がするんだ」

「そう」

いつからだろう。いつも頭のどこかが濛々としていた。そこに
ある記憶を探り出そうとすれば頭痛に苛まれた。

しかし、あの夢から醒めた後頭は妙にクリアになっていた。

今しようとしている話は頭痛を引き起こす種類のものだろうと自然と分かったが痛みはない。

それが良いことなのか、どうなのかは分からない。ただ、ある種の使命感のようなものが湧いてきた。

何故か？その理由を探したとき夢の中にいた少女の姿が幻視された。その理由もまた不明だが、この話をする事で答えに近づける気がする。

明人は遙に先を促した。遙が口を開く。

「彼女は…… あはっ あはははははは！？」

甲高い狂った哄笑が遙の言葉を裂いて響き渡った。その背筋が凍るような奇声に二人は悪寒を覚えて顧みる。

そこには先ほどまで死人同然だった綾瀬が幽鬼のようなおぼつかなさで立ち上がっていた。

しばらく虚空を彷徨っていた瞳が2人を捉えた。
「コンティニューだよ。私は使命を遂行する！」

第5話：再現・return to reality（前書き）

再帰＋現実⇐再現　なんだこれ。普通に使う文字じゃないか

第5話：再現・return to reality

「コンティニューだよ。私は使命を遂行する」

立ち直ったような綾瀬だったが心の中ではまだパニックに陥っていた。

《虚構の樂園》^{エリユシオン}は人間であることを捨てて手に入れたもの。夢に見ていた超常的な力。それをよりによって半年間も自分に踊らされていた非力な男に突如破られた。それが綾瀬の自尊心に付けた傷は計り知れなかった。

しかも込めた力が弱かったとはいえ《虚構の樂園》が看破された理由は不明だ。

「クヒヒツ。今すぐ幻葬してやるよ」

不気味な笑みを浮かべ両手を拳銃っぽくして遙に向ける。

幼稚に見えるが綾瀬はこのスタイルが気に入っていた。1番弾を放つイメージが浮かびやすいからだ。

「必死な顔して何やってんだか。どうでもいいけどアンタの夢物語はもう幕よ」

言うが早いか遙の姿がかき消え、その拳が鳩尾^{みぞおち}にめり込んでいた。「かはっ……」

速すぎて反応できなかった。その衝撃に身体のコが軋むようだった。

立ったままの体勢を維持できなくなり、拳が引つ込むと綾瀬はリノリウムの床に俯せて倒れた。口腔には苦くて酸っぱい液体が大量に込み上げてきた。やがて溢れたそれは口の端から床に滴った。

その姿はあまりに無様過ぎた。悔しさと惨めさと痛みとで涙が零れ落ち、気を失いたいくらい恥ずかしいが幻象の身体がそれを許さない。

「一太刀で逝かせてあげる。苦しみは、無いわ」

遙は無表情で剣を綾瀬の上に掲げた。

すると剣は次第に歪曲していった。変形が終わると遙の手には3本の歪んだ刀身を持つ曲刀が握られていた。持ち主の4分の3程の長さがあり、銀色の太蛇を思わせるフォルムだ。

その歪な曲刀が現れた時綾瀬の中に巨大な恐怖心が生まれた。絶命に対するものではなかった。

幻象は名前の通り生き物ではない。例え死んだとしても条件さえ揃えば再び顕現することができる。だがこの感覚は違う。幻象である自分の存在の根幹が揺さぶられる恐怖であった。

「……何をやる気なの？ 斬ったくらいじゃ死なないんだから」
「ふふっ、今に分かるわ」

綾瀬は精一杯の強がりをして吐いて、怨念の籠った瞳で遙を睨み上げた。

すると、応じるように遙の目がスッと細くなつて笑った。無慈悲で冷酷な死神の微笑みだった。

遙の足が綾瀬を乱暴に転がして仰向けにさせた。左腕が変な格好で身体の下敷きになり鈍い痛みが走った。

そして、歪な剣の切っ先を綾瀬の半分露出した左胸に向けた。

綾瀬が消滅を覚悟したその時、意外な所から救いの手が差しのべられた。

「霜崎さん、剣を戻してくれ」

声の主は榊原明人だった。その声は震えてはいるものの強い意志が感じられた。綾瀬を死の淵に追い詰めた元凶が今度は救おうとしていた。

偶然だとしても皮肉に感じられ頭にきた。

「何で？」

遙は振り向きもせず凍てつくような静かな声で聞いた。

「その子は何もしてないだろ。ナイフを向けた、ただそれだけだ」

「分かってないわね。どういうモノかは知らないけど榊原くんも幻覚を見たはずよ」

「ああ、見たよ。妹が殺されたし、親を殺した女の子と平然と抱き合った」

綾瀬が作った悪夢を思い出したのか明人の顔に苦々しい表情が浮かんだ。

「それはコイツが見せたモノよ。許せないでしょ？許せるわけないんだよ！」

「ぐえっ」

急に冷静さを欠いた遙はいきり立って、綾瀬の脇腹を蹴り上げた。重い一撃だった。幾つか肋骨が折れたような感覚を覚えた。

「やめろって言うてるだろ！それにな現実には誰も死んじやない。ただの幻覚なんだよ」

対する明人は冷静だった。自分が非日常に踏み込んでいることには気付いているだろう。おそらく遙の話も事実として受け入れかけている。

それでも彼は綾瀬を庇っていた。

綾瀬にはその心境は知り得ないが彼が心根の優しい人なのだとは分かった。

「うっさい！何にも知らないくせに」

まるで敵を見るかのような憎々しい顔で遙が向き直った。

「そりや分からないさ。急に変な剣が出てくるし、殺し合いは始まるし。でもな目の前で人が殺されそうなのをほっとけるわけないだろ」

明人はキツパリと言い切った。だが、これで遙と決裂してしまえばすぐに殺されてしまうだろう。そうなれば綾瀬の消滅も確定する。綾瀬は彼の短慮に失望した。

「コイツは人じゃない。有害なだけのモノよ」

もはや自分で道を切り開くしかなかった。部屋に展開している《虚構の楽園》をさつき遙を仕留める時に使ってしまった。後は自ら

因子を放つしかない。

綾瀬は無事な右手で銃を作り遙に向けた。

刹那、白銀の光が一閃した。

「いぎやあああ!？」

弾丸は出なかった。そこにあるべき銃身の役割を担う人差し指がなくなっていたから。

「本当にバカね」

遙がせせら嗤い、再び閃光が走る。

その精密な剣捌きに何か思う間も無く、次は綾瀬の右手首から先が斬り落とされた。

「……ッ!」

想像を絶する痛みに言葉にならない唸りを上げて綾瀬は転げ回った。

鮮血が噴き出し、みるまに部屋を深紅に塗装していった。

「霜崎!」

その光景を見るなり明人が遙に突進した。殴るなり蹴るなりして凶行を止めさせるつもりなのだろう。

しかし、それは人の身では無謀でしかない。

彼の拳が遙に届く前に刀身を収束させた剣がその胸を貫いていた。明人は愕然とした表情で自身の身体に埋もれている剣をぼんやりと眺めていた。

「さよなら」

遙そんな彼を見上げて静かに永劫の別れを告げた。

しかし、そこで不測の事態が発生した。曲刀が光を放ち部屋が昼間のように明るくなった。

「がああッ!？」

遙は低い悲鳴を上げて壁に叩きつけられた。そしてその華奢な身体が壁を伝ってズルズルと崩れ落ちた。

明人を刺し貫いた曲刀も遙の傍に転がっていた。

時が止まったかのような静寂が部屋に満ちた。この場にいる者全員が状況を飲み込めず困惑していた。

最初に静けさを破ったのは綾瀬だった。

「早く逃げて！」

綾瀬は劇痛に苛まれながらも立ち上がって叫び、自分も出入口に向かつて走った。だが自身の血液で塗装されたリノリウムの床は残酷なまでに滑りやすかった。数歩も行かないうちに前のめりに転倒してしまう。

綾瀬は思わず先程捻った左腕で身体を支えてしまった。

「くあっ…うっ！」

鈍痛が腕を駆け抜けた。そしてそのままバランスを崩して倒れ伏してしまう。

染み込んだ血でワイシャツが肌に張り付くのと、錆鉄のような独特の悪臭が不快感を催した。身体から力が抜けていき起き上がることはおろか這うことさえままならない。

「待つてろ今行く」

呆気に取りられていた明人が傍まで走って来た。幸い彼は滑らなかった。

綾瀬の傷ついた両腕に触れないように何とか起こそうとしているが時間の無駄だ。

「腕はいいから急いで！」

綾瀬は切羽詰まった調子で叫んだ。

彼女には遥が剣に寄りかかり立ち上がるのが見えていた。衰弱してはいるがその姿からは顕になった殺戮の執念が感じられた。

「ごめん痛いかも」

遂に意を決したらしい明人は綾瀬をお姫様抱っこした。

斬られた腕が明人の制服と擦れた。それだけでもかなりの苦痛だが綾瀬はビクツと震えただけで暴れなかった。

明人は立ち上がるとドアに向かつて慎重に走った。

「逃がすか！」

遥の鋭い声に明人が怯えているのが分かった。綾瀬も怖くて仕方なかった。だが今は明人に身を委ねるしかない。

どうにか廊下に明人は飛び出した。

綾瀬はその腕の中で首を捻って後ろを見ると曲刀の3つの刀身が蔓のように伸びて恐ろしいスピードで迫っていた。

だがそれが二人を貫くことはなかった。

「我が異能《虚構の楽園》の真骨頂を拝みなさい！」

とつくに準備を終えた綾瀬は力強く言い放った。するとたちまち『楽園』が発生した。

床に広がる血の海が壁を遡り、天井を這った。だだっ広い教室は紅く染められた。

「何?! きゃあああ!」

綾瀬の血から沸き上がった完全な闇が教室全体を呑み込んだ。恐怖に満ちた遥の断末魔もその中に吸収された。

その暗黒の中で何が起きているのか。それは《虚構の楽園》の主である綾瀬のみが知り得ることだった。

その綾瀬は明人の腕の中で力尽き意識を失った。

静寂が戻ってきた。聞こえるのは自分自身の興奮と疲労を含んだ息遣いと早鐘のような鼓動だけ。

開け放たれたドアの向こうには闇が満ちており、時折霧が風に吹かれて渦巻くように揺れ動く。

それを見ていると段々と頭がぼんやりしてきた。

中にいるであろう遥の事が気になった。自分を本気で殺そうとした奇怪な剣を持つ少女。

彼女の言っていたことはかなりファンシーだったが、実際に目の前でまざまざと怪奇現象を見せられてはこの世に色々と超常じみた物事があると信じざるをえない。それにあの剣が心臓を貫通した時

にはどうなるかと思ったが少しの痛みもなく、今もこうして生きている。実に不可解だった。

まさか自分がフアンタジーに有りがちな『強大な力を持っているのに気付かず普通に生活している人』というわけではないだろう。いや、ないと信じたい。

まあ、目の前であれだけ異常を見せられては死なない理由など幾千と考えられる。

思索に耽っていた精神が身体に帰ってきた気がした。と同時に腕に重量がかかっているのを感じた。

見れば綾瀬が眠っていた。彼女の状態を考えれば寝ているというより気絶しているのだろう。

全身血まみれ、右手首から先は欠損し、顔も大量出血のせいか色がない。

止血もしていないし、常人というか人間ならとくに死んでいるはずだが綾瀬は浅いながらも安定した呼吸をしている。腕の出血も止まっていた。

やはり化け物なのかもしれないと思った。それでも、関わってしまったのだから後始末はするつもりだ。

「まずは病院かな」

不思議と慌てる気持ちは生まれなかった。今日1日で色々な事がありすぎて感情が麻痺しているのかもしれない。

明人は暗闇に閉ざされた教室に見切りをつけ、ひどく緩慢な動きで階段を降りていった。

職員室には行かないつもりだ。校内でゴタゴタが起きたとなれば面倒なことになる。特に現場のあの部屋に人を入れるのは気が退けた。

とりあえず学校を出て他の場所で病院に電話をすることにした。

都合良く廊下にも昇降口にも人はおらず、明人はさつさと靴を履き替え校舎を後にした。

現在午後9時数分前。学校は緋森市街から離れた場所にあるためこの時間帯は周辺に人気がない。

住宅はあるものの帰宅ラッシュも終わり、大抵の人は家に入ってしまったているだろう。

「こ、この辺で良いだろう」

人目を避けて綾瀬を学校の近くの路地に運び込むことには成功した。

なかなかスリルがあって楽しかったが腕が痛い。おぶる事も考えたが何となくお姫様抱っこの方がカッコいい気がしたので脳内で却下された。

ボタンを上2つ外すという滅茶苦茶な服装をしている綾瀬を見て、何らかの邪な感情が働いていたのを抑えるのが大変だった。というのは秘密だ。

明人は綾瀬を壁に寄り掛かせて、ケータイを開いた。119と番号を打ち込むと女性が対応に出た。

「どうされました？」

「大怪我を負った女の子を見つけたんです。場所は緋森高校の北にある路地です」

「どんな怪我ですか？」

「腕を切断されて意識がありません」

「分かりました。すぐに救急車を向かわせます」

「ありがとうございます」

電話を切ってケータイをしまふ。

応対してくれた女性はかなり緊迫した様子だった。それはそうだろう。こんな片田舎では稀にみる凶悪事件なのだから。

「さて、と救急車が来るまで10分くらいか。どうすっかな……」

「……うん」

しばらくすると、小さな呻き声を上げて綾瀬が目覚めた。やはりまだ蒼白な顔でぼんやりしている。

「ここ……どこ？」

「学校の裏手だよ。先生に見つかりと面倒なんで、ここで救急車を呼んだ」

「ふん……、病院行きたくない」

「どうしてだよ？」

「コレ。見て分かんないの？」

綾瀬は無くなってしまった右手を振ってみせた。

白い骨と黒く固まった血肉のコントラストが気持ち悪かった。痛みであろうその傷を平然と見せびらかす綾瀬にも悪寒を感じずにはいられなかった。

それで明人は目を背けてしまった。

「ふふふつ、ごめんね。でも人間なら死んじゃうよね、普通。だから行きたくないの」

そんな明人に反省の色が見えない愉しそうな謝罪をして、綾瀬は笑った。

「やっぱり人間じゃないのか……」

「元人間よ。そうだ、名前言ってないよね？ 広橋綾瀬よ。よろしく榊原明人くん」

綾瀬はにこやかに千切れた腕を差し出した。

それがあまりにシニールで明人は苦笑するしかなかった。

「それで、人間じゃないなら何なんだ？」

「おおつ、遂に諦めて世界の裏側に踏み入る気になったのかね？
でも今はだめ。だって……」

綾瀬が耳を澄ます仕草をする。なるほど救急車とパトカー、2種

類のサイレンが聞こえてきた。

その音にえもいわれぬ焦りと緊張を感じさせる力があつた。

「どっか行くあてあるのか？」

「そりゃもちろん……」

綾瀬は意味深な眼差しを向けてきた。

「俺の家か」

嬉しいのやら悲しいのやら、よく分からない表情が明人の顔に浮かぶ。

「大正解。そうと決まれば早くしてよ」

綾瀬はそんなこと気にも留めておらず、傷ついた両腕を伸ばしてきた。

「今度は何？」

「おんぶして。腕が使えないと歩くのもキツいの」

座った姿勢から上目遣いで甘えたようにねだってくる血まみれ美少女。

「……卑怯だな」

明人には折れる以外の選択肢はなかった。

第6話：冥夜・gloom y night（前書き）

後半に性的暴行シーンがあります。苦手な方は注意してください。
どこまで書いていいものか分からないので軽めですが。

第6話：冥夜 - gloomy night

「ほら。走れ榊原っ！」

開口一番、綾瀬は偉そうに命令した。さっきまでの死にかけた様子を微塵も感じさせない明るく楽しそうな声だ。

ム力つく所だが徐々に大きくなっていく2つのサイレンに急かされて明人は渋々歩き出した。学校の裏を通り、反対の道から家に向かう。

「遅い。警察に捕まったら榊原が犯人だって言ってる」

綾瀬は負傷した腕を明人の目の前で揺らしながら不満を垂れた。

「んな理不尽な話があるか！それにグロイからやめろって」

「大声出さない。アンタはただひたすらに黙々と素早く私を連れて家に帰ればいいの」

「うわ、マジウゼエ。早く降りるよ」

「嫌ですっ」

数時間前に会ったばかりなのに綾瀬は無礼極まりなく、やたら馴れ馴れしい。まるで人との接し方を知らないかのようだ。

苛立ちを覚えるのが当然とも思える状況だった。だが、明人はそんな綾瀬とでも喋っていると嬉しさが込み上げてきた。

別に綾瀬との会話に限ったことではないかもしれない。今なら学校の不良グループと雑談しても面白く感じるかもしれない。

それほど先ほどから生じ始めた新鮮かつ解放感に満ちた不思議な感覚が圧倒的に大きかった。

それは晴天の下、芝生なんかを素足で踏む感覚と似ていた。

この不思議な感覚は会話だけに止まらない。踏みしめるアスファルトや、燦然と輝く星彩の天蓋や、肺に満ちる涼しい夜気。いや身の回りの万象全てが真実味を帯びて感慨深く感じられた。

明人は生まれ変わったような心地になった。それに合わせて高揚

してきた気分には足りも軽くなり駆け出した。

自分でも何がしたいのか分からないがとにかく走った。

「ちよっ！？ いきなりなによ」

驚いた綾瀬は明人にしがみついた。手が使えないので腕を首に回すようにした。

それは自然と明人の首を絞める形となり、呼吸と一緒に暴走も止めた。

「ぐえっ」

「ああつ。ごめん……」

綾瀬はそのままずりりと背中から降りた。

「なんで急に走るかな？ 焦らなくても追い付かないよ」

綾瀬が眉を寄せて、咳き込む明人を覗き込んできた。

明人はその時、サイレンが鳴り止んでいることを知った。

「違うんだ。なんというか、嬉しくてさ」

「何がよ？」

「生まれ変わった気分とか、生き返ったようだとか、そんな感じなんだ」

「……はあ……？」

釈然としない表情をしている綾瀬を見て、明人は更に説明を加えた。

「見るもの、触れるもの全てが鮮明で感動しちゃってさ」

こんなことをいきなり言われても綾瀬は理解できないだろうが、なんとかかこの感じを分かって欲しかった。

「……そ、よかったね」

綾瀬は少々暗影を含んだ表情で返した。

「どうした。もしかして、傷に障ったりした？」

「うつん。へーき。でも、早く帰ろう」

綾瀬の先ほどまでの活性っぷりは半減し、消沈していた。そのまま、明人の背に身体を預けることもせずさっさと歩いていった。しまった。

「アイツのせいで、力が弱ったか……」

ぼそりと綾瀬が呟いた言葉は、秋の激しい夜風に消し飛ばされた。
どうしたものか、と明人もその後を追う。

「なあ。何か気に障ることも言っただか？」

「ううん。榊原は悪くないよ」

「そうなのか」

「気にしないでよ。私、躁病で鬱病患者だから」

綾瀬は、困ったような薄い笑みを浮かべて、「冗談か本気が分別できないことを言った。」

「そんな事言われても、逆に心配になるんだが」

だよね、と小さく笑う綾瀬。ふざけた様子がないのをみて、明人は言葉通り余計心配になった。

なんとなくだが明人は、綾瀬のおかげで今の感覚を味わえている気がしていた。

『元人間』だと言う綾瀬の悩みを解消できるか分からないが、その根拠のない恩義からほつつてはおけなかった。

「あ、そうだ。今夜はサカキの家に泊めてよ」

微妙な空気を変えるためか、綾瀬はまたとんでもない事を言い出した。ついさっき、心に決めたけれどこれは事が大きかった。

ついでに、呼称が急に『サカキ』に変わっている。『バラ』くらいあっても同じだろうに。

「……襲うかもしれないぞ。やめといた方がいい」

建前として遠慮しておくが、内心大歓迎なのはやはり秘密だ。

「そんなことできるの？意気地無しのサカキが、サカキはへたれだから、やるとしたらお風呂覗くくらいじゃない？」

綾瀬は小馬鹿にしたように言った。また、調子が戻ってきたようで明人はほっとした。

「へたれでもやるときややる」

言った瞬間後悔した。今のは身に余る失言だ。

「うわ変態だ！ 男なんてみんな紳士という皮を被った変態なんだ」
「スゲー貶すのな」

「変態が悪いんだよ、変態が。おまわりさ〜ん！ タスケテ〜」

散々悪口を言うと、突然綾瀬はスキップしながら街灯の少ない暗い通りを駆けていき、たちまち姿が見えなくなってしまった。

「ほんと情緒不安定だな」

明人は綾瀬の目も当てられない奇行に呆れつつ、後を追って暗がりを進んだ。

完全に遊ばれているようだが、放っておくのも気が退けた。それに都合良くこの道はアパートへ向かっている。

結局綾瀬に追い付いたのは、明人のアパートの近くだった。何故家を知っているのかとか、怪我してるのに足速すぎだとか、疑問は尽きない。

そんなことは後で聞けるので、成り行き上綾瀬を案内することにした。

「人はいないみたいだな。ついてこい」

エントランスを確認し、エレベーターに乗った。明人がボタンを押すより早く綾瀬が8階のボタンを押していた。

「あつてるでしょ？」

「……ああ」

ニコツと笑いかけられたがちょっと怖かった。

そのままエレベーターは動き出した。すぐに目的階に到着した。その間、綾瀬は黒く塗り潰された街を見下ろして微笑んでおり、明人はまた冷たいものを感じるはめになった。

8階の廊下にも人影はなかった。難なくこの階の角に位置する自室にたどり着けた。誰かに会わない方が面倒が無くて良いのだが、

多少薄気味悪かった。

「ほら、入れよ」

「おじゃましまゝす」

明人がドアを開けてやると、綾瀬は意外にも靴を揃えて上がり込んだ。「アメリカンスタイル！」とか言っ、土足で上がらなかったのは純粹に嬉しい。掃除的な意味で。

「さてさて、お風呂はどこかな？」

まるで子供のような好奇心に満ちた瞳で綾瀬はキョロキョロと家を見渡した。

「風呂はそのドアの奥だけど、溜まってないからな。ちょっと待っててよ」

明人は廊下とリビングの明かりをつけながら言った。

「うん」

綾瀬は素直に返事をしてリビングに入っていた。

それを見届けて明人も風呂場へ向う。やはり、ここでもアノ感覚は健在だった。自分を覆っていた半透明の膜がべろりと剥がれたような、そんな剥き出しの新鮮さを我が家でも味わえた。

明人がお湯を出して戻ってくると、綾瀬はリビングにある棚やら小物やらを嬉々して物色していた。

面白いので、入口に立ってしばらく観察してみる。何か盗もうとしているわけではないようなので安心した。

綾瀬が無駄に元気で平気そうなので忘れかけていたが、改めて見ると彼女の欠損重傷具合は気分が悪くなりそうだ。

「あ、盗み見なんてタチが悪いわ」

そんなことを思っていると綾瀬に見つかってしまった。第一隠れて見ていたわけではないのだが。

「来て早々に他人の家をあばいてる方がよっぽど悪い」

「親愛の証なんだから問題ないよ」

理解不能の綾瀬理論が説かれたが、気分が良いので明人としては
気にならなかった。

「なら俺とお前は盗み盗まれる関係ってことだな」

「変態め、私から何を盗むつもり？ まさか……じゅんけつ……」

それは盗むとは言わない、と訂正しそうになったが更なる自己嫌
悪に繋がりそうなので自重した。

「はあ……なんでそこに持っていくんだ。もう病院が来てくれ」

明人はお手上げという感じでソファに倒れ臥した。

どうして連れてきたのか、今となっては理由が思い出せない。そ
れくらい後悔した。

「ところで、服が無いよな？」

ほとぼりが冷め、風呂も溜まったところ明人は再び話しかけた。

「あゝ、それは盲点だったな」

キョトンとして綾瀬が言った。本当に忘れていたらしい。

「いや……確定的に明らかだったと思うぞ」

さらに明人は本人がどうこうというより、自分が気になるのでも
う1つ聞くことにした。

「その傷で風呂なんて入れるのか？」

「んゝ。全然オツケー」

綾瀬はしげしげと自分の惨状を確認し、なんとも思っていない風
に答えた。

「そ、そうか」

非人間的な反応に言葉が出なかった。やはり、『元人間』と言
張るだけはある。帰りの様は仮怪我（？）だったのではないかと疑
ってしまう。

「風呂場を過ぎたところに妹の部屋がある。とりあえず服はそこ
にあるのを適当に使ってくれ」

気を取り直して明人は綾瀬に色々と注意を促した。

「それと、風呂を紅くしないでくれよ？血の海には入りたくないからな」

「イエッサー！　じゃあ遠慮なく使わせてもらってください」

綾瀬はぴょんとソファーから飛び降りて、出ていった。すれ違い様に微かな血の匂いが渦巻いた。

「ふう……」

やっと一息つけた気がする。久しぶりに吸った『本当』の我が家の空気にようやく落ち着けた。その安堵故か途端に腹が鳴った。

「そついや、飯がまだだったな」

探してみたところ2人分の食べ物は無かった。食パン数切れはあったが、それは明日の朝食食べることにした。

「仕方ない……、買ってくるか」

明人はもう一度出かけることにした。幸いにも近くにコンビニがある。そこで適当に買おう。

「ちよつと出掛けてくる」

明人は風呂場に声をかけてから出発した。

「はい」

その背中を綾瀬の喜悦に浸った声が追った。

明人が戻ってしばらくすると、藍のパジャマを着て綾瀬がリビングにやってきた。

カラフルなヘアピンが外れた髪がしつとりと濡れて艶やかだ。

「うっつ、キレイサッパリ！　やっぱお風呂ってイイよね。今日みたいな日は余計ありがたみが分かるよ」

そして『両手』を組んで大きく伸びをした。

「……え？」

明人の口から素っ頓狂な声が飛び出した。

綾瀬の切断された右手首は元に戻り、内出血して変色していた左腕もものの見事に治っていた。

「どうということだ」

「それは後で教えてあげるから。その袋は？ デイナー？」

明人の疑問を軽くいなし、綾瀬は期待に目を輝かせて袋を見つめた。

「そんな大層な物じゃないが、まあメシだ」

明人はテーブルに買った物を並べた。

秋の限定品らしいパスタ2種類とサラダ。明人自身は普段サラダは買わないのだが、綾瀬のために気を利かせて買ってみた。

「えゝ、デザートは無いの？」

不満そうに口を尖らせながらも、綾瀬は食べる気満々なようだ。

「図々しい奴だな」

「それが私だからね」

綾瀬は胸を張ってそう言った。

「そんなこと自慢気に言われてもな……。とにかくデザートはないんで、どっちか決めてくれ」

「ブー！」

「豚か？」

「不満のブー、だよ！」

終わりが見えないので、明人はさっさと片方のパスタを選んでソファーに腰を下ろした。

綾瀬もしぶしぶ余り物を手に取って隣に座った。

「安物にしては美味しいわね」

自分の物を吸い込むように完食した綾瀬は、隣に座る明人のパスタにフォークを伸ばした。

「失敬な。せつかくだから、少し奮発したつもりなのに」

明人は反抗しても掃除が大変になるだけだと思い、それを黙認した。

「へえ……、だったらデザートもつけければ良いじゃない」

「まだ言うか」

この話題にほとんど嫌気が差し、遂に明人は本題を切り出すことにした。

「今日の怪奇現象もろもろの説明をしてくれないか？」

実に率直でつまらないものの聞き方だが、こうしないと綾瀬がまともに答えてくれない気がした。

「……聞いて幸せになることなんてないよ？」

綾瀬は明人の気迫に驚いた表情を見せ、その物言いにちよつと不満げな様子で勧告してきた。これが最後警告だろう。

「それでも構わない」

自分がこの怪異に巻き込まれれば、当然妹にも災厄が降りかかる。それは避けたかった。

すでに両親の死という悲劇が藍には控えているのだ。残った唯一の家族を更なる危険な目には遭わせたくない。

そんな明人の決意を感じてか、綾瀬も真摯な態度で口を開いた。

「私たちの名称は《幻象》^{フェノミナ}って言ってね、字が違うけど意味は現象と同じ。条件さえ揃えば消滅してもまた発生するの。たぶん、そこ

から来てるんだと思う。誰が付けたか知らないけど、奇々怪々で非生物的な私たちにはピッタリな名前でしょ」

何か質問は、といった感じで綾瀬が目線を投げ掛ける。

「なるほどね。それであの傷も治ったのか」

なるほど、で済む話ではない。理解できないが、気になったらまた後で聞けばいい。

「そういうこと。でもね……」

綾瀬が左手で明人の手を掴み、自分の右手に乗せた。正確には乗るはずだったと言っべきか。

「な……!？」

明人は目を見張った。自分の手が綾瀬の右手にめり込んでいるのだ。

それはゲームで近接するキャラクター同士が重なっている状態を彷彿させた。

明人は、慌てて手を引つ込めた。何の音も感触もなくあっけなく手は離れた。

「実はここだけ直らなかつたの」

綾瀬は右手を握ったり閉じたりしてみせた。自然に見えても、それは中身を伴わない虚像。その中では赤い肉が露出しているのだ。

明人は背中を何かが這い上がる感覚を払拭できなかった。

「……そこは確か、霜崎に斬られた所だよな」

明人は少し震える声で聞いた。麗美な剣を振るう残酷な少女を想起しながら。彼女もまた《幻象》であるらしい。

「そう。今までだって大怪我は何度もしたけど、元に戻らないのは初めて」

その声は驚愕や悲愴も含んでいるが、感心している節もあった。

「どうしてだと思う？俺も刺されたけど無傷だったし」

明人としても謎だった部分だが、綾瀬はあっさりと答えてしまった。

「アイツの能力じゃないの。相当幻象^{わたしたち}を嫌ってるようだったし」

「なんか関係あるのか？それと霜崎の能力が」

「大ありよ。幻象^{わたしたち}は、この状態に生まれ変わる直前に抱いた想いに縛られる。それが幻象の存在意義で魂といえる部分になるの。これがほとんど能力に直結するわ」

「じゃあ、霜崎は幻象を殺したいほど憎んでるってわけか」

「そうなるんじゃない。となるとアイツは天敵ね」

憎たらしそうに綾瀬が呟いた。しかし、同時に笑っていた。

「何が可笑しいんだ？ 綾瀬にしたら生命の危機だろ」
明人は訝しそうに言った。

「甘い人間。そのスリルを楽しんでこそその人生よ！」
綾瀬は高らかと言い放った。どう？ カッコイイ？ みたいな目つきがなければもったいいのに。

明人は思わず感嘆の呻きを漏らした。あの綾瀬から恐れ入るような力リスマ発言を聞けるとは思ってもみなかった。

それに彼女の正体が何であれ、自分に正直に生きている所は大概の人間より人間らしいと感じられた。

「そういえば、綾瀬はどういうことができるんだ？」

話を聞いているとなかなか好奇心をくすぐられたのだ。

「サカキも見たでしょ？ 教室でのアレやコレ」

くつく、と意地の悪い笑みを浮かべる綾瀬。

「……アレをやったのはお前か！」

遥の言ったことは正しかったらしい。それを聞いていたし、あまりに非現実的で綾瀬に対して怒りやら憎しみはさほど生まれなかった。

明人は次第に甦る悪夢の中に両親を奪った少女の姿を見た。彼女に対しても微々たるほどの憎悪しか抱いていなかった。

それよりも彼女は誰なのだろう、という疑念が大きい。それは思い出せそうで思い出せない歯がゆい記憶。

「俺さ、夢の中でゴスロリな服の女の子に会ったんだけど。お前何か知ってるだろ？」

あれは綾瀬が作った夢だ。その内容を当人が知らないはずがないと明人は踏んだ。

「彼女は……私の友達、かな。サカキにぞっこんなんだとさ」

綾瀬にしては珍しく考えて物を言っている様子が見て取れた。

「俺に惚れてる、だって？」

これまたあまりに急な告白だ。でも、かすれつつある夢の中の言動を思い起こせば合点もいった。

「ええ。私はその気持ちを見せてただけ」

「彼女の名前は？ 今どこにいる？」

明人は心中のものを晴らすため畳み掛けるように聞いた。

「なまえ？ あゝ、えゝ、で、でもどっか遠くにいるよ」

目は泳ぐ、不自然。しらばっくれているのは誰の目にも明らかだった。

「変な奴だな。綾瀬は」

どうも喋りたくないようなので、明人もそれ以上追及しなかった。それよりもこんなに感情だだ漏れで、嘘もつけない人間は初めて見た。世間一般としては善人だろうが、ある意味不憫に見えてしまう。

「ところで、幻象絡みで俺に直接関係がある事はないのか？」

なおも明人は、語り切ったかのようにテーブルに突っ伏してしまつた綾瀬に聞いてみた。なにに越したことはないのだが、このまま雰囲気流されて説明終了してしまいそうだ。そのまま不可避の悲劇、という流れはごめんだ。

「ない。私もう疲れたから寝る」

何が気に食わないのかぶつきらばうな声だ。そして唐突に綾瀬は立ち上がり部屋を出ていこうとした。

「本当か？ ちょっと待てよ。そこが1番重要だろ」

明人はすかさず手を取り引き止めようとしたが、叶わなかった。

掴んだのは実体のない右手だった。

綾瀬の頑固で自分勝手な性格を考えると、明人は立って追いかけることも億劫になり俯いてしまった。

「部屋、借りるからね」

リビングを出るとき綾瀬は、肩越しにちらりと向いて言った。その表情はどこか浮かないようで翳っていた。

「ダメって言ってもどうせ聞かないだろ。俺はここで寝るから勝手にしろ」

しかし、一瞬の怒りから明人は顔を揚げず綾瀬の表情を見なかった。

「よく、分かってるじゃない」

皮肉を言いながらも綾瀬はしばらく立ち止まっていた。何かを期待しているようだったが、結局明人が顔を揚げた時にはもういなかった。

「何なんだアイツ」

明人は憤りを感じずにはいられなかった。コロコロと態度が変わる様子は見ていて面白い。しかし、この状況では煩わしいだけであった。

怒らせてしまっただろうか、言い方がキツかっただろうか。後悔が押し寄せてきて、謝ろうかと考えた。

だが、こちらが卑屈になるのは理に敵っていない。人の気持ちも考えず身勝手なことをしている綾瀬が悪いのだ。

葛藤の末、明人は謝罪を後回しにした。綾瀬のことだ、明日になればまたケロッとしているに違いない。そんな期待もしていた。

それでも心の中には暗いしこりが残り、気分は晴れなかった。

「……風呂にでも入ろうか」

夜11時過ぎ。明人は遅めの入浴を済ませた。お湯は紅にこそなっていないかったが、そうとうぬるくなっており暗鬱な気分を助長させるようだった。

仕方なくさつさと上がってソファアに転がる。布団を自分の部屋から取って来たいが綾瀬に会うのは気まずい。

「というか何故アイツは俺の部屋を使ってるんだ。藍の部屋使えよ」文句を言っても意味がない。明人はしまつてあった別を出してくるまつた。

秋の夜長は寒く、ソファアもしっくりこない。寝心地は最悪だが混沌とした非現実的な1日の疲れから、明人はすぐ深い眠りに落ちた。

アメリカ北部の街。暗い夜道にカッカツと規則的な靴音が響く。

（すっかり遅くなっちゃったよ……。明日朝早いのに）

榊原藍は帰路を急いでいた。自責の念を抱きながらも、その表情は満ち足りていた。先ほどあったクラスメイト達との送別会の残り香に浸っているのだろう。

（色々あったけど、アメリカンライフも楽しかったなあ）

その心に浮かぶのは一年間の数多の思い出。

日本を通っていた学校が国際交流に積極的だったことが始まりだった。つまりは交換留学である。

教師の熱狂的な勧誘と家族の承諾に押され、藍自身が決断したことでだ。

藍は留学についてあまり不安を感じていなかった。数人の同学年の生徒と一緒に来るのだし、なにより校区内に少女の実家と仲がよい親戚の家があった。

現にこの一年間、他の生徒が寮生活なのに対し、藍は自宅から通っているようなものだった。

そんなことができるのか、といえば自由の国の力と言わざるをえない。

たまに寮生活をしてみたくなって、週1ペースで泊まりに行く事があるくらいだった。

そこから始まり、思い出される日々の数々に、暗黒に染まる人気がない道も明るく見えた。

「……きゃっ!？」

藍が角を曲がった時、大柄な男とぶつかってしまった。藍に緊張が走る。

「気を付けろよ」

男はただ注意して通りすぎた。

「はい」

藍は一瞬恐怖を覚えたが、男が何もしなかったことに安堵した。しかし気が緩んだその時、後ろから太い腕が彼女を羽交い締めにした。

「きゃ、むぐつ！？ んんー！」

藍は悲鳴を上げようとしたが、湿ったハンカチのようなもので口を遮れてしまった。

（なに、この、におい…）

同時に鼻腔に刺激の強い匂いが流れ込み、藍の意識が遠退いていく。

ぐったりとした藍を男はその剛腕で軽々と担ぎ上げ、素早く近くに停めてあつた車に乗せた。藍と男を乗せた車は、その黒いボディを闇に溶かすように走り去った。

（ここは……？）

藍が目覚めたのは、明度の極端に低い蛍光灯に照らされた古い倉庫のような場所だった。

かびと埃の臭いが染み付いたこの部屋には大小様々な棚や、大きな台、道具が溢れた用具箱などが散乱していた。ここが長らく使われていないことが伺える。

「うう……んん！」

漂う悪臭に耐えかね藍は口を開けようとした。それは何かで阻害されていた。

藍からは見えないが、その口にはボールギャグが噛まされている。両手は後ろで拘束され、服もボロボロにされ白い肌と下着が露出していた。

藍は緊縛状態で床に転がされていた。

藍の後方で金属のドアが重々しく開く音がした。藍が首を捻って

後ろを見ると、数人の覆面男が立っていた。その中にはさつき藍を運んだ男も見られた。

「グッドモーニン」

1人の男が嘲りの挨拶を投げ掛けた。それは他の男たちに低い笑い声を上げさせた。

すぐさま藍の瞳は純粋な恐怖で彩られた。これから何が起こるかなど想像したくもなかった。

蒼白な顔に冷や汗が垂れ、華奢な身体の震えも止まらない。

しかし、抵抗も忘れない。それは身体をもぞもぞとくねらせ男たちから離れる、という無様なもののだが。

ついでにそれは男に余計な欲を奮い起こさせてしまうことに藍は気付かない。

そんな藍に絡み付くような視線を送り、男たちは黒い欲望を募らせる。そして悪意を撒き散らしながら、飢えた獣たちはゆっくりと藍に近づいていった。

初めは激しく抵抗していたが、今では藍も疲労の色を露にし、男たちにされるがままになっていた。

男が腰を動かす度に下腹部への劇痛と絶望と行為終了への渴望、そして自分を犯している者への憎悪が生まれ出る。

それらは我先にと少女の塞がれた口から飛び出ようとした。その結果、何の意味も持たない混沌としてくぐもった喘ぎが断続的に零れた。

これが本来は本当に快楽に繋がるのだろうか、藍は甚だ疑問に思った。その答えを模索し気を紛らわすことを切に願っていた。

何時間経っただろうか。一体何人に槍を突き立てられただろうか。もう何も考えられない。藍の頭の中は真っ白だった。

破瓜の血、野獣達の体液、自分の体液。グロテスクに混ざりあっ

たそれらは相応の腐臭を放ち、男たちが去った今でも藍の呼吸器を犯していた。

いつしかボールギャグも外され自由になった口からは、壊れた玩具のように「あう」とか「うあ」とか意味不明な音が出ていた。

光を失い影に支配された藍の瞳は、遙か遠く虚空を映していた。

耳も腐っていると言ってもいい。称賛されるべき英語力のせいで、下劣で卑猥な罵詈雑言を少なからず聞いて理解してしまったためだ。もはや人間としてではなく、肉人形として乱暴に扱われた少女。

そんな陰惨無比な状態で彼女は、穢らわしい液体にまみれ床に転がっていた。まさに茫然自失の境。藍は肉体的にも精神的にも崩壊しかかっていた。

「酷い……。あなた大丈夫ですか？」

その時誰かが倉庫に入ってきた。その人物は藍に気付いて駆け寄ってきた。

それは藍と同じくらいか、年下らしい日本人の少女だった。薔薇と十字架がたくさんついたゴスロリ服を着ている。髪も染めているように灰色をしている。藍が肉を持った人形として扱われたならば、少女は正規のアンティーク人形のようなのだ。どこかミステリアスで人間味が薄い。

明らかにこの薄汚い倉庫とは不釣り合いで、奇妙な存在である。

しかし未曾有の不幸に襲われ思考も回らない藍には、少女は神々しく見えた。

「今病院に電話しますから」

少女はケータイを取りだしボタンを押す。

「ま、まって」

藍は呂律の回っていない口調で少女を制し、ガクガクと震える足を叱咤し立ち上がろうとする。

「無理しないでください。肩貸しますよ？」

少女の微笑みは慈愛に満ちていて、藍は安心して身を任せた。

「ありがと……」

少女は綺麗な服が台無しになるのもお構い無しに、ベトベトに汚れた藍を支えた。

「病院は本当に行かなくてもよいのですか？」

心底心配そうな表情で少女が尋ねる。藍はそれに力なく頷く。

「そうですか。それでどうしましょうか？ あなたのお家はどこです？」

「イヤ、家には帰りたくない……」

「どうして？ お家の方が心配しますよ」

「こんな、こんな姿、見せられない……」

そのまま泣き崩れそうになる藍。

「そうですね、私がうつかりしてました。でも、困りましたね。あ、私の家に来ます？ 独り暮らしなんですよ。もうすぐ、日本に帰る予定ですけど」

少女はそれを受け止めて、しばらく逡巡^{しゅんじゆん}して言った。

「ほんとですか！？ い、行かせてください」

冷静に考えれば奇妙極まりない提案であるが、レイプされたショックと家族に知られたくない一心で藍はその提案を必死に受け入れた。青白かった顔にも少し生気が宿った。

「分かりました。でもちゃんとお家に連絡はしてくださいね。私が誘拐犯になってしまいますから」

藍の様子にニツコリ笑うと少女は、藍を労^{いたわ}るようにゆっくりと歩き出した。

藍は少女の動作一つ一つに深い優しさを感じた。服装は変わっているが彼女にとっては天使や女神も同然に見えた。

「あ、あたし、榊原藍^{あきはら}って言います。えっと、あなたは？」

「小夜^{せや}です。森谷小夜^{もりやせや}。よろしく、藍ちゃん」

2人の少女は歩き出す。冥い冥い（くらいくらい）夜の深みに。沈むように、溶けるように。

第6話：冥夜・gloom y night（後書き）

かなり間が空いてしまいました。読者の皆様に申し訳ない。

第7話 A：決意 - a w a k e n i n g o f a v e n g e r (前書き)

蟲が出ます。そして過剰な暴力シーンを伴います。苦手な方は気を付けて読んでください。

第7話A：決意 - a w a k e n i n g o f a v e n g e r

灰色の雲は厚く遍く天を覆い、^{あまね}気の滅入るような冷たい細雨を吐き出していた。世界はまだ夜の色を濃く残しているが、早いながらも朝を迎えている。

遥は身体を半ば引き摺るように、学校の廊下を歩いていた。虚ろな瞳と制服に散りばめられた赤黒い染みは、ただならぬ鬱悶気を醸し出している。

誰かに見つければ事件に発展するだろうが、休日でしかも時間が早いのでその心配はないようだ。

遥の目に映る無機質な白い壁は寒さを助長させ、窓越しの薄汚い世界は惨めな気持ちにさせた。

遥の中でどす黒い塊が脈打った。邪悪で陰惨な毒^{きおく}が流れ出る。

あの時教室を覆った綾瀬の血液は、一寸先も見えない闇を作り出し教室を包んだ。

その中では最高純度の悪夢がこの世に顕現していた。それは性質^{たて}の悪い現実と考えるほどにリアルな幻覚だった。部屋の風景は洞窟内の巨大な円形ホールのような場所に変わった。灰褐色の寒々しい岩肌に覆われたそこは、どこからともなく淡い光明が降り注ぎ、洞窟であるにも関わらず多少目が利いた。

だが、遥の目には洞窟より嫌なものが映った。ここの住民である。ゲームに出てくるオーガのような亜人系や巨大な獣もいたが、何と表現してよいか分からない奇々怪々なデザインの怪物が大量にひしめいていた。どれもこれも生理的嫌悪感の結晶というべき姿をし

ている。

「イイ趣味してるわね」

遙が呟いた。それは小さく自分以外に聞こえるような声ではなかったが、怪物たちは一斉に遙の方を向いた。目のあるモノ無いモノ、顔がどこだか分からないモノも遙を認識した。

「グオオオオ……！」

濁った咆哮を上げ、怪物たちは彼らの住みかに堕ちてきた憐れな犠牲者を歓迎しているようだった。

怪物たちは攻撃をすることなく、遙から離れてこのホールに繋がる多数の通路に入っていた。

（一体何が……）

遙が訝しげに思っていると一匹の怪物が穴から進み出た。

遙の2倍はある血色の悪い巨大な肉の塊で、それに見合う不恰好な手足と頭部がついている。

それはユラリユラリと巨体を揺らしながら、ゆっくりと遙に接近してきた。

「さしずめ闘技場での決闘といったところね」

遙が不愉快そうに言うと、肉塊の上部が横に大きく裂け呼応するように低い音を出した。どうやらアレが口らしい。

遙は出現させた三つ又の剣を構えたが、肉塊はただ巨大な体躯を揺るだけだった。

それをチャンスと見て遙は肉塊に向けて走った。そのスピードは肉塊の無い目に止まるものではなく、遙はすれ違い様に深く斬りつけ肉塊から十分な距離を置いた。

肉塊の腕らしき部分が地面に落ち、汚らしい膿のような液体を流した。

（効いてない……？）

それでも全く動じない肉塊に驚きながらも、遙は再度肉塊の周囲を駆け抜け片足を斬り捨てた。

肉塊は図太い腕を振り回したが、もう遙はその範囲にはいない。

そしてそのままバランスを崩し地響きを立てて転倒した。

「……イタッ」

突然遙は腕に焼けるような痛みを感じた。見ると肉塊から出た液体が少しかかっていた。

慌てて制服のスカートで拭う。見たところ痛いだけで赤くもなっていない。

（酸かな。でも服とか地面は溶けてないし。……まあ、夢だから何でもありか）

内容はシニールだが、あまりのリアルさに真実を忘れそうになる。

のたうつ肉塊と怪物たちが消えたホールの際の暗闇を観察しながら、遙は思考を巡らせていた。

（再生はしない。斬り落とした肉が動き出すわけでもない……）

しかし予想外のこと起きた。

肉塊が動かなくなると同時に、斬り落とした四肢共々爆発したのだ。

「ひぎやああああ!？」

全身に体液と肉片を浴び、遙は生きたまま火葬されるような痛み絶叫した。乱舞して痛みに悶える遙を尻目に暗闇からまた怪物が一匹輩出された。

それは蟲と幼い少女を合成したような怪物だった。

少女は全裸。その未発達な肢体の肩口からは無数の長大なムカデが生え、腰から下はヌリと光る黒い蜘蛛という有り様だ。

少女自体は無表情ながらも可愛いらしいが、それが蟲と合わさること度を超して痛々しく見える。いうなれば『合蟲少女』である。遙は痛みに耐えながら、新しい相手を見やった。

（子供……化け物とはいえ殺りにくいわね）

朦朧とする意識の中遙が標的を確認し躊躇していると、少女は蜘蛛の足を器用に使って壁を登り、天井の闇が溜まっている場所に消

えた。

どうしたものと悩んでいると、視界の端でキラリと何かが光った。

反射的に遥は横に素早く跳躍した。

（糸……！？）

壁には針金くらいの蜘蛛の糸らしきものが刺さっていた。それを確認して、遥はまた飛んだ。

ガガガッ

遥がいた場所を連射された矢のように糸が挟った。糸とは思えない硬度と破壊力である。

（速い。けど動いていれば避けることは可能）

そう分析し遥は走り出した。一步遅れて糸が壁を突く音がついてくる。

（でも、これじゃ反撃できないわね）

天井は高く、刀身を伸ばす攻撃も届かないだろう。それにこんな状況では立ち止まることも容易ではない。

「……げえ！？」

突然走っていた遥の身体が後ろに引き戻された。何かが首に引っかかり絞めつけながら、遥の身体を宙吊りにする。

「あ………う………かはっ！」

ジタバタともがいている内に、首に例の糸が巻き付いていることが分かった。それはちょうど首吊り自殺の時に使うロープの形状をしていた。ホールにはいつしかこのトラップが大量に仕掛けてあったらしい。

怪しくなる呼吸に急かされ、遥は剣で糸を斬ろうとした。

すぐさまそれを阻止せんと糸がその腕を貫いた。

「ぐっ！？ しまっ……！」

怯んだ隙に剣が手から滑り落ち、カランと音を立て地面に転がった。

続いて全身に何本もの糸が刺さる。骨を貫通したものもあり、凄

まじい痛みが遥を襲った。代わりに首締めから解放されて、遥はむせるほど空気を貪った。

「ぐふっ、は、はああ……」

だが、獲物の呼吸が安定するのを狩人が待つはずがなかった。

系には釣り針のような返しがついており、それで遥を吊り上げ洞窟の高みへ運んだ。重力に従い落下しようとする身体を支える系は鋭い苦痛を生み出していた。返しは肌を破って食い込み、身体の中を通る系は揺れる度に肉を切る。滲み出た血が制服を濡らし、眼下の地面に落ちていく。

発狂して暴れそうになるの身体を遥は必死に制御した。今下手に動けば身体がバラバラになりかねない。

上昇していくにつれ、暗がりには潜む少女の姿が見えてきた。蜘蛛の脚で逆さまにぶら下がり、無数のムカデ状の腕で器用に糸を持ち遥を操り人形のように弄んでいた。

（化け物が、私をどうするつもりだ？）

遥は抵抗虚しく少女の目の前に持ち上げられた。

少女がニイツと嗤う。するとムカデたちが糸を手放し、遥は宙に舞った。

「く、そ……ああぐっ！」

想定外のことではあったが、なんとか体勢を立て直して、着地し受身をとった。全身が痛みをにじんだが、地面に叩きつけられるよりはマシだった。

少女もまた天井の暗がりから這い出し、遥の近くへ降り立った。そしていとも簡単にそのおぞましいムカデの腕で遥を絡めとった。

「は、放せ！ 気持ち悪い！」

全身を這い回る何千という脚。その不快感はある意味先ほどの攻撃より威力があった。

しかも蟲のくせに異様に力が強く、疲弊した今の状態では外せそうになかった。

「この子たちが、お姉ちゃんを食べたいって」

少女が初めて口を利いた。人間部分の見た目同様幼く無邪気な声なだけに、余計に恐ろしかった。

「そんな、ことしたら殺すわよ！」

顔以外をムカデに覆われながら、遙が叫んだ。その表情は言葉ほど厳しくなく、嫌悪感に歪んでいた。

「うるさいよ」

苛立った声に反応して、ムカデが抱擁を強めた。

「がはっ……！ ごぼお。……や、やめで、はなして！」

強烈なベアハッグを受け、遙は身体を弓なりに反らせた。スレンダーな身体の線が強調される。

骨が折れて内臓を損傷したようで、赤黒い塊を吐き出した。その血をムカデが先を争うように啜る。吐血程度の量では足りるはずもなく、ムカデたちは遙の口に殺到した。

「むぐっ！？」

口腔は蠢く足と触覚との凄まじい感覚に満たされた。全身の毛が逆立ち、肌が泡立った。

「ダメだよ。おんなじところに行ったら、みんな食べられないですよ」

少女は楽しげに言って、一旦口から『腕』を抜いて抱擁も解いた。
(いまのうちに……)

恐怖で震え役に立たない足に見切りをつけ、遙は無理やり転がって剣を奪取した。

「にげないでよ」

反撃に転じる間もなく、遙の白い足にムカデが伸びてきて鋭い顎で咬みついた。

「ぐ！ この……！」

遙は更にまわりつこうとするムカデを斬り伏せた。数匹が頭部を斬られ黄色い体液を滴らせる。

「痛っ！」

少女は小さく悲鳴を上げた。感情が分かる所はただの蟲より戦い

安い。

「覚悟しなさい。今から地獄を見せてやりゆ！」

言った瞬間遥はしまったと思い、口を押さえた。

「『やりゆ』だってカワイイー」

「う、うるさい！」

遥の方は恥ずかしくて怒鳴った。なんとも自然にそうだったので、多少混乱していた。

「それ、ただの『噛んだ』じゃないんだよ」

意地悪そうに少女が口元を歪めた。そしてゆっくりと遥との間合いを詰めていく。

遥の身体が電流が走ったようにビクツと震えた。突然遥は立つだけの力を失い、崩れるように膝を着いた。全身の筋肉が弛緩して力が入らなかった。

「な、なんね…！？ はあ、はあっ…」

苦しげに喘ぎながら、遥は自分を見下ろす少女を睨み付けた。

「この子の毒だよ。お姉ちゃん、もううごけないね」

少女は得意げに『腕』を振った。褒められて嬉しいのか、ムカデたちはキチキチと不気味な音を発して長い身体をくねらせた。

（これは…ヤバいわね）

遥は悔^{かいゆう}尤の念に浸りながら、嘲笑する怪物を睨むしかなかった。

「みんなおまたせ。ぜんぶ食べてもいーよ」

ついに少女が死の宣告を下した。同時にムカデたちは歓喜して遥に襲いかかった。握っていた剣を弾き飛ばし、無力な肢体に群がる。

我先にムカデたちが集まったのは口だった。

閉ざそうとしても毒の効力でうまくいかない。為す術なく侵入を許してしまう。

「んぐっ！？ んんむぐ！」

舌で押し戻そうとすれば、多脚がその上を行進する。そのあまりの気味悪さに抵抗する気力が失せ、食道への進入を許してしまう。

「っぐっ、んひいい！ んー！」

無数の爪を食道に突き立てながら、血と唾液と嘔吐物が混ざったものを退けながらムカデたちは更に奥を目指す。

気道を塞がれ息をするのも困難になる。痺れて言うことを聞かない身体は時々反射的にビクンビクンと跳ねているだけである。その振動で、早くも生気が欠如した瞳に溜まっていた涙が頬を伝った。

「ほら、みんなにもあげなさい」

少女は下準備が整ったのを確認し、『腕』に次なる指令を与えた。ムカデたちは遥の胃を占拠し、更に奥に進行しようとしていた。

しかし合図に従って、身を捻ると肉壁に牙を立て喰い破りはじめた。「ぐぎぎぎっ！」

遥はかつと目を見開いた苦悶の表情で、声にならない咽びを絞り出した。ムカデが腹腔を引きちぎり、急速に身体の表面に迫るのが分かった。

そして遥が見ている目の前で、ムカデたちは腹部を穿いて登場した。赤黒い血と粘液で濡れた体節がキチキチと耳障りな音を鳴らす。それは先陣に加われなかったムカデたちにとって、メインディッシュの蓋が取り払われたということだ。猛然と遥の腹部に突進し、穴を喰い広げた。赤いプールに溺れるような体勢で血を啜り、臓腑を喰い散らかす。

少女は苦痛に歪む遥の顔を見やすくするために、遥の口から『腕』を引っ張り出そうとした。ムカデたちが食欲のあまり激しく抵抗するのでほとんど無理矢理する形になった。

果てしなく無惨な音がした。何千もの鋭い爪を持つ脚が咽喉をズタズタに切り裂いたのだ。体内から出たムカデたちも、すぐに腹部に猛進して先陣に加わった。

遥は血液が跳ね、肉と骨が削りとられる音を集めた曲を聞いている。何も感じない。

（痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！）

痛み以外は何も感じなくなってきた。

おぞましい蟲が己の欲望を満たすために、少女のたおやかな肢体

に群がり蹂躪する様は筆録しがたいものがある。

その間遥は意識を失うことも目を逸らすこともできず、未曾有の激痛に絶叫しながら自分の身体が減っていくのを見るしかなかった。声が出ていたのかも自分では分からない。なにしろ生き物としての機能は破壊されているのだから。

遥が魂の苦痛から解放されたのは心臓を貪り食われた後だった。

遥は意図せず再び覚醒することになった。とは言え、目も耳も鼻も機能しておらず唯一触感だけがある状態だ。そんな遥を変な感覚が襲った。

全身がむず痒い。でも何となく気持ち良くもある。

これが夢であることを思い出した。もしかしたら、もう終わったのかもしれない。あまりに過激な体験に身体がショックしているから、こんな状態なのではないか。希望が瞬いたが、すぐに現実に取り戻された。背中には洞窟のゴツゴツした感触があることに気付いた。

それでもこの苦痛のない現状になら身を委ねてもいいと思った。それは勘違いも甚だしい。今は『治療』の真っ最中である。遥がそれを思い知るのは、視覚が回復してからだ。

眩しさに目が眩んだ。久しぶりに見た光は、岩窟を照らす不思議な光だった。決して強くはなかったから、すぐに目が慣れた。

「ひっ!？」

『治療』を目撃して、遥は思わず息を飲んだ。

へし折られて身体から飛び出した骨は、赤黒い膜を張りつけた白い芋虫よろしく元に戻ろうと不器用に動き回っていた。

裂かれた皮膚はノロノロと伸縮し繋がった。かと思えば力を無くしてちぎれたりしている。

全身の部位が別の生き物のように蠢いている。純粹な恐怖が渦巻いた。

声を出そうとして、口や喉の皮膚も再生していることに気付いた。体内でも同じことが起きていることを想像すると、身体が強張った。好き勝手に動き回る自分の一部は、刺激したら一斉に振り向いてきそうに怖かった。

そう考えると目が離せない。つつい好きでもないホラー映画を見てしまう感覚と似ている。『治療』を見せつけること。それは遥の身体を癒し、心を毒すものであった。

最終的にはもう一度戦えるほどに身体は修復された。すると、待ってましたとばかりに怪物がまた一匹ホールに躍り出た。

遥はこの『治療』を再び受けなかったために力を振り絞って戦いに挑んだ。勝つのは無理でも、なんとか悪夢の終了まで時間を稼ぎたかった。

その油断も隙もない遥を嘲笑うかのように、思いもよらぬ所に罠はあった。

「ひぐうう！　がああつ！」

遥が醜い怪物に何度目かの斬撃をあたえようとする時に、それしてきた。治ったかに見えた細い足を喰い破るようにねじられたような断面の骨が顔を出したのだ。

呆気に取られたのは一瞬。すぐに凄まじい痛みで転げ回ることになった。悶えれば悶えるだけ、遥の身体は腐った果実のようにズルズルと自壊していく。

その状態で遥は怪物に縋り殺され、また『治療』を受けることになった。しかも『治療』は完璧な時もあれば、少し動くと身体が壊れる時もあった。

遥はいつまた身体が崩壊するやもしれぬ恐怖と、怪物に縋り殺される恐怖との板挟みに苦しみながらも戦うしかなかった。

救いようのない狂氣的な想像力が作り出した、どこまでも惨慄な夢。結局それは、綾瀬の右手に宿っていた力を使い果たした時点で終わった。

「……」

脳裏に染み付き、隙あらば思考の表層に浮かび上がろうとするそれを遥は懸命に振り払った。

今は疲弊しきった心身を休める場所を探すのが肝要である。悪夢を回想し、無駄に精神を病む必要はない。

（体力が回復したら、アイツをぶった斬る）

綾瀬の邪悪な内面を隠すような眩しい笑顔を思い浮かべると、遥の本能が目覚め始めた。

《復讐の女神》ネメシス フェノミナ

それが遥の幻象としての名前だ。唯一幻象を造り出す能力を持ち、遥を血塗られた運命に決定付けた幻象、《起源》オリジン。それが復讐の対象である。

今度は在りし日の思い出が脳裏を掠めた。

血まみれの少年を抱きしめ、泣きじゃくる少女の姿。全てが変わったあの日

その幻想をも遥は振り払った。

（過去を憂いて悲しむ時間は私にはない…）

遥は剣を出現させ、目を閉じその刀身に祈るように額をつけた。

美しくも歪なこの三ツ又の剣は、斬った幻象を再発生させずに消滅させる力がある。同時に周囲の幻象の存在を感知できる。

だが、デメリットもある。

まず人間は斬れない。これは、明人を刺した時に初めて知った。最たるものとしては、幻象への殺戮衝動が起こることだ。このせいで遥は憎んでもいない同族を殺戮していった。

彼らは望む望まないは別として、『起源』に人生を変えられた仲間のはずだ。それを自分勝手な欲求だけで殺すのは辛かった。これでは、あのムカデたちと何ら変わらない。

だが、止めようと思ってても止められず、無理に我慢すれば意識を失ったりもした。そして目覚めた時には、必ずと言ってもいいほど手は血に染まっていた。

遥はそんな自分が怖かったし、嫌いだった。しかし殺戮行為を止めると自己否定になるらしく、消滅しかかったこともある。

復讐を果たすためには殺るしかなかった。

だから、この衝動を多少コントロールする術を身に付けた。だが次第に肥大化する欲望を完全に制御するのは不可能だった。

遥は衝動に身を任せ、殺人の快楽を求めるようになっていった。

復讐と保身の板挟みに遭った精神の一種の防衛機能である。

もはや《復讐の女神》などという大層なものではないのかもしれない。『辻斬り』『通り魔』そんな呼び名の方が似合っている。

幻象を殺しても消滅する為証拠は残らないが、目撃者にはは大量殺人犯として見られている。幻象とも人間とも相容れない。遥は孤独な存在になっていた。

それを悲しく思ったのは最初だけだった。その後は《起源》を探しながら、出会う幻象を殺し飢えを満たした。

能力ゆえ、傷つくことはあれど負けることはほとんど無かった。

今回は久しぶりに大敗を喫したことになる。この綾瀬というなかなか骨のある獲物は、遥の心はいつになく沸き立たせた。

殺人衝動以外の理由で剣を振るう機会は久しく無かった。

剣から額を離し、遥は目を開いた。その赤い瞳から虚ろな光は消

え、並々ならぬ狂気と強い意思が宿っていた。

「生きるためには殺すしかないのね」

いや違うか。これは贖罪だ。あの日、この狂った獣の欲望で大切な人を殺したことに對しての。それは綺麗事だ。本当はもっと単純に、殺したいだけなのだ。だが、殺人の重圧は幻象になったとしても軽くなるものではない。だから、手頃な理由が欲しいだけ。

「どうでも良いわ」

浮かんできた様々な想いを一蹴して、遙は再び歩き出した。

第7話 B：決意 - never forget

遙が決意を新たに学校を脱出してしばらく時が経った。榊原家では家主が起床した。

ソファで寝るのは要領を得なかったらしく、明人は目覚ましがわりに全身を床にぶつけた。

「ついてねえ……」

不満を垂れながら顔を洗って、歯を磨いて、着替えを済ませた。毎朝何かしら音楽を聴いていたが、今日は静かな雨音がBGMである。

「アイツまだ寝てんのかな」

アイツとは綾瀬のことである。

昨夜はよくわからない内に雰囲気が悪くなり、明人の部屋に逃げてしまった。騒がしいのが居ないのに気付くと途端に寂しさを覚えるものだ。

綾瀬の性格からすれば、今朝はケロッツとして起きてきそうだが、うだとしても何となく罪悪感があった。

「謝つとくか、一応」

悪いのは確実に綾瀬なのだが、彼女から謝罪が聞けることはまず無いと思った。こういう時は謝った者勝ち、ともいう。なんだかなだ言って綾瀬が心配なのである。

明人は自室に足を向けた。

「あれ？」

ドアが開かない。鍵などは付けていないので、中で何かが引っかけているらしい。

「完全引きこもり宣言か」

出会って数時間で人の部屋を我が物顔で使う奴は初めて見た。

「止めといた方がいいか。アイツにも何か事情があるみたいだし」
そう結論づけて、明人は大人しく引き下がることにした。無理に起こしても不機嫌になるだけで大変だろう。

明人はリビングに戻って、思い出したようにケータイを開いた。
「留守電もメールも無し、か。どうしたんだ藍？」

この鬱陶しい天候のせいで、妙な気分になり余計な心配までしてしまう。確かにモーニングコールはほとんど毎日あったが、今日は帰国する日なのだ。

早く家を出なくてはいけなさそうだし、実際に会えるのだからしなくても不思議ではない。

「さて、何をするか……」

つくづく自分は独り言が多いと感じた。

今思えば両親が旅行に出かけてから 死が何者かに隠蔽されてからは特に顕著だったようだ。

犯人はあのゴスロリだろうが、別にどうでもいい。

時間は万病の秘薬。

死体も出ないし、半年間も死んだことを知らずに過ごしていたのだから、今さら実感もない。本当は警察に届け出る必要があるだろうが、そんな気も起こらない。

今はただ藍のことが気になる。この事を知ったらどうするだろう。泣いてしまっただろうか、それとも自分と同じで実感が沸かないのだろうか。

やはり警察に届け出るべきか。だとしても半年経って『親がいなくなりました』等とのたまうのはバカらしい。妙な疑いをかけられては困る。

他に選択肢は何かある？

「……思いつかねえ」

明人はうなだれた。実は自分が家族のことを別になんとも思っ

ないことを思い知らされたことに。

「最悪だ」

自分に妹を迎える資格はあるのだろうか。アメリカにいた方が幸せだと思わせてしまうのではないか。負の自問スパイラルに陥り、だんだんと悲しくなってきた。

ガタガタと物を動かす音が聞こえてきた。どうやら彼女の要塞が開放されるらしかった。

片手しかない少女が一体どうしているのか疑問である。

「ふああ……、おはよう」

怠惰の塊みたいな声が聞こえた。綾瀬が寝ぼけまなこでリビングにやってきた。

「よく寝れたなあ。むふふ、布団が気持ち良いんだよね、サカキっぱい匂いがして」

明人に聞かせたいのか、綾瀬も独り言患者なのか。恥ずかしくなるような台詞を惜しげもなく言い放っている。

「おかげで良い夢見れたし、体調はバツチリ！ 手ないけど」

綾瀬はペラペラと一通り喋ると、Uターンして洗面所に行ってしまった。

「何なんだアイツは」

空気読め、という方が難しいかもしれないが察して欲しかった。

じゃぶじゃぶと無遠慮な水音が耳に響くのに鼻につく。

戻ってきた綾瀬に今の状態を見せなくなかったが、どうにも身体は動いてくれなかった。結局俯いたまま出迎えることになった。

明人を気に掛けているのか、気まぐれなのか綾瀬は無言で朝食の準備を開始した。

トースターでパンを焼いたり、冷蔵庫から何やら取り出して調理

を始めた。

明人は顔を上げず、その音を聞いていた。感謝と情けなさを感じながら。

「ブレックファーストは大切だね。1番を壊す。なんていうの、2番が1番な感じ？」

静寂が嫌いみたいで、綾瀬は一人ボケ始めた。

「意味わかんねえ」

シカトを決め込んでいた明人も思わずツッコんでしまった。

「あ、やつと元気になった」

顔を上げると綾瀬がエプロン姿でニコニコと笑っていた。今のが元気になったと言えるなら、気の触れたオウムでも元気なんだろう。「朝から落ち込んでるなんて不健康だよ。パーッと明るく楽しく行くべきです」

「……そうかもな」

まさか綾瀬に叱咤されるとは思ってもみなかった。明人は照れくさくなって顔を背けた。人に弱みを見せるのは初めてかもしれない。った。

「もうちょいで出来るから待っててよ」

綾瀬は上機嫌だった。加速していく独り言に律儀にツッコむ明人も大変である。

「うむ。会心の出来だね。私の分だけ」

「は?! ちよつと待て。最後辺りに不穏なワードが聞こえたぞ」

綾瀬が運んできたお盆をのぞきこむと、見事なまでの黒い物体が皿に乗っているのと同じ普通に美味そうな朝食の皿がある。両方ともまともなスクランブルエッグが付いているが、見た目は天国と地獄である。

「嫌がらせか。どうやったら一緒に焼いて片方だけ炭化するんだ?」疑問を投げ掛けつつ視覚と嗅覚を刺激する方の皿に手を伸ばす。

「トースターに嫌われてるんだよ、きつと。見た目悪いけど、ビタ

「チョコだと思えば食べられないことないよ？」

綾瀬は素早くその皿をひったくった。

そしてパンに失礼なくらいジャムを塗りたくった。甘い物が好きというより、悪ふざけにしか見えない。

「じゃあお前食えよ。代わりにその甘党の夢みたいなヤツを貰うから」

「えー、イイよ」

綾瀬はなんとも簡単に承諾した。

絶対裏がある。表から裏が透けて見えるくらい明らかだ。

「ほらよ」

明人は一応渡してみた。正直、何をしてくるか分からない。

「…ブラックスクエア。ダイオキシンと同じカテゴリーに入るらしい超有害物質。見てこれ、黒いよマジパネえ！」

「そんな危険なシロモノが家庭で簡単に作れるとは驚きだあね。で、喰えや」

明人が急かすように言った。

「私がこの猛毒で苦しむのがそんなに見たいか！ このドＳめ」

言ってることが支離滅裂である。

「自分から進んで喰うって言ったろ！ このドＭめ」

明人は逆ギレに逆ギレで返して、砂糖漬けみたいなトーストを口に運んだ。持っただけで、指がジャムまみれになる。

「これ１斤で１日分の砂糖、って感じだな」

明人は何かのＣＭ風にコメントして、パンを綾瀬の皿に戻した。

「それ、おいしいってこと？」

不思議そうに綾瀬が見てくる。炭は放置されている。

「不味い。頭がどうかしてるって意味だ」

「えー、糖分は脳を活性化させるってアルファベットの探偵さんが言ってたよ」

「ま、名探偵には必要だろうな。でも頭使ってなさそうなお前にはいらん」

口直しに牛乳を一口飲んだ。甘ったるジャムと混ざってなかなか美味い。

「あ、サカキの味がする」
「ブッ！」

強烈な不意打ちに明人が嘔き出した。

綾瀬はそんなことは気にも留めず、サクサクと小気味の良い音を出しながら、ベトベトな甘党専用を平らげていく。彼女も牛乳と交互に食べるのが好きらしい。というか、これはドリンクが無いと拷問みたいな代物である。

「……」

返す言葉が無い。こんなシュチュエーションは二次限定だ。

「……ちよっと！　なんか言いなさいよ。こっちはずかしくなるでしょ」

綾瀬の頬が少し紅潮した。でも幸せそうなのは甘い物のおかげか、間接キスもどきのおかげか。明人には分からなかった。

「デレたな。はずかしい奴」

からかわれっぱなしもつまらないので、明人も反撃した。

「あ、ひどっ！　ブラックスクエア喰ってろ、ばーか！」

反撃は予想以上に効いたようで、綾瀬はふいとそっぽを向いてふてくされてしまった。

「……すまん、調子に乗りすぎた」

非は十割ほど綾瀬にある。なぜ謝っているのか明人本人も分からない。

「食べたらゆるしてあげる」

振り向きもせず綾瀬が小さく呟いた。

「何をだ？」

薄々気付いているが、聞いてみた。そうでなかったら、という願いを込めて。

「ブラックスクエア」

「やっぱりか。っーか、その名前気に入ってんのか？」

「うつさい、早く喰え。じゃないとサカキの部屋に引きこもるよ」

「マジかよ。じゃあ同棲生活だな」

「それ良いかも」

綾瀬は遠い目をして何か危険なものを空想している。

「じゃあ早いとこ喰って阻止しないとな」

綾瀬のデレを蹴って、大きく一口かじった。

口中をボソボソ感と苦味が占領して

「ん!？」

炭はとことん甘かった。さっき食べたパンと同じ味だ。

「プツ」

綾瀬が少し噴いたかと思えば、破裂したように笑い出した。

「きやはははは！ サカキはやっぱダメだね。見破れたらスゴいけどさ」

パチンと綾瀬が指を鳴らす。

持っていた炭の塊がぐにやりと歪んだかと思うと、ビン1つを空けたくらいのジャムがかかった物体に変わった。正確には戻ったというべきか。

「は？」

「おはようサカキ。朝ごはんが黒こげってナイトメア」

悪戯がキマったガキの笑顔。単なるガキなら領けるが、綾瀬は高お校生である。その思考幼稚すぎやしないだろうか。

「そりや悪夢だろうけど……」

まんまとはめられた。綾瀬は間接キスをゲットし、明人は醜態を晒してさらに喜ばせたに過ぎなかった。

パンの一件は気に食わなかったが、スクランブルエッグはトロトロしていて美味しかった。

「お前が作ったにしちゃ上出来だ」

素直に誉めておく。デレると可愛いし面白い。

「良かったあ。料理なんて久しぶりにやったから」

綾瀬は心から安堵しているようだった。
だから明人は「まあ、スクランブルエッグなんて誰でも作れるけど
な」という意地悪は飲み込むことにした。

「ところでさっきのは幻象^{フェノミナ}ってやつのか？ アレは……」

明人の疑問は真剣みを帯びた声に中断させられた。

「そこで！ サカキに言わなきゃいけないことがあるの」

綾瀬が唐突に真摯な態度を取る。しつかり明人を見つめる赤い双眸には強い意志が宿っていた。

「驚かないで見て。あと、怒ったらヤダから」

忠告もそこそこに、綾瀬は立ち上がって部屋の中央に移動した。

明人が何か言う前に部屋は奇妙な空気に包まれ始めた。蛍光灯の
明度が段階的に下がったように感じられる。

「《虚構^{エリュシオン}の楽園》よ、真実を白日の元に曝せ」

綾瀬が仰々しい呪文めいたワードを朗々と唱えた。

すると、ガラスが砕け散るような音がそこらじゅうから聞こえて
きた。

「何だよ一体？！」

頭の中がぐらぐらする。視界に音相応の亀裂が走る。眼と耳を塞
ぐしかなかった。そうでもしないとイカれてしまいそうだ。

「サカキ、眼を開けて」

綾瀬の柔らかな声に明人は恐る恐る瞼を上げた。

フローリングは黒々とした『ワックス』で塗られている。床のみ
ならず壁、天井、家具類も全て真っ黒だ。

「これが真実」

ゆっくりと振り向くと薄い闇の中に綾瀬がいた。

彼女の周りにはおかしな蝶々が舞っていた。おぼろげに光る体は

ガラス細工のようで、一目で生物でないのが理解できた。

「まさか……」

明人は絶句した。捨て去った記憶が濁流の如く流れ込んでくる。乾いた血が覆う部屋にいるだけが理由ではない。綾瀬が《虚構の樂園》を解いたことで一部制限されていた記憶が蘇ったのだ。

「ごめんなさい。サカキのここ半年間は私が作った幻^{げんじつ}実よ」

綾瀬が悲しげに独白し出した。

とうてい冷静には慣れないが、明人は黙って聞くしかない。

「半年前、私はたまたまこの街に来ていた。フラフラ放浪してたから本当に偶然。そこであのゴスロリと知り合ったの。私の力を知ったアイツは懇願してきたわ。『明ちゃんを傷付けずに邪魔な奴等を消したい』って。ちよつとした幻^{ひと}象助けだと思って協力したの。暇だったし。」

最初は普通にサカキに会いに行くだけみたいだったけど、何を思ったかサカキの親に会った瞬間アイツは2人を手にかけた。そのままアイツはアメリカに行くとか言って消えてしまった。煉獄のようなこの部屋とサカキを残してね。

私はその後始末を進んでやることにしたの。だからこの半年間は、ずっとサカキの隣で過ごしてきたって訳。理由はよく分かんない。気まぐれだと思ってた。でも違うみたい。私サカキが好き」

綾瀬は凶行に至った経緯を語り、常軌を逸したタイミングで告白してきた。一体どういう思考回路を持った生物なのかと考えたところで、この少女は生きていないし死んでもない。更に常識不適應者だった。

「そうか」

明人は短くそう答えた。綾瀬の願いを聞き入れた訳ではないが、怒りどころか悲しみも湧かない。

「なんで今コレを見せたんだ？」

「だってアイツにサカキを盗られるのは癪だもん。それに昨日の夜、喧嘩別れした原因これだし」

「お前なりに考えてくれたってことか。でも、言っちゃって良いのか？ これを知ったらアレは何するか分からんぞ」

「何」と言いつつ明人の心配事は1つだった。

ゴスロリの言葉が蘇る。

『藍ちゃんを探し出して、殺すわ』

今朝連絡が無かったのはもう殺されてしまっていたからかもしれない。

「たぶんね。慕ってる人の家族を殺す動機は不明だけど」

明人の心情を知ってか知らずか話は『アイツ』の方に流れていった。

「アイツって言うけど、名前があるだろ。教えてくれよ」

「森谷小夜って名乗ってたわ。幻象としての名前は言ってなかったけど」

「森谷小夜…」

その名前を反芻するとチクリと頭痛がした。

小夜が明人に何か（綾瀬の口ぶりからすれば恋心だろう）を抱いているなら、以前会ったことがあるはずだ。

街でちよつと見かけて好きになったから家族を殺しました、とかならこの国はもう終わりだ。

そついうわけで、思い出せないが案外近くにいた人物なのだろう。明人は自分の過去を顧みない性分を残念に思った。以前のクラスのメンバーなんかろくに覚えていない。

「アイツはサカキへの執着心の塊ね。ずつと明ちゃん明ちゃん、って言つて未練たらたら。昔仲良かったんじゃない？」

綾瀬は小夜の名前を呼ばない。恋敵と認識しているらしく蔑むような口調だ。

「かもしれない」

「ふん。で、あの名前に覚えは？」

「さあ、記憶にないな」

明人は両手を軽く上げてみせた。少なくとも高校ではそんな奴は知らない。

「ふふっ、そうなんだ」

綾瀬はちつとも残念そうではないし、むしろ嬉しそうに笑っていた。

「楽しそうだな」

「だってアイツは幻象になってまでサカキを追ってきたのよ。なのに覚えてもらえてないんだもの。かわいそう」

綾瀬は口元を三日月みたいにして嗤った。並びの良い白い歯が覗いた。

「案外黒いなお前」

明人は苦笑した。小夜も普通に出会えたら良かったのに。何も殺人を犯して好感度を地の底に落とす必要はない。

「救われないな」

明人はポツリと呟いた。

「そうだ、アルバム。何か手掛かりがあるかもしれん」

この閃きを実行すべく、再び部屋を見渡して気分が悪くなった。会話の中で冷やされた頭で見ると、室内は更に陰惨さを増していた。

「そっぴゃ、死体はどこへやった？」

「アイツがほうりだして行っちゃったから、あっちの山に埋めた」

綾瀬は窓の外、雨のベールの向こうを指差して言った。

「そうか」

それを聞いてもやはり何の感情も浮かばなかった。

（末期だな、俺も）

「怒らないの？」

綾瀬が不安そうに見上げている。常識から逸脱している幻象の少女からしても、これほどの無感動は驚きなのだろう。

「元からこうなんだ。虚無主義ってやつらしい」明人はやんわりと

言った。

十数分後、2人は《虚構の樂園》^{エリュシオン}の力で造られた日常的な非日常に戻ってきた。

綾瀬がこの部屋を再度封印し、入る者の認識をすり替える工作を施した。綾瀬がいなくともこのシステムは半永久的に稼働し続けるらしい。これで虚構は時を経て事実になり代わる。

明人はそれで満足だった。平和に暮らすなら知らない方が良いでしょう。特に薄皮1枚剥がしたら血まみれルームが顔を出すのは、御免だった。

「サカキは良いとして。妹ちゃんは大丈夫なの？」

パラパラと中学の卒業アルバムを捲りながら綾瀬が言った。

「ああ。帰ってきて親が死んでるって知ったら、どうなるか分からん。永久に応急措置だよ」

アルバムに目を走らせながら明人は隣にいる幻象の説明を思い出していた。

多種多様、禍福も自在。先ほど見た蝶々は綾瀬曰く「血と汗と涙と想像力の結晶」らしい。やたら水分が多い。それを憑依させれば、あとは綾瀬の意志1つで夢幻の虜となる。

幻覚の性能の優劣で言えば、銃弾<蝶<血液や身体の一部ということらしい。

部屋のシステムに加え、帰ってきた藍には家の外用に蝶もつけてもらうことにした。

「ただこの蝶々作るのめっちゃ手間だし疲れるから、いつもはこれよ。ぱあん！」

綾瀬は手で銃を作って射撃してみせた。

そんなことを言いながら嫌な顔一つしないで協力してくれる。明人は言い尽くせないくらいの感謝を述べた。

「ひつ、さ、サカキ」

綾瀬が怯えた声を出した。

感傷に浸っていた明人は驚いて指されたページを見た。

「……きみわりいな」

アルバムは中学時代明人の所属していたクラスのページに差し掛かっていた。

クラスメイト全員の顔写真を載せたページのある一カ所が黒のマジックで乱暴に塗り消されていた。

「三好、守田、じゃあここは……」

森谷が来るのではないか。2人は同時に結論を導き戦慄した。

「他のページは？」

綾瀬に促され、体育祭とか文化祭等の思い出深い行事のページを開いた。

綾瀬が息を飲んだ。

黒塗りの部分はやはりあった。女子の集団の中に多く見受けられ、意味する所はおそらく黒塗りも女子であるということ。一緒にはいるがどれもこれも遠くに写っており、女子との仲は良くなかったようだ。

だが消されているのは2年の秋辺りまで、その後には禍々しいマジックは見当たらなかった。

「消されてないけど、この中にアイツがいるのかな」

ジツと写真を見つめる綾瀬に明人が諭した。

「消す必要が無かったんだろ。この先に森谷小夜はいない」

「そうともとれるけど、何で断言できるの？」

「うちのクラスは36人、行事の度に集合写真を撮ってるようだが、常に1人ほど足りない」

欠席している奴もいるだろうが、どの写真を数えても最高は35人である。

「じゃあ中学2年の秋くらいに幻象になったみたいね」

「すると3年前になるなあ」

結果としてその程度のことしか分からなかった。嫌な思いの割合

の方が大きい。

アルバムは押し入れの奥にしまっておいた。二度と見ることはないだろう。

「あれを塗ったのは誰だろうね？」

綾瀬が分かっているくせにあえて聞いてきた。

「俺がやったんだ。森谷小夜との間に何かあって、衝動的にな」

ここまできて何も思い出せない。明人は不甲斐なさを感じずにはいられなかった。

その後明人は綾瀬の腕の事を思いだし、義手について調べてみた。だが、到底手の出る値段ではないし、綾瀬もいらないと言う。

外へ出られないので談笑していると、いつの間にか雨は止んでいた。

夕方、明人と綾瀬は電車で揺られていた。藍を迎えに空港に向かっているところである。

国際線の出ている空港などももちろん緋森市には無い。幸い隣県にそういった空港があるので、そこへ向かっている。

さつきから綾瀬は席に膝立ちになって窓の外を眺めている。服を持ってないなどのたまうので、またしても藍の服を借りて着ている。

今は男の子っぽい活動的な長袖Ｔシャツ、ジーンズという出で立ちだ。

もつとヒラヒラな服が好きかと思っていたが、これも似合っている。アイデンティティなのか、髪はヘアピンで加工されたままだ。

「普段はどうしてる？」

嫌な予感がして聞いてみると、予想通りの答えが返ってきた。

「服以外もお金はないけど、お店から借りてる」

「それは万引きと言って犯罪だ。覚えとけ」

言う割に明人は何とも思っていない。店が潰れようが興味がなか

った。

「幻象に人間のルールは適応されない。覚えておきたまえ」

綾瀬は本当に何にも縛られない生活を送っているらしかった。

しかし幻覚が効かない機械は誤魔化せないらしく、監視カメラを筆頭にセキュリティシステムは苦手。でも捕まえに来るのは人間だから遅れは取らない。

雨は昼過ぎに止み、散り散りの雲の隙間から夕陽が射して茜色に染まる街並みは実に美しい。

「日本の車窓から、サンセット殺人事件」

綾瀬は相変わらず奇天烈な独り言を繰り返している。彼女の脳内ではサスペンスの定番BGMと共に血みどろ殺人が起きているに違いない。

（我慢だ、無視だ、他人のフリをするんだ。今に始まったことじゃない。例えば他の乗客の前でぶつぶつ言っても、ツッコんだらダメだ）

同じく独り言が多い明人も人の事を言える立場ではない。だとしても思い付いた妄想を駄々漏れにするほどの重症患者と同列でない事は確かだ。

「おい、お前。傍若無人って言葉知ってつか？」

限界である。決意は虚しく2秒で崩れた。

「傍に若く無い人がいる」

高齢社会をそのまま表した言葉よね、とツッコまれるのを待ちかねていたように綾瀬は勝手な解釈を垂れる。

「オーケー。言葉を変えよう。そのブツブツ止めるボケが！」

「えゝ、肌綺麗だと思っただけど…」

「なら、襲って確「国家権力の出番だね！」」

こんな痴話を繰り広げても乗客達は見向きもしない。それというのも綾瀬が能力を使ってこの車両を《エリュシオン虚構の樂園》で変えてしまっ

たからである。ここにいる人間は誰一人2人を認識していない。

羞恥心を持ち合わせていない疑いのある綾瀬は別として、明人は十数人に囲まれての喧嘩など気が気ではない（楽しんではいるが）

「便利だな。その能力」

「でしよう？ 何せ私が自由に楽しく過ごすためのモノだからね」

「なるほど。それがこないだ言ってた1つの思いつてやつ？」

すると綾瀬がちよっと目を大きくした。

「意外に鋭いね」

「まあな。多少自分が巻き込まれたモンに興味があるんで」

「それじゃあ、わたしたち幻象の出生の話でもしてあげる」

綾瀬はキチンと座り直して、語り始めた。

「まず《オリジン起源》って幻象がいて、彼が幻象を創るの。あ、創るって

いうか人を変身させるっていうか。彼は強い願望がある人の所にやって来て、その周囲の人間関係をぶっ壊した後、最終的に当人を襲って殺そうとするんだって。それで死にかけてパニックた人間に問うの『お前の望みは何だ？』ってね。めっちゃ怖いんだから。まさに死ぬほど。それで、願いを言ったらそれに見合う幻象になる。でもチャンスは1回。男も女も二言はできない。あくまで最初に言った願望だけよ。だから可哀想なのは『死にたくない』とか『殺さないで』って問われた後に叫んだ奴。そいつらは自分で消滅できない幻象になって、多分地球最期の日までこの世に存在いきなきやいけないかも。最初は良いけど段々心が磨耗して最期には狂うらしいよ。それは置いて、見事幻象になったら急に優しくなって、そいつの幻象名を決めたり、不安でくたばりそうな私達にあれこれ教えられるの。案外いい人かもね」

色々と驚かされる内容である。起源の性格にはいささか問題があるように思えた。

要するにその男は人間を試して遊んでる訳だ。願いが叶う人は良

い、だがそんな状況でまともに答えられる奴が何人いるだろうか。
大概の人は生も死もない存在^{いき}地獄。無限の苦しみを味わうことになるのだろう。

「だから我ながら凄いと思うんだ。私の精神力」

綾瀬が誇らしげに言った。

「ああ、大したもんだ」

それは本心からの称賛だった。現在の性格がどうあれ綾瀬だって普通の女の子だったはずだ。彼女を取り巻いていた環境がどう変化した、どんな形で命の危機にさらされたかは知りもしない。

だが、そんな中で「自由に楽しく生きる」などと言えるのは心底凄
いと思った。

意地悪く裏を返せば死にたくないと同じだが起源には詮無きことらしい。

その一方で目的こそ不明だが人を弄んでいる起源には嫌悪感を持たざるを得ない。

「ねえ、会ってからずっとだけどなんで『お前』って言うの？ 名前
前で呼んでよ」

「は、何だ？ 急に」

シリアスさも抜けきらぬまま、別の話題に飛んだことでちょっと焦った。

「私は明人の彼女だって設定だから。しっかり妹ちゃんに紹介して
よね」

「そうか……って、はあ!？」

そいつは初耳だ。

「ほらはやく。練習。綾瀬って呼びなさい」

有無を言わせぬ真面目な雰囲気。心の中ではニヤニヤしているのが丸見えだ。

「改まるなよ。無駄に恥ずかしくなる」

「……」

大きな瞳が上目遣いに明人を見ている。もの欲しそうに見上げてくる。

小動物の可愛さがあつた。ここまま大人しくしていれば、普通に美少女で通るであろうに。

「わーったよ。呼べばいいんだろ、呼べば。……あ、綾瀬」

こんな会話今時、中学生でもしねえよと思いながらも、意外に恥ずかしい。

「フツ、その反応。貴様草食系だな」

勇気を出して真っ赤になつて言ってみれば、綾瀬は変なキャラを構築して鼻で笑つた。

明人は仕返しに黙りを決め込んだ。

「いじけてるの？ バカね、名前呼ぶくらい普通じゃん」

「……」

「無視しないでえ。さみしいと死んじゃうの」

綾瀬は腕にすがり付いてきた。

つい鬱陶しくなつて明人は吐き捨てるように言つた。

「なら死ね。どうせすぐ生き返るんだろ」

さっきの会話で綾瀬が幻象であることに誇りを持つていることは気付いていたはずだった。なのに完璧な侮辱に当たる発言をしてしまった。

「ひどい……ちょっとふざけただけなのに」

みるまに綾瀬の表情が険しくなる。

泣きそうになりながらも怒りを露にしており、微々たる刺激で決壊しそうなのが分かる。

その悲惨な氣に当てられて身動きができない明人を尻目に、綾瀬は別の車両に逃げ出した。同時に綾瀬が造つた空間が崩壊し、普通の電車に戻つた。リアルな揺れと騒音を体感できた。

戻ってきた日常に何かを感じる間もなく、アナウンスが目的地に到着したことを報せた。

空港の近くということで人の出入りが激しい。明人は押し流されるままホームへ降り立った。

「どこ行った」

明人は人混みから外れてホームの端に移動し、忙しく流れる人の波に目を凝らした。

電車は止まったかと思えばすぐに行ってしまう。アナウンスがあったのでここで降りることは分かっているはずだが。

あのまま乗っていつてしまったのかと考え始めた時、ヘアピンを大量に着けたカラフルヘッドが明人とは反対側の出入口に走って向かうのが見えた。あれはあれで可愛いし、放っておけない感じがするのである。

追いかけようと一歩踏み出した時に、明人は意外な人物の横顔を目にした。

銀のような冷たさと美しさを兼ね備えた幻象の少女。

「霜崎遥」

彼女も同じ電車に乗っていたらしい。

黒のロングコートに身を包み、長いポニーテールを揺らしながら明人とは逆の方向へ足早に移動していく。その意味する所は火を見るより明らかだった。

「まさか……！」

昨夜の凶悪な記憶が克明に浮かんできた。

一度は死を免れたものの二度とはないかもしれない。そんな究極的な恐怖が、追いかけようとする足を地面に縛り付けた。

その呪縛を解いたのはケータイのバイブだった。慌てて開くと藍からのメールが届いていた。

「無事だったか」

安否を確認できて一息つくも、今は一刻を争う事態である。

『……あと20分くらいで着くよ……』

絵文字で飾られた文章から最低限を読んで即返信した。

『おくれる』

藍には悪いが幻想に堕ちてもらう予定だ。それは綾瀬がいなければ成し得ない。そしてその当人に消滅の危機が迫っている。

「無事でいろ」

明人の決断は早かった。

あえて2人を追わず、すぐ近くの階段を一段飛ばしで駆け降りた。降りた所で明人の正面の出入口に2人の姿が見えないのを確かめ、反対の出入口に突っ走った。そちらの方が人が少ないと感じたからだ。

そこは彼女達を通った階段の行き着く先である。必死の形相で疾走する明人に周囲の人々は驚きと好奇の視線を投げ掛けるが、そんなことを気にしては守ることなど出来はしない。

（明人のバカ。私の気持ちも知らないで）

一方綾瀬はもうすでに駅から出て、街道を走っていた。

走るのを止めたかったが、追いかけてくるであろう明人に捕まりたくなかった。その想いと矛盾して、早く追い付いて欲しいとも思っていた。

謝ってくれたら一発殴って許すくらいの覚悟は出来ていた。

そのせいか綾瀬の足は遠回りながらも自然と空港に向かっていた。仲直りした後にすぐ2人で藍に会うためだ。

だが、綾瀬は無意識に人気のない小さな道を選んでいて。その選択が自分を追う死神をほくそ笑ませているとは知らず。

「いぐつ!？」

何の前触れもなく綾瀬は右の大腿に衝撃を受け、前のめりに倒れこんだ。初めて感じる焼けるような痛みが身体を抜けた。

「ぐえあ！　がっ！」

ひとまず立ち上がろうとうつ伏せの姿勢から左手をつくと、今度は猛烈な蹴りが胸部を襲った。綾瀬の華奢な身体は為す術なく地面を転がった。

口から血を滴らせながらすぐに身体を起こす。綾瀬はそこで初めて襲撃者の姿を視認した。

涼やかな秋の微風に揺らぐ黒のコートは、徐々に深くなる夕闇と混ざり闇色と化しつつあった。悪魔の槍に似た三ツ又の剣は、微かに残る落日の陽光を受け鈍く光る。

そこにいたのはまさに死神同然の美少女だった。

「昨日は素敵な悪夢をありがとう。おかげでよく魔されたわ」

遥は得物と同じく冷淡な態度で、先ほど跳ね飛ばした綾瀬にゆっくり歩み寄ってきた。

「あら、私の特製幻覚がお気に召して？　何度味わってもらっても結構よ」

遥がただか半日程度で立ち直るなど、にわかに信じがたかった。だが、現に目の前にいる。綾瀬は挨拶もそこそこに左手の『銃』を遥に向けて乱射した。

「ふん」

高速で迫る弾幕を歪な剣で器用に弾きながら、遥は懷から黒い物体を取り出した。

「本物を見せてあげるわ」

「ぐあっ……！」

黒い物体が乾いた音と共に火を噴き、綾瀬の左肩を鉛の弾が貫いた。衝撃で綾瀬は後頭部を地面に打ち付けた。

唯一の武器だった左手は使い物にならなくなり、だらりと地に落ちてしまった。

「きゃああ……うえっ！？」

攻撃手段を失った綾瀬は悲鳴を上げようとしたが、瞬時に遙の手が首を捉え嗚咽にしかならなかった。

「叫ばれても厄介ね」

遙はポケットからタオル地のハンカチを摘み出して綾瀬の口腔に詰め込んだ。呼吸がもちろん困難であるが、唾液をハンカチが吸うことで口の中はカラカラになり不快感が増した。

「ふぐう……」

遙はうーうー、と苦しげに呻く綾瀬を片手で吊り上げて立たせ、壁に叩きつけた。

「殺す前に痛めつけないと私の気が収まらないな」

しげしげと綾瀬の身体を眺めていた遙の視線がある場所で止まった。

「やっぱり再生しないみたいね」

自分が斬り落とした綾瀬の右手を見る。手首から先はなく血が滲んで袖を染めていた。綾瀬がかけていた『手があるように見える』幻覚は多大なダメージで解けてしまったようだ。

「ここにあったモノが昨日の夢の源か」

遙はイカれているとしか思えない笑顔を浮かべた。

「むむー！ うぐー！」

綾瀬はより一層の狂気を感じて、イヤイヤと首を振った。自然と涙も零れ落ちる。

ぐちゅ

獲物の懇願など受け入れられるはずもなく、遙は剣を消して空いた手で無遠慮に丸い肉の断面を撫でた。大きく綾瀬の身体が跳ね、暴れたした。

「動かないで」

遙の警告は耳に届かなかったようで、綾瀬はあらんかぎり絶叫しながら暴れ続ける。

「あくまで、従ってくれないわけか」
ずちゃ

遙は躊躇いもなく、その血が溢れる輪切りの腕をコンクリートの壁に押し当てた。

コツツと骨が壁に当たる音がする。離してみると、スタンプのような後がくつきりと残っていた。

「次はもつと痛いから、ハンカチを噛み締めておきなさい」

言うが早いのか、今度は叩きつけるように腕を壁にぶつけた。

身の毛もよだつ醜い音がして肉が潰れ、骨が削がれた。

身に余る苦痛に綾瀬は目を見開いた。その目に涙はあれど光はなく、目の前にいる暴力の化身も壊された手も映ってはいない。

絶望の淵に叩き込まれた瞳だった。

そろそろ殺さないと人が来るかも。そう考え剣を出すため手を離すと、綾瀬は糸の切れた操り人形の如くふしだらに座り込んだ。

「おい！ 霜崎！」

遙の予想は早すぎるほどに的中した。おぼろげな光を纏った人影が路地に現れた。

その人物の登場には驚いたものの、それが驚異にもならないことが分かった。

「榊原明人」

路地に入った明人は、例の剣を携え脚立する遙と力無く地面に腰を下ろしている綾瀬を発見した。

「お前が何故ここにいる？」

「どこへ行くのが俺の勝手だろ」

明人は人の形をした死神を恐れることなく歩を進めた。今は綾瀬の無事を祈る気持ちしかなかった。

「俺の大切な彼女を返してくれないか」

明人は遙と1mほどの距離で立ち止まった。彼に付きまとい

た非生物的な蝶々が遙の横を通り過ぎて綾瀬の頭に止まった。

「彼女？ お前正気か」

遙がせせら笑ったが、どことなく曇っているように見えた。

「当たり前だ。早く綾瀬から離れる！ さもないと……」

「さもないと、どうするつもりだ？ 私を殺すのか」

遙はコートから9mmハンドガンを取り出して銃口を明人に向けた。遙自身は人間を攻撃できないが、これなら無問題であった。

「そんなモンまで……」

明人は少したじろいだ。昨日とは全く別人のような遙の豹変っぷりは、こちらが本性であると分かるものだし、本物の銃はその象徴みたいに見える。

遙が自分を攻撃できないと思いやってきたのだが、そうでなければ勝機などなかった。

「幻象と関わって悲惨な運命を辿る前に私が終わらせてあげる。そのくだらない恋愛を！」

「くそ！」

明人が突進するのと、遙が剣を振り上げ、引き金を引いたのは同時だった。

剣は地面を叩き、遙に殴りかかろうとした明人も止められた。

射撃音だけが尾を引いていた。

「んくっ！」

明人の目の前で綾瀬が崩れ落ちた。

明人に取り憑いていた蝶々を自身に還元し、その僅かなエネルギーで明人を庇ったのだ。

「綾瀬、しつかりしろ」

明人は倒れる綾瀬を受け止め、真っ赤に染まったハンカチを口から取ってやった。

「あ、あきとお……、げぼっ。ケガ、してない？」

苦しそうに息を荒げながら綾瀬は囁くような声で聞いた。

「ああ大丈夫だ。それより自分の心配しろ」

「良かったあ。明人が死んだら、きっと妹ちゃん悲しむよ……」

「喋るな」

「嬉しかった、私のこと彼女だなんて」

その言葉を無視して虫の息で言葉を繋ぐ綾瀬を明人は抱きしめた。数発の銃弾を受けた綾瀬の背は血がべつとりとついていた。命が流れ出していくようで止めてやりたかったが、どうしようもなかった。

「もう喋らないでくれ。お前が嫌がっても病院に連れていくから、それまで……」

「もう、助からないから、良いよ。それよ、り、妹ちゃんを迎えに行つてあ、ッ……げて」

苦痛のノイズが混じつたか細い声。あまりに痛々しく、儚い響きがする。

「藍は無事だ。それより俺のせいでお前がこんなことに」

込み上げる熱いものを明人は必死で堪えた。辛くなって顔を上げると、遙が逃げるように走り去っていくのが見えた。

撃つたのは彼女、撃たせる状況を作ったのは自分。明人はその背中を複雑な思いで見っていた。

「あは、なぐる力もないや……。でも、謝ってくれたし気にしてない、から。わたし、がいなくても、お家には残った蝶々がいる……」

完全じゃないけど、事件を隠してくれる」

綾瀬の言葉に視線を戻すと、綾瀬は笑っていた。

「そんなこと言うなって。お前は強いんだから死なないさ」

『どうせ死んでも生き返るだろ』

明人はその言葉が持つ残酷さを理解した。人が死ぬ。それは生き返ろうが何だろうが心を決める。

それを笑って許してくれた綾瀬は本当に強いのだと感じた。

「結局、明人の彼女だったの1時間も、なかったね。……でも、楽

しかった」

「違うな、始まったばかりだ。いつまでも待つてるから戻ってこい」
「明人……。うん、また会いに行くから……」

綾瀬は最期にギュツと抱きついてこと切れた。

力を失った綾瀬の身体は、何ともつかない物質に変化し立ち込める夕闇に融解して消えた。その場に残されたのは彼女が愛用していたヘアピンと藍から借りた服だけだった。付着した血液さえも最初からなかったように無くなりつつある。

「綾瀬……」

止めどなく涙が流れた。悲しい。だが、それも刹那の感情に過ぎない。

俺は過去は振り返らない人間だ。簡単に思い出を捨てられる薄情な男だ。取り返しがつかない両親の死も綾瀬の死にも何の価値も感じない。俺にとって価値があるのは今と未来だ。だから俺が考えるのは常に次何をするか、だ。

綾瀬にいつ会えるのか、そんなもの見当も付かない。それでも彼女と交わした約束が果たされるのは『これから』のことである。

そう思っても完全に立ち直るのは不可能だ。これはガキの強がりなんだ、と心の何処かで誰かが語る。

それでも今は唯一の家族である藍を迎えよう。

「完全に『おくれる』だな。アイツ怒るかな」

涙を拭い去り明人は遺品の服とヘアピンをそっと鞆に仕舞って、路地を後にした。

第7話B：決意・never forget（後書き）

これで終わりじゃないんだ。前半は終わりですけど。

なんか遥が悪い奴すぎるのですが、ホントはそんなことないです。

では、ここで終わるときや良かったな、にならないよう後半も頑張ります。

最後にこんなグロい駄文に付き合ってもらっている読者様に感謝。

第8話：俘虜 - apostles of greed

ターミナルは混雑していた。

忙しなく行き交う人と荷物。彼らは旅の疲れと思い出を引きずり帰ってきた。もしくは様々な思いを胸に旅立つ。すぐそこで起きた刹那の悲劇など知りもしない。仕事で疲労困憊だろうが、隔離される程の病にかかっていようが明人には妬ましいほど幸せに見えた。それほどまでに綾瀬を失ったことは大いに明人の精神を痛めつけた。

暗い気分を打ち消すように明人は妹の姿を探した。藍に会えれば自分らしくもない未練を断ち切ることができる、という期待があった。

すぐに十数人の団体が休憩所にいるのを見つけた。

数人の学生と教師。そしてその学生達の親。

明人はその中に懐かしい顔を見つけた。焦って険しい表情を和らげ、そちらに歩を進めた。彼女も明人に気付いて大きく手を振る。

「お兄ちゃん、こっちこっち！」

毎日電話越しに聞いていた明るく温かい声が荒んだ心を癒すようだった。

「よう、藍。元気だったか？」

「っ、ちよつと！？ お兄ちゃん！」

明人は気分を変えるためテンションを上げて藍をハグしてみた。ふんわりとした感触とシャンプーの香りを堪能しようとする、藍は小さく息を飲み、ビクツと大きく身体を震わせ直後に明人を両手で押し退けた。

「どうした。アッチじゃ挨拶はこんなだろ？ あ、キスが良かったのか？」

明人は怪訝そうに妹を見つめた。

周囲の視線が2人に集まっていた。一緒に留学していた生徒は理解があるようだが、その親からは変な目で見られていた。

「そうだけど、ここ日本だし」

藍は顔を赤らめ俯いてしまった。

「すまん。ちよつと変態チックだったか」

明人が周りに目を走らせると、すぐにおかしな物を見るような視線は散り散りになった。

「そ、そうだよ。キスでもハグでも日本だったらカップルでやるもの……」

「そうだよ、ってひどいな。もうしないよ。日本の風土には合っていないみたいだし」

「分かったなら良いの」

藍は少し間隔を空けるように後退った。どことなく冷淡なその反応が癢に触る。いけない、いけない。どうも他人の態度に過敏になっているようだ。俺は同情して欲しいのか。何がしたいんだ。

せつかくの再会なのに明人はイライラしてしまっていた。

ここで何も知らない藍に当たっても仕方がない。明人は何をしかすか分からない気持ちをつと封じ込めた。

明人は気を紛らわすために一年ぶりに会う藍を観察してみた。またも変態チックなのはいたし方あるまい。

出立前と背は変わっていないようだ。極端に低い訳ではないが、小さい方だろう。瞳が大きいのも相まって幼げな印象を与える。

それらが歳が1つしか違わないにしろ妹らしくて明人は好きだった。

肩を少し越える程度の薄茶色の長髪を、白のリボンを使ってツィサイドアップとかいうツインテールとストレートを足した髪型にセツトしてある。昔は髪が短めだったので新鮮である。

明人の視線は頭から下がっていく。セーラー服とスカート、そこ

から覗く健康的に焼けた脚。

「何見てるのよ！ バカ兄い」

これには藍の堪忍袋の緒が切れたらしい。口調が変わっていた。

「さすが我が妹。ツツコミが容赦ねえ」

悪びれる様子も無い明人に藍は更に腹を立てたようで、身体ごとそっぽを向いてしまった。同時に膨らんだ手提げが明人の腹に振るわれたが、容易く避けた。

「これがアメリカンクオリティか。凄まじい豹変っぷり。でも悪くない」

「何ブツブツ言ってるの。キモがられるよ」

もっとおしとやかだったと思うが、何も言うまい。今の彼女を受け入れてやればいい。突然の変容も含め、明人は再会に満足していた。

しばし時間が過ぎ、教師の号令でようやく解散となった。

「じゃあ。帰るか」

「うん。あ……それよりお母さんとお父さんは？」

藍も最初に思ったことだが、明人のせいで聞くのが遅れていた。

「ああ、その事が。帰ってから話すよ」

明人は落ち着いて対応したが、良心の呵責を感じずにはいられない。

「なによお。そっか、サプライズでもあるんでしょ？」

藍は何の疑いも持たず、虚言をそう解釈した。その輝くような笑顔が明人を傷付ける凶器として用いられているとは知らず。

「詮索するなよ。楽しみが減っちゃう」

「当たり前。楽しみだなあ」

明人からすれば亡き両親にそんな粹な真似ができたかは疑問だった。一年間異国の地で頑張った家族を迎えに来るのが当たり前のはずだ。

明人はあまりに自然と受け取られたことを不思議に思ったが、欧米文化に感化されているのだと考えた。

「早く」

「はいはい」

明人はいつの間にか止まっていた歩みを再開した。

帰りたいようで、ずっと立ち尽くしていたい。進みたいけど、逆行してみたい。今まで感じた事のない感情が明人の中に芽生えていた。

「前ばかり見すぎたか。人間そう簡単に割り切って生きられねえな」
「なに？ ブツブツ言っちゃって」

「ただの独り言。気にすんな」

そう言って心配そうな表情の藍の頭を撫でてやる。藍はまたビクリと揺れたが、大人しく撫でられていた。

「そつえば、目が赤いよ。どうしたの？」

藍は目ざとく悲劇の残り火を見つけてしまった。

「そうか？ 自分の眼は見れないから分かんが」

「もう。ひねくれ者なんだから。でも前からこんなだったっけ？」

「ああ、お前の兄貴はけっこうネジがトNDERぜ」

「……変なお兄ちゃん」

呆れられてしまったようだ。だがそこで厭な話題は終わってくれたので、あれこれ聞かれることはなかった。

「お前も変だろう。さっきからびくびくして」

次は藍が立ち止まる番だった。その表情には濃い蔭^{かげ}がありありと射していた。

「そんなことないよ。何でもない、なんでも……」

以前から藍は嘘を吐くのが苦手だった。それは相変わらずのようだ。だが、今度ばかりはただの嘘ではない。何か暗い巨大なモノを抱えているのが伝わってくる。それくらい簡単に判断できた。

「厭なことがあったら相談してくれ。力になる」

明人は励ますように力強く言った。藍が傷付くことは嫌だった。

唯一の家族には幸せでいて欲しい。重りを背負うのは一人で十分だ。
「ありがと……」

悲哀が滲み出た震えた声だった。何があったか知らないがとてつもなく不憫に見える。

明人はそつと手を引いて藍を外へ連れ出した。今度は手を握ってもおかしな反応は見られなかった。

そんな兄妹の顛末を森谷小夜は物陰から観察していた。

今は目立つゴスロリな服装ではない。小夜の中ではあの服は幻象としての衣装と決まっていた。だから今は人間のつもりだった。

小夜は藍の行動を振り返ってみた。

男である明人に触られた時、小夜が思ったほど深刻な反応は見られなかった。それは兄だからなのだろうか。

それとも私がアメリカ最後の夜にずっと慰めてあげていたことが原因なのか。だとすれば、完全に逆効果である。

しかしこれは布石なのだ。

小夜はこれから絶望に打ちひしがれる藍の姿に胸を膨らませた。
レイプされ、帰り着いた我が家は地獄。

「そして、あたしに殺されるのですから。カワイソウ」

信じていた友人に裏切られ殺される。あまりに悲惨な末路ではないか。

そんな末路を用意したら、あの御方は願いを聞いてくれるかもしれない。小夜はアドバイスをくれた同胞に感謝した。

去り行く2人の背中を眺め小夜の表情は綻んだ。

「だから最高のシチュエーションを用意しなくては」

小夜はケータイで綾瀬に電話を掛けた。

アメリカで別れ、次の日には日本のしかも自分の街に小夜が現れたのではアホらしいにも程がある。他にも計画に関係する奴らの認識を色々弄ってもらわなければならない。

小夜は大掛かりな舞台を整えるスキルを持っていない。それゆえ、偶然綾瀬と出会えた事はとてつもない幸運だったのだ。

「出ないわね」

ため息が出てしまう。お留守番サービスを名乗る女の声を中断させて小夜はケータイを閉じた。

一刻も早く明人の情報が欲しい。

今日帰る事は連絡したから綾瀬も知っているだろうし、どうしたものか。しばらく小夜は思索していた。

当の綾瀬と明人は結託し、藍に襲い来る絶望の第二波を防ぐ策を弄していた。そして兄妹の住む街には幻象の天敵と呼べる霜崎遥が滞在している。どちらも小夜の計画に少なからず影響を及ぼす因子であることは間違いない。

そして小夜はこのことを知らない。

数回掛けたが一向に出る気配が無いので小夜は仕方なく空港を出た。

秋も半ばを過ぎ日没は段々と早くなっていた。それに合わせて日に日に気温も下がっているようだ。

「寒っ」

小夜は身を縮ませ、空を仰いだ。

薄くかかった雲の上から月がネオンの溢れる街を遠慮がちに照らしている。こんな儚げな月でも見ていると、えも言われぬ活力が小夜の中で生まれてきた。

その喜ばしい感覚に小夜は内心ほくそ笑んだ。幻象になって後、小夜と月夜は切っても切れない関係になっていた。

それは小夜を正規の幻象たらしめ、長年の悲願を成就するための力を授けてくれる。

小夜は重たい旅行鞆を引きずって懐かしい日本の夜街に歩き出した。

遙は緋森市内の安宿の一室にいた。部屋を真っ暗にして隅の方で震えていた。

毛布にくるまっても身体の奥底から沸く悪寒は消えない。その起因は自身の犯した殺人への罪悪感なのだから当然である。

「ふふふつ、気にするな。いつもの事だろう」

誰かが話しかけてくる。深海から響いてくるような暗く低い声に背筋がざわめいた。

幻象になつて以来、この声は遙が1人で鬱々している時に語りかけてきた。軽い耳鳴り程度だったものが、今では会話すら可能になっていた。

遙は顔を上げなかった。上げても誰もいないのだ。この声は自分の殺戮を快楽とする人格がもたらす幻聴なのだと感じていた。

「今回はいつもよりスツとしたねえ。ずたばろにされた女に報復できたし、バカな男の人生を修正できた。おまけにあなたも満足よね」
同情するような、蔑むような口調で声が続ける。

「……」

遙は耳を押さえ、不可視の存在からの戯れ言を締め出そうとした。そんなことはお構い無しに邪声は頭の中にこだまする。

「嬉しいんだろ、気持ち良いんだろ、ホントは。そろそろ私と交代したら？」

「……消えて」

蚊の鳴くような声で遙は言ったが、愉しそうに声は続けた。

「そんなこと言うなつて。仲良くやろうよ、ね？」

「黙れ！ 私は起源を殺せば良い。他の幻象なんか知らない」

遙は耐えかねて怒鳴った。怒声が空虚な部屋に響いた。

「くすくす、強がっちゃつて。今に殺したくてたまらなくなるわ。快楽殺人鬼の遙ちゃん」

イラつく猫なで声で責め立て、声はピタリと止んだ。

「うっつ……、違うの、そんなじゃないのに……なんで？」

遥は嗚咽を漏らした。自分でも気付かぬ内に涙が頬を伝っていた。寒くて辛くて、遥は悪魔が潜む我が身を抱いた。

何処までも孤独だった。狂気を孕むこの心身を誰かに慰めて欲しい。今宵はいつも抱えている願望が一際強く感じられた。

遥は同時に閃いた。

その思い付きはろくなものではなかったが、少なからず空っぽの我が身を満たせるかもしれない。

「榊原明人……」

ついさつき、自らの手で殺した幻象の恋人とかいう少年の名である。

恋人の仇がノコノコ現れるのもおかしい話だが、会って謝っておきたかった。それに幻象と仲良くなれるような稀有な性格の人間なら、何かしら得られるものがあると踏んだ。

遥は少なからず彼に興味と下心を持っていた。やはり、遥にとつて彼は《起源^{オリジン}》の情報ソースなのだ。

彼の家の場所は知っている。今朝学校を出た後、綾瀬の居所を探査していて偶然見つけたのだった。まさか同棲しているとは思ってもみなかったが。

もうこの街に用はなかった。もとより起源の手口と似た事件が発生したことを知って来てみただけである。しかし半年もブランクがあつたせいで収穫は無いに等しく、無駄骨であつた。

何故今になって情報が出てきたのかは謎のままではあるが。

ちょうど次の行き先を決めて立ち去ろうと考えていたところだ。

しかしネットカフェ等で調べても起源の新たな手掛かりは皆無だったので渋っていた。

だから明日明人にコンタクトを取ってそれを期に復讐を果たす宛もない旅に出てもいいと思った。明人と会う。自己救済のために選

んだ道は容易く人を傷付けるひどく悪辣なものだとは十二分に分かっていた。

明人の心を深く決る可能性も高い。

もしそうなつて、万一《起源》に付け込まれるようなことになれば「私と同じ、幻象になるかも」

意図せず口を突いて出た最悪の結末に、遥は戦慄した。

私を終わらせてくれる存在。

生きていると誰かを苦しめる。それが遥の苦痛になってきている今現在、この思い付きは恐ろしくも魅力的な結末に感じられた。

「ダメよ」

遥は浮かんできた破滅的な思考を振り払った。歪な剣を召喚し、刀身に額を当てる。貫くような冷たさが遥を律した。

どれだけ傷付こうとも起源を殺して悪夢と化した人生にケリを付ける。幻象になった夜、大切な彼の亡骸を抱いて誓った。

他者を傷付けずにはいられないこの身、この剣。最初から血濡られた道なのだ。ならば、最期まで外道に徹してやろう。冷酷に、貪欲に、自身に必要なモノを求めれば良い。

明人はその対象でしかない。

「そうよ。そのまま、私を受け入れなさい」

再びあの声が脳内に響いた。

顔を上げると『遥』が立って、座りこむ遥に手を差し出していた。

「誰が！」

遥は手にした剣で自身の幻影を横に薙いだ。

「強情なヤツ……」

幻影はポツリと言い残して闇に溶けた。

「自分のことは自分で決めるわ。欲望の使徒で快樂殺人鬼の遥ちゃん」

私はもう迷うこともないだろう。

色々と根に持つ性格であると自覚していたが、こうもすんなり悩みが断ち切れると逆に猜疑的な気分になった。

遥は寢床の準備をしながら思った。

だが気分が良いのは悪いことではない。今日は久しぶりにぐっすり眠れそうだ。そう考える間にも遥の身体からは力が抜け、心地よいまどろみが全身を包んだ。

視界を埋める闇は限りなく優しかった。

第8話：俘虜 - apostles of greed (後書き)

俘虜^{ふりよ} 何かの虜となつた人。捕虜

a p o s t l e s o f g r e e d

(訳) 欲望の使徒

彼のキリストは敬虔な弟子たちを使徒として布教に遣わされた。

欲望に遣わされた使徒たちは、我欲を満たさんがため他者を捨て奔走する飢えた獣に他ならない。

信ずるものは己が欲望のみなり。

第9話：変容・vicissitudes（前書き）

Vicissitudes 《変容》そのまま

第9話：変容・vicissitudes

電車に揺られることしばし。明人と藍は緋森市街の駅で下車した。2人の家は市街地からは距離があるものの、手軽に遊びに行けないほどではない。

明人はガラガラと耳障りな音を立てるトランクを引いて歩いた。さすがに洗濯物やら何やらが大量にあるので、残りは郵送してもらうらしい。これには最低限の物しか入ってない。

隣では藍がキョロキョロと落ち着きなく懐かしの街を見渡している。

「新しいお店がいっぱいできてるじゃん」

「そうだな。有名企業のグループがこの辺にも進出してたし。ここも割と発展してるぜ」

楽しそうな藍の顔を見て、明人もにこやかになった。上手く笑えていると思う。

「へえ、ただの田舎だと思ってたけど違うんだね」

「カントリーサイドサイドがカントリーサイドになっただくらいだ。大差無い」

「大違いよ。明日日曜だし、誰かと遊び行こっかな」

「帰って早々それかよ」

「だって話したいことたくさんあるし。色々見たいじゃない」

「観光気分か。学校で話せば良い…、っとあまりとやかく言つとウザいな」

「そうそう。黙ってなさい」

「そういえばおなか空いたなあ。ね、何か食べて帰ろうよ」

「電車に乗って随分時間経ったしな。そうするか。で、何が食いたい？」

「え〜つとね……」

「ズバリ、ラーメンでしような」

日本人ラーメン好きだろ、という推測から言ってみた。

「何でわかったの？」

藍は意外そうにこちらを見た。案外単純なのかもしれない。

「お前のことなら何でも知ってる。何故なら……」

「シスコンだから？」

「何を言うか！」

「どうせ私のコール、楽しみにしてたんでしょ」

「……くそっ、アメリカめ。俺の妹に変な能力植え付けやがって
それらしく苦々しい表情を浮かべておく。」

「今の間は何よ？ マジでキモい人なの？」

漫才まがいの会話を楽しみながら、2人は店を探して歩いた。

威勢の良い挨拶が2人を出迎えた。店内は喧騒と食欲をそそる香りで満たされていた。店内は喧騒と美味そうな香りが充満していた。

学生、会社員、家族連れ。多様な人々が思い思いに食事しており、概ね繁盛しているようだった。

店員に案内され、今ちょうど空いたとおぼしき席に座った。

「お腹空いたあ。どれにしようかな」

向かいに座る藍がメニューをテーブルに広げた。

「スタンダードだな」

明人はざっと目を通してがっかりした。自分でもよく分からない
が変な物が食べたかった。

「私これにしょ」

「じゃ、これで」

注文してからの空き時間は退屈することはなかった。一年分の土産話があるのだから当然だった。

藍はどれから話せばいいのか混乱していて、話にまとまりがなか

ったが、それほど思い出がたくさんあるということだ。それは微笑ましいことであつた。

話が弾んできた所で「おまたせいたしました」とラーメンが運ばれて来た。

「ちよつとお兄ちゃん?! 何たのんだの?」

明人の前に置かれた物を見て藍はギョツとした。

「何、つて担々麺だけど」

「明らかにメニユーと色が違うよ。真っ赤つかじゃん」

メニユーには濃いオレンジ色の見本が載っていたのだが、目の前にあるのは血かマグマみたいな色のスープである。

「そういうお前は冒険心の欠片も無い醤油ではないか」

「コレ一番人気って書いてあつたし。だいたい、地雷源に突っ込むのは冒険心で言わない」

「いやいや、コレ裏の人気メニユーだから。確か当社比云十%アツプだったか」

「またテキトーなこと言つて。ひねくれ者」

藍は愛想を尽かしてラーメンを口に運んだ。

「あ、美味しい。やっぱ向こうのとは根本から違うわね」

感激して食べ進めていく藍に遅れまいと明人も赤いスープを一口啜つた。

「……うん、イける。適度な辛味が脳天に突き刺さる」

限界まで辛くと注文したのだが、職人は自分のラーメンを凶器にはしたくなかつたようだ。見かけはひどくレッドなものの、味はちやんとしていた。

美味しい料理と絶えない談笑。

綾瀬といた時もそうであるが、意図せず独り暮らしが続いていた明人にはやはり新鮮なものであつた。

藍からは様々な話題が飛び出した。ニユースでしか知らない外国の見聞も広められた気がして明人は何倍も得した気分だった。

「どっかでケーキでも買つてやるよ」

「ホントに！？ 今日は奮発するね」

会計を済ませて2人は店を出て通りを歩いていた。

緋森市街の夜は意外に人がいて、あまり夜の街に繰り出したことのなかった明人は驚いていた。

「再会を祝すんだから当然だ」

「実はお母さん達が買い忘れたケーキを買っただけとか…、ああっ！」
「ん、どうした？」

「夕御飯食べちゃった。どうしよう……」

「別に食うことだけがパーティーって訳じゃないだろ」

そうは言っても明人もその事をすっかり忘れていた。即席の嘘であつたから仕方ないと自分に言い訳しておく。

「お母さんの料理とか楽しみじゃない。お兄ちゃん何で言ってくれないのよ」

「すまんすまん、お前の話が面白かったからつい、な」

感づかれまいかと身構えたがしっかりしてよね、とだけ言つて藍はその話を止めた。

そんな緊迫した空気が去つて暫く後、2人はオシャレなスイーツショップを見つけることができた。評判云々は知らないが、最初に見つけたのでとりあえず入ることにした。

「ここで買おっか」

藍に連れられ店に入ろうとした時に、ポケットでケータイが振動した。

「ちょっと待って」

藍に一声かけて、明人はケータイを取り出した。着信があつたのは明人ではなく綾瀬のだった。

「お兄ちゃん、ケータイ変えたの？ なんか女の子っぽいけど…」

確かにキラキラのシールやネコのストラップでデコレーションされたピンクのケータイは到底男の物には見えない。

「俺の彼女のケータイだ。別に盗んでメール見たりしてるわけじゃないぞ」

言いつつこの機会に電源を切っておこうと思い開けたところ、明人は奇妙なモノを発見した。

『病照ちゃん』

綾瀬はこのなんと読むのかも定かでない文字で電話の相手を登録していた。

この相手がどうも何回か掛けてきているらしく、不在着信が溜まっていた。明人も空港にいる間の着信には気付いていなかった。

「早く」。彼女だからって勝手に見たら怒るよ」

藍が急かしたが、今はこっちが重要に思えた。

「ちよつと先に行って見といてくれ。俺のヤツも決めていいから」
有無を言わせぬ口調に藍は苛立ったようだが、明人が電話に出てしまったので仕方なく店に入っていた。

『もしもし？ やつと出たわね。今どこよ』

相手の女の声には聞き覚えがあった。いつだったか知れないが、確かにあった。

『黙ってないで何とか言ったら。綾瀬さん？』

「もしもし」

『……』

相手は驚きのあまり沈黙したようであった。知らない男が友人の電話に出たのだ。当たり前前の反応である。

しかし、次に発した言葉は思いもよらないものだった。

『ああ、明ちゃんか。久しぶり』

親しげな挨拶。偶然街で会った時のような軽いノリであった。しかもこの呼び方である。電話をしているのは自動的に決まった。

「誰だ？ お前」

『ひどいなあ。あれだけいじめたのにまだ思い出せないの？ でも当然と言えば当然よね』

「訳わかんねえ。名前言えよ」

言われなくても分かっていた。あくまで形式的な質問だ。小夜に綾瀬との関係を悟られてはいけないと直感した。

『森谷小夜、よ。昔みたいに小夜ちゃんって呼んでも良いわよ』

「知りもしない奴を誰が呼ぶか！」

『あらら、ご機嫌斜めのような。でも見ず知らずの相手にそんなに怒鳴れるなんて変だと思わない？』

痛い所を突かれ、明人はだんまりを決め込むしかなかった。

『ま、何でも良いわ。そのうち語り合うことになるのだし。それよりそのケータイの持ち主はどこかしら？』

「知らないな。部屋に落ちてたから拾ったまでだ」

『ふふふつ、あの子もドジね。ケータイ忘れてフラフラしてるなんて』

小馬鹿にした笑いが聞こえ、明人はムツとした。

『そうそう、せっかく話してるのだし、もう1つ聞こうかな。妹はお元気？ 空港でちょっと変だったけど』

「どういう意味だ？」

『さあ？ どういう意味でしょうね』

「ふざけんな！ 藍に手を出したらタダじゃおかないからな！」

『ふふふつ、ごめんなさい。なら私はタダじゃ済まないコトになりそうね』

怒りを露にする明人に対して、小夜はケラケラと笑い残酷な言葉を放った。

「てめえ、何をした！」

『本人に聞けば？ お互いの傷の舐め合いでもするが良いわ。さよなら』

更に追及しようとしたが、一方的に切られてしまった。

藍が無事に帰ってきたことで、小夜の脅威は去ったと勘違いしていたようだ。藍もまた、何らかの事件に巻き込まれていたらしい。

最初に藍から感じた違和感の正体はこれだったのである。

綾瀬がいない今、ただの人間である明人が幻象に敵うはずもない。

襲われれば確実に死ぬ。「どうする？ 何か手は……」

ぶつぶつと呟きながら思索する明人に近づく影があった。

「大丈夫？」

「うわっ！？ なんだ藍か、ケーキ買えた？」

肩に手を乗せられただけで、明人は情けないほど飛び上がった。

「なに怒鳴ってたの？」

「いや、心配するな。何でもない。ただのケンカ。勝手にケータイ使った俺が悪いんだ」

口から出任せの弁解はまるで願望のようだ。電話の相手が綾瀬ならどれだけ良かったことか。「嘘……ちゃんと話してよ」

「えっ、何をだ？」

突然変わった藍の口調は真剣で、ある種の冷たさが感じられた。それに対して反射的にとぼける自分に明人は憤りを覚えた。

「分かるよ。悩みがあるんでしょ？ さっきは俺を頼れとか言ってたくせに、私には頼ってくれないの？」

「悩み。この俺が？」

藍は平生から妙に鋭い所があった。今もその勘が働いているのだろう。今はそれが忌々しい。

「向こうでのほほんと暮らしてたお前には分からんよ」

「……お兄ちゃん、変わったね。だって、こんな酷いこと言っただもん」

藍が消え入りそうな声で呟く。捨てられたペットのような雰囲気もある。

明人が何と声をかけようか渋っていると、藍は独り言を呟いた。

「……私だって色々あったんだから……」

これにより、明人は小夜が発した『タダじゃ済まされない事』が実際にあったと確信した。今は喧嘩などしている場合ではない。

やっと脳が冷静な判断を下し、明人は落ち着くことができた。

「ごめん。俺がどうかしてた」

素直に非を認めたが、言った所で何か策が見つかるとは思えない。

藍に苦痛を与えてしまっただけかもしれない。明人の面持ちはますます陰険になるばかりである。

「誤魔化したりせずに話してよ。どんなに辛い真実でも隠されるよりはマシなんだから」

俺の周りには強い女の子が多すぎる。

それでも俺は弱いままなのだ。男として、何より人間として。

「家で話そう」

だから

「そうだね」

帰るしかない。綾瀬の置き土産がある我が家へと。

街の灯りに負けたのか、それとも広がる雲に隠れたのか、歩き出した2人の頭上に星は見えない。

藍との間に会話が無い。話のネタは尽きないはずなのに。その内に段々とネオンは薄れ、夜の闇が勢力を強める寂しい道に入っていた。

緋森市は極端な街である。

駅前付近は平均的な都市風景だが、ビルが立ち並ぶのは市の中心だけで、そこから離れれば森と畑の比率が増えてくる。

今はそんな街から離れた住宅地を2人で歩いていた。

バスでも使えば早く帰れるが、秋の夜長に散歩するのも悪くない。気分が晴れれば言うことはないが、到底望み薄であった。

人気はない。明かりの無い建物と光度の低い街灯がポツポツと並び、沈黙する通りに灯りを投げ掛けている。

この道に差し掛かると、藍は明人の左腕を抱くようにして歩くようになった。落ち着きなく周囲の目を走らせる姿は捕食者に怯えている小動物に見えた。

「大丈夫か、震えてるぞ」

「暗いのも静かなのも嫌い。でも今日はお兄ちゃんがいるから……」
藍は鬱屈とした声を漏らす。

前は夜道を怖がることなどなかったように思う。なら、今の状況は何なのだろう。すぐに、安直に、小夜の言葉と結びつく。

しかし、どんなものでもトラウマを掘り起こすのは気が退けて、明人は押し黙った。

電灯が少なく、異常なほど静まり返る通り。

それが連想させるのは、藍が体験した理不尽な暴力であった。

今にも大男が出てきて拐われてしまうのではないかと藍は気が気ではなかった。

この瞬間、兄に、いや男にしがみついているのも本当は嫌だった。だが、今頼れるのは兄しかいない。男しかいない。ともすれば恐怖で崩れ落ちそうな身体を支えてくれるのは、兄しかいない。

2人なら襲われるわけない。その確信と共に藍は仕方なく縋るしかなかった。

その時、神経質になっていた藍は奇妙な音を捉えた。

地面を擦るような、さっさっという乾いた音がだんだんと近付いてくる。

「なに、この音」

何でもない音が怖い。藍はますます身を縮めてしまう。

「藍、怖がりすぎ。お前そんなにビビりじゃないだろ」

明人にも聞こえていたが、それはやや季節外れな草履の音だと分かった。

「誰か来るよ……」

「安心しろ、来ない方がホラーだ」

「からかわないでよ！」

突然藍が癇癢を起こしたように叫んだ。明人から離れて、そうはいつでも離れすぎるのは怖いようで中途半端な位置で立ち尽くして

いる。

「おいおい」

明人が何と声を掛けるか決めあぐねていると、話し掛けてくる者がいた。

「どうしやした？ 大声出して」

「あ、いえ。何でもない、です」

明人は急なことにしどろもどろになりながら返事をした。見れば声を掛けてきたのは珍妙な人物だった。

まるで落語の舞台を終えそのまま出てきたような薄墨色の和服を着た男。

男は異臭を孕む霧を漂わせる。それは男の持つ馴染みのない道具キセルから出ていた。

「嘘言っちゃいけねえ、お嬢ちゃんすっかり怯えちまってますよ」

明人と藍を交互に見て男は言った。

「そうですね、あなたには関係無いことじゃないですか」

「はは、何ですかその態度は。この唐変木がっ！」

男は哄笑すると凄味のある声で言い放った。

「は？」

「兄さん、人の情を無下扱っちゃあいけやせんぜ」

「……ああ、そうですね。すいません」

明人は素直に謝罪した。絡まれるのは御免だったし、奇妙な男の言い分は理に敵っていた。

「いやあ、すいませんねえ。つい熱くなってしまいやして。これは

あつしの親切心なんですがね、本当大丈夫ですかい？」

「ええと、何かあなたの草履の音が怖かったらしくて」

「ははっ、そいつはすまないことをした。この格好は気に入ってましてね、止むに止まれないんでさあ」

「へえ」

明人は、時代劇の町商人風の変な喋り方をするこの男をウリった

犯罪者かと思っていた。そうは見えても言動から良識は持ち合わせていそうなのが不思議だった。

好き好んで関わりたいわけではないが。

「そんな暗い顔しないで、元気出してください」

男は取っ付きやすい笑顔を浮かべ藍に話しかけた。

「あ、え……」

藍はおどおどするばかりで言葉にならない。

「心配しなさんな。何もしやしません」

男は微笑んだ。俗っぽい。それゆえ親しみ深い。そんな笑いだった。

「すみません、ご迷惑お掛けして」

藍がおずおずと謝る。

非があるとすればこの男であって、藍ではない。

明人は藍の態度に苛立ちを感じた。

「冥い夜は誰だって怖いものでさあ。この黒を見ると、厭なモンが蘇ってきますからね」

「そう、ですね」

心の中を見透かしたような発言に藍は男から目を背けた。

「ほんならもう行きますわ。あつしは縁ってヤツを大事にしてるんでさあ。今宵の出会いも何かの縁。また何処かで会ったらよろしく頼みます」

最後に明人の肩を叩いて男は夜風に衣を靡かせ歩きだしそうとした。

「あの、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

意を決して藍は質問した。

「おっと、あつしとしたことが名乗りもせずにベラベラと。姓を九鬼、名を政孝と申します」

九鬼は答えて優雅にお辞儀した。和服なのに西洋で紳士が淑女にするようなお辞儀で、なんとも滑稽だ。

「ふふ、九鬼さんですか。私、榊原藍と言います。こっちは兄の明

人です」

それがおかしくて藍は笑みをこぼした。

「なんとご兄弟でございやすしたか。あっしはてつきりカップルかと」

「そ、そうなんですか」

「このまま禁断の恋に走れるぞ。良かったな藍」

九鬼の勘違いにぎこちないながらも笑いが起こる。その波に乗って明人も釣り餌を垂らしてみた。

「何がよ！」

見事藍が釣れた。純粋な良い奴である。

「ははは、藍さん元気になりやすしたね」

「あ……、はい」

九鬼に言われて藍はいつもの調子を取り戻したことに気付いた。

「ありがとうございます。九鬼さん」

藍と明人は2人してお礼を言った。張りつめた空気を破ったのは他ならぬ九鬼であつたから。

九鬼はそれを見て、柔和な笑みを浮かべた。

「なんのなんの。困ったときはお互い様、でござんしょ？」

「何だかご立派ですね」

藍は心から感心しているようだ。

明人も今どきこんな人は珍しいのだろうと思う。だが九鬼をどことなく胡散臭く思ってもいるのだった。

「そう思っていただけるんなら、嬉しいことさあ。さあて、そろそろお暇いたしやせん」と

九鬼は明人たちとは反対の方向へ歩き去った。しばらくは小気味よい草履の摺り音が聞こえていた。

藍にとって今度は恐ろしい音ではなく、名残惜しい響きに感じられた。

「変わった人だったな」

九鬼を見送り、再び家に向かいながら明人が言った。会話は自然と生まれていた。

「だね。私最初は時代劇ヲタクかと思ったよ。でもなかなかいい人じゃなかった？」

「なんというか義理と人情の男の気配が漂ってたな。けど、何か匂う」

「やっぱりそう思うよね」

明人の言い分に藍も異論はなかった。

果たしてただの通りすがりがあれだけ親身になってくれるのか。

藍はこんな事を考える自分に良心の呵責を覚えた。だがそれ以上にまた犯罪に巻き込まれるよりはマシだと思っていた。

「気を付けるよ藍。お前単純だから、イイヒトダナ」とか言ってるっていきそりで心配だよ」

「そんなバカじゃないもん！」

子供っぽく頬を膨らませる藍に明人は思わず吹き出した。

「プッ！　くくくッ」

「何よ！　何がおかしいっていうの？！」

途端に不機嫌になって藍は明人に食って掛かった。

「い、いや…、おまつ、クックッ」

「このバカ兄！　いい加減に、しろっつ！」

「何ぞっ、イデッ？！」

明人の尻に強烈な蹴りが炸裂した。

その細い脚のどこにそんな力があるのか。あまりの痛みに跳ね回り、訳も分からず笑いたくなった。

「年末に何度も叩かれてる人達の気持ちがよく分かったよ」

「私の気持ちを分かりなさいよ」

藍はまだご立腹だが、気分が昂揚して怖くなくなったらしく一人でスタスタと歩いていってしまふ。

「ちよっ、置いてくな。危ないぞー」

シカト。

まあ、いい。家はすぐそこだ。明人には黙って追いかけるしかないようだ。

2人はそのままアパートに入った。

怪しげな男であったが九鬼との遭遇でいい感じになっていた明人のテンションは萎みだしてきた。

エレベーターで登っていく間、明人の心臓は早鐘を打っていた。

もうすぐ誰もいない家を藍が見る。そう思うと緊張せずにはいられない。綾瀬が何か仕掛けを施してくれたようだが、実際どんなものなのかは教えてくれなかった。

綾瀬の不慮の死がこれからに多大な影響を与える今、問いただせば良かったと後悔した。遂にエレベーター内部の電光表示が8階を指し止まった。

「変わってないね」

明人の心配をよそに藍が廊下を見てのほほんと呟いた。

「廊下は変わらんだろう」

そっか、とやや天然っぽい返答がもらえた。どうやらサプライズパーティーというのを本気で信じているらしく、心ここにあらずという様子である。

「何でカギ閉めるの？」

明人が家のドアを開けようとカギを挿した。

中に親がいると思っっている藍には変な行動に見えたのだ。

「まあ良いじゃないか。さあ、どうぞ」

「うん。ただい、まあ……？」

明人がドアを開けてやると、藍は元気良く叫ぼうとした言葉を絶やしてしまった。

「どうした？」

形式的に聞く。中には誰もいない、明かりも無い、気配すらない。

「電気付いてないよ。誰も居ないし。どういうこと、お兄ちゃん？」
無人の闇が漠然と広がる我が家。

様々な感情が交錯した表情で藍は振り返った。

「……分かるだろ。言わせるなよ」

サプライズ、サプライズと連呼しては意味がない。父さん母さんは気合い入ってるんだよ。そういう意味だ。

「あ！なるほどね」

藍もそれを理解した。靴を脱いで上がり込む。

明人もそれに続く。床が異様に冷たく感じられた。

藍がリビングのドアに手を掛ける。

明人は廊下の電気をつけながら、固唾を吞んで見守る。
カチャリ。

藍がリビングに入る。

何も起こらない。明人にとっても、藍にとっても。

「お母さん、お父さん？ ただいま」

藍はリビングの電気をつけようとした。

破裂音、破裂音。

「きゃあ！？」

「藍、お帰り！」

両親がクラッカーを鳴らして藍を出迎えた。

藍はありったけの喜びを表現し、両親に抱きついた。両親も藍の努力を褒め称える。

頭を優しく撫でられて、藍は自分の努力が実ったことを実感した。
親元を離れ異国の地で、長い時間を過ごすのは楽しいけれど、やっぱり辛い。だが、それを補って余りある愛情そして達成感が藍を癒した。

そこは常闇。藍は一人、笑い、泣き、歓喜する。

藍の周りをひらひらと嘲笑うかのように蒼白い《幻象》^{フェノミナ}の蝶が数匹舞っている。

あまりに憐れな光景に明人は言葉を失った。

駆け寄って眼を醒まさせてやりたいが、その気持ちより目の前で繰り広げられる1人芝居への恐怖が強い。

「サカキへのサプライズだよ」

藍の周りに浮いていた蝶の1つが明人の前にやってきた。

それは姿を変え、少女の身体を真似た。

「綾瀬……」

綾瀬はリビングの入口に立っており、その後ろでは藍が1人楽しそうに漆黒と話している。

「心配しないで、妹ちゃんは苦しんでないから。最高級の幻覚よ」
説明する綾瀬を良く見るとうつすら透けていた。彼女は明人だけに見える幻覚である。

これは本人ではない。粗悪に造られたガイドだった。

「両親はすぐに旅行に出かける設定よ。サカキは妹ちゃんに話を合わせてよ。多少融通は効くけどあまり突っ込んだ話をするとうエリュシオンが壊れるから」

プログラムされたことを言い終わると綾瀬の幻は霧散した。

同時に奥で藍が均衡を保てなくなってグラリと揺れた。

何かを考える間もなく明人は駆け出して、藍を支えた。

藍の頭には例の蝶が止まって、ゆっくりと羽を開閉していた。

「だ、大丈夫か？」

「へいき、ひよつとめまいがしたらけ」

藍はとろんとした遠い眼をしているし、泥酔しているかのように呂律も回っていない。明らかに異常をきたしていた。

「藍、しっかりしろ！」

だいぶ説明が足りないのどという状態なのかさっぱり分からない。先の痛々しい再会は意味があったのだろうか。

あれが綾瀬の享楽心からきたお遊びであるなら質が悪い。帰ってきたらお灸を据えてやる。引っ掛かることはあれど、明人は全面的に綾瀬を信頼していた。

「安心しろ。すぐに良くなる」

明人は朦朧としている藍を抱き抱え、ソファーに寝ころばせた。

藍はしばらく天井を眺めてぼくっとしていたが、やがて規則的な寝息を立てはじめた。

「ふう、一体何だっけ言うんだ」

明人は藍の向かいに座り様子を見ていた。

しばらくして綺麗というより妖しい蝶がドロリと形をなくし、藍の身体に溶け込んだ。

「これ、大丈夫かよ？」

空気が緊迫した。明人の心配は杞憂に終わり、結局藍は苦しみもしなければ、表情も変わらない。すやすやと穏やかな眠りを満喫しているようであった。

明人はそれを見た途端どつと疲労を感じて眼を閉じた。

長過ぎるし、濃厚過ぎる24時間だった。まだ経ってないかもしれない。今何時なのか、正直時計を見るのも億劫だ。

安らかな睡魔に誘われて、明人は深い眠りに落ちた。

第10話：宥和 - approach your heart

明人は、自分以外の出す生活音で眼が覚めた。

それは長い間無かったことで、常々感じていた微量の孤独を和らげた。寝ぼけ眼でソファから身を起こし音のする方を見やる。

窓から差し込む陽光の中、藍が掃除機を引っ張って活発に動きまわっていた。

「おはよう」

掃除機に負けじと多少ボリュームを上げて挨拶をした。

「あ、お兄ちゃん。おはよう」

藍は朗らかに笑って返した。顔色も良く健康そうだった。昨夜のことはあまり影響が無いようで安心できた。

「大丈夫か？」

「何が？」

「時差ボケとかしてないかなって」

割と自然に訊いたことだったが、藍は呆れたというように溜息をついた。

「もう帰って1週間だよ。学校にも行ってるし、治つたに決まってるじゃない」

「……ああ、そうだな。寝ぼけてたよ」

「しっかりしてよ。お母さんたちじゃないんだから」

それを聞いて驚かないようにするのは苦労した。ああ、そういえば綾瀬の幻影がそんなことを言っていたな、と思い出した。

両親の不在という巨大な違和感は綾瀬によってうまく嚥下されたようだ。明人は安堵の溜息をついた。

「あ、そうだ。遅いから1人で朝ごはん食べたちゃったよ」

藍はテーブルにある明人の分の皿を指して、掃除を再開した。

「朝から働くなあ」

心配事が1つ消え、明人は時計を見た。

「もう9時か。俺にしちゃ遅い。いてっ」

慣れない姿勢で寝たせいか、身体の節々が痛い。しかも昨日から着替えていなかった服が気持ち悪い。二日連続ソファで寝たこともよろしくない。今夜は自分の部屋で寝ようと、ぼんやりと考えた。生ぬるい日常の拍子抜けしたような空気を噛みしめながら、明人は自室に向かった。

「なんじゃこりゃー！」

部屋は荒らされ放題。本とかだけならまだしも、タンスやベッドまで動いていた。朝からハイになるくらいの乱雑ぶりだ。

明人は昨日の出来事を回顧してみた。

ドアが開かなかったのはこいつらがバリケードを作っていたからだと気付く。そして、この部屋を占拠していた人物も思い出す。

「綾瀬め。好き勝手してくれたな」

この反応を見て大笑いしている様が眼に浮かぶ。

今もそこにいるのではないか、という錯覚が脳裏をよぎる。もちろん部屋を見ても、スラムを彷彿させる荒れようしか目に入らない。明人は幻想を振り払って、片付けを始めた。もう存在していない少女のことを想っても仕方がない。

「案外未練がましいよな、俺。気にしないのが特技だったのに」

結局のところ藍の部屋の掃除も合わさって、家中大掃除になってしまった。

その後シャワーで汗を流し、すっかりきれいになった家で明人はくつろいでいた。

最終的に11時という中途半端な時間になってしまい、気は進まないが藍が作ったものだからと朝食を頂いていた。

ベーコンエッグとトースト。どっちも冷たい。

藍は明人が掃除している間に買出しに行って今も不在。

「三食はキッチンと摂りたいんだがな…」

朝だからと軽めにしてあったのが幸いで、完食して腹五分目といったところか。

食べ終わって窓の外を眺めた。空は青くて空虚だ。藍のいない家は静かで、鳥の囀りも聞き取れる。

「本日は晴天なり。何して過ごそうか。とりあえず小夜の情報が欲しいな。あと武器も」

独り言が尽きない。その中で、素で「小夜」と呼んだことが恨めしい。

これもやはり何らかの繋がりがあつた所為なのか。記憶はまだ黒く塗りつぶされている。思い出さないほうがいいのかもしれない。

「お兄ちゃん！ 変な手紙がきてるよ」

遠い空を眺めて物思いに耽りかけた矢先、藍の声で現実に取り戻された。

帰ってきた藍は差出人不明の封筒を持ってきた。ドラマ以外でもあるもんだなと思う。更に住所も無ければ、切手も無い。どうやって届けたんだ。

「不気味だな。コーヒーのないカフェオレくらい」

「それミルク」

「そう、ミルク並みに白い封筒だ」

口ではお茶にかけて見たものの、脅迫状だったらどうしようかと悩む。小夜あたりからの。

「そんなことどうでもいいから開けてみてよ」

何も知らない藍に急かされるまま明人は封を千切って、中にあった手紙を引っ張り出す。中身も味気ないもので、短い文章と差出人の名前だけが書かれていた。

それを見た瞬間、明人は手紙を藍から遠ざけた。

「どんなの？ 見せてよ」

「俺宛だ。それに見たらチェーンメールを友達に送らなきゃならん」

「アナログのチェンメッてあるの？ ま、しょうもない悪戯ね」

藍は明人の言葉を鵜呑みにして、興味を失ったらしかった。というより、薄々そんな物だろうと気付いていたのかもしれない。そして藍は買ってきたものを冷蔵庫に入れたりする作業に入った。

うまく誤魔化せたはずだ。

明人は自分の部屋に戻り、手紙を見直した。

『迷惑なのは分かっています。それでも会って話したい。駅前通りにあるドアーズという喫茶店で12時に。霜崎遥』

脅迫状より恐ろしい殺人者からの呼び出しであった。

昨日の今日で、あまりにぶっ飛んだ提案である。不条理過ぎて思考が止まる。

「何考えてやがる。行くかボケ！」

明人は手紙をグシャグシャにして床に叩きつけた。興奮して変な汗が出た。

会えば感情を抑えられる自信が無い。暴力沙汰になって補導されでもしたら、親が行方不明だと知られてしまう。それで藍の幻覚が解けたら元も子もない。それはなんとしても避けなければならなかった。

「くそっ！」

今自分はどんな顔をしているのだろう。

沈痛か、憎悪か、はたまた未来への諦観か。

そんな顔を藍に見せたくないのも、明人は部屋をうろついた。

歩きながら幻象とは一体何なのだろうか、と考える。狂っているとは思えない。しかし、綾瀬のことを悪く思うのが憚られてすぐに邪な思案は沈静化された。同時に頭も冷やされていく。

「……まで、これはチャンスかもしれないな」

藍を護るには力が足りない。その不足は満たしようも無く、どう足掻いても人の身で、しかも一高校生には到底不可能だろう。

綾瀬は殺された。他ならぬこの遙に。

しかし、それが弱味だ。負い目だ。人間的な感情が遙にあればの

話だが。だが自分で殺しておいて、会いたいと言ってくるのがその証拠とも思える。

明人はしわくちゃの手紙を拾い上げた。決断は早かった。

「藍、ちよつと出かけてくるな。昼飯も食って帰る」

「え？ あ、うん。分かった。気をつけてね」

藍が手を振って見送った。

「ちゃんと戸締りしとけよ」

「はい」という元気な返事に背中を押され、明人は家を出た。マンションの外に出ると蒼空にはちじれた雲がまばらに浮かんでいた。家にいたときには見えなかったものだ。

あれは、不確定因子なのだろうか。集まれば翳りが生まれる。消えれば透き通る蒼が現れる。

空を見上げて明人はそんなことを思った。

約束の12時。

ドアーズというのはわりかし趣味のいい喫茶店と評判だ。この辺の学生なら知らない奴はそうそういないだろう。大きくはないが、落ち着いた雰囲気店内はクラシックミュージックが流れている。ドアがいつぱいあるわけではない。

明人が店に入った時、遙は奥の方の席でガラス越しに人の往来を眺めていた。どこか物憂げな雰囲気が漂っている。

間もなく遙は明人の気配に気付き、片手を挙げて場所を示した。今日の遙の出で立ちは、ゆったりとした白いワンピースと黒のジャケット。

今までの印象からもつと動きやすい服かと明人は考えていたが、なんともおしとやかな感じである。

明人がこの状況で不謹慎にもカワイイと思ってしまうのも致し方ないくらい、イイ感じの女の子だ。

もう最初に出会った時の可愛げのある普通の少女では決して無い。あれが演技であつたなら相当巧者である。

「で、何の用かな？」

席に座るなり、明人は尋ねた。

酷薄そうに言つたのだが、遙は顔色一つ変えない。そのままはや定着した抑揚の無い声で謝り、少し身を引いて遙が頭を垂れた。

「……本当にすいませんでした」

この無防備に差し出された頭をテーブルに叩きつけてやりたかつた。

「それだけを言うためにここに来たんじゃないだろ？」

明人は顔の筋肉が強張らせながら聞いた。謝罪なんか聞きたくなかつた。

「……変に思われるかもしれませんが、残りの半日私と付き合つてもらえませんか？」

「は？」

明人は話がおかしな方向に流れていきそうな気がした。

「平たく言えばデートしてください、です」

恐ろしく前置きに適った要求を遙は真顔で言い切つた。

「つまり、お前と綾瀬のように話したり、買い物したりしろということか」

言いながら、明人は予期していた通りますます自分の顔が引きつるのを感じた。

「それが罪滅ぼしになると思っていますし」

裏があるに決まっている。明人は直感した。そんなことを本気で思っているのなら脳みその所在を疑う。

明人は握り拳を震わせて、じつと憤怒の獣が鎮まるのを待った。

一方、遙は顔を上げ冷ややかな眼差しで明人を見ていた。

この険悪な空気の只中にコーヒーを2つウェイトレスが運んできた。ドアーズなのにコーヒーである。

彼女はできるだけこの客たちを刺激しないようコーヒーを置いた。

遙が軽く会釈したのに応じて、彼女はそそくさと逃げ去った。

「いいぞ」

明人は唸るように言ってコーヒーカップを引っ掴み、中身を飲み下した。ブラックなのだが苦味は感じない。色のついた冷水と同じだ。

「ありがと。あなたにそんなに想われて彼女幸せね」

「言うな。もう済んだことだ」

明人は苦しそうに呻いた。苦渋の決断だったのは遙の眼にも見えていた。

遙は胸が圧迫される感触を覚えた。この期に及んでまだ罪悪感を覚える自分に苛立ち、それを押し流すためコーヒーに手を伸ばす。私は復讐者だ。手段は選ばない。そう、自分に言い聞かせる。シロップとミルクを入れたコーヒーはなおも根源的な苦さを持っていた。

仮初めのカップルが、欺瞞に満ちたスケジュールを決めている最中、事件は起きた。

くぐもった悲鳴が聞こえたかと思うと、爆発に近い破砕音と振動が喫茶店を揺るがした。

2人は必死に眼を瞑った。

「おい、なんだよ……あれ？」

眼を開けると明人は言葉を失った。向かいに座る遙も眼を見開いている。

日光を反射しダイヤのように輝くガラス片がスローで舞い散っていた。ある意味幻想的ともいえる光景に一際アクセントを与える物体がある。

黒のワゴン車が店内に突っ込んでいるのだ。

カウンターとの衝突でボンネットが歪に潰れている。

「うわあああ!？」

客、店員、野次馬、その全員が状況を理解できない内に、運転手らしき男がエアバッグを押しつけ半狂乱になって車を飛び出してきた。

「こつちよ」

車からはヤバげな液体が漏れ出しており、明人がそれが何たるか思いつく暇もなく、遙に車が入り込んできた窓から通りに連れ出された。

数テンポ遅れて他の人たちもバカのようにわめきながら散り散りにドアーズから湧き出してゆく。

明人たちが脱出して10秒もしないうちに、車は地響きと熱風を放って爆発炎上した。

明人らは爆風が立ち尽くす身体を揺らす程度だったが、避難が間に合わなかった人たちは見るに耐えない有様であった。

黒煙を伴い荒れ狂う業火が店と逃げ遅れた人々を喰らっている。服に引火し転げまわる人。爆発の衝撃で地面に投げ出され、ろくに抵抗もできず高温に晒される人。怪我人を助けようとしている者もいれば、しきりにケータイで撮影している者もいる。

立て続けにまた爆発が起きた。先の物より大きく、どうやら店のガスに火がついたらしい。

熱風が火葬場の臭いを運ぶ、この地獄絵図に明人はただ驚愕をもって突っ立っていた。燃え盛る業炎に視神経が悲鳴を上げようと、眼を離すことはできなかった。

その隣では、遙が店とは関係ない場所に眼を光らせている。

遠巻きに事故を見物している輩などではない。遙は彼女にしか分からないモノを探していた。

「榊原くん、大丈夫？」

遙に身体を揺すられ明人はようやく紅い呪縛から解放され、眼を擦った。

「ああ、すまん。こんな事故は初めてだったんで」

「事故なんかよりタチが悪いわ。近くに『フェノミナ幻象』がいるの」

「じゃあ今のもソイツがやったのか？」

「たぶん。普通こんな真昼間に暴れるヤツなんてほとんどいないんだけどね」

「それで、ソイツは今どこに？」

明人も炎の残像が残る視界を見回してみるが人間と幻象の区別がつかない。かすかに耳がサイレンの音を捉えたただけだ。

「それが……場所を特定できないの。気配が霧みたいにこの辺一帯に広がってるだけで」

「なんだそりゃ」

明人はがっかりして、人だかりから抜けた。遙もその後を追う。

ここにも得することはないと判断したからである。本当の彼^あ女^{やせ}ではなさそうだから。

人は野次馬精神豊富なようで、皆事故のあった方へ引き寄せられていく。

その流れに逆らい明人らは歩いた。もうドアーズは見えなくなり、振り返れば黒煙が立ち上っているのが見えるだけだ。

「好奇心は猫をも殺す」

明人は思いついたことわざを口に出してみた。

「それがどうかした？」

「死にかけた俺らから見たらあいつらはよっぽど命知らずにみえるな」

「そうね。また爆発が起きないといいわね」

「まったくだ」

明人は遙に一応他人を思いやる心があることを知った。ただ話を合わせてきただけかもしれないが。

「さっきの幻象の方はどうなってる？」

「気配が半径5メートルくらいの円状に広がって、私たちを追ってきてる」

遙は意識を集中させるためか眼を閉じ、しばらくして答えた。

「それしか分からないのか？」

「ごめんなさい」

遥は戸惑っていた。幻象の居場所が分からないなど未曾有の事態である。

遥の索敵能力は幻象の位置を平面的に捉える。漁船のソナーみたいなものである。距離は掴めてもその幻象の強弱など、その他の情報は今一つ入ってこない。実際に会うまでどんな奴か分からないのがネックである。

肝心の《起源》^{オリジン}についても同様で、それゆえ遥は復讐を果たせないでいた。

さらに使用には意識を集中させる必要があり、他の行動と平行して行うことはできない。慣れていくらかマシになったが、やはり動きは鈍くなってしまう。

巨大な欠陥の代わりに有効範囲だけは広大で、やろうと思えばこの緋森市全体、あるいはそれ以上の範囲をも見ることもできた。

明人が何も言わず先に歩き出す。

遥は何とか力になるうともう一度精神を集中させ襲撃者の位置を割り出そうとした。

歩みを止めた遥の頭上に、ここぞとばかりに巨大な影が覆いかぶさった。遥は索敵のため反応が遅れてしまう。見上げればビル側面に架かった看板が降ってきていた。

遥の身体能力ならかわせないスピードではない。しかし遥の足は凍りついたように動かなかった。焦燥と驚愕が生む恐怖で遥は眼を見開いた。

「危ねえ！」

それは何たる偶然だろう。

明人は遥の頭上の看板が不穏な動きをしているのを目撃していた。ついてこない遥を確認するため、振り向いたときに視界の端に蠢いたのである。

明人は自然と地を蹴っていた。そこには一切の躊躇も気後れも無

い。

次の瞬間、明人は遙と一緒に歩道に転がっていた。

地面が揺れる揺れる。金属が歪みねじれて潰れる轟音が耳を撃つ。

「はあ……はあ、怪我、してないか？」

「う、うん。大丈夫……」

明人も遙も心臓が飛び出さんばかりに跳動していた。抱き合う格好の2人は互いにそれを感じることができた。

明人は無事を確認すると、密着状態だった遙を腕から解放し座り込んだ。チラリとビルを仰ぎ見る。屋上に小さな人影を一瞬捉えたが、その姿はすぐに掻き消えた。

「ほら、立てよ。騒がしくなるし、もう行くぞ」

周囲にはすでに野次馬共が集まってきて、不幸な事故から生還した2人を好奇の目で見ていた。

遙は差し出された明人の手を掴み、立ち上がった。

明人はそのまま手を引いて、何か急くように大またで歩き出した。

「どうして助けたのよ。あなたにとって私は仇でしょ？」

身動き1つできなかったことへの悔しさが、遙にお礼よりも憎まれ口を叩かせた。

「ああ、その通り。俺は別にお前が死んだって構わない」

放たれた低い声は案の定というべきか、予想外というべきか。ああは言ったものの遙にとっては後者であろう。

遙は力チンときて明人の手を振り払って逃げようとした。

寂しさを癒すために近づいたのに、憎悪の籠もった呪詛のような荒々しい刃のような言葉を吐きかけられるなら孤独のままでいい。

しかし、明人は放さない。逆に遙を強引に振り向かせた。

「でもな、これ以上俺の周りで人が死ぬのは御免だ。前にも言ったがな」

遙は明人の眼を見た。彼の眼は自分が直面している不条理な運命

に深く悲嘆していて、それでもなお抗おうとする強靱な意志が宿っていた。

「私は……人間じゃ、ない」

遥は弱い弱い最終防衛線を張った。

明人は容易くこれを突破した。案の定というべきか、予想外というべきか。遥にとっては前者であり願望であつた。

「いや違うね。どれだけ超常的でも、お前の本質は人間だ」

遥の中で滞っていた澱みが浄化され、昇華された。

それは遥が常に望み、常に叶わずして心を冒されていた病。《幻象》だけ人間として接して欲しいという願望。

「うっあああ……！」

遥は感情を抑えられなくなり、声をあげて泣いた。明人の胸に顔を埋めながら。

明人は何も言わない。道行く人が怪訝な目つきで見ようともし、ただ遥の滑らかな長髪を撫でるだけ。冷たい光を瞳に宿しながら。

明人は初めて会ったときの遥を思い出していた。

あの親しみ深く、ちよつとおてんばな感じの少女は張りぼてではなかったらしい。実はあれが元来の遥ではないのか。

《幻象》としての遥とこう在りたいと願う遥を対比させると、人は変わるんだなという、虚しさのような感情が生まれた。

場違いに思えるその感情はすぐに消滅することとなった。明人はそれを期に遥を抱きしめてみた。

遥も抱き返してくる。人の温もりというここ数年感じたことの無いものを全身で享受していた。

そして自分が殺めた綾瀬という《幻象》と同じ気分を味わっていることに気付き、初めて心の底から罪悪感を覚えた。

「気は済んだか？」

「……うん」

「そうか」

近くのベンチで遙が落ち着くまで少し休憩してから、2人は明人の家に向かって歩き出した。

遙の涙で濡れた服のまま出歩く気にはなれなかったし、遙もそんな調子ではない。

遙は泣きはらした目を隠すためかうつむき加減で明人と平行して歩いている。時折ヒックヒックとかすれた音を出しているのが憐れに見える。

こういう時の接し方が分からないので、明人は言葉少なになりがちだった。ほとぼりが冷めるにつれて妙に意識してしまっているものもあるのだろう。

しかしそつとしておくのが一番だと考え無闇に沈黙を破ろうとはしなかった。

「着いたぞ。お前もくるよな」

いつの間にかアパートの前までやってきていた。

遙を連れ込むのは綾瀬に対して後ろめたさを感じる行為であったが、ここで見捨てるわけにもいかず聞いてみたのだった。

「私なんかが上がってもいいの？」

遙は控えめに質問に質問で返してきた。

どちらかといえばクールな遙がいいので、明人は早く立ち直って欲しかった。遙を籠絡して戦力に加えることが今回誘いに乗った主な目的だ。

憎悪から生まれた作戦だったが、今では邪気が抜けてしまい酷く扱おうという気持ちも消えていた。抵抗されなければな。

「ああ。遠慮することは無い」

エレベーターに乗り込むと、すぐに8階に到達した。

まっすぐ自宅のドアへ向かい、鍵を開けようとしたが、遙に止められた。

「ちよつ、ちよつと待つて。私ひどい顔してないかな？」

妹がいると教えたので、泣いた跡を見られるのは嫌であるらしい。

「んー、大丈夫だ」

見られても藍なら空気を読んでスルーしてくれると思う。明人は率直な感想を答え、鍵を開けた。

「そう。良かった」

遙も安心したようで、明人について家に入った。

明人は玄関に入るとすぐ違和感を感じた。

何かが違う。なんだ、なんのことは無い。藍の友達のものらしき靴が並べてあるだけだ。

明人はそんなものに気をとられたのが馬鹿馬鹿しくなってさつさと上がった。遙も後に続く。

「ただいま」

「お邪魔します」

「おかえり。早かったね。およ？　もしかしてその人が例のカノジヨさん？」

藍の楽しそうな言葉は明人の耳に届いてこない。全神経が視覚にまわっていた。藍の向かいに座る少女に。

「こんにちわ。お兄さん。お邪魔してます」

例のゴスロリ服ではない。あの夜の禍々しさも感じられない。それでも、そこに藍と一緒にいるのは紛れもなく森谷小夜、その人であつた。

第10話：宥和 - approach your heart (後書き)

例え瞬きのように短くとも、平穏は大切にな。
禍福は波のようにやってくる。

第11話：契約 - c a n ' t b r e a k (前書き)

c a n ' t b r e a k 《破りえぬ》の意味

第11話：契約 - c a n ' t b r e a k

小夜を見た瞬間、明人の呼吸は止まった。身の毛がよだつ。

昼食を抜いてしまったことによる空腹さえ感じなくなった。

あの月夜の悪夢が目の前に実体化しているのだ。

記憶の中より短くなったが灰色の髪と真紅の双眸は変わらず、これといった差異は禍々しいあの衣装に身を包んでいないことだけだ。そんなちよつとした事で恐怖は拭えない。

明人は過去の自分がしたように、今この時を塗り潰したくなった。

小夜はそんな明人を見ていなかった。矮小な人間に抱く危惧など道端の小石に対するそれと同程度しかない。

その瞳には明人の後ろに立つ遙しか映っていない。

何故コイツがいる。どうして明ちゃんと一緒にいる。《復讐の女神》^{シス}の名を冠する《幻象》^{フェノミナ}にして忌むべき裏切り者。高慢にも起源、ひいては他の幻象に仇成す反逆者め。^{わたしたち}

だが今は行動を慎まなければならない。コイツは憎たらしくも強大な幻象であるのだ。

小夜は畏怖と敵意を押し隠しつつ遥を見上げた。

そうしているとあるうことが遙は小夜に微笑みかけてきた。その笑顔が何を示しているのか、考えれば考えるだけ混乱してしまう。

小夜は気まずくなつて視線を藍に戻した。

「今ニュースでやってたけど、駅前でいろいろ事故があつたんだって。それでお兄ちゃん大丈夫かなって話してたところよ」

藍がのんびりと話す。無知ゆえにさぞ幸せな心地なのだろう。

「あゝ、俺たち実はその現場にいたんだ」

言いながら明人は不思議に思ったことがある。

小夜は事故のとき家にいたらしい。なら屋上にいた人影は一体誰なんだ。

「えええ！？ 怪我とかしてないよね？」

それを聞いて藍の態度が豹変した。いささかオーバーではなからうか。

「ああ。この遥のおかげで九死に一生を得た感じた」

明人は後ろに隠れるようにして立っている遥を向いて言った。遥がこのヤバイ状況を理解してくれるように願いつつ。

「お邪魔してます」

当の遥は穏やかに挨拶なんかをしている。浮かぶ微笑みが眩しい。「こんにちは。あつ！ すいません。座っててください。今飲み物とか持つてきますから」

藍は遥を見るなり自分の粗相に気付き、立ちっぱなしの明人らを座らせようとした。

「いや俺の部屋に行くからいいよ。自分で持つてく」

どうしてこんな状況になっているのか情報も欲しかったが、明人は撤退することにした。

殺すつもりならもうやっているだろうから、しばらくは大丈夫という推測のものと決定だ。

とはいっても明人が戻ってきたことで小夜の考えが変わる可能性もある。

それが心配ではあるが部屋で当初の作戦を遥に伝え、すぐに戻ってくればやはり問題はないはずだ。

ちょうど藍が買ってきたであろうお菓子とジュースを持って明人はこの部屋を後にした。引きざまに小夜を見ると、どこか安堵したような顔をしているように見えた。

明人は掃除したばかりのキレイな部屋に遥を招き入れ、ドアを閉

めた。

早速遙を座らせ、話を切り出した。

「お前アレに気付いたか？」

「あの《幻象》の子のこと？ 気付いたけど」

アレとはもちろん小夜のことである。

それは2人の共通理解になっていたが、遙は特に驚いた様子が無い。明人は不審に思った。

実のところ、遙は明人の傍に他の幻象がいたのを不思議に思っていないかった。相手をしているのが藍である違いはあれど、自分や綾瀬のようなのがもう1人いたというだけだ。

《幻象》が一所に複数体発生しているのは稀ではあるが。

「アレが学校で話した両親を殺した幻象だよ」

「え？ そんな奴がどうして！？ しかもあんなに馴染んで」

その一言で、状況が遙の思っていたような微笑ましいものではないことを思い知らされた。

明人の落ち着き払った態度も理解できず、柄にも無く取り乱してしまう。

「さあな。藍は事件の時留学してたんだが、アレはどうもそれを追っていつて知り合ったらしい」

当惑する遙に明人は自分の推測を語った。小夜からの電話のこともあるのだ、ほとんど確信に近いものである。

「ふうん。なんでアイツが襲ってくるのか分かる？」

《幻象》は個々の発生の起因に固執するものであり、それが行動原理になっている。例えるなら肉体を持った怨霊みたいな物よね、と遙は自虐的に付け加える。

明人がそんな事はないと否定しようとした。よくは知らないが《幻象》自体はそんな忌むべき存在ではない気がする。

遙は明人を遮り話を進めた。

「だからそれが分かれば解決してあげられるかもしれない」
静かな悲哀に満ちた独白。

その対象は俺なのか、小夜なのか、明人には分からなかった。

綾瀬が言っていたように遥は《幻象》を憎んで恨んでいて、だから殺そうとしているのだと考えていた。

しかし今のを聞く限りそんな風には思えない。

「お前はなんで《幻象》になっただんだ？」

時間は惜しいが、いい機会なので聞いてみることにした。これからやろうとしていることに相互理解は不可欠な要素である。

「今そんなこと話してる場合じゃ……」

遥は扉の方をチラチラ見ながら、困惑した表情を浮かべている。

「大丈夫だ。アレにその気があるなら藍はもうこの世にいない」

言っていて胸が痛んだ。藍が殺されるなんて想像もしたくない。

「じゃあ手短に話すわ。……私はごくごく普通の女子高生だった。

母と父と弟がいて、みんな仲も良かったしお金持ちじゃなかったけど十分幸せだったわ。いま思えば……」

「そんなのってありかよ」

話を聞き終わり明人は絶望感に襲われた。

例えようもない凄惨なドラマ。話し終えた遥も思い出したことでひどく沈痛な面持ちになり俯いてしまった。

「余計なこと聞いちゃったな。ごめん」

「いいよ。気にしてないし。むしろ、ありがとうだよ」

顔を上げた遥は満足したように苦笑していた。

「この話をしたの初めてだけど、共有してくれる人がいるっていいなって思ったから」

初めてにしては話がまとまっていた。もしかするとずっと誰かに話したくて練習していたけれど、話す機会が無かったのかもしれない。

「そうか。なら俺も力になれてよかったよ」

その言葉は本心であつたが後ろめたさもある。
今の話で意図せずこれから言おうとしていることが余計に残酷になつてしまったからだ。しかし、成功確率も上がったと思われる。少しお近づきにはなれたのだから。

「ちょっと間が悪いけど、お願いがあるんだ」

明人は本当に申し訳ないという表情で遂に人としての禁忌を切り出した。

「なに？」

「実はアレを、妹の隣にいた幻象を殺して欲しい」

「何を言つて……？」

「このままだと平穩無事には過ごせないんだ。俺にはできないし、綾瀬もない。お前しか頼れないんだよ」

ここで綾瀬の件を持ち出してくるなんて非道だとは思つ。でもここは譲れない。

遙も綾瀬と聞いて翳りが見えた。

「それが私に会いに来た理由なの？」

遙の口調が冷気を帯びた。逆に彼女が怒りに燃えているのは痛いほどよく分かる。

「ああ」

ここで嘘を吐いても意味は無い。明人は正直に返事をした。

「私帰る」

遙はポツリと呟き、立ち上がつてドアに手をかけた。
期待した私がバカだった。彼は生存の手段としか私を見ていなかったのだ。奈落に突き落とされたような気分だ。

そこへさらなる追撃をかける一言が明人から放たれた。

「俺さ、たぶんその《起源》^{オリジン}って奴のこと知ってるわ」

「え？」

遙は驚いて振り返った。

「アレを殺してくれたら、続きを教えるけど。どうする?」

悪魔だ。遥はそう思った。

先ほどの話を聞いて、このタイミングで《起源》の話を出す。遥が存在理由そのものの情報をみすみす逃すことなどできないと知っているのだ。

「あなたホントに人間? こんな酷い事を言つて……」

「なんとも言つてくれ。俺と妹が生き延びるためにはこれしかないんだ」

明人自身も苦しくないはずが無かった。

遥に優しくしていたのはこのためだけではない。本心からの親しみがあつたからだ。

だけれど弱き人間ゆえそんなことは言えない。本音の叫びは遥に届かない。そこには綾瀬という障壁がある。

「私は、誰も殺したくないのに。そう、話したじゃない」

遥は泣きそうな声を漏らしながら立ち尽くしている。

交錯する2つの感情がせめぎ合っていた。《幻象》として《起源》を滅ぼしたいという欲望と、人間としての良心がない混ぜになっているのである。

「知つてるよ。でもあえて言つんだ。他に手は無いから」

明人は遥を追い詰めるように言葉を繰り返す。

そして

「……やつてあげる。でも勘違いしないで、私は自分のためにやるの。お前のためじゃない」

遥の態度は一変していた。

もう明人を人間として見てはいなかった。《起源》の情報が無ければとつくに殺されていただろう。そう考えると身体が震えるのを禁じえない。

「ありがとう。……本当にごめん」

「いいから。さっさと作戦を教えなさい」

実のところ明人が持っている情報などたかが知れている。

この街に《起源》がいる。その程度だ。

遥にはとんでもない犠牲を払わせるのに、得られる情報の少なさに殺されたって文句は言えない。それだけ非道なことをやっているのだから。

それで自分が死んでも、藍が無事でいてくれるなら……。

第11話：契約 - c a n ' t b r e a k (後書き)

今回遥の過去バナが省略されてますが、別個の話として載せるのでご心配なく。

第12話：破滅・ruination

「……とまあ、こんなもんだ」

「ふうん。なら、私は取り押さえるくらいでいいんだ？」

「ああ、その間に俺が説得する。聞かないようなら……頼む」

「そ。榊原君もそこまで鬼じゃないんだね」

「そりゃあ人が死ぬのは見たくないだろ」

作戦は極々単純かつうまくいけば一滴の血も流れないで済むものであった。遥としてもそれは望むところで、明人の株の下落も止まつたところだ。

だからと言って殺人の道具として使われるのはやはり気分のいいものではない。

こんな形で人に頼られるなんて。

そう思わずにはいられなかったが、《起源》の情報のため我慢することにした。

くきゅうう。

緊迫した空気が一時弛んだせいかな遥のお腹が可愛らしく鳴った。

この沈黙の中ではやけに大きく聞こえるものである。

実のところ車が店に突っ込んだり、看板が落ちてきたりしたせいでこの2人は昼食を食いそびれていたのだ、致し方ないことではある。

「な、何よ?!」

遥はかあつと赤くなって睨んできた。完熟トマト的な赤さだ。

「いや何も言っていないし、あぶねっ!」

ドアの近くにいた遥は戻ってきて明人に平手を食らわせようとした。明人の鼻先を掠めたそれはホラーな速度だった。

「まあ、座れや。お菓子ならここにあるぞ」

「ふん」

ふてくされたような態度で遙は腰を下ろし、チョコの袋を開けた。
一粒口に入れ、ゆつくりと味わいながら溶かしていく。

「そんなに美味いか？」

明人はたかがスーパールのチョコにうつとりしている遙に聞いてみた。

「うん」

「ガーナとかのプランテーションで働く貧しい子供達の血と汗の結晶だからな」

「う、なんで今言うのよ」

至福の時を邪魔されてぎろつと睨みつけてくる。

また平手が飛んできそうなので明人は射程から退いた。

「知識としていいかなと思って、ん美味しいな。そう思うと人類発祥の地アフリカの味がする」

「なにそんな味よ」

一応聞いてくれるあたりノリはそこそこイイらしい。

「デザート味の」

「……あげる座布団ないよ」

なるほどツツコミもこなせるようだ。

「山田め。仕事しろ」

「あ、え、クッションならあるけど」

遙が自分の座っていたやつを差し出す。それがどうにも天然っぽくって吹き出しそうになる。

「い、いや。別にお前に山田役をやれってわけじゃ」

「あんまりにも入れ込んでるみたいだから」

「わかった分かった。そんな意外な一面見せてお近づきになりたい腹か」

「そ、そんなんじゃない！ バカじゃないの」

そっぽを向いても、チョコはほおばる。

案外かわいい所もあるんだなと、思っで見ていると大げさな音を立てて謎の物体が窓を突き破り、2人の飲んでいたコップを粉碎し

た。

「な、なんだ?!」

明人は腰が抜けかけて立てないでいた。首は動くので見てみると、その物体は歪な形の金属だった。鈍い銀色の欠片で四角く尖っていて当たっていたらただでは済まない。

遥はすでに臨戦態勢で剣こそ出していないものの、狩りをする肉食獣のような雰囲気纏っている。

「あのもやもやした気配の《幻象》が近くにいます」

「もやもやって、ここ8階だぞ。近くったって」

もちろん窓の外は鳥が飛んでいるような高さである。

はっとした瞬間立てるようになり、明人は部屋を飛び出した。リビングのドアを開けると目の前に藍と小夜がいて眼を丸くしていた。「いま凄い音がしたけど、何だったの?」

藍たちも音を聞きつけて見に行こうとしているところだったようだ。

「俺の部屋になんか投げ込まれた」

そう言いつつ小夜を見る。当然のごとく状況が分からずポカンとしている。どうやら疑う余地はないようだ。

「なんかって何? 石とか?」

「金属片ならぬ金属塊だ。当たってたら命が無いくらいの」

言っていて初めて安心した。本当に危ないところだったのだ。

「お兄さん、誰がやったのか心当たりありますか?」

小夜が初めて口を利いた。葉が摺れるような静かな声だ。

「いや、ない。藍は?」

端的に答えて、藍に振る。明人は何となく話したくないような、片意地のような感覚を味わっていた。

「うつん。さつき友達にメールしたけど、こんな帰国のお祝いはやだな」

これはアメリカンジョークなのか。コメントしづららしく小夜さえ、苦笑いする始末である。

「あ、あれ？ 変なこと言ったかな、私」
どうしたものか。

「榊原くん。掃除機持ってきて」
微妙な空気は遙の声で破られ、3人は止まった時が動き出したようにあたふたと片づけを始めた。

「せっかく掃除したのに今度は窓無しかよ。3日連続ソファで寝るのはキツイな」

「贅沢ね、平気よ。私野宿したことあるし」
やはりお腹が減っているようで他の人より多くお菓子を口に運びながら、遙は平然と言った。このご時勢に女の子が1人野宿など考えられないことだが。

「たくましいな」「大丈夫だったんですか？」「へえ」

三者三様の反応が返される。
皮肉ったような明人と心配そうな藍。小夜は興味なさそうである。もとより遙を警戒しているのである。

居場所が無くなった明人と遙は予定とは違えどリビングに戻ってきていた。

現在の時刻は午後5時半過ぎ。秋も深まりつつあるゆえ外はもう暗くなってきたが、今宵は雲も少ないので明るい月が拝めそうだ。

「小夜ちゃん、暗くなってきたけど、どうする？」

藍がだいぶ前に灯りの点き始めた街を見て言った。藍は友人で、しかも女の子に暗いところを歩かせるのは抵抗があった。

「そうですね……、じゃあそろそろ帰ります」

小夜も頷いて支度を始めた。

明人はそれとなく遙に合図した。遙は当然気乗りしなさそうな顔をしていたがこればかりはしょうがない。

小夜の気が変わっていて元から殺す気がなかったとしても、確か

める意味で決行するしかなかった。

「下まで送ってくよ」

「ありがと。お兄さんと彼女さん、お邪魔しました」

「ああ、やっぱり彼女だよね」

小夜は玄関のところでお辞儀して藍と連れ添って出て行った。加えて2人とも決定的な誤解をしていた。

「俺達も行くか。彼女さん」

「誰が。アンタなんかと」

小夜の位置は完璧に追跡できた。遥の能力をもつてすれば朝飯前である。

途中藍をすれ違った時はヒヤリとしたが、遥を送っているのだと思っているようなので何も怪しまれるはずもない。

今は小夜の後ろ姿を前方に捉え、ひそかに後をつけていた。

どの道を行ってもあまり人影はない。帰宅ラッシュもまだだろう。第一小夜が通る道は昼間はともかく平生から人通りが無い。

こうして追っているのもなるべくウチから距離をとるためだ。

「ん……？」

急に小夜が振り向いた。その視界にあるものは明度の乏しい街灯に照らされた寂しい道だけだった。脇は空き地と草むらばかりで人影はない。前方も似たようなものだ。

その直前に明人は直感としか言いような無いものに突き動かされ、枝分かれした道に逸れていた。

怪しい興奮が全身に染み渡っていた。心臓は高鳴り、たぎる血液を送り出し続ける。身体が火照っていた。

「なに笑ってるの？」

隣にいる遥が怪訝な表情をしている。

自分ではそんなつもりは無いのだが、どうも頬が緩んでいるらしい。

「分からない。1つだけ言えるのは今かなり楽しいって事」

「変態」

遙は明人の言葉に多大な嫌悪を抱いた。男とは時としてこういう生き物なのかもしれない、という認識が生まれた。

そうこうしている内に小夜は歩き出していた。

「この道はかなり長い一本道だ。俺はこっちから先回りするから、遙は見張つといてくれ。あとケータイの電話は繋げたままにしないと」

つまりはアルファベットのディーの縦線のところで小夜を挟むつもりである。

「分かった」

このあたりの土地勘がない遙は従うしかなかった。短く返事をすると、すでに明人は音も無く走り去っていた。

走っていると夜風が気持ちいい。こんな時間に走ることなど万年帰宅部には縁のないことだし。

体力に自信がある方ではないが、交感神経が活発なせいか疲れを微塵も感じない。

ケータイに繋がるイヤホンから時折遙の声が聞こえる。小夜の歩くスピードは先ほどと変わらず、十分に追いつけるものと思われた。「おい榊原。こんなところで何してんだ？」

「ちっ、山下」

反対からクラスメイトの男子が自転車に乗ってやってきた。思わぬ障害に明人は舌打ちした。

「どうした。お前ジョギングなんかするようなやつだったっけ？」

「たまにはな。思い立ったその1回でやめちまうけど」

「はあ、ダメな奴だな。そーいや昨日だったよな、藍ちゃんの帰国」そんなことはどうでもいいただのキツカケ作りで、山下は本題の藍のことを切り出した。こいつもファンの1人なのだ。

「ああ。お前に見せるツラは無いってさ」

長くなりそうな気配に苛立ちながら答える。山下のほうは気にし

た様子も無く、あれこれ聞こうとしてくる。脳内春男が。

イヤホンから遙の声が聞こえるが、どう山下をやり過ごそうか必死で明人は正確に聞いていなかった。

「明日は学校に来るよな？ 全校朝礼で帰ってきた生徒が挨拶する予定だし」

「たぶん藍じゃないと思うが。そんな練習してる素振りもないし」

「そりや残念。けど……」

「しまった！ 一旦運動し始めたらしばらくは続けないと筋肉的な意味が無いんだった」

しびれを切らした明人はテキトーなことを言って話を中断し、走り出した。

「お、おう。じゃまたな」

呆氣にとられる山下の声などもう聞こえなかった。

『榊原くん、今どこ？ 私いつ出れば』

「今デイーの頂点だ。小夜は目の前まで来てるし、取り押さえるのもこのまま俺がやる。はあ、手を上げたら攻撃してくれ」

明人は焦りに似た感情に駆られケータイを切った。

ギリギリ間に合ったようで小夜はまだ通路にいる。

明人は呼吸を整え、また後ろを振り向いている小夜に向かって歩き出した。

「きゃ！？」

小夜の肩を突き飛ばすようにして、脇に生えている木に押し付け動きを止める。小夜の手からケータイが落ちたので、それを届かないところに蹴っておく。

一連の動作は自分でも驚くほどスムーズにできたのが何とも言えず嬉しかった。

小夜は逃れようとして抵抗していたが、その力は《幻象》とは思えないくらいに弱く拘束し続けるのは容易かった。そして明人の顔

を見るなりもがくのをやめた。

「久しぶりですね。藍ちゃんのお兄さん」

家にいた時の口調そのもので話すのがむかついた。

「黙れ殺人鬼。気安く妹の名前を呼ぶんじゃないやねえ。なんで俺の親を殺した？　なんで藍に近づいた？」

肩を掴む手に力を入れると小夜の表情が歪んだが、毅然とした態度で答えた。

「幸せになるためよ」

「ふざけんな！」

感情を爆発させながら小夜を木に叩きつける。ブレーキが壊れてしまったような気がした。

「いたっ、痛いよぉ」

しばらく続けていると小夜は弱気になり、呻くだけになった。

それが嗜虐心と復讐心を掻き立てた。自分の変態性に気付かされるものではあるが、さして気にならない。

「俺が受けた痛みは、こんなもんじゃねえ」

呼吸も荒々しく明人は乱暴に小夜を突き飛ばした。小さな身体はアスファルトに転がり、うわ言のように痛い痛いと言いつつ繰り返した。

「俺の生活を弄くり回して、何が目的だ？　答えろ、化け物！」

小夜は泣いていた。月明かりの下、紅い瞳から零れた涙が雪のように白い頬を光りながら伝っていく。服も所々破れており、同様に真っ白な肌が見えている。

なんだか以前見たことのある光景に思えて仕方がない。

『あなたもわたしを虐めるの？』

塗りつぶされた記憶の一片が去来し頭を揺さぶった。生まれ出でる頭痛と共にこの症状の原因である小夜に怒りを覚えた。

明人は泣きじゃくる小夜の腕を引っ張り無理やり立たせた。

「ごめんなさいごめんなさい……」

小夜は俯きぶつぶつと忌々しい謝罪の言葉を垂れ流すだけだった。

こんなだからますます虐められるのだと、明人は思った。だから歯止めが利かなくなりまた手を上げてしまった。

「お兄ちゃん！」

明人の手が振り下ろされる瞬間、全身全霊を込めた藍のパンチが明人の顔を打った。

明人は獣のような唸りを上げてよろけ、結果小夜を解放してしまった。

小夜から誰かにつけられてる、という電話をもらって、藍は家を飛び出した。言い表せない不吉な予感が満ちていた。

多くの場合このような予感は現実となる。今回も例外ではなかった。

駆けつけてみれば、男（兄）が少女（小夜）を襲っていた。

その光景は藍に陵辱の夜を思い出させるに十分足りえた。そして満身創痍といった感じの小夜を見た瞬間藍の心は決まった。

そこからの行動に何の迷いも恐怖も無かった。

もう誰にもあんな目には遭ってほしくない。大切な友達を助けた一心だった。

小夜を背中に隠し、藍は明人と対峙した。

「何してるのよ！ お兄ちゃん！」

藍は怒鳴った。

なんでお兄ちゃんがこんなことを。その気持ちでいっぱいだった。「藍、藍か……。は、ははっ、してやられたというわけだ」

明人は空を見上げて嗤っていた。それはどうみても異常をきたしているように見えた。

藍の拳はもちろん痛かったが、精神的なダメージの方が大きかった。そのせいか、この状況の全てを悟った心地になった。

「俺は全部思い出したよ。結局、俺が悪かったんだな。因果応報ってワケだ」

自虐的に嗤いながら明人は独り言ちた。

「ねえ、何言ってるの？」

藍の声は明人に届いていない。明人は熱に浮かされたような目つきで小夜を見つめて問うた。

「満足か？」

「……」

対する小夜は無言。明人は少し声を大きくして今一度聞いた。

「藍まで利用して、俺に仕返しができて満足かと聞いているんだ」

「……私はそんなの望んでいません」

小夜はそれだけ言ってまた藍の後ろに隠れた。

「はははっ、そうなのか。はずれか、残念だ」

明人の眼が数瞬殺意に染まった。そして間隔を空けず、右腕を白光と暗黒の空へ突き上げた。それは殺せという合図。

通りの暗所から小夜の背中に目掛けて銀色に輝く三つ又の刃が凄まじい速度で迫った。

「ぐああっ!？」

明人は己が耳目を疑った。

それは誰一人として反応できるはずの無い完璧な強襲だった。にも関わらず遙の悲鳴が聞こえたのは何故だ？

答えは目の前にある。

「あれ？ 何とも無い……」

妹の、藍の胸には3本の刀身が沈んでいた。

藍はきつく閉じた眼を恐る恐る開けてそれを確認した。ワケが分からなかったが、すぐに剣は暗がりへと戻っていった。

藍が剣を跳ね返したということは藍はやはり人間である。しかし人間が今の奇襲に反応できるものだろうか。

理由を考える間もなく、暗がりから現れた遙が低い姿勢で刺突を繰り返した。

「やめてっ!」

同じ方向から来た攻撃だったので、藍はすぐに反応し両手を広げて立ちふさがる。

「なんで遙さんまで。今夜の事態は藍の許容量をゆうに超えていた。無駄よ」

伸びた剣の切っ先は蛇行し藍を避けて小夜に襲い掛かった。

小夜は身体を引く程度の最小限の動きで3本の刃をかわすと、立ち尽くす明人の背後に素早く回り込んだ。そのまま明人の腕を後ろに捻り上げる。

「全員動かないで」

その静かな、それでいて有無を言わせぬ命令に皆従う他なかった。遙は苦虫を噛み潰したような表情で小夜に敵意を浴びせていたが、観念したのか三つ又の剣を消し去った。

「私はこの男に襲われました。木に叩きつけられて、とても痛かったです。それを藍ちゃんに知られたから、今その協力者に私たち2人を殺させようとしたのです」

被害者になりきって小夜は語り始めた。

その内容は脚色されたものであるが、今何か言ったところで現行犯の言い訳に過ぎないのは重々分かっていた。

明人から見た小夜の表情は、ほくそ笑みを堪えたようになっていて、これから始まるであろう明人の公開処刑を導いていた。

「警察に電話しようよ」

敵を見るような眼で明人を見つめながら藍が言った。

「いえ、その必要はありません」

「なっ!?!」

明人はこのまま警察に突き出されるものと思っていたので、間拔けな声を上げてしまった。

「私はよく虐められてたんです。このアルビノの体質のせいで。その頃はもっと酷いこともたくさんされましたし、今日のなんかはどうってことないです。だから見逃してあげます」

小夜は色素欠乏症である。白い肌と紅い眼はそのためだ。《幻象

《 になっても消えることはなかった。

明人も思い出していた。

加えて今の証言に決定的な欠落があることも分かった。

「お前を助けぐえ！」

「お前を助けたのは俺だ」そう言おうとしたのを小夜の察したの
だろう。腕が折れそうなくらい締め上げられた。

「ホントに、それでいいの？」

藍は家族が捕まるのは嫌だが、それで小夜の気持ち収まるのか
も不安だった。

チラリと明人を見る。さつきは何を言いかけたのだろう。本当に
自ら望んで犯罪を犯したのだろうか。

怒りと諦めと救いを求める感情がごちゃまぜになって憐れな顔を
している兄。

なんだか少し、ほんの微々たるものだが、小夜は満足そうな表情
をしているみたいに見える。

そして変な剣みみたいなものを持っていた兄の彼女。彼女もまた悔
しさを前面に押し出した様子が窺える。

私は何か勘違いをしているの？ 何かが引つかかる。錯覚として
もいいくらいの微かな違和感を藍は感じ取った。

「はい。藍ちゃんに知られたことで、彼も反省したはずです。帰り
ましょう」

小夜は誰にも分からないように明人の手に紙切れを握らせて解放
した。

藍と手を繋いで歩き出す。その時遥に一瞥をくれた。

『私には盾がある』そんな脅しが込められているように見えた。

「う、うん。そうだ家まで送るよ。心配だもん」

小夜に言つて藍は最後に明人を見た。

「藍……聞いてもいいか？」

幾分冷静になった口調で明人が尋ねた。

「何？」

「どうして、遥のことが分かった？」

他に聞くべきことはあるだろうが、明人はこれを選択した。

「私ね、お兄ちゃんのことなら何でも分かるから。小夜ちゃんに暴行したのは予想できなかったけど、話してるときおかしくなったふりして企んでるなって思ったの」

これは藍が心に秘めているものだが、もう1つの理由はレイプされた後異常なまでの気配察知能力を得てしまっており、それで遥の隠れていた位置が分かったのだった。

「仲の良さが裏目に出たのか。それより死ぬのは怖くなかったのか」
どんな攻撃が来るのか藍が知るわけがない。もしかしたら銃とかナイフだったかもしれないのに小夜を庇ったのが不思議でならない。
「もう誰にもあんな目に遭って欲しくないし、小夜ちゃんは大事な友達だから……」

「そうか」
あんな目。何があつたんだ。聞きたい。でも手の届く範囲にはもう寄ってこないだろう。

明人は去り行く2人の背中を見送った。その寂しげな表情は本人でさえ知らない。

「してやられたわね」

「ああ」

「あなたは唯一の家族の信頼を失い。誰も味方はいない」

「お前は？ お前もいなくなるのか？」

「そうね。さあ、《起源》の情報を教えなさい」

「……この街にいる。正確にはここから東にある山の廃寺だ」

「何で知ってるの、いや、やめとく。それじゃ、もう会うこともないわね。ありがと、そしてさよなら」

遥がいなくなっても明人はしばらくそこにいた。

「……小夜。お前は何がしたいんだ？」

明人は手の中のメモを握り締めて呟いた。そこにあるのは遙に教えた寺の住所だった。

「これが虚無か」

何も無い、何も。全ては小夜の思い通りになって、自分は全てを喪失した。

妹も、親も、綾瀬も、遙も。家にも入れてもらえないに違いない。金も無い。財布は家にある。

これが《幻象》に関わった者の末路なのか。

「はっ、終わってたまるか！ 過ぎ去ったことに意味があるのか。未来だけ見れば、いい。今までだってそうしてきた。だからこれからも」

心の片隅に溜まる闇は決意を嘲笑う。

お前はただのガキだ。不都合なものは切り捨てる、自分の信念を唯一無比の完全と思い込んでに頑なにしがみつく、傲慢なガキだ。過去を背負うことの大切さも、高を括る拙劣さも理解しない愚かしい存在だ、と。

燦然と輝く星と満ちていく月に反吐が出そうな心地だ。顔を撫でる涼風も軽やかな虫の声も気に入らない。何もかも。

第12話：破滅・ruination（後書き）

人もをし 人もうらめし あぢきなく 世を思ふゆゑに もの思ふ
身は

第13話A：発生・Nemesis（前書き）

《復讐の女神^{ネメシス}》である遙の過去話。
いつも以上に闇色のお話になっています。

第13話A：発生 - Nemesis

明人から情報を得た後、遙は一旦寝泊まりしている宿に戻った。制服に着替えて、黒いコートを羽織る。コートの中には、様々な武器が隠されている。

《起源》^{オリジン}を狩る準備は整った。

外は暗く、喧騒も遠い別次元のものに感じれる。

戦場に赴く遙は明人に話した自らの過去を思い出していた。想えど変わらぬ、忘れようもなく絡みついてくる記憶。

あれは高校1年の窒息しそうに蒸し暑い夏のことだった。肺が爛れてしまいそんな風の季節。

私には優しい彼がいて、友達もいっぱいいて、暑さで苛立つ教師達の下らない授業を聞きに学校に行くのも苦にはならなかった。

そんなある日、親しかった友達の1人が自殺した。線路に身を投げて、電車に轢かれて。

動機は全く不明。いじめがあつた気配はまるでないし、自殺を考えるまで思い詰めた様子だって微塵も感じられなかった。

ただ単に自殺。あまりにも証拠が無く、捜査はテキトーに済まされた。

それを認めなかった友達がいた。亡くなった子の1番の親友。

私も信じられなかったから、彼女に誘われたときに二つ返事で協力することにした。

調査と言ってもただの自己満足だったのかもしれない。聞き込みも情報収集も中途半端。生半可な正義感を振りかざした拳句得られ

たものは、とある噂1つ。

最近こゝらで和服の怪しい男を見るようになったという話だけ。それも『誰々が見たつていうのを聞いた』とかばかりで目撃者に出会えない。

しかし、親友の子はそれを頼りに捜査に燃えた。何が彼女をそこまで駆り立てるのか、私には分からなかった。

私たちが捜査を抜けても、彼女は1人友人の幻影を探し続けた。

しばらくしてその子は失踪してしまった。まるでこれ以上踏み込むなという警告のようだった。大きすぎる犠牲を払って私はやっと事の重大さに気付けたのだ。

怖くなった私は、彼女が和服の男を追っていたことを警察に言って、その後この事件に関わるのを止めた。

それで犯人が捕まって解決すれば良かった。でも失踪事件は続き、犠牲者は8人にまで上った。それは全て、私の彼氏を含む友人達であつた。

私は嘆き悲しむことと、姿無き犯人を恨み続けることしかできなかった。

かつての生活はもう無い。学校は色褪せ、そこにいるのは皆私より幸福な人々だけ。

いじめ？ 病気？ お金が無い？ ましてや恋の悩み？

そんなものはいくらでも解決法がある。私の苦悩に光り輝く道は無い。

闇の牢獄に放り込まれた私を、檻の外から幸せ者が笑覧する。

同情は凶器、励ましは毒。

檻の中、囚われの私にそんな汚物みたいなものが投げ入れられる。彼らは慈悲だと思つているだろうが、ただの偽善に思えてしまう。

中には本当に心から私のことを考えてくれた人もいたと思う。だけど私はこの悲哀が他者に理解できるはずがないと塞ぎ込み、孤独な悲劇のヒロインに身をやつして拒絶した。

結局の所、私はそんな汚物でも欲しかったのかもしれない。ただ事件で傷つき捻じ曲がった私の心が、慰めが含有する微々たる嘲りを拡大視し、純真無垢な善意から眼を閉ざしただけなのかもしれない。

本当は宝石のように煌びやかで温かいものなのに。

その時点で道は定まってしまった。

感謝の無い不遜な私には、いわれもない誹謗中傷と社会的制裁こりつが加えられる。その内学校のみならず地域にも悪評が伝播していった。災難を被ったのは私なのに、責め立てられるのも私。世の不公平を呪うには申し分ない屈辱だった。

自分のことで精一杯だった私は、その時失踪事件が収まっていたことに気付かなかった。まるで私の受難を楽しむかのように。

しばらくするとみんな私を構うことをやめたみたいだった。

平穩無事に2ヶ月が経とうとしていた。事件は未解決だが収束を迎えたらしい気配に人々は安心して、私への興味は削がれたらしかった。私を見ると嫌な顔をするのだけれど、以前のような暴力的な反応は無くなっていた。

私も暗鬱に過ごすのは嫌だったから、勇気を振り絞って教室に戻ってみた。

それまでの私は保健室に入り浸って極力他人と顔を合わせないようになしていた。

そしたら何のことは無かった。

最初は話しかけても粗悪な人形繚りみたいにぎこちない反応が返ってきたり、冷やかな視線に晒された。でも私も必死だった。日常を取り戻すために。

それが伝わったのかみんな少しずつだけ私を見てくれて、クラスに溶け込ませてくれた。

話を聞いてみると事件が残した傷跡は私にだけあったんじゃない。
った。

それは当然の事。だけどその時初めて気付いたのかもしれない。
失踪した友達にも家族はいるし、私以外の友達だってもちろんい
る。

やっぱり私は傲慢に1人で悲劇のヒロインを気取っていただけ。
みんなはそれが気に入らなかったただけなのだ。

被害者はこの街の住人全員。

遅すぎる認識に私は啞然とした。でもこれで、やっと平静な暮ら
しが戻るのだ。

私は崩壊した関係の修復により一層力を注いだ。私の努力をみん
なは認めてくれて急速に世界は色づき、未来を差し示す光がのさば
る闇を滅ぼした。

失ったものも多い。戻らないものも多くある。それでも、これか
ら得るものだって捨てたものじゃない。

いままで通りの世界とはいかないけれど、精一杯前を向いて歩く
ことはできる。

自分で言うのもアレだけど、悲劇を超克した人間は強いと思う。

この世の知らなくてもいい悲しい側面を覗いたから。自分の非力
を知ること他人を認められるようになるはずだから。

季節は巡り春になった。明るくてあつたかくて幸せな、私の好き
な季節。

2年に進級し私はバスケット部で活躍していた。1年の頃から入って
いたが事件のせいでしばらく休んでいたので、復帰してから遅れ
を取り戻そうと懸命だった。

日が長いから練習も長い。帰るのはどうしても遅くなっていた。

学校の近くの学校最寄の駅から電車で約10分、着いた小さな駅
から徒歩5分で家に着く。

駅の近くでふと誰かに名前を呼ばれた気がして、振り返ってみる。けれど誰もいない。微かに懐かしい匂いがした。なおも眼を凝らしていると雑踏の中、思い出となってしまった後ろ姿が見えては消えた。

「ユウ……」

知らず知らずの内に私はいなくなってしまった彼の名を呟いて、私は直感的に駆け出していた。

離れず追いつけない距離を保って私とユウは追いかけてくをしていた。

ユウはゆらりゆらりと人垣を抜け滑るように歩いていく。まるで亡霊だ。

私はなかなか追いつけないことに苛立ちながらも、無我夢中に光に集まる羽虫のように彼だけを見て追跡した。

いつの間にか私はユウについて、町外れの廃工場に入っていた。たしか缶詰かなにかを作っていた所だと聞いたことがあった。そこは私が小さい頃に閉鎖され、未だ買い手がおらず淘汰された場所だった。

どうしてユウがこんなところに用があるのか、全然検討も付かなかった。

中はひどく暗くて薄気味悪く、ホコリとカビの臭いが鼻を突く。

こんな汚らしい場所でも利用者がいるらしい。

壁の至る所に稚拙なラクガキが描き殴られ、スプレー缶やタバコの吸殻やアルコールの容器が散乱している。

ああ、ここは危ない奴らの溜まり場なんだなと理解し、辺りを見回すとユウはもういなかった。

ヤバイことに巻き込まれるのは嫌だったが、ユウが巻き込まれているかもしれないのをほっとけなかった。

ただの善意が再び私を日常の立ち入り禁止区域に踏み込ませてしまった。

今度こそ戻れない暗流に足を滑らせ墮ちたのだ。

第13話A：発生・Nemesis（後書き）

今回から1つの話を2つくらいに分けてアップしようと思案中。
1話アゲルのに時間かかっていけないので。

第13話B：発生 - Nemesis

そこで見たことは一生の思い出になった。

同廃工場の広めのフロア。天井に張り付いた薄汚れた窓と空いた穴から漏れる日光で部屋は明るい。

大小様々な廃棄機材が並んでいて、終末的な雰囲気せうまつきを醸している。「お願いします！ もう1粒、もう1粒だけ柘榴ざくろをぐええ！」

声がユウの情けない懇願を聞いてすぐ逃げればよかったのだけど、私は反射的に物陰に身を潜め様子を窺うかがってしまった。

柘榴？ あまり馴染みの無いフルーツ。何の話をしているの？

「何度来ても無駄だ。金もねえ奴にやれるかボケがつ！」

メリケンサックや鉄パイプで武装したいかにもな連中にユウがボコボコにされはじめた。

私は早くも来たことを後悔した。しかし、見つかることがどうしようもなく怖くて全く動けなかった。

しばらくすると暴行は終わり、私の死角から透き通るようなのに悪意に汚れた少女の声が聞こえてきた。

「ホント使えないわね。人間って」

また意味が分からない。まるで自分は違うみたいな言い方。

「まあ、そう言いなさんな。あつしはくれてやつても良いとおもいますかねえ」

今度は低い男の声が聞こえた。これは喋り方が変に時代がかったいた。

「これはアタシの仕事よ。アンタに従う筋合しんあいなんて無いわ、《起オリ源ゲン》」

オリジンって何？ この人たちは何者？ 疑問は尽きない。

「くっく、ちげえねえ。正論でかえされちゃあ、このあつしも言い

返せませんぜ」

「その話し方、癪だわ。ていうか何でここにいるのよ？ 用が無いなら消えて」

少女はどう考えても年上の男に高圧的な態度を取っている。

対する男は穏やかというか余裕の有り余っている様子。少女の言うとおりイライラする。

「迷惑かもしれませんが、まだここに残りやすよ」

「迷惑よ。どうして？」

「なに、新たな同胞を生むだけでさあ。ちよいとアンタの仕事にも絡みますがねえ」

「勝手に決めないでくれる？ どうしようもなく自己中ね」

「ははっ。テメエにだけは言われたくありませんぜ」

「なんですって？！ 貴様、殺すわよ」

口喧嘩の最中恐ろしい波動が部屋を揺るがした。

常人の私でさえ分かる鋭く濃厚な感覚。殺気とか邪気とかそんな感じのもの。私は叫んでしまいそうになり慌てて息を止めた。

「ん？ 今なにか動きやしたね」

「気のせいでしょ。アンタの」

「シッ！ 隠れても無駄ですよ」

男は何か言いたそうな少女を制し、見えないはずの私に語りかけた。と同時に私の身体を何かが突き抜けた。ドアノブ静電気を強くしたような痛みが走る。

「いたっ！？」

私は鋭い痛み思わず飛び上がり、結果としてこの部屋に居並ぶ者を確認することとなった。

うつぶせて動かないユウと武装した5人のチンピラ。それだけなら納得もいくけど、小学校中学年くらいにしか見えない小柄な女の子と紫苑の羽織を着た男は場違いだ。

和服の男は気味悪い笑みを浮かべて、それ以外は驚きを隠せないように止まっていた。

その際に私は一目散に逃走した。幸い足には自信がある。きつと逃げ切れる。ユウには悪いがやはり命は惜しい。

「どこ行こうってんですかい？ お嬢さん」

「ひい！？」

開けっ放しの出口まで行くと和服の男がニヤニヤ嗤いながら待っていた。

いつ来たの？ 理解できない現象に恐怖が背中を這い上がってきたが、私はまだ諦めなかった。すぐに別の出口を探そうとして踵を返すと

「がっ……！」

お腹にスイングされた鉄パイプがめり込んでいた。振るったのはチンピラの1人だった。

痛みが浸透して自分の身体が崩れ落ちるのを感じた。

跪いて、犯罪者たちを見上げているのが屈辱的だった。

「《起源》、コレが貴方の獲物ってわけ？」

「ええ」

「ふうん」

いつ来たのか少女が私を見下ろしていた。

暗黒色のドレスで盛装していて、流れるようなプラチナブロンドが映える。闇夜と星の群れを思わせる綺麗な出で立ち。

だけど、私を見下ろすブルーの瞳は冷酷さと邪悪さを惜しげもなく発散する。

初めて人間を怖いと思った。いえ、初めてはあの孤立した時代。今目の前にいるのは、もっと違う何か。

「ユウを、返してください……」

幼い少女に哀願するのは情けなく思ったのだが、逃げられないだろうからせめてユウだけでも助けたい。それに怖い。

「アンタ、ユウって名前だったんだ。虫けら」

少女が後ろに佇むユウに話しかける。虫けらと呼ばれても、怒る様子はない。絶対におかしい。

「はい」

「コレとどんな関係？」

「昔の、彼女です」

「へえ、それは面白いわね。《起源》、コレをちょっと借りるわよ」
私を指差して、物みたいな扱いをする。気に食わない。

「はあ、あつしのものだというのに……。ま、何するかによりますな」

「私は、お前達の所有物じゃない」

お腹の痛みを堪え、憤りを言い放った。

「この私に口答えをするの。虫けら風情が、調子に乗るな」

「《墜落の魔姫^{ハデス}》さん、話が先に進みませんぜ。ほつといて、続きを話しな」

私を蹴りとばそうとした少女を和服男が宥めた。オリジンだのハデスだの、意味不明なコードネームを使ういかれた連中だと思う。

「……ええ。さしずめ貴方の気に入るような神話の再現よ」

「ほう。怪我はしないんで？」

「もちろんよ」

「なら許可しまさあ。ですが、あまり時間をかけすぎないよう」

「分かってるわ」

嫌な予感しかない。このどこまでもふざけた連中は何をするつもりだろうか。

「さあ、始めましょうか。冥府の王の審判を」

私は、はじめユウがいた部屋に連れ戻された。近くにユウもいる。
「どうするつもりなの？」

静寂に耐えかねて私は少女に聞いた。

「ゲームよ。勝てたら、逃げていいわ。それを私たちが追うこともない」

「ホントに？ 約束よ」

思わぬところにあつた救いの綱。私は必死に飛びついた。

「ええ。ルールは簡単。その虫けらと2人で工場から出られれば勝ちよ。ここが大事だけどね、途中で振り返ったら負けよ」

和服男がほう、と溜息を漏らした。

「それだけ？」

「もちろん私だって邪魔はするけれど、暴力はしないわ。そんなところかしら」

勝てる。

そう思える条件だった。

ユウは顔色が悪くて、何かに怯えるようにキョロキョロとして落ち着きがない。勝利に不可欠な彼にはしっかりとしてもらわなければならない。

遠い昔のようで、実は1年も経っていない。私はその間の寂しさを全部吐き出すみたいに甘えてみた。

「ねえ、ユウ。何があつたの？ いなくなった時すごく悲しかったんだから」

「あ、あ、ごめん。俺……い、いや……」

しっかりと受け止めてくれると思っていたのに、期待は裏切られた。ユウの反応は痛々しくて目も当てられない。

ユウの挙動はまるで保健で習った薬物患者だ。それなら話が繋がる。

ここにたむろしている連中は麻薬の虜となつた憐れな人たち。和服男と少女は麻薬ディーラーのような存在なのだろう。

男はともかく、少女に疑いを持つのは変かもしれないが、傲慢な態度や歳不相応な大人びた喋り方には何か異質なものを感じずにはいられない。

「しっかりと！ 昔のユウに戻ってよ！ ねえ！ こつち見てよ。話聞いてよ」

ユウはもつと頼れる男子だったはず。こんな状態になるなんて、よっぽどひどい目に遭つたらしい。

「無駄話は済みまして？」

疑問形なのに、圧倒的な命令が込められた声。まだ話は全然終わってない。

私はきつと少女を睨み、その軽薄な笑みをたたえた顔に敵意を剥き出しにした。

少女はそれが気に食わない様子で笑みを消し、凍えるような憤怒を露にしていた。ちよつと仕返してきたみたいで子気味よい。

「ほら、立って。行くよ、ユウ」

「お、おう」

少女を尻目に、私はユウの手を引いて駆け出した。スタートなんて宣言されてなくても構いやしない。

手を握ると汗で湿ったユウの手も握り返してくる。

『俺をここから救い出してくれ』

そんな無言の期待が込められているみたいで、私に力をくれた。

甘えてばかりの私だったけど、今度は私がユウを護ってみせる！

走り出しても後ろの連中は何もしてこない。

逆に不気味で振り向きなくなるが、ルールを思い出してはつとずる。危ないところだった。

手を繋いだユウの足取りはおぼつかなく、否応なしに進むのが遅れてしまう。怪我でもしていて障っているのかと思われたが、振り向くわけにはいかない。

焦りが生まれる。至る所に仕掛けられた『無』からくる不安という微細な畏が注意を後ろに向けさせようとする。細心の注意が必要だった。

「何があっても絶対振り向いちゃだめだよ」

「……」

「ユウ？」

ユウは答えない。

握る手の感触はあるのに、そこにいるのかと聞かれれば分からない

い言ってしまいそう。

どうしようもないので私は歩き続けた。

曲がりくねって迷宮を成す遺物達が視界に現れた。広大なこのフロアはゴミで埋まっていた。どこで道を間違えたのかこの部屋は初めて来る。

迷路はかなり人為的なもので奇妙極まりない。

奴らがわざわざ造ったのだ。となると、私は手招きしていた奴らの元へ自ら身を投じたことになる。ユウは活餌だったのだ。

和服男と少女の嘲笑が聞こえるようだ。そんなものに引つかかる自分と奴らに腹が立った。

来た道ではない。しかし、後戻りはできない。万が一、袋小路に辿り着こうものならそれはゲームの敗北を意味する。慎重に選ぼう。「つまらない、興ざめ。人間は暇つぶしにもならないわね」

真後ろで少女の声が聞こえた。

冷や汗が流れ、瞳が無意識に後方を向こうとするのを必死に止めた。前を見ながら少女に聞いてみた。

「出口はちゃんとあるんでしょうね」

「当たり前でしょ。勝つと分かっている試合ほど低劣なものはないわ」

小ばかにした調子で少女は話す。

本当は勝ち目なんてないのかもしれない。心を暗影が通り過ぎた。私は迷路を造るゴミ壁から突き出ていた鉄パイプを引っ込抜いていた。いざとなったら、こんな幼い子でも……。

「そんなものでこの私が殺せるとでも？」

今度は完全にバカにした微笑を含んだ口調で嘲られた。

「お前みたいなのやつに殺す価値なんか無い」

私はわざと少女をキレさせるように言葉を選んだ。沸騰しやすい性格なのだと、会話から読んでいた。

「ッ……人間風情がつ！ もついい、死ね！ 殺してやる！」

思ったとおり少女は感情を爆発させた。少女の中にある何か凶悪な気配がドバドバと溢れ、後ろでうねりを上げている。

後ろを向けないわけではない。もう契約は破棄されたのだから。でも私は振り返らない。膨張していく怪異と目を合わせたら、発狂しかねないと思ったから。

怖くないわけが無い。極限の憤怒を直に浴びるという未知の経験に震えが止まらない。しかし、私にはまたしても確信があったのだ。「肉体と精神が砂となるまで殺し尽してあげるわ!」

少女が絶叫し、形あるもの全てを切り裂く暴風が私の背中に迫った。私は頼りないユウの手を握り締め、眼を閉じた。

「アイギス
《不壊》」

男の声が聞こえ、私の身には何も起きなかった。

車の衝突みたいな暴音が数回聞こえ、辺りが静かになった。そこで私は後ろを向いた。

「やっぱり助けてくれたんだ」

「やっぱり? なるほど、はめられたというわけさあね」

キレるかもしれないと構えたけど和服男が愉快そうに返してきた。彼は私たちと少女の間にいて、予想通り先の攻撃から護ってくれたようだ。

「その子の仲間じゃないの?」

私は何があったのか地面に転がっている少女を指して聞いてみた。「いやあ? あっしらは基本単独行動でさあ。協力なんてえのはその時々でね」

男は変な言葉遣いながら声が弾んでいて、よく分からないが楽しそうである。

「あの、私たち、帰っていいですか?」

無理とは知りながら聞いてみる。今までの会話から私たちに用があるのは少女ではなく、この男らしいが。

「はははっ。そいつは聞けねえ相談でさあ」

「やっぱり……」

分かってもらえない。だったらやることは1つ。

「えええい！」

私は鉄パイプを振り上げ、思いっきり男の胸を殴りつけた。

ガキンとおおそ人を殴ったのに相応しくない音がして、腕が干切れそうなくらい痺れた。鉄パイプは衝撃で吹っ飛んでいった。

「くっつ……！ な、何なのよ」

「そんなの効きませんぜ。諦めて話を聞いてくだせえ。貴方の友人を自殺させたり、失踪させたりした不肖のあっしの話を」

「えっ……？」

数瞬は不理解が脳を支配した。たった数瞬。

「あ、あなたがみんなを……っ！」

人生をめちやくちやにした男を目の前にして、私の理性は崩壊寸前だった。

殴っても蹴っても効かないという認識だけが、私を暴力の衝動から遠ざけていた。

「姉さんの人生は変わったな。暗闇とそこからの脱出を経て、強くなった。さあ、最後の試練でさあ！ 存分に享受し、行き着く先をあっしに見せなせえ！」

爛々と目を輝かせながら和服男が高らかに宣言した。

「支配と束縛、逃れえぬ永遠の快楽をここに。《冥界の柘榴》！」

ボメグラネイトインハデス

和服男の言葉を合図に少女の奇怪な言葉と共に赤い閃光が一带を包み、その強烈な光に眼がくらんだ。

ユウの身体がビクンと跳ねて、稚拙な人形操りのような動きで私のほうを向いた。

「大丈夫？ ユウ顔色悪いけど」

「平気だよ。むしろ気分が良すぎるくらいさ」

本当に自然にユウの手が私の首にかかった。だから全く反応はで
きなかった。

「どうし、やめ、て……」

息が苦しい。押し退けようと伸ばす腕も力を失っていくのが分か
る。そのままユウは私を押し倒した。

霞みつつある視界にユウを捉える。ユウは無言で私の首を絞め続
けている。眼の焦点は合っており、キトキトと忙しく動き回って
いる。

「私を侮辱した罰よ。愛する虫けらに殺される！」

いつの間にか立ち上がった少女が悪魔じみた高笑いを響かせてい
る。

護ってくれるものと思っていた和服男さえ直立不動でこっちを見
ているだけだ。

「足掻いてみなせえ。人間、生に執着してこそそのモノでさあ」

「かってな、いいぐさ、ねっ！」

飛びそうだった意識が負感情のキメラに引きずり戻され、融合し
た。

刹那、私の脚がユウを跳ね除けていた。

私は起立し、息を切らせながら悪魔2匹を見据えた。今相当怖い
顔をしているんだろうな。

「ユウを元に戻して！」

「いやよ。コレはもう私のものなんだから。ああ、証拠を見せてあ
げようか。それなら納得でしょ」

少女がその小さな手を広げてみせた。すると、見る間に紅く輝く
あめ玉大の粒がいくつも手のひらに現れた。まるで手からルビーが
湧いているような光景だ。

「ほら、虫けら。お前の欲しくて欲しくてたまらないものよ」

それを地面に落とすと、死体のように動かなかったユウがものす

ごい勢いで起き上がり紅い粒に飛びついた。

ホコリまみれでも何でも構わないみたい。ユウはただただ紅い粒を口に入れ、惜しむように落ちた床を舐めていた。

「や、いやぁ……。ユウ、なんでそんなこと……？」

シヨックが大きすぎた。

いくら呼んでも、彼氏は、ユウは、その人間は、犬のように這いつくばりせつせと舌を使って紅い粒の余韻を集めている。

頬を何かの液体が伝っていった。

「あ、そうだ。前に《起源》からもらった《出来損ない》がいたんだっただわ」

とてつもない悪意を発露させながら、少女は指を鳴らした。

何者かの足音が少女の背後から聞こえてきた。

見たくない。もういや。

眼を閉じたくてもできない。できたことなんて、自分が泣いているのに気づいたことだけ。

「紹介するわ。愚かで卑しくて汚い虫けらどもよ」

少女がまた紅い粒をばら撒いた。人の形をした虫けらが嬉々して群がる。

「いやあああ！」

絶叫なんかしても無駄。事実は変わらない。でも止まらないのは、たぶん精神を守るためなんだと思う。

虫けらは全部で8匹。どれもこれも知った顔。

だって、それは、失踪した友人たちのなれの果てなんだから。

第13話B：発生・Nemesis（後書き）

一人称って難しい。変な所があつたら教えてほしいなあ。

あと、この小説に何が足りないかと考えたところ…… 比喻希望主題
差別化台詞回し、そして何よりもバックボーンが足りない。

第13話C：発生・Nemesis（前書き）

遥過去編最終章です。

第13話C：発生・Nemesis

「働かざる者死すべし。汚らしい虫けら共、食事は終わりよ。その愚か者を捕まえて連れてきなさい」

陰湿な微笑を浮かべ、少女が命令を飛ばす。

虫けらと呼ばれた私の友人たちが、よだれを垂らしながら床から顔を上げた。みんな虚ろな目をして、でも私を見てほんの少し戸惑っているみたいにも見える。

「やめてよみんな。正気に戻って……」

私はか細い声で頼んだ。悪魔2匹への怨恨は不活性化してしまった。

「俺達は正気さ。働いて、給料をもらって、また働く」

「就職したのと同じようなもんさ」

「遥もおいでよ。キモチイイし、楽チンだからさっ」

全ての苦から脱したような穏やかな仕草。もう蟻のように這いずり、紅い粒を舐^{ねぶ}っていた時の面影はない。不気味さを通り越して、懐かしささえ感じてしまう。

「だけど、それが私を甦る。」

「イヤ。こないだよ」

私は耐え切れなくなつてゴミの迷路の中に駆け込んだ。

「待つてよ。アタシたち友達でしょ」

追ってくるのは友人たち。万に一つも鬼ごっこをしているわけじゃないのがとても辛い。

「《墜落の魔姫^{ハデス}》さん、あなたはヒドイお方だ。神話のハデスなどもまだ人間味があるというのに」

「私は人間じゃないのよ。そんなもの要らないわ」

「そうですか。ああ、あなたの持ち時間は10分くらいでよろしいですか？」

「何の話よ？」

「あなたが彼女を追い掛け回す時間でさあ」

「ええ、十分よ」

「ふむ、つまらない洒落でさあ」

「何言わせんのよ、クソヤロー！」

「淑女たる者そんな口の利き方はよろしくありませんがね」

「ああ、もう！ お前嫌い！ この時間はさっき私を殴った仕返しに充てさせてもらうわ」

少女がどこからとも無く持ち主と同じくらいの大鎌を持ち出して構えた。

刃まで完全な黒に覆われており、柄にはルビーがいくつもはめられている。さしづめ、全身に紅い眼を持つ暗黒の大蛇のよう。

「死を統率する神の名、身をもって知りなさい！」

「その名はあつしが付けたということをお忘れなく」

元凶の2人が戦闘^{けんか}を始めたことなど知る由も無く、私はガラクタ迷路を突き進んだ。

高さ180センチくらいの迷宮壁を作っているのは、主に鉄パイプと学校机と工場の廃材。どこから集めたのか知らないけど、途方もない量だと思う。

通路は人1人通れるくらいのもことから、車でも行けそうなものである。それが分岐だらけなので犬でも目標を探すのに苦労するだろう。

そして1番問題なのは隠れる場所が無いことだった。壁には潜り込む隙間がない。

だから走るしかない。体力には自信があるが、相手は8人もいる。挟まれてもしたら一巻の終わりだ。

壁を登ることもできるが所詮机なので何とも不安定で頼りない。倒れてきたら、と考えるとあまり有効な手ではないかもしれない。

「早く出口を見つけないと……」

壁の向こうで足音が聞こえたので、私は慎重に歩き出した。

「あ、ハルはっけーん！ これでご褒美は私のもの」

「ヒナちゃん……」

迷路で初めて出くわしたのはヒナちゃんだった。

ぼやぼやした性格で人気があった子。足は遅かったはず。

「ごめん」

私はユーターンして、近くの選ばなかった分岐を曲がった。

しまった！

道が狭すぎて前から他の子が来たら挟まれる。

「まってよ」

ヒナちゃんが追いついてきた。もう進むしかない。

私は駆け出した。

けっこう長い一本道で、早く脱出したいのに別れ道が無い。

「おっ、遙いた！ こちら琴美、遙を発見した。現場に急行せよ」

そこに横道があるのか、ふっと前方に人影が現れた。その人影は私を見るなり大声で無線機に喋りだした。

『急行って、どこに行けばいいのか分かんない』

「バカ！ 気合で何とかしなさい」

『ふええ……』

無線からは情けない声が放出されている。

聞いていて思わず口元がほころんだ。

（琴美と……由香里かな。変わってないなあ）

2人は、いいにくいんだけど、その、れ、れずっ気があって付き合っていた。今もそれは変わらないらしい。

どうしてこんなことになってるの。心がチクリとした。

「がんばって！ 捕まえたらキスしてあげる。あっ遙が逃げた」

琴美がラブコールをしている隙に私は意を決して壁を登った。

机部分に足をかけて、ゆっくり慎重に……よし、上れた。

「ヒナ！ アンタがとろいから逃げられたじゃない」

「そんなあ。コトちゃんゆりゆりが百合百合してたのが悪いんだよ」

合流した2人が下で騒いでいるのを尻目に、私は隣の通路を確認していた。広いし人気もない無い。

かなり高く感じられ、下を見ると眼が眩んだ。でも飛ばないと他のみんなが集まってくる。それからじゃ遅い。

私は机の縁に腰掛け、手で机を押して飛び降りた。

嫌な揺れが両手に伝わって、壁がヒナと琴美の方へ倒れていく気配がした。

着地して見よう見まねで受身を取ると、ちょうど壁が崩壊するところだった。

「ひいやあああ！」

金属のなだれに2人分の悲鳴が飲み込まれた。

左右の壁もつられて倒れていく。圧倒的な質量の鉄が歪む鳥肌の立つような音で耳が壊れるかと思うほど響きわたる。

「あ、ああつ。ヒナちゃん、琴美……私が、殺したの？」

ぼんやりとそれだけが実感できた。

せつかく会えたのに、病院に行けばクスリを止めてまた一緒に遊べたかもしれないのに。あれじゃ助からない。

「琴美！ 琴美い！ ねえ、返事してよ！？」

見計らっていたかのように今1番会いたくなかった人物がやってきた。泣きながら無線を握り締めている由香里である。

「遙！ 琴美に何したの！？」

私を捕まえることなど頭に無い様子で由香里が突っかかってきた。後悔の想いから制服の襟を掴まれるのにも何の抵抗もなかった。私の琴美を、よくもおおお！」

鬼のような形相で睨みつけられ、私は顔を背けてしまった。

いくら禁忌的な同性との恋であっても、相手を失う辛さには何の

変わりも無い。私だってユウを殺したら何をするか分からない。

由香里の手が首に上っていき、力が込められる。

「殺してやる。命令なんてどうだっていい！」

「ぐ……」

死んじやってもいいかな。それで、由香里の気が済むんだったら諦めていれば後はすぐ終わる、はず。

あれ、いつの間にか身体が浮いてる。由香里が私を宙吊りにしてる。こんな、ちからが、あつたんだ……。

「由香里！ やめなさい！」

「ふえっ……！？」

突然尻に衝撃を受け、遠のいていた意識が戻ってきた。

私は地面に座り込んだ姿勢のまま、霞む瞳で由香里が私をほったらかしにして駆けていくのを見た。

「私は平気だから。ほら、こっちおいで」

「うええ……、琴美いい」

「よしよし、泣かないの」

信じられない。

崩れた鉄パイプと机の中から琴美が這い出していた。服こそ破れているものの無傷に見える。

今も号泣している由香里を抱き止め、平然と立っている。

チャンス。このワケのわからない状況を理解しようとはせず、私は酸素不足で喘ぐ身体に鞭打ってこの場から立ち去ろうとした。

その矢先、長身の人物とぶつかった。

「待てよ。ここで逃げられちゃ、また見つけるのに苦労するんでな」

「うっ、……アキラ」

「久しぶりだな」

アキラは口調だけなら男子と勘違いされそうだけど、れっきとした女子である。柔道とかやってて強くて頼りがいのある人。

そういえば、私の周りが狂い始めた発端となった女子の自殺の調査を最後まで諦めなかったのがこのアキラだった。つまり私たちのグループ中で1番最初に失踪した人なのだ。

「あんだけ大きな音がしたのに来てるのは3人だけか」

呆れたように呟きながら、アキラは私を羽交い絞めにした。

痛くないように気を遣ってくれているらしく拘束は堅くない。逃げ出そうと思えばできるかもしれないけど、おとなしくしとくことにした。

「いや、さっきヒナの声もしたしな。埋もれてんのか？」

「う、うん」

聞かれて思わず答えてしまった。アキラの態度も失踪前と何も変わってなかったからかもしれない。

「ならスゴイのが見れるかもしれない」

アキラが妖しく笑った。以前はしなかった笑みだ。

「いったああ！」

ヒナちゃんの声が聞こえたけど姿は見えない。すると、目的を忘れていちやいちゃしている琴美と由香里の後ろの鉄山が噴火した。

パイプやら机を吹き飛ばして出てきたのは探していたヒナちゃんその人だった。

「ひっ!？」

私は目を見張ると同時に戦慄した。

ヒナちゃんのお腹と右脚にはパイプが刺さっている。血が滴つてものすごく痛そうなのに、いつもと変わらない態度が恐ろしかった。

「ヒナ。無事だったか」

「おー、アキも来たんだ」

「そりゃ、褒美がほしいからな。それより、その刺さってるの抜いたらどうだ？」

「うひゃあ。グロいねえ。いろはが好きそうだけど、ここはいつちよ」

ズブリ、と嫌な音がして2本のパイプが引き抜かれた。無論痛か

つたみたいで、ヒナちゃんもその時は顔を歪めていた。

血が止まることは無いが、それでも抜いてしまえば何ともないのか、ヒナちゃんは傷を服で隠してピンピンしている。

「なんで、そんな……」

見た目は変わらなくても、中身が根本的に変容してしまった友人たちを前に私は茫然自失していた。

「ご主人はな、ちよつと変わった仕事をしてるんだ。その時部下のアタシらが脆かったら使い物にならんわけよ」

「そう。それで、ちよつぱり改造とか強化されてるってとこね」

アキラの説明に割り込んできたのは、いろはだった。

相変わらずミステリアスな雰囲気を漂わせてる子。実はスプラッター大好きであつて、ヒナちゃんの発言はそれを受けているのであつた。

「そんな、ワケ分かんない話……」

あるわけない。

私の口から出たのは最大の疑問だった。

ここへ来てから感じ続けている異質な感覚の正体。おそらくは誰も信じないだらう非現実的な現象の連鎖。

気付いたら周りには5人の友人達に囲まれていた。

ヒナちゃん、琴美と由香里、いろは、そしてアキラ。

「あるんだよ、それが。私たちは、『^{フエノミナ}幻象』。自らを世界の理に組み込み不死となりし超常の現象^{ひと}」

アキラが劇役者染みたセリフを言った。

ふえのみな？ 不死？ 超常？ なにそれ。

認めたくない心に絶望的なほど非現実的な光景が脳裏に甦る。

少女の手に湧いた出した紅い粒。警察が何も掴めなかった事件の黒幕、オリジンと呼ばれていた男。鉄の洪水に巻き込まれても平気な友達。

「さて、ここまで喋ったんだしもう飲ませるか」

「遙もやつと仲間入りだね。全然怖いことなんかないから」

「だって死なくなるんだから」

アキラは私を拘束したまま、他のみんなが楽しそうな笑顔でにじり寄ってくる。手に手に例の紅い粒を持って。

「やめてよ！　こんなおかしいよ。意味わかんないし！」

必死にもがいてもアキラには敵わない。私はガツチリとホールドされ成す術が無い。

「由香里」。あゝんして」

「あゝん。はあああつ、とりよける……」

私に食べさせるのに4人も要らないと思ったのか、琴美と由香里がお互いの持っていた粒を食べさせ合いだした。

2人は急速に浸透する極限の悦楽に呆けたような表情になって、へたりこんだ。さつき少女がばら撒いていた粒よりはるかに強力そうだ。

「それハルに食べさせるやつなのに」

ヒナちゃんが不平を漏らす。彼女自身も食べたくて仕方ないみたい。

「ほつとけ。アタシたちはご主人からもらえばいい」

「……そだね。はい、ハル。おとなしくお口開けててね」

ヒナちゃんが再び迫ってきたので、私は硬く口を結んだ。ちらりと横を見ると、いろはが紅い粒をこっそり口にしていた。

「開けてくれないと食べれないんだけど」

「なら鼻から入れる」

怖いことを言うアキラ。

「それじゃハルが痛いよ。私ムリ」

「なら代わって。拷問チックなことには興味があつて」

いろはがしゃしゃり出てきて、ヒナちゃんの粒をひったくった。

紅い粒の影響に耐えているのか顔が赤い。それが興奮しているみたいに見えてゾツとした。

「ほどほどにしろよ」

「わかってますって」

メガネが怪しく光る。その奥の瞳にも狂気と呼べるものが微かにチラついていた。

「ぜったいムリ！ やめてよ！ お願、んくっ」

最後の懇願をするために開けた私の口に紅い粒が吸い込まれた。これが狙いだっただと今さら気付いた。

「けほつけほっ、い、イヤだ……バケモノになんかなりたくない……」

全身を駆け巡る快楽の電流。思考を止め、四肢から力を奪っていく。

抗うことのできない快感に私はビクビクと肢体を震わせ、ひたすら身悶えた。

自分の身体が別のものに変化していく悪感が満ち溢れる。その一方で、やつとみんなと一緒になれるという安堵も生まれていた。

ああ、世界が優しい霧に溶けていく。目が、覚めたら、また、みんなと……。

生暖かい液体が顔にかかる。ぬるぬるとしていて気持ち悪い。それに臭い。

ぼんやりしている頭を叩き起こして目を開く。

「う、ん……」

赤い。あたり一面。

誰かが怒鳴っている。

「虫けら！ こっちにきて護りなさい」

「命の無駄使いでさあ。《出来損ない》でもないヤツを差し向けるなんてなあ」

甲高い悲鳴が巻き起こり再び赤い雨が降ってきた。

こんな所で寝てたら風邪引いちゃう。そう思って、身体を起こす

と今度はちゃんとした物体がお腹に落ちてきた。

なんだろう？　ぬるぬる濡れた黒い糸。白い丸いのが上に2つ、赤い部分に挟まれて下にはずらっと並んで、やっぱり赤い液体を流して。

これじゃまるで。人の顔みたい。

「やめっ！？　イタイタイー！」

「そんな病気時代遅れですぜ」

次は蒼白い光がバチバチ唸って、小柄な何かを襲っている。小柄な何かはくねくねよがって、なんだかエロい。

お裾分けみたいに私にもビリツときた。それで頭がシャキツとした。

「いやああああ！」

私はお腹に乗っていたいろはの頭部を投げ捨て、あらん限り叫び泣いた。

「おはようござえます。遥さん」

和服男がヒナちゃんを片手に持ってプラプラさせていたのを放して、私に向き直った。

落ちたヒナちゃんは人肉が焼ける異臭を纏って、ピクリとも動かない。

「すいませんねえ。そのちっこいのがけしかけてくるもんですから、殺しちいましたよ」

しゃがんで目線を合わせてきた。苦悶の表情が張り付いたいろはの生首を持って。

見るのに耐えかねて眼を逸らす。

顎で指された少女は不機嫌そうに鎌を回していた。あとは死体ばかり。迷路に逃げる前に会ったチンピラと女の子2人のものだ。女の子のものは、たぶんあの時失踪した薫と奈緒だと思う。みんな胴体が真っ二つになっている。

これ、みんなこの人が……？　こんな酷いことをして。なんで楽しそうに笑ってるの？

「怖い眼をしてまさあ。彼女らを支配してますのはその口リでせ。あつしは攻撃されたんで反撃したまででさあ」

私は反応しない。言葉も首の振り方も忘れたかのように。

少女が鎌を振った。深紅の宝玉が暗い光を放つと、迷路では会わなかったユウと純が進み出た。

和服男は頷くと、腰に挿していた鞘から見事な日本刀を抜き放った。武器というより芸術品の域に達するような輝く麗美なフォルムだ。

そのまま何の前触れも無く純を肩から斜めに切り伏せた。瞬きの合間に刃が発光したかと思うと人間が悪臭を放つ肉塊に成り下がっていた。

乾いた血がこびり付いた刃をユウの首に添えながら、男は私を見つめた。

「やめて。ユウには手を出さないで……」

必死に声を絞り出した。意味も無く殺された純のことも辛いけど、私にはやっぱりユウだった。

「ははは」

無慈悲に跳ね飛ぶユウの首。

首を刎ねた男の哄笑と噴出した温かい鮮血を浴びて、私は壊れた。

私は意味を伝える機能を欠いた音を吐き出し、男に殴りかかった。失うものは無い。あるとしたらすでに価値を失ったこの命。

「さあ、遥さん！ 新たな人生、第二の生。何を望みまさあ！」

有頂天にいるかのような調子で男が叫んだ。まるで歓迎しているみたい。

「殺す！ お前らを殺してやる！！」

ありつただけの憎悪と怨念、殺意と呪詛を込めて私は絶叫した。

「願わくば、その望み果たされんことを」

男の声を最後に匂いが消え、音が消え、光が消えた。私の拳は男

に届くことはなかった。

身体は得体の知れないモノ混ざり合い、心は砕け形を失くす。魂さえも揺らぎだす。

要した時間は永遠にして須臾かもしれず、範囲としては極所的で全域で、程度にすると膨大で過小な変異が鎮まった。

紅い粒を吞まされた時より急激な変化だった。死んでいるのか、生きているのかも定かではない。

「うらああ！」

「ぐううっ」

響き渡る金属の慟哭。

私の斬撃は届かなかったが、男は見えない盾と一緒にぶっ飛んで迷路の崩壊に巻き込まれた。

「オリジン！？ もう手に負えない。退くわよ」

少女の声が耳に入った時には、身体が勝手に動いていた。

「お前もあの男の仲間だろ」

自分のものとは思えない低い声が出た。私は目で捉えることしかできないからどうしようもない。

手に持つ柄から伸びた白銀の蛇たちが対象を切り刻もうとのたうちまわる。

少女は一瞬怯えを見せたが、すぐに嘲笑を浮かべた。

「お前は《柘榴》を撰った。すでに私の手の中よ」

少女が手をかざすと途端に私の身体は動作を止めた。何も考えられない。収まっていた快楽が大急ぎで起動したような感覚。

「これ没収。『赤ん坊』に持たせても害しかないわ」

私の手から動くのをやめた剣が抜き取られた。

「ぐえっ！？」

また血だ。切り裂かれた少女の喉元から溢れ出る。

剣はひとりでに暴れて何回か斬り付けると少女の手を離れ床に落

ちた。

私の身体に自由が戻ってきた。蛇を結合したような剣を拾い上げる。

「ご主人！」

アキラがひゅうひゅうと息を漏らすことしかできない少女に駆け寄る。私を睨みつけて何か言おうとしていたみたいだったけど、蛇にお腹を刺されて投げ飛ばされた。

「まずいよ。早く逃げないと。走って！」

「い、イエッサ！」

琴美と由香里が逃走する。

危ない！ 蛇が後ろに……

警告しようとしたけど間に合うことなく2人は胸を貫かれて倒れてしまった。最後にキスしようとしてじり寄ったのに、蛇がめっちゃやたらに串刺しにしたので叶わなかった。

「ひゅう……」

微かな呼吸音が聞こえ、視点が戻された。

じりじりと這って無様な敗走を見せてくる少女がいる。

「しぶといな。なんだ、その目は」

恨みがましい瞳を向けてきた少女が前方にゴロゴロと行ってしまった。蹴りがこんなに強いなんて知らなかった。

私は生にしがみついて何とか逃げ延びようと頑張っているちっぽけな存在を追い詰めていく。あっという間に追いついてしまって面白くない。

「私の友達を薬漬けにして飼いならしていた罪は重い」

冷たい鋼鉄の蛇が少女の背中を這う。まったく自然な感じでザクザクと滅多刺しにしていく。腹ペコ蛇の池に突き落としたらこんなだろうな。

一方少女は色々と不随になって動けない。また蹴られて、転がって全身を強打しながらに生の終点に近づいていく。

「遺言を聞いてあげたいけど、喋れないんじゃないかな。さよなら」
少女が何を求めてか手を振るので斬りおとしてあげた。この一撃で葬る予定を狂わされて、私はご立腹のようだ。

「死ねッ！」

あ、あれ？ 和服じゃない男が串刺しになった。誰これ。

「……はるか……まさかこんなことになるなんて」

虫の息で話しかけてくる男。血が止めどなく流れているのを見ていると何だか悲しくなってきた。

「わたしの名まえ……」

やめる。そんな名で呼ぶな。

私を支配していた何かが音を立てて瓦解していく。猛り盛っていたどす黒い感情が萎んでいく。

「ホント、ダメな彼氏でごめん。お前だけは巻き込みたくなかった」

この男との思い出が走馬灯のように頭を、心を走りぬける。知らないはずなのに何故か涙が出た。

ああ、もしかしてこの人は

「ユウ、なの……？」

「そうッ、ぎいいいい！」

ユウを刺し貫いていた蛇が死後痙攣を起こしたように蠢いて消えた。それが、トドメになった。

「ユウどうしたの？ 続き話してよ」

ほら、立って。力入れて。ここから出よう？

外はあったかいよ。桜だって咲いてる。そうそう、私きれいなところ知ってるんだ、見に行こうよ。

寒いのか？ だって震えてる。身体冷たいし。熱でもあるのか？ でも、熱なら身体ってあつく……

もういい！ 私が連れて行ってあげる。

もっと踏ん張って。私女の子なんだから、肉体労働向いてないから。

ユウ!? 怪我したの? こんなに血が出てる。あはは、お花見なんかより病院だったね。

「見て見て! こんなに花が散って、風強いね今日」

とつても久しぶりのお天道様が眩しい。ユウもおんなじみたいで俯いてる。

私は目を細めて上を見上げた。サクラ吹雪の優しい空は、悲しいほど青く澄んでいた。胸が痛いな。

そこからの記憶は曖昧だ。

警察が来て病院に行って家族と話した。何を聞かれても何のことだか分からない。

破壊尽くされた工場からは大量のガラクタしかでなかったそうだが、懐かしいあの人達はどこへ。

医者によると極度の疲労状態と記憶障害をきたしており、少し入院した方がいいとのこと。様子を見て、精神病院に移ることもありえるとも言われた。

そこから何時間、何十時間経つただろうか。初めての、もしかしたら幾度目かの病院での夜に誰にも気付かれず、影のように闇に溶けて面会人がやってきた。

私は眼が冴えて眠れなかったので、天井とにらめっこしていたところだった。

「遙さん、気分はどうですか?」

私が無言でいると、男は独白にはいった。

「名前が決まったんで伝えに来たんでさあ。あなたの名は『復讐の女神』^{ネメシス}。原義は義憤でありますけどいつでもいいでござんしょ。呵責ない復讐者の側面とそれをなだめる慈愛の側面を持ち、その狭間で苦しむ女神でさあ」

一旦話が止まった。何の反応も示さない私を見て男は落胆したようだった。

「ふむ、心が壊れてんですか。我々《幻象》は銃や剣より精神的な損失がよっぽど致命的だというのに。ああ、剣といえばあなたの得物もそうでしたな」

銀色の蛇が脳裏に浮かんだ。触れるものを容易く八つ裂きにする三つ首の蛇。

「《怨疾毒蛇^{エリニコエス}》。あなたの深遠たる怨嗟が生んだその剣は、我らにとつては劇毒の塊。受けた傷は治りませんぜ。血に飢えた復讐の三女神が撃つ鞭のようであな」

雲がどいて月明かりの元、男の全容が露になった。あの和服男だ。ざんばらに切った黒髪。痩せた長躯の影を部屋に伸ばして、腰帯に刀の鞘が挿った和服を着込みニヤリと嗤っていた。心なしか眼は嗤っていないように見えた。

「もう普通の生活は望めませんぜ。殺意と狂気を糧に追って来なせえ。あつしは《起源》。悠久を生き、永遠を分け与える者なり」

そうして男は去っていった。

数週間後、再び身体が乗っ取られたようになった。その日の夜、病院を抜け出した。

そして街にいた名も知らぬ《幻象》を殺した。そのときの快感といったら例えようも無い。

気がついたら血塗れで、その血はだんだん消えて行って、何が何だか分からないまま病院に連れ戻された。

自らの異質性を実感し、他人にばれることを恐れた。

私は家族にも何一つ告げることなく病院を脱出し、故郷を捨て果てしない復讐の旅路についた。

木々に囲まれた石造りの階段を上り、色褪せているであろう鳥居をくぐって、遥は指定された廃寺の境内に到着した。

外界は寒々しい月夜だというのに、ここはあちこちに立てられた

蠟燭のおかげで朧げな温かい光に満ちていた。
「約束どおり殺しに来たぞ。《起源》！」
遙の声に蠟燭の焰が蔽かに揺れた。

第13話C：発生・Nemesis（後書き）

グダグダと長くなっているので、コンパクトにまとめる術を勉強中。

第14話A：災会 - happy? reunion (前書き)

タイトルは災難 + 再会

第14話A：災会 - happy? reunion

無人の道に靴音が響く。酒が回っているような不揃いのリズムを奏でて、深秋に見合った哀愁を感じさせる。

精神が荒んでしまいそうな冷たい風に身を縮ませながら、榊原明人はさまよっていた。

いつもなら独り言を漏らしながら歩いていそうだが、今はそんな気力も持ち合わせていないようだ。

つい10分前に妹・藍の信頼を始めとして様々なモノを失った彼は、今や浮浪者やホームレスと同格に落ちぶれていた。

築いてきたモノが一瞬で消し飛ぶ。派遣切りや株価大暴落に遭ったこんな気持ちなんだろうな、とまだ見ぬ大人たちの世界に想いを馳せてみたりしている。

ひとまず晩御飯と泊まる所を探さねばならない。この時期、食事を抜いて公園で寝ようものなら黄泉の国への約束手形が発行される可能性は極めて大である。

こういう非常時にネットワークが広いと便利だ。人脈があればなんでもできる。

明人はケータイを取り出した。

「よお親友。俺だ。今家を叩き出されたところなんだが、そっちに泊めてくれないか。理由？ 詳しいことはあとで説明してやるから……………こっそりだな、オツケ。じゃあな」

今のは空元気である。精神状態はそれはそれは陰惨なものだ。

本来なら藍を助けに行くのが道理だろうが、完膚なきまでに打ちひしがれているのである。

泊めてもらえるのはもう確定した。明人は友人に会うまでにテンションを取り戻しつつ、今後の行動をどうするか思索することにした。

何においても最初に藍を奪還しなければならない。

小夜が《起源^{オリジン}》の情報を流したおかげで、遥と分断されてしまいこちらの戦力は皆無だ。このまま行けば簡単にくびり殺されて試合終了。

だいたい同じ作戦会議を前にやった。その時は遥を利用することを思いついたが、今は弄する策もなし。

考えたところで答えなんか出やしなかった。ただの強い人間ならまだしも、相手は常識を超えた未知の存在である。

「力が欲しいな」

渴望が思わず口を突いて出た。それは誰にも届かないはずだったが、闇の中から応える者がいた。

「へえ。そうなんだ」

「誰だ!？」

相槌など予想もしていなかったので慌てて辺りを見回す。無人。どうしようもない状況を打破したいという欲求が幻聴を耳に届けたのかもしれない。だが今は誰かの声に似ていた。

僅かに期待していたこともあり肩を落として前を向き直ると、眼球前数センチの所にナイフがあった。

月光を受けて凶悪に光る刃の向こうでは、見知った顔が笑っていた。

「明人、ひさしぶり」

「あ、綾瀬？」

消滅したはずの綾瀬がそこにいた。復活には相当の時間がかかるだろうと勝手に考えていたのだが、どうやら間違いだっらしい。驚きと嬉しさそして愛しさのあまり飛びついてハグしてやりたくなったが、綾瀬は華が咲いたような笑顔のままでナイフを下ろさない。どうも様子がおかしい。

「どうした？」

「明人、明人っ、あははっ！」

突然笑い出した綾瀬に冷たいモノを感じて咄嗟に身を引いた。案の定、明人の首があつた位置にナイフが白い軌跡を描いた。

「なんで避けるの？ 私がキライなの？」

綾瀬は露骨に嫌な顔をして見上げてきた。

「そういう問題じゃねえ。当たったら死んでたんだぞ」

「えゝ、死んだりしないよ。だって明人は車の爆発も当たらなかつたし、看板も避けたじゃん」

どういう理屈なのだろう。綾瀬理論はつねに常識の遙か上に行く。

「あれをやったのはお前か？」

「うん そだよ」

明人は昼間の謎の襲撃のことを想起した。となると、遙が言う『もやもやした気配の幻象』は綾瀬で、部屋に金属片を投げ込んだのも綾瀬ということになる。

しかし、動機が不明だ。恋の続きを約束して一時死別した綾瀬に襲われる心当たりなど皆無だった。

「なんであんなことを……」

「うーん、お家に帰れないし妹ちゃんにも嫌われた明人には関係ないんじゃないかな」

「それとこれとは関係ないだろ。一体どうしたんだ？」

綾瀬に非があるように振舞いつつ、明人は己の内に原因を探った。まるつきり見当も付かない。

「明人がさあ、ハルカたんなんか家に呼んでさ、いちゃいちゃしてるから。おめめがグリーンアイドモンスター」

綾瀬のほうから答えが示された。女の子は怖いな、と明人は身にしみて感じるのだった。

しかも実際に綾瀬の瞳は茶色から暗い緑に変わっていた。

「とんだ愛憎劇に発展しちまつてるぜ。あと意味が分からん」

明人は驚き呆れるばかりだ。

綾瀬が本気で怒っているのか、じゃれているのか清々しいくらい解釈不能である。太陽みたいな笑顔が、完全な正体不明の怪物の頭

部に見えてしまう。

「ああ、そういえばかわいいリボンだな」

綾瀬はヘアピンの代わりに大きな赤いリボンで髪を結んでいた。風が吹くと蝶がのんびり羽ばたいてとまっているように見える。

ちなみに服は明人の学校の制服。一体どこで何をしていたのやら。「かわいいだつて。いやあんもう、明人ったら殺したくつてたまらないっ！」

「なんでそうなる！」

褒めて正氣に戻るかと思つたら、悪化した。

再びナイフを振ってきたとき、説得は無理だと悟つた。綾瀬は全然脈絡の無い、ますます不可解な存在になってしまったようだ。

こんな危ない子を連れて行つたら友達も迷惑するので、宿泊はふいになるかもしれないと関係ない思考が働く。

そんな中、明人は1つの可能性に辿り着いた。最初に思いつくべきところではあるが。

「分かつた。また幻覚だろ？ ふざけて遊んでるんだな。かわいいヤツめ」

眼のこともあるので自信があつた。

「なら、検証しちゃおうか。明人たらぶらぶ無理心中！」

「まてまてまて、お前ナイフじゃ死ねないだろ。ただの他殺だよそれ」

「……ばーれーたーかー」

徒労だつた。というよりためしてショウテン、する勇気なんか持っちゃいない。思考が全く読めないのが綾瀬の歪んだパーソナリティであると再確認しただけだつた。

どうしてこんな子と付き合ってるんだか、今じゃ理由が浮かばない。

月と星がこの喜劇コメディをケラケラ嗤わらって見ているような気がする。そう思っているならそのありもしない目は腐クランギニョルってる、と叫びたい。これはどちらかというと恐怖劇だ。

殺気が肌を焼き、綾瀬の視線が矢のように刺さる。ほんわかした言動のくせにそれらは本物だ。

もし綾瀬が外套を着ていたら、中から遥の死体が出てきそうなくらいの修羅場なのだ。

明人は背を向けて一目散に駆けた。一応の措置だった。もちろん、逃げ切るなんて不可能なのは承知している。

ひとまず、綾瀬の気が済む方法を考えながら逃げるのだ。

幸い綾瀬の方もすぐに追い詰めるつもりはないように見える。

綾瀬の場合、何を考えてその行動に至っているのか逆に怖いというのもある。明人はネズミをいたぶる猫気分でないことを心の中で祈った。

夜の町に靴音が響く。もはや空虚ではない。生命の躍動を感じさせる力強い疾駆。

明人にとって綾瀬との奇妙な再会がもたらしたのは恐怖だけではなかった。頭の片隅、心の底では彼女を信頼しているのだ。希望もまた確かに存在しているのであった。

第14話B：災会 - happy reunion

明人は闇雲に夜道を逃亡していた。彼を追う靴音はだいぶ前に途絶えていたが、油断は禁物である。なにせ追手はあの綾瀬である。

気がついたら目の前にいました、なんてことはよくあることだろう。

「ひい、ふう……」

明人は息切れを押し殺しながら、偶然通りかかった公園の片隅に身を潜めた。草木が茂って枯葉が人知れず積もっており、隠れるにはお詔え向きだ。

辺りを窺うも街灯に照らされた寂しい遊具群しか確認できない。

BGMは声だけなら好感が持てる秋の虫たちのコーラスだ。

すでに冷えた汗が流れてきた。しばし休憩だ。すっからかんの腹で肌寒い町を疾駆すれば体力の消費も半端じゃない。

息遣いも安定し、冷静になってみると思い出したことがある。

興奮しているほうが空腹や疲労は感じない。休憩はミスかもしれない。なかった。

そんなことより事態は深刻だ。

綾瀬の凶行は今に始まったわけではないが、今回は度を越している。まして性格的に本心が図りがたい。猫が鼠を齧るようなものなのか、じゃれているだけなのか分からない。どっちにしろ殺人未遂はかなり悪質だ。

綾瀬を信用しているし、嫌いになったわけではないが恐怖を感じたのも事実。

「お前何がしたいんだよ……」

明人は深く溜息を付いた。活力を吐いて、代わりに空虚と無力と寂寞を吸い込んだみたいだ。血管に流入した秋の毒が全身に回って、筋肉を弛緩させる。

どつと疲れが押し寄せて、明人は地べたに腰を下ろした。柔らかな枝葉の死体が優しく受け止めてくれた。

両親の死。綾瀬や藍、遙との決別。策を巡らせる小夜。毒はネガティブを生み出し、今まで何とも思わなかった出来事をトラウマに進化させていった。

現実逃避だつてことは百も承知、それでも眠って目覚めたら平穩無事な世界に戻っている、そんな夢を見たい。

「俺はよくやったよ、そろそろ休んでもいいんじゃないか」

深層心^{ダム}に溜めた陰鬱が噴き出す。引き起こされた黒い鉄砲水が全てを飲み込んでいく。粘着質の闇に誘われ^{いざな}、明人は眼を閉じた。

どれくらい時間が経っただろうか。何かが明人の顔に触れた。

「うつ」

悴む身体になお冷たい氷のような感触にビビッて眼を開けたのだが、周囲は真つ暗なままだ。

背後に人の気配がある。息がかかるほど近くににいるそいつの手で目隠しされているのだと分かった。

綾瀬？ もう追いかけっこは終わりなのか。

「だ〜れだ？」

後ろから聞こえたのは紛れも無い藍の声だった。

だが、藍がここにいるわけがない。今頃は小夜に……。

「綾瀬だろ。もう手の内は割れてんだよ」

力無く答えると、藍の声は場違いに明るい調子で返してきた。

「ぶー。正解は『明人のことが大好きで24時間一緒にいたいと思うあまり、トイレのドアをこじ開けようとしたらさすがに怒られた綾瀬ちゃん』でした」

「わかるかつ！」

明人は思いつきり身体を捻ると後ろの人物に覆いかぶさる形で倒れこんだ。

そして勢いがつきすぎたせいで少々乱暴ではあるが、くちびるにキスをした。綾瀬をびっくりさせて黙らせるために考案した最終手段をこんな形で使うことになるとは後悔の至りだった。

「んんっ！？ むぐうつ……！」

やけに暴れる。驚きすぎてパニックになっているのかもしれない。草むらで絡み合う2人を月がおっかなびっくり照らし出した。

「いやあああ！？」

謎の人物が明人を跳ね除けて、草むらから飛び出した。

「うわああっ！？ どういうことだ！？」

キスしていたのは恋人達、ではなく真正銘ラザース兄妹だった。

「お、お、おにいちちゃん！ なにすんのよ！」

直感した。紛れも無く本物の藍が怒鳴り散らしている。明人は本当に言葉を失ったかのように、やわらかい感触の残るくちびるをパクパクさせるだけだった。

「ねえ知ってる？ 近親相姦ってタブーなんだよ」

神出鬼没豆型不快生物みたいな文句が聞こえた方向に、明人の首が粗悪なロボットのような動きで向いた。

「明人顔色悪いよ。病院行けば？」

極悪な天使の笑みを湛えた美少女、もとい綾瀬はどこまでも愉快そうだった。

「お、お、おまつ……！」

脳内が遠心分離機にかけられたようにごちゃ混ぜで、正常な思考などできない。明人は溢れ出るままの感情に身を任せ、足音荒く綾瀬に歩み寄っていく。

明人の烈火の如き憤怒の形相を見て、綾瀬も今度ばかりはやりすぎたと思ったのだろう。怯えて逃げることもせず、ぎゅつと眼を瞑った。

明人は縮こまっている綾瀬の肩を掴むと、今度こそ恋人の震えるくちびるにキスをした。

綾瀬の鼓動も速くなっていくのが分かる。明人自身もそうだった。たつぷり十数秒ほどの口付けを交わした後、明人は一旦離れた。口元を結ぶ透明な架け橋が月灯りを反射してキラリと光ると、やがて途切れた。

どこか切なそうな表情で瞳を潤ませている綾瀬を無言で抱きしめる。

独りよがりの性分は損なものだ。気付かないほどの寂慮を少しずつ蓄積し、最後には呑み込まれてしまいそうになる。だから今は支えて、繋ぎ止めていて欲しかった。

とても温かく自分を迎えてくれる彼女に少しでも疑心を持っていたのが恥ずかしくなった。思わず腕に力が入る。

「ちよつと、いたいよ」

「ごめん。でももうすこし、このままでいさせてくれ」

もそもそと身体を揺らす綾瀬だが、嫌そうには見えない。明人は湿り気のある声で謝り、彼女が楽なように幾分力を弱めた。

「……明人、泣いてるの？」

「泣いてねえ。なんでもねえよ！」

明人は声を荒げたが、水気を払拭することはできなかった。

綾瀬もいつものように馬鹿にするでもなく、ただ悲愴を汲み取って明人の背に手を伸ばした。自分より大きいこの男がひどく小さくて弱弱しくて、愛おしく思えた。

しばらく抱き合っていると明人の方から離れていった。綾瀬は少し残念そうな、それでいて満ち足りた表情を浮かべていた。

「……サンキューな、それとおかえり」

「何それ、カッコつけてんの？」

綾瀬が戻ってきたら最初に言っただろうと思っていた言葉。彼女は予想通りこちらが困る反応を示したわけだが、それがまた嬉しい。「口でくらいカッコつけさせてくれ。俺なんて何もできない人間なんだからさ」

「キスはできるじゃん」

カウンターが鋭い。今思い返して少々気恥ずかしく感じていたところなのだ。

「いや、その、なんだ……」

「ふくん、やっぱり妹ちゃんがいいんだ。このシスコン！」

綾瀬の言葉は藍が敏感に聞き取っていた。恋人達の愛情を垣間見て、誤キスの件は不問にしようと思っていたのに、その一言で再炎上した。

「兄さん、そうなんですか？」

「……そんなわけないだろ」

「なんですかその間は!？」

「シスコンシスコンシスコン……」

冗談がキツすぎたようだ。藍はツーサイドアップの髪を立てて憤っているし、綾瀬はナイフを明人にだけ見えるようにチラつかせている。それ幻覚だよな、信じていいよな？

大丈夫ラヴアーズだし、という根拠のもとそれを片付けると、明人は妹に向き直った。

「すまん。ホントあの時は気が動転してたんだ」

「……もういいです」

藍は半分赦して半分恨んでいるようだった。もう構わない方がいいと思った。

「じゃ、なんでここにいるんだ？」

「小夜ちゃんと家にいたら綾瀬さんが来たの。それで気付いたらここに」

綾瀬を見ると、したり顔で小さく舌を出していた。

「なら目隠しは？」

構わないと誓ったばかりだが、謎が深いので聞きたくなってしまった。藍には我慢してもらおう。

「……あれしたら兄さんが元気になるし仲直りもできるって綾瀬さんが」

「頼まれたくらいでよくやる気になったな」

「私だって兄さんが小夜ちゃんにあんなことするなんて信じられなかったし、何かワケがあるんじゃないかなって」 やはり話さないわけにはいかない。これ以上先延ばしにしても悪影響しかでないだろう。

「もちろんある。長いけど、いいな？」

明人の問いに神妙に頷く藍。明人は深呼吸して、発端となった春の朧月夜の話を始めようとした。

その時、公園の上空に冷たい光を纏う人影が飛来した。それは明人ら3人の姿を見るや、その背に負った光翼を音も無く羽ばたかせた。

レイディアントスコール
「冷光の白雨」

放たれた羽根は光輝く豪雨の如く公園中に降り注ぎ、遊具を両断し、地面に無数の穴を開けていく。

3人の中で襲撃の前兆に気付いた者はおらず、回避もままならぬうちに光に飲み込まれた。

光弾が止み、夜の静けさが戻ると襲撃者は怯む3人の前に降り立った。

「さ、小夜ちゃん……そのカッコは……」

最初に立ち直った藍が、友人の異形への変貌を目の当たりにして驚愕のあまり固まってしまった。

「どうなってんだよ、なっ……」

「もう来ちゃったんだ」

明人と綾瀬も復帰し、小夜とまみえた。

全身を覆えるほどの巨翼を生やした小夜。その姿は天使を彷彿させる。

だが灰色の髪と深紅の双眸までも強調され、どこか墮天使のよう

な雰囲気も醸しだしている。例のゴスロリならさらに際立つのだろう。

「藍ちゃんは返してもらいます」

諸諸の反応を無視して小夜は落ち着いた足取りで歩み寄ってきた。
「まずいな」

小夜を見据えるも何かできるわけでもなかった。

「妹ちゃんと逃げて。私が足止めするから」

綾瀬もいつに無く真剣な面持ちで異形と対峙する。

「綾瀬……気をつけろよ」

明人は突っ立ったままの藍の手を引いて駆け出した。本当は綾瀬の傍に居てやりたかったが、足手まといになると直感し戦略的逃走を選んだのだった。

「綾瀬さん、貴方では無理です。私も同胞を傷つけたくはありません」

外気以上に冷たく、心電図の平行線みたいな声だった。

最初に会った時はもつと普通に喋っていたはず。お仕事モードつてわけね。

綾瀬に恐怖は無かった。明人のためにも負けられない。

「あはっ。そんなのはやってみないとね」 使い古された文句を言ってみる。意外と悪くない気がした。

「そうですね。 静かなる月、聖なる夜光よ、我が手に浄化の刃を」

一瞬で小夜の右肘あたりから先が月光を集めたような淡く透き通る光の長剣に変化した。

「《月宮の天使^{セレナ}》、いきます」

小夜の名乗りが終わると同時にあらかじめ公園内に張った《^{エリクション}虚構の楽園》が展開された。発生した夢幻の闇に2人の少女が呑み込まれた。

第15話：幻闘・illusion battle（前書き）

ちょっと遅くなりました。すみません。

評価をいただいたモト様、PAPAS様、サンクスです。励みになります。

おかげで次はもうちょい早く上げられそう。

第15話：幻闘 - illusion battle

「今宵の特別ゲストはこちら、オーガの皆さん！ 腕力、精力、浅知恵の持ち主です」

闇が晴れるとそこは元の公園だった。

筋骨隆々とした2メートル強の巨人が4体、手に手に棍棒や斧を持ち臨戦態勢にはいつているのを除けば。

「くだらない幻覚。1度ならともかく2度目は通用しない」

小夜は冷徹に状況の分析をし、勝利を確信した。

「くだるわよ。夢幻だって分かっているんだろうけど逃がさないからあなたの精神なんてズタボロだよ」
ハート

どこからともなくハイな綾瀬の声が聞こえてくる。

おそらくは近くにいます。私は何も無い公園のど真ん中で突っ立っているか、寝ているだけ。

グオオオッ！

巨人が下等な唸りを上げて突進してきた。一步が長大故に物凄く早い。

小夜はさつと飛翔してかわし、斜めに急降下しながらタツクルを空振りしたオーガへ斬りかかった。落下のエネルギーに羽ばたきが加わり弾丸のような速度である。

右手の光剣がオーガの背中を斜めに切り裂き、巨体が汚い断末魔と血しぶきを搾り出して果てた。

小夜は地面スレスレを飛ぶと再び空に舞い上がった。速度のため小回りが利かず、急上昇と急降下を繰り返しての攻撃にならざるをえないのだ。

そうはいってもまさに光速の斬撃を鈍重な巨人たちが知覚することとは無く、巨大な肉切れに変わっていった。

「終わりです」

ふわりと着地して小夜は宣言した。身体中血で汚れていたが、呼吸1つ乱れていない。

藍が誘拐された時と同じなら、これで《虚構の樂園》^{エリュシオン}は消えるはずだった。

「……勝負にならないなあ。でもお」

ややあつて姿を見せない綾瀬からの返答があつた。

この異空間を司る《幻象》がこの場にいては、そろそろ幻覚も消えはしないのだろう。

「く、あつ。こ、この痛みは……？　どこから」

突然小夜が小さく悲鳴を上げて、横腹を押さえた。

外傷はない。巨人の血で赤くなつた服がそこにあるだけだ。

理由はどうあれ、敵がこの隙を見逃すはずはなかった。

巨大な物体に体当たりされ、小夜の小柄な身体が吹っ飛ばされた。頭を打つたせいで視界が揺れる。

地面に放り出された彼女に向かって、黒い塊が押し潰そうと落下してくる。

「くっ……」

無我夢中で羽を動かし空へ回避した小夜は、地面に埋もれた謎の物体を確認した。

それは小夜が斬りおとしたオーガ胴体だった。

見れば周囲には骨をチラつかせ、赤黒い体液を滴らせた気味の悪い肉がいくつも浮遊していた。

「死体のリサイクル？　新しいわね」

正体が分かれば、重量を活かした直線的な突撃しかできない肉塊など恐れるに足りない。

「なによクールぶって、出られないくせに」

さして驚いた様子もなく軽くあしらう態度が、綾瀬は気に入らな

かった。

「ふふん、だつたら……おいでませ不浄の肉紐くんたち、生意気な小鳥を捕縛しろ」

綾瀬の一言で巨人だったものが震えだした。よく観察していればそれは腹部だけだということが分かる。

小夜もそれに気づき、警戒しつつ剣を構える。

静寂は大きな肉を素手で引き裂いているような音で破られた。現れたのは言葉通りの無数の肉紐。正式名称オーガの腸管。

人間でさえ7〜9メートルある器官だ。3メートル近い巨体にはどれほど詰まっているのか計り知れない。

「趣味ワル」

感情をあまり出さない小夜も今度は顔をしかめた。一応元は人型をしていたのだ、その腸を引きづり出して操るなど生への冒涇だった。

綾瀬の夢想によって動くそれは、繋がっている他の臓器を引き連れて上空の小夜に向かって伸びた。

「ふっ！ たあっ！」

小夜は絡み付こうとするそれらを微細な翼の動きによる華麗な円舞でかわしながら切り払っていく。

光刃が一振りされる度に詰まった汚物と腐臭を撒き散らして腸管が両断される。

千切れたものは分かれて再び動き出すが、それでも地獄に招かれた天使は圧倒的だった。

しかし勝利は易々と手に入るものでない。

「が……っ」

横腹を襲ったのと同種の痛みが今度は右肩を抉った。右腕と同化した剣の動きが止まる。

さっきから、何なの……

「いやあ！ 離れて、離れてよお」

自らの叫びがこの痛みへの思考を中断させた。

不快感の塊のような肉紐が小夜に群がり、縦横無尽に身体中をのさばる。

ゴムのような感触に不釣り合いな力強さで、剣を動かすのはおろか身じろぎすらままならない。

吐きそうな臭いを放つ怪物の腸が雪色の翼に汚物を擦り込んでくる。

見るの耐えない光景に小夜は気が触れてしまいそうだった。

これは幻覚。そう念じてても汚物の侵食は止まらなかった。

「天使を穢す背徳感ってすごいんだね。それじゃ邪魔なハネハネを取りまーす」

無理やり翼が広げられ、腸管で固定された。肉の十字架に磔にされた憐れな天使の図だった。

ぼきつ、べきつと恐ろしい音がしたかと思うと、脳内が漂白されるような激痛が全身を疾走した。

ぬめる肉蛇に首を動かされて小夜が見たものは無残な光翼。折られて捻じ切られ、かつての純白を真っ赤な血に汚染された翼とむしられ散らされた羽根の織り成す異風景だった。

オーガの巨腕が浮遊し、その暴力的重量が羽を完膚なきまでに破壊しようと執拗に振るわれる。

白銀の羽根が儚く散って小夜の視界を埋める。

翼は完全に折り取られ、眼下の公園に捨てられた。もう肩甲骨のあたりに翼の付け根のみが残るだけだった。

攻撃対象を失った野太い腕が拘束された小夜の身体を豪打するのに時間はかからなかった。

腕だけではない。褐色の脚、生気の失せた気色悪い頭部も寄って集って翳ってくる。

殴られ、蹴られ、時に噛み付かれて、あちこちの骨が折れた。生きたまま火葬されるような苦痛が燃え盛る。

綾瀬の趣味なのか顔は全く攻撃されない。

だが無事なことは必ずしも良いことではなかった。

意志に抗い瞼が裂けんばかりに開かれて、小夜の紅眼に残虐無比な光景を焼き付けるのだった。

安穩な死を望むほどの痛みに苛まれていたが、小夜の精神は崩れる足場にしがみついて離れない。

肉体は何度でも再生するのが《幻象》^{フェノミナ}の特徴だが、心は1つしかない。

《起源》^{オリジン}に願望を伝えた、そのときの分しか持ち合わせていない。精神崩壊、これすなわち《幻象》の死も同義。

崩れ去る寸前の小夜の精神が暴虐の中に見出したのは消滅への覚悟ではなく、藍の笑顔だった。

藍ちゃんは誰からも敬遠される灰髪と紅瞳を持った異形^{わたし}に、分けてのない微笑をくれた。

もう会えないかもしれない。心を壊されて、藍ちゃんを認識すらできなくなる。

「やだよおおお！」

発狂していそうな声で小夜が叫んだ。

死ぬ間際において高速で思考を巡らす。この悪夢を終わらせる方法を模索する。

腸管が小夜のボロ雑巾みたいな身体を持ち上げ、更なる高みへと連れて行く。

地上十数メートルに上り詰めると、グルッと一回転させてそのままの勢いでぐったりとした小夜を地上へ叩き落した。

頬を切り裂くほどに風がぶつかってくる。地表が目前に迫る。

落ちていく身体とは逆に、1つの矛盾が浮上した。

何故、翼から血が出ているのか。

現実ならこれはありえない。この翼に実体などないのだから。

それが頭の片隅に引つかかった途端、落下感と激痛が和らぎ、代わりに脇腹と右肩の痛みが鮮明になってきた。

さらに念じると半透明になった地面の向こうに綾瀬の姿が見え隠れする。

小夜は矛盾への思考に全神経を動員した。

ぼんやりとした地面に墜突する間際、真夏の太陽のごとき裂光が小夜の視界を埋めた。

「……ん？ 《楽園》がおかしい」

《虚構の楽園》に異常を感じ取った綾瀬が小夜が横たわる場所に視線を遣る。

そこにはジャングルジムの棒で肩と脇を貫かれた天使が横たわっている、はずだった。

「いない！ どこに……」

焦って公園を見回す綾瀬。時すでに遅かった。

「はああああ！」

高度な機動力を誇る翼を活かした光剣による鋭利な刺突。

容易く綾瀬を串刺しにすると小夜はそのまま突進し、1本の木に綾瀬を繋ぎとめた。

大きく木が揺れ、葉がさわさわと鳴った。

「ぐぎぎ、げぼっ」

信じられないといった顔で綾瀬が小夜を見る。口は血を流すだけで言葉を紡がない。

「終わりです。輪廻を経て、再発生を待ちなさい」

綾瀬の腹に沈んだ刃が鼓動するように光った。

綾瀬の身体が端のほうから霧のように立ち上り消滅していく。苦しまないようにはやってしたのは、同胞への思いやり故だった。

小夜は浄化が完了すると、綾瀬の墓となった木に背を預けてほとんど倒れるように座り込んだ。

《虚構の樂園》の後遺症が全身がひどい幻視痛に見舞われていた。精神的にもかなり消耗していて、憂鬱このうえない。心身共に傷の回復には通常より時間がかかりそうだ。

「……………」

小夜は深呼吸して歯を食い縛ると2本の金属棒を抜いた。右肩をやられたせいで剣と化した右腕を動かすのが困難を極めた。それで無理に綾瀬を斬ったものだから更に悪化したらしい。

傷は2、3時間あれば塞がるだろうが、今それを待つ余裕はない。この町は住民たちが思うより危険な状態なのだ。そんなところを非力な人間の兄妹がふらふらしていたら何が起こるか知れない。

「行かないと……………まだ話してないことがいっぱい、ある」

立ち上がろうとして、小夜は傷を押さえて俯いた。荒い吐息が白く漂う。

その靄を散らして誰かが目の前に立った。

「苦しそうだね」

「え？」

小夜が頭を上げようとすると、顔を殴られた。後ろに突き飛ばされて、逆戻りになってしまった。

「あははっ、油断したなあ。まさか破られるなんて思ってなかったし。でも二重に掛けといてよかった」

酷薄な笑みを浮かべて綾瀬は負傷している小夜の脇腹に片足を乗せて踏みしめた。

「ぐ……………何でっ、邪魔するの」

歯を食いしばって囁くほどの声で小夜が聞いた。

「アンタは明人を取ろうとするから嫌い」

綾瀬から笑顔が消え、小夜の存在さえ認めないというような眼差しが放たれる。

「そんなことしないっ。だからどいて」

「ダメだよ。アンタが行ったら明人が怖がるでしょ」

「その明ちゃんが、『幻象』になっても、痛つ、いいの」

「……ふふ、あははっ」

綾瀬は小夜の質問に本当に楽しそうに笑った。純粹で無邪気な子供のよな表情で。

「それが、あなたの目的……なの」

「好きな人と永遠に一緒にいたいだけ。誰の差し金か知らないけど、アンタのおかげで明人は悲劇を味わってるから『起源』のお眼鏡にかなうかも。それに妹ちゃんもいるから心配ないよ」

小夜は綾瀬を利用していると思っていたが、それは大きな間違いだったと気付いた。

気分と感情で行動する綾瀬は知ってか知らずか小夜の計画を破綻させていた。

小夜自身も藍との出会いから生まれた自分の変化を感じたときに計画に限界を感じていた。

それを綾瀬が正体不明の怪物に昇華させたことで今プランは破棄された。

「……藍ちゃんを巻き込むな」

計画が消えた空虚な心に残った本音が出た。

小夜は右腕を綾瀬に向けた。月光を纏う手が小夜の意志に従って光の刃に変わる。

綾瀬は驚いてバックステップで距離をとった。

「まだやる気？ ふふっ今度は何を使って責めようかな……」

無邪気を装って思考する邪気の塊。今にも悪魔の空間が再起動しようとしているのが伝わった。

「もう遊びに付き合うつもりはない」

小夜が空いている左手を地に向ける。

「消え去れ！」

見る間に公園の地表が淡い輝きを帯びていき、眩しい奔流となって公園を包んだ。

ガラスの碎けるような音と共に、白光が止む。

「備えあれば……か」

レイディアントスコール

冷光の白雨を最初に放ったのは牽制のためだけではない。

月を司る能力を持つ小夜は夜の間のみそれを利用した能力で浄化を扱うことができた。

羽根が沈んだこの土地は小夜の命令で一挙に浄化され、仕掛けられた《虚構の楽園》も消滅したのだった。

元はといえば浄化という名目で自分を虐めていた奴らを殺戮するために《起源》にもらった力。

復讐はとくに終わった。というよりやめた。

何も生まないし、小夜自身満たされたことがなかったからだ。

最近はおつぱら《起源》とあのお方のために尽力してきたのだが、それももう潮時かもしれない。

小夜は重傷の心を背負つてのろろと立ち上がった。依然として全身は実体無き苦痛に苛まれ、肩と横腹はジクジクと痛んだ。

木立から出てみると、どこにも綾瀬の姿は無かった。逃げられたようだ。

安堵で溜息が漏れた。命の奪い合いでピンと張りつめていた空気がふつと緩む。

冷たいけれど静かで優しい風が公園を吹き抜けた。

「待つてて、いま行くから……」

小夜はとくに限界だった。

でも、私が行かないと誰も《起源》や綾瀬を止められない。

遙を誘導したことが悔やまれたが、もはやどうしようもない。

自分が招いた結果だ。自分でカタをつけてやる。

小夜は弱い弱い足取りで進んでいった。しかしながら、その心は力強い決意に燃えているのだった。

第15話：幻闘 - illusion battle (後書き)

綾瀬のいう二重掛けとは、1度目は精神を切り離して幻覚をかけ、それが破られ肉体に精神が戻ると今度はその2つに影響する幻覚が発生する。というお話。
煩わしいね

第16話：血戦 - bloody battle (前書き)

明人の（本当は小夜の）情報を頼りに《起源》がいるという廃寺に赴いた遙。彼女を待ち受けるモノとは……

第16話：血戦 - bloody battle

苔むした石段を登ると、こんもりと茂った木々の中に使われていない古寺が幽霊のように建っていた。

その周りを囲むように置かれた燭台には蠟燭の灯が揺れ、厳かな雰囲気を作り出している。

《起源》^{オリジン}の好みそうな趣向である。

決戦の舞台に立った遥は獰猛な三つ又の剣《怨疾毒蛇》^{エリニユエス}を構え、仇が現れるのを待っていた。

蠟燭の焰が身を縮ませるように靡き、開け放たれた本堂の奥の闇が動いた。

ワォーン

どこかで野良犬の遠吠えが聞こえた。

じれったいほどゆっくりと時間が流れて、その人物が全貌を明らかにした。

「な……」

遥は驚きを露わにしていた。現実を目の前にしても信じられない。莫迦みたいに口を開け閉めした後、ようやく言葉を吐き出すことができた。

「……………アキラ」

「なんだ、驚きすぎて挨拶もできないのか」

彼女は柔らかな光を放つ蠟燭の側に立った。

細めのジーンズにピチツしたロンT、黒のジャケットを羽織っている。

短めに切られた髪とスラリと伸びた背、多様な武道を嗜んで鍛えられた身体。それでいて女の子らしさを失わない美しい曲線を描く。同性の遥でさえ見惚れてしまいそうかつての友人がそこにいた。

「どうしてこんなところに……？ それより生きて……」

震える声で疑問を口にする遥。数多の感情がひしめき合う中から、友達を刺した感覚が甦ってきそうに怖かった。

そんな遥を見て、アキラは微笑んだ。

「怖がらなくても、ちゃんと生きてる」

「これ、幻……？」

「夢でも幻でもないさ。あたしはちゃんと存在してる」

「っ……来ちゃダメ！」

こちらへ踏み出そうとするアキラに遥が叫んだ。刹那、伸びた銀色の毒牙が暴れた。

《起源》を切り刻めると期待していた《怨疾毒蛇》が腹を立てているようだった。

ギリギリ掠ることもなく、2人は安堵した。

遥は剣を消し去ると自分からアキラに寄っていった。

近づくほどに罪悪感と懐古感が募り、泣き出したくなった。

「ごめん。取り乱して、でも会えて嬉しい」

それは本音だった。

「あたしも」

どちらからともなく身を寄せる。

それは殺しかけ殺されかけた罪の関係が元に戻ろうとしているかのようだった。

「……他のみんなは？」

「……あの時死んだよ。残ったのはあたしだけだ」

「ごめん。私があんな」

謝ると同時にアキラが《幻象》だけど《出来損ない》なんだと気付いた。

そうでなければ《毒蛇》による傷は再発生しても治らず、永劫の苦しみを味わなければならぬから。

「いいよ。あの時遙も正気じゃなかったみたいだし。じゃなきゃあんなことはできない」

「うん……」

いたたまれない気持ちになって遙は目頭が熱くなった。
赦されるわけがないのに、どうしてアキラはこんなにも優しいのだろう。私にはできないな、と遙は感服した。

「そつえば、なんでここに」

銃を乱射しているような、何かがすごい速さで石段を駆け上がってくる音に問いが掻き消される。

遙は考えるより先に、アキラを引っ張って横に飛んだ。

真つ黒な物体に今立っていた参道の石畳が抉られた。

グルルル

大きな犬が戦慄を覚えるような唸りをあげて、2人を睨んでいた。
夜より暗い闇色の毛、血に飢えた紅い眼、犬というより狼のような凶暴性を漂わせる。

姿勢を低くし敵意とナイフのような牙を剥き出しにする様は、命を狩り慣れた殺し屋のものだった。

「なんだコイツは」

「《幻象》……？ でも動物のなんて聞いたことない」

のそりのそりと魔犬がにじり寄ってくる。それに合わせて遙たちも下がっていく。

山の中腹を切り崩して建てた狭い境内なので、すぐに舗装された岩肌で背中がついてしまった。

「アキラ、闘える？」

「はっ、あたしを誰だと思ってるの」

もともと武術に長けているアキラが《幻象》になってさらに身体能力が底上げされているのだ。これほど頼もしいことはなかった。

「そうだよ。でも、あんまり私に近づかないで」

《毒蛇》が勝手に動いて斬ってしまうかもしれない。それだけは絶対にしたくない。

頷きを交わすと2人は左右に散った。

「こつちだ、クソ犬！」

アキラが挑発すると、魔犬が風を切り裂いて飛び掛った。

「やあつ！」

気合の入った掛け声と共に長く力強い脚が中空の魔犬を蹴り上げた。

蹴り上げるとほぼ同時に、アキラは目の前に浮遊する魔犬にストリートを叩き込んだ。

流れるような一連の動きに遥は一瞬見惚れてしまった。それも束の間、魔犬が遥の方へ飛ばされてくる。

「はっ！」

遥はアキラの意図を汲み、大きく踏み込んでそれに銀の刃を叩き込んだ。コートが鋭い風に煽られ音を立てる。

闇色の獣は真つ二つに裂かれ、粘っこい影のようなものを撒き散らせて地面に落ちた。

「やった」

連携が華麗に決まり、遥は素直に喜んだ。

なんだか友情が確認できたみたい、そう思うともっと嬉しく感じられた。

遥がアキラに微笑むと満足げに頷いていたアキラの表情にひびが入った。

「痛ッ!？」

違和感を覚える間もなく、遥は左太ももに何かを打ち込まれ、すぐさまその場を離れた。

去り際に自分の踵のあった所に斬撃を繰り出すと、何か手応えがあった。

「アイツ不死身か……」

2人の目線の先で魔犬は立ち上がった。

遙に真つ二つにされた胴体がどろどろとした影のような物質となつて、地を這い身体を再構築しようと集結していく。

不完全な犬型の身体からは先の切られた鋭い針が飛び出ていて、ドロリとした黒色のモノが滴っていた。

このまま好きにさせるわけにもいかない。

再生途中の怪物に遙が銃弾を浴びせかける。

当たる度に黒い粘液のような身体をよじらせるが、効いている風ではなかった。

遙は弾の無駄だと判断し、銃撃を止めるとアキラのところに左足を踏み出した。作戦を練るなら今しかない。

「いたっ」

「大丈夫か？」

膝をつきそうになった遙を、アキラが支える。

「平気、すぐ治るから。それよりもアイツを」

完全に元に戻った魔犬が水でも浴びてきたみたいに身体を震わせていた。

それが終わると、闇の獣がギラつく双眸で2人を睨みつけた。戦意は衰えず、むしろ傷を負ったことでますます猛り狂っているようだった。

「あたしが引きつける。遙は回復に専念して」

アキラは一方的に言いつけると、本殿の裏手に向かって走った。

そこには蠟燭が無く、どこまでも深い黒が居座っている。

「そっちは危ない」

人間同様、《幻象》は特殊な者を除いて夜目が利かない。しかも五感の鋭い獣相手では極端に不利なフィールドだ。

遙の叫びも虚しくアキラは闇に飛び込んだ。

魔犬は遙と裏手とを見比べるように首を動かした。その微々たる逡巡の後、遙に突進してきた。

これでアキラに無理をさせなくて済む。

遙は安堵しつつも、気を引き締めて魔犬を迎え撃つべく剣を振った。

3つの刃が軌跡を生む。

しかし、黒い怪物は大きく跳躍すると遙を跳び越した。

「く……うあつ！」

無防備な背中を魔爪が切り裂いた。コートの生地と一緒に血が弾け飛ぶ。

魔犬は見向きもせず寺の裏へ回っていった。

「ぎゃあああ！」

すぐにアキラの絶叫が聞こえた。

遙は弾かれたようにその暗がりに入った。足や背中への傷は気にならない。

アキラを助けないと。それしか頭に無かった。

思ったとおり裏は表よりさらに分厚い木の葉の天蓋のせいで何も見えない。

アキラの荒い息遣いが聞こえた。

遙は危険を承知で意識を探知に向けた。

すこし離れた所で動かずにじっとしている点とその周りを徘徊している点が見えた。

「アキラから離れて！」

遙が叫ぶと、その点は遙に突進してきた。

すつと身体をずらすと、脇を死の風が吹き抜けるのを感じた。そこに回し蹴りは放つ。

鋭い蹴りが魔犬を正確に捉え、明るい表側に叩き出した。

「アキラ、早く出て」

遙は一言叫ぶと魔犬を追って表へ躍り出た。立ち直りつつあるドス黒い物体に剣を振り下ろす。

魔犬は滑るように斬撃をかわすと、石畳を叩いた衝撃で痺れてい

る遙に飛び掛った。

遙はすでに影響の無い左手の銃口を向けていた。放たれた3発の鉛弾が回避不能の状態にある魔犬の頭部を穿った。

しかし魔犬は止まらない。刃を取り揃えた強靱な顎が白い首筋を狙う。

遙は咄嗟に左腕を戻してガードした。魔犬の大顎がその腕に喰らい付く。

「ぐうつ、あああああ！」

想像を絶する苦痛に遙は、髪を振り乱して身悶えた。そのせいでバランスを崩して、魔犬に覆い被される形になる。

魔犬の牙は骨にまで届き、さらに噛み砕かんと喰いしぼる。

さらに鎌のような形に変形した前脚が振り回され、コートを裂いて白い肌を刻んだ。

飛び散った血が月光を浴びて白く光る石畳を汚していく。

このままじゃ殺される。

遙は言うことを聞かない身体を無理やり奮い立たせ、無事な右手で無駄に大人しくしている《毒蛇》を魔犬の喉元に突き刺した。

血なのかもよく分からない墨みたいな液体が大量に噴き出して、遙の身体にぶちまけられた。

魔犬は千切れそうな頭部を従えて遙から飛び退いた。

「はあ、はあ……っつ」

使い物にならなくなった腕を庇いながら何とか立ち上がると、遙はみるみる傷が癒えていく魔犬と対峙した。

視界が不安定に揺れ動く。ふとした拍子に気を失いかねない。

コレは使いたくなかった。でもそんなことも言ってられない。身体が動く内に使わないと乗っ取られる。

「罪深き鮮血の虐殺者よ、この身体貸してあげるわ」

遙の囁きで《怨疾毒蛇》の3つの刀身がめっちゃやたら暴れ出した。

それは異形の舞。血に飢えて気が触れた銀色の怪物の狂乱であった。

ズクン、ズクン……

心音が異常に大きく聞こえ、嫌な感覚が身体中に染み渡っていく。忌諱すべきもう1つの自分が歓喜の産声をあげた。同時に遙は意識を手放した。

「……ククッ」

ヒステリックな笑いが血塗れた少女の口から漏れた。

そこに立っていたのはもう人間と呼べるモノではなかった。

痛々しい傷が徐々に塞がっていく。虚ろだった瞳は爛々として禍々しい光に侵蝕されていく。

《復讐の女神》^{ネメシス}の原点。

「ク、ハハハッ！」

闇色の獣でさえ、その変容を感じ取ったらしい。

自らと同じで傷が塞がっていく遙に一瞬恐れを成したものの、遙の哄笑に対抗するように咆哮した。

ダダダダッ

吼え声と共にブラックホールの如き口内から放たれたのは無数の銃弾。魔犬は遙に撃ち込まれた弾を撃ち返していた。

弾のほとんどは乱舞する刃に弾かれたが、数発は遙の身体を貫通した。が、その程度のこと、狂える虐殺者は気にも留めていない。

《女神》は弾が撃ち尽くされるのを待って、それを合図に飛び掛った。踊り狂う蛇の柄を片手で持ち、魔犬へ突き出す。

魔犬は頭部を黒い槍に変え、地面を蹴った。

激突する両者。

槍が《女神》の肩を深々と抉った。のも束の間。

《女神》の配下の銀蛇たちが暴れ、粉々にしていく。

《女神》は満面の笑みで魔犬を地面に叩きつけ、斬り潰した。犬型のモノがミキサーに入れられた果実よろしく粉碎されていく。

最後の力を搾り、全身を変異させた無数の針で殺戮者の身体を貫

くも無意味だった。

バラバラにされ無に帰す魔犬。再生しようと集まる影も、跡形もなく消滅していった。

「また1匹！ ああ、ハハハッ」

《女神》は楽しくて堪らなかった。狂気染みた高笑いを隠そうともしない。

その喜びに同調して《毒蛇》も魔犬の黒い物質で濡れた身を躍らせる。

「遥……？」

アキラが重そうに身体を引きずりながら現れた。

友人へぐりつと首を向ける《女神》。正気などどこにも見当たらない。

刹那、アキラの前に現れる。

「もう1匹みつけた」

血に酔った遥を見て、アキラは恐怖した。

あの日の遥が目の前にいる。

「なんか見たことあるヤツだな。ま、カンケーないけど」

遥が胸の前にうなる剣を構える。

全身の筋肉が強張り、呼吸すら止まる。まさしく蛇に睨まれた蛙のようだ。

あつ。あたし死ぬんだ。そう思ってアキラは目を瞑った。

いつまで経ってもあの劇毒を盛られながら切り刻まれる苦痛はやってこない。即死はこんなものかもしれない。

アキラが恐る恐る瞼を開けると、苦しそうな友人と眼が合った。

胸の数センチ手前で銀色の死刑執行人が前後していた。

「に、逃げて……あき、ら、っ」

遥が消え入りそうな声で囁いた。汗だくになって暴走する本能を懸命に食い止めていた。

アキラは半歩下がってしまった自分を叱りつけた。

「がんばれ、そんなのに負けんな」

アキラの口から自然と応援の言葉が出ていた。

その言葉に遥がゆっくりと頷くと、《毒蛇》が薄れ始めた。時折威勢を取り戻して抵抗するも、遥の意志が勝利した。

完全に剣を消し去ると、遥は倒れて死んだように動かなくなった。だが、その表情は八苦を滅した行者のように穏やかだった。

「……お疲れ、遥」

アキラは包み込むような優しい口調で呟いた。しかしその表情には翳りが見える。

一旦遥から視線を上げて、空を見る。何もしてくれない月が彼女を見つめ返しただけだった。

アキラはもう一度遥の幸せそうな顔を見つめた。何をしても赦してくれそうな人懐っこい表情だ。

アキラは血が滲むほど唇を噛み締めると、遥をおんぶして廃寺を後にした。

暗黒たる石段。ともすれば足元さえおぼつかない。

ポニーテールに纏められた遥の髪が踏み出すたびに揺れていた。

第16話：血戦 - bloody battle (後書き)

えゝ、やっとマトモなバトルが書けました。今までののはバトルって
いうか虐待やら虐殺の類。
巧く書けてますかね？

第17話A：惑志 - puzzled encounter (前書き)

puzzled encounter 惑いの邂逅

第17話A：惑志 - puzzled encounter

立ち止まらない。止まればあの輝く翼で、光の剣で殺される。

明人と藍は緑が多すぎる公園周辺の地区を抜け、市街地の端のほうに来ていた。

夜風にざわめく暗緑の木々は数を減らし、同時に暗い気分も晴れていくようだった。

ちらほら人や車が見られ、なにより街灯同士の間隔がとても狭い。「ちよつ、痛いんだけど」

今までずっと沈黙していた藍が露骨に嫌そうな声を上げた。

最初は綾瀬や小夜についての質問をマシンガンのごとく撃ちまくっていたが、明人が何も答えないでいると押し黙ってしまっていたのだ。

「ああ、すまん」

知らず知らずのうちに力んでいたららしい手を放してやる。

藍はむすつとした何か言いたげな顔で明人を見つめた。

「なんだよ」

「説明して」

人が見受けられるようになって安心したからだろう。また疑問の波が押し寄せてきたらしい。

明人はうんざりして欧米を意識した肩の竦め方をして見せた。

「しらばつくないで！」

仕草に馴染みがある分腹が立ったようで、藍が激昂した。

「はいはい、んで、小夜のことか？」

「それ以外になにあるの」

やはりか。話してやりたいがこのタイミングはマズイ。落ち着いてもらわなければ、致命的な誤解を生みかねない。

「今はダメだ」

何度も繰り返した言葉をまた口にする。

明人としては当然のことを言っているのだが、藍には伝わらなかった。

「ふん、だったら小夜ちゃんに直接聞くから」

そう言って踵を返した藍の肩に素早く手を掛ける。

藍の精一杯の強がりはそので止まってしまう。今の自分が夜一人歩きなどできないことは分かっていて。

サラリとした長い髪が手の甲を撫でて、その向こうに肩越しに振り向いた藍の恨めしそうな眼が現れた。

「ウザイ」

その言葉は辛辣で心外すぎる。

明人は一瞬で沸点に到達しかけた怒りを何とか鎮圧すると、口を開いた。

「死んでもいいのか」

あまり言いたくはなかったが、それが現実になる可能性は十分すぎるほどののだ。

「え……」

死。想像もしていなかった言葉に藍は動揺を隠せない。

「行くなよ、俺じゃ守り切れないんだ」

そこへ更に弱い兄の態度が冷水をかける。

少しクールダウンした頭で考えても何が何だか全然理解できない。それでも兄の心配だけは本物だと分かった。

「……ごめん」

「もう行こう。綾瀬の稼いだ時間を無駄にしたくない」

2人は手を繋いで歩き出した。今さっきとは打って変わって、いたわるようなペースだ。

藍の手は震えていた。手だけではない。全身が凍えたかのように小刻みに振動している。

当然だ。いきなり友達があんな姿で現れて平気なわけがない。

明人はふと取り戻した中学時代の記憶を思い起こした。

小夜は元来心優しい女の子だったと思う。それに少しばかり正義感が強い所があるのを知っているのは、俺しかないだろう。

誰も彼女を相手にしない、というより人間扱いしていなかったからだ。ただ容姿がちよっと変わってるといっただけで陰惨極まるイジメを受けていた。小夜にしても誰か心を許せる友人が欲しいはずだ。なら藍を合わせてもいいかもしれない。小夜の風貌なんか気にしていないようだし。

明人は一瞬そう思ったがすぐに振り払った。

《幻象》になって彼女の中身は変わってしまった。幸せになりたい、とかいうワケのわからない理由で両親を惨殺したのがその証拠だ。

万一藍が命を落としてみる、綾瀬と違って戻ってはこないんだ。

歩くごとに喧騒と街の明かりが大きくなっていく。

一先ず胸を撫で下ろすことはできる。しかし何の解決にもならない。逃避は解決の対岸にある。

藍の疑心は肥大化しているように見える、綾瀬の無事も知れない。どろどろと流動する不安が前向きな思考を呑みこんでいくような気がした。

その時、後ろを向いていた藍が小さく声を出した。途端に辺りが昼間のような明るさに包まれた。

「う、眩し」

振り返ろうとしたら白い烈光が眼を貫いた。

きつく瞑った瞼の向こうで徐々に光が収束していく。

ゆっくりと眼を開けると、今来た道の方向、公園の辺りに光が収まっていくのが見えた。

「何があった」

「知るわけないでしょ」

眼を擦りながら藍が不貞腐れたように言った。

「神の月明かり、というのはどうで？」

不意に背後から聞き覚えのある声がした。

ぎよつとして首を回すと、この場にはいけない人物が立っていた。

「やあやあ榊原さんズじゃあございやせんか。こんばんわ、なんとも不思議な夜でさあね」

その和服の男は何が面白いのか胡散臭い笑いを刻んだ口を吊り上げていた。

「……オリジン」

「あ、九鬼さん」

明人はしまったと感じたが後の祭りだ。

遙の話が頭にこびりついていて、つい口を突いて出てしまった。言い訳にもならない。

さつと藍を見たが動揺していたおかげか気付かなかったようだ。

九鬼も聞こえなかったかのように表情を変えない。それが逆に怖い。

「また出会うとは、縁を感じますねえ。そうでさあ、ちよつくら付き合ってもらえませんかねえ？」

九鬼は和服の袖に引つ込めていた手を出すと、ポンと叩いた。

仕草は珍妙。その実恐ろしい提案。

この男の正体を知っている今、ついていくのが何を意味するのか容易に想像できた。

「いいですよ」

危機感も警戒心も無く、お茶に誘われたくらいの気軽さで藍が返事をしてしまった。

「決まりですねえ。ささ、こっちでございやす」

九鬼は心底嬉しそうにニヤリと笑った。

藍もつられて笑みをこぼす。

人間には無い包容力というか頼れそうな力を無意識に感じているのかもしれない。

この時どうして無理やり手を引いて立ち去らなかったのか。

おそらくは流れに身を任せれば、楽だから。それに悲劇に見舞われ疲れきった少年には、運命のように抗いがたい異質な存在に立ち向かう余力はなかったのだろう。

しかし、その決断にはある種無自覚的な思惑も介在していた。

それは力への渴望。滞ったヘドロのような今の状況を切り開く異形なる力。すなわち《幻象》。

明人はどうにでもなれ、と投げやりな気持ちで2人の背を追った。

きんきやくやく

欣喜雀躍の衝動を必死で押し殺したような、それでいて手放しの

感情を発露させたほくそ笑みが雑踏の中を漂った。彼がそれに気付く様子はつゆと無い。

第17話B：惑志・puzzled encounter

明人はゴクリと唾を飲んだ。周囲の音が遠のいていく。

正面には《起源》がゆったり腰掛け、明人の隣には藍が座らせられている。彼女は困惑したような表情でじっと明人を見つめていた。「どうしやした？ 早くしないと……」

戸惑いが頭を支配する。

この男の心中は窺えない。こんな所に連れ込んだ意図が分からない。

行き交う制服、絶えない談笑とリーズナブルな料理の匂い。

この和気藹々（あいあい）とした何でもないただのファミレス。

「早く決めてよ」

藍が文句を垂れ、早くしないと店員さんが困ってますぜ、と《起源》が急かす。

明人の自制心は吹き飛んだ。

とにかく腹が減っていた。胃袋の中身がマイナスに達していそうな空腹。

明人は少しでも眼を惹いた料理を片っ端から注文していった。

遠慮はいらねえ。なんせ全部この男が持つてくれる。

「す、すごっ……」

「何か、あつたんでござんしょうか」

残された2人は明人の奇行にそれぞれ驚愕していた。

「今宵はどうして外に出てたんで？」

藍は九鬼の質問に答えるのを一瞬躊躇した。

助けを求めるように明人を見たが、怒号の連続注文をした後すぐにテーブルにへばり付いてしまい、役に立たない。

「えっと、お散歩です。月が綺麗だし」

人が良すぎて嘘をつけない藍。ついてはいるが眼が泳いでいたり
と挙動不審だった。

「若いのに2人して素晴らしいご趣味で。いい友達になれそうです
あ」

九鬼の方といえば、感心した様子で何度も頷くと手を差し出し
た。

「よ、よろしくお願いします……？」

よく分からないが藍は一応握手しておいた。

痩せて骨ばっているようで、得体の知れない力強さを持った九鬼
の手。何とも言いがたい気持ちになる感触だった。

「なあに畏まってんですかい。あつしに敬語は不要ですぜ」

「でも、年上ですから」

「気にしない気にしない。見た目は大人、心は子供でさあ」

パロディっぽい発言がますます九鬼の本質を霧に巻く。

「え、っと……」

「はははっ、まあ何でもいいでござんす」

返事に困っている藍を九鬼は笑い飛ばした。

明人は2人の会話を止めようとはせず、ぐったりとテーブルに突
つ伏していた。何か腹に入れるまで動きたくなかった。

店内は遊び帰りの子供連れや学生の醸しだす日曜のオーラが漂っ
ている。

《起源》もこんな人が多いところで何かしようとするのは愚かだ
ろう。

最近ここらで遙の周りで起きたような失踪事件は耳にしない。こ
の中に《幻象》が混じっていることは無い、と決めた。

他の可能性は脳内を埋め尽くすハングリーな意識に食われたらし
く思いつかない。諦めた。

「お待たせしました」

置いてあったコップをぶっ飛ばすくらいの勢いで、脊髄反射的に明人は飛び起きた。

「明人さん？ 店員さんビビってますぜ」

「はっ！？ すいません。背に腹が代えられそうなんで」

言つてて理解に苦しんだ。店員め、なに砂利食ったみたいな顔してやがる。

「いただきます！」

《起源》の相手を藍に一任して、明人はひたすら料理を貪り始めた。

食べ盛りの少年を苦しめたお昼抜き、の飢餓道がようやく終点に着するのだ。

「九鬼さんは普段何してるんですか？ あむ」

藍がフライドポテトをほおばりながら尋ねた。

「実はあつし自称旅人です。お恥ずかしい話、ぶらぶらしてるだけなんです。道中、ボランティアもやってますが」

「なんだかすごいですね」

尊敬の念が籠もった眼差しに九鬼は頭を掻いた。

「そう言っていたけるとうれいすねえ。全ての出会いは一期一会、会う人全てにまごころを。あつしの信条でさあ」

やっぱりこの人は普通と違う。本物の詐欺師に会ったことはないが、九鬼とはまた違うのだと思う。

その認識が良いものなのか悪いものなのかよく分からないが、話していると心地良かった。

しばらくして会話が切れた。だが悪い沈黙ではない。

藍は何の気なしに視線を九鬼の後ろへ移した。

すると離れた席からこちらを見ていた人物とバッチリ眼が合った。

その人は慌てて席に引つ込んだが、赤い大きなリボンがボックスからはみ出ていた。

「綾瀬さん？」

「どこだっ！？ ツンゴ」

独り言だったのにパスタを猛然と飲んでいた明人が物凄い速さで反応した。ついでに麺が喉をせき止めた。

「落ち着いてつてば。ほら、あっちの席に」

指差したらもう明人はいなくなっていた。

恋愛ってスゴいなあ。そう感じた瞬間心に亀裂が走った。

フラッシュバックする悪夢の記憶。瘴気に満ちた倉庫、覆い被さる男達、下腹部の鈍痛。

吐き気が込み上げてきて、藍は口を手で押さえた。

染み出してきた暗い気分を掻き消そうと藍は活気に満ちた店内に眼をやった。

「……っ」

こんな時に限ってカップルの姿がやたら目に付く。みんな幸せそうに笑っている。テーブルの料理も自分のより美味しそうに見える。

藍は気分転換どころか、ますます惨めになって俯いてしまった。

そういえば私、汚い子だったんだ。忘れてたな、もう普通の恋なんて……。

じんわりと視界が潤んでくる。

「大丈夫ですか、顔色がよろしくありませんか？」

ブラックコーヒーを啜っていた九鬼が藍の顔を覗き込んだ。

ほんの少し眼を上げてその顔を見ると、本当に心配そうな九鬼と眼が合った。藍は込み上げる嗚咽を飲み下し、儚い声で呟いた。

「なんでも、ないんです」

「とてもそうには見えませんが……」

「すいませんっ！」

急激に目頭が熱くなるのを感じ、藍は咄嗟に席を離れた。変な眼で見られようが関係なかった。

「綾瀬、いるなら声かけてくれよ。心配してたんだ」

明人は2つ離れたボックスにいた綾瀬を見つけた。

ポツンと1人腰掛けて、ストローでジュースをブクブクさせていた。何故か必死で明人の方を見ないように頑張っているようだ。

「小夜に何かされなかったか？　おい、何とか言えよ」

明人が質問しても無視してくる。

私がんばったよ、褒めて。と擦り寄ってくるといふ理想が崩れていく。

何気なくポンっとリボンで飾られた頭に手を置くと、電気が走ったみたいに綾瀬の身体が跳ねた。

「何だお前」

新しい反応に子供染みた悪戯心を駆り立てられ、何度もポン、ビク、ポン、ビクを繰り返してみた。

「綾瀬は髪で感じる、うむ新発見だ」

「何なんだりよきみみぎゃ」

痺れを切らした綾瀬が大声を上げようとしたが、何を慌てていたのか舌を噛んだようだ。

猫が潰れたみたいな声を出してくねくねと身悶えしているのを見ていると、こちらまで痛みが伝播してきそうだ。

いつも通りかなり変なのだが、明人にとっては微笑ましい光景に見えた。

「元気そうでよかったよ」

「うっ……」

慣れない演技が看破されたような気がして、綾瀬の中には恥ずかしさだけが残った。

「ほらいくぞ？　甘いものとかいくらでも奢ってやるからな」

「ホントー！？　行く行くう」

瞳をキラキラさせてさつと立ち上がる綾瀬。現金、とはちょっと

違う気がした。

「切り替え早えな」

「えゝ、だってね……むふふ」

「おかえりなせえ、明人さん、それに《虚構の樂園》エリュシオン」

戻ってみると笑顔の《起源》だけが待っていた。《起源》だけ。

藍はどこだ。トイレなら問題ない。それ以外なら……。

「あつ、でさあ、だ。久しぶり！」

「でさあ、じゃありやせん。あつしにはれっきとした名前が」

「檻人でしょ？」

「なんか、発音違いやせんか」

2人のしょうもない会話を無視し、藍を探したが見る限り店にいなかった。

明人は黙らせる意味も込めて綾瀬の手を握り、《起源》と向かい合うように座った。

「藍をどこへやった？」

「さあて何処でしょうねえ」

どこ吹く風、と言わんばかりに怒りを孕む質問は流された。

「ふざけんな」

明人が低く唸ると、《起源》は再び卑下た笑みを浮かべた。

「巫山戯けてなんていませんぜ。これはあつしの憶測ですがね、天使に会いに行ったとか」

「てめえ……！」

ガリツと歯が音を立てた。テーブルの上、握った明人の拳が戦慄わなないた。

《起源》は眼を細めてじつとその様子を眺め、そして口を開いた。

「ほおう、殺す力ではなく、護る力が欲しいと」

「はあ？ いらねえよそんなもん」

凶星だ。意地を張って肝を冷やすような読心術に反抗を試みる。
「くつくつ、あつしの力を舐めてもらっちゃあ困りまさあ。はつきりと見えてますぜ、明人さんの願望が」

《起源》の漆黒の双眸が彫りの深い顔の真ん中でギラついた。
魔の提案。差し出されたその未知の力があれば、小夜に対抗できるかもしれない。

しかしその為だけに人間を捨てるのは踏ん切りがつかない。
「まさしく人生を左右する決断でさあ。じつくり……」

言葉からして明人が持つ《幻象》の認識を知っているのだろう。
不意に《起源》は話すのを止め、窓の外に眼を遣った。

そこには晩秋の寒気に身を縮ませて歩く人々しかない。

「どうも囲まれましたね」

「どうということだよ？」

「そのままの意味でさあ。なに、すぐに分かりますよ」

その時台風の日に入ったかのように店内が静まり返った。この場にいる全員がただならぬ気配を感じ取り息を潜めているようだった。窓の外、風景と変わらなかった通行人が、首を捻じ切らんばかりの勢いで店の中を向いた。それは衆目を意に介さず、ガラスに突進してきた。

人々は碎け散るガラスに日常の崩壊を見た。

第17話B：惑志・puzzled encounter（後書き）

予告通り遅れてしまいました、すみません。

忙しすぎてキーボードに手が伸びない今日この頃。それに長らく書いてないと書き方って忘れるんですね。初めて知った。

第18話 A：夜宴 - Walpurgis Night

『もしもし』

ケータイから気力に乏しい、不健康そうな細い声が聞こえた。

「貴様が《天網恢恢^{ワラノス}》か」

『誰アンタ』

質問に男の声がわずかに警戒の色を帯びた。加えて物凄い速さでキーボードを叩くような音も混入してきた。

「アタシも《幻象》だよ。頼みたいことがあるんだが」

『働きたくないでござる。働きたくないでござる』

不快なヤツだ。こんなのが幻象界隈の重要なポストにいるとは。だが、コイツの弱点はすでに我が主から聞いてある。

「そうか、《起源》に職務怠慢だと報告されたいのか」

『なん……だと……！ も、もちつけ！ それはよせ』

慌てる男。けれど、その脇で鳴り続けている音は止まない。

「やってくれるな？」

『まったく、やれやれだぜ。でもお前のエロボディに免じてやってやるよ』

その言葉に肌が粟立った。見られているのか？

『キヨロキヨロしちゃって、キツイ割りにかわいいじゃねえか。上見てみな。漏れはそこだ』

電話を掛けているこの通りにはアーチが架かっており、そこに設置されている監視カメラが自分を捉えていた。

それだけなら何の問題も無いが、何となく邪気を感じた。

いつの間にかカタカタという音は止んでいた。

『やべえ、そのおばーい揉みてえ……！ ちよ、おま、カメラ壊すな。緋森市が泣くぞ』

「黙れ。場所は分かったようだな。ならさっさと市内全域の情報操作を行え」

『へいへい、これだからネタの分からねえヤツは……。ああそうだ、1つ聞くが、カメラを壊したありやなんだ？』

「知りたいか？」

『質問に質問で返すな！。で、まあ漏れを雇って何か仕出かそうとしてるヤツだしな』

「そうか。《忠誠》^{ケルベロス}、アタシの名だよ」

『へえ……。冥府神の犬か。ま、この天空神ことこの漏れが見といてやんよ。好きなだけやるがいいさ』

「ああ、恩に着る」

その後、淡々と内容を指示して、ケータイを切った。

さあ、次の仕事だ。

歩道に面した窓をぶち破って人が次々と飛び込んできた。

それはどこにでもいそうな若者や中年の男なんかである。

彼らはガラスを踏みつけ、威嚇するような目つきで放心状態の客達を睨みまわす。

彼らの内の1人が黒い物体を掲げると、乾いた音と共に天井に風穴が開いた。銃にはサイレンサーが付いているらしい。

「見てんじゃねえぞ、クソが！」

ハンドガンを持った男が興奮で裏返りかけた声で喚き、鉛弾を撃ちまくり始めた。

連続するガラスの崩壊音と、照明が破壊されたことで増していく闇が恐慌を一気に絶頂まで押し上げ、人々に傍若無人な避難を強制した。

我先に出入り口に殺到する人の群れは殺人的だった。押し合い、掻き分け、薙ぎ倒して前進を図る。

子供達は泣き叫び、荒れ狂った罵声が交錯する。

明人は何だかデジャヴだな、と感じながらボックスに収まっていた。そこはまるでシエルターのように隔離された空間。

《起源》は瞑想でもしているように眼を閉じている。綾瀬に至ってはどこから持ってきたか知らないが大きなパフェを抱えて、大混乱をトッピングにそれを堪能している。

「明人ー、はいアーンして」

明人の視線を勘違いしたらしく、にこにこしながらスプーンいっぱいのパフェを差し出してきた。

気乗りはしなかったが食べてみた。甘い甘いクリームが恐ろしいくらい場違いだった。

そんな聖域に乱入してきたのはどこにでもいそうな中年サラリーマン。

おおよそ人間らしくないジャンプ力で座席群を飛び越えて明人らのテーブルに着地した。

「和服男見つけマシター！ 死ねや、コラッ!?」

そいつは懷から拳銃を取り出して、即《起源》の頭に向かって撃った。同時に何故か当人の眉間に穴が空き息絶えた。

中枢を失った身体がバランスを崩し、明人のすぐ横に落ちてきた。ぐしゃり、といやな音が脳に刻まれた。

「騒がしくなつてきやしたね。そろそろ出やすか」

湯船から出るくらいの気楽さで《起源》が席を立つ。

「そだね。ほら、明人も行くよ」

綾瀬に腕を引っ張られて明人もものろと立ち上がる。

濃密な人の死を間近で見たせいで、ひどい目眩が襲ってきた。

「シカトしてんじゃねエよ！」

立ち上がった矢先、近くにいた男が綾瀬に銃を向けた。綾瀬はさも面白そうに微笑んで、男を見つめ返すだけだった。

ひらりひらりと蝶が舞う。運ぶは夢。深遠たる悪夢の奈落。

「ひい!? く、来るなああああ！」

男は狂ったように喚き、ぐるぐると回りながら見えない何かに怯え出した。

「あはっ、怪物ランドにご招待するよ」

秘めた狂気が溢れ出したような綾瀬の表情。明人は肝が冷えるような気がした。

そして男は、仲間に向けて弾倉が空になるまで発砲しはじめた。突然の凶弾に反応できるわけも無く男達は倒れていった。

「……弾弾弾タマタマタマタマタマアア！ 出るよ、出てくれよ、ヒ、ヒヒッ」

カチカチカチカチ

仲間を殺し尽くし、1人残された男は空になった拳銃をこめかみに押し付け、いつまでも引き金を引いていた。

店から逃げた野次馬達はこれくらいの距離なら大丈夫、と遠巻きに事件現場を観察していた。そのまま大抵の者は逃げ出してしまっただが、ここにいる十数人は好奇心故に残っていた。

今銃声は止み、彼らは少し安心したのか、手に手にケータイを持ち、友人知人彼氏彼女と連絡を取ろうと試みていた。

だが、今度も何故かケータイは機能しなかった。

店から飛び出した直後の警察への電話も繋がらなかった。

それは回線が混んでいるものと思っていたが、今試したメールもネットさえもそうだった。

しきりに首をかしげ、居合わせた者同士疑問を投げ掛けあう。皆全て統一された不安顔だ。

人々を繋ぐ万能ツールが使えない。平和ボケした現代人たちを震え上がらせるのには、目の前で起きた彼らの認識で言う強盗事件よりある意味効果的だった。

外部とのつながりが切れた感覚。人々は、徐々に言い知れぬ恐怖を感じ始めた。

そんな彼らに追い討ちを掛けるが如く、真綿にくるまれていくような静寂が何処からともなく広まっていった。心臓の鼓動がやけに大きく速い。

次第に人々は、パラパラと散開していった。

彼らは精神の安らぎを渴望していた。我が家や、別の通りなら得られるかもしれない。魂に植えられた恐れを緩和してくれるかもしれない。

足早に歩きながら、あるいは深海の如き重圧に負けて駆け出しながら、人々はそう思ったことだろう。

既知の世界がグラグラと揺れる。その感覚は言葉にはできない。しかし、誰も彼もが己の魂が縮み上がるのを感じていた。

本能的に怯え、事件に関わることを忌避しようと蠢く人の群れ。その中を逆行していく少女がいた。

彼女は周りの事など意に介した様子も無く、意思の強そうな瞳でじつと前を見つめ現場のレストランに近づいていった。

「片付きましたね。《楽園》、よくやりました」

「大したことない奴らだったね。何者かな？」

血生臭い店で繰り広げられる異能達の会話。

明人はそれを聞き流しながら、混沌に沈みゆく現実を悩ませていた。今までの事が見戯に見えるような、そんな変化が起こりそうな気がした。

一陣の冷やかな風が荒れた店内を吹き抜けた。

3人がふと道路側に目を向けると、そこに人が佇んでいた。外の明かりでその人物の前面は影に覆われ、その全貌は見る事ができない。

「お久しぶりですね。《起源》」

凜とした力強い声が影の人物から響いた。背が高いが、どうやら少女であるようだ。

「……アキラさん、ですか。《出来損ない》のあなたがここで何をしてるんですかい？」

「それはご存知でしょう。だから、足止めに来たんですよ。……立て！ 貴様ら！」

アキラの一喝で空気が震えた。凶弾に倒れた男達が緩慢な動きで身体を起こし始めた。

「コイツら死んでないのかよ」

「そのようでさあね。そっちの頭がなくなっちまった兄貴は違うみたいですが」

明人の問いに、《起源》は思索半分と言った感じで返した。

次にアキラはへたりこんだままの男に近づいた。

「貴様は何をしている？」

「キヒヒヒ、しぬ、ヒッ、クヒッ」

男には何も見えていないようだった。血走った眼球をギョロギョロと動かしながら、一心不乱に銃口を側頭部に叩きつけるだけだ。

「憐れだな」

ポツリと呟くと、アキラは何の躊躇いもなく男の頭部に目にも留まらぬ回し蹴りを喰らわせた。

ぼぐつ、と骨肉が潰れる歪な音がして、男の頭はほとんど粉碎された。頭に詰まっていた物を噴き出して男の身体は崩れた。

アキラがそれを気に留める素振りはなく見られない。ただ、ムゲンの苦しみから解放してやったに過ぎない。

こいつも人間じゃなかった。

予想通りすぎる結果を明人は拒むのもやめて受け入れた。

それよりもアキラという名前は最近どこかで聞いた気がした。

思い出せない。こういう時に限って人の記憶は役に立たないものだ。

「《樂園》、ちよいと頼まれごとをしてくれませんか？」

明人が必死に思い出そうとしている時に、《起源》が綾瀬に囁いた。

「なあに？」

「今襲ってきたみたいな野郎がどれくらいいるか見てきてくれませんか。連中、眼を見ると分かりまさあ。それに報酬は、弾みまさあ」

そこで《起源》は一瞬明人を見た。彼は気付いていない。

「……りょーかい！ ほら、明人行くよ！」

綾瀬は火花が炸裂したかのような特大の笑顔で頷いた。

「ちよつと待て。藍の居場所を聞いてからだ」

綾瀬を止めて明人は《起源》を睨んだ。

「実は彼女、さっき明人さんが聞いてきた時は厠に行ってましてね。ま、あの騒ぎで逃げたとは思うんですがね」

《起源》はこの戦場においてさえ軽口を叩く余裕を崩さない。

その厠云々が嘘かどうかは分からないが、銃声なんかを聞いたら普通は逃げるだろう。トイレの近くに職員用の出入り口もある。

トイレにいたとしても、今連れ出そうとすれば敵の注意を引いてしまう。

「綾瀬は何か知らないのか？」

「え、私は明人しか見てないけど」

綾瀬に聞いても二重の意味に聞こえる言葉しか返ってこなかった。真剣な表情で嘘ではなさそうだし、ここでツツコミを入れられるほどお気楽じゃない。

「……行こう。藍は無事だよ」

不安は残る。だが、藍は大丈夫だという漠然とした感覚があった。命がかかっている時にそんなものを信じるなど自分でも正気とは

思えない。けれども、他に信用のおけるものがない以上は勘さえ十分な動機だ。

今度は明人は綾瀬を引っ張り、台風が過ぎた後のような店を足早に進んだ。

アキラは出て行こうとする2人を横目で見ただけ。他の連中に至っては魂が抜けたようにだらしく突っ立っているだけだった。

「さあて、宴会の後片付けでもしやすかねえ。ま、これが本番とは思ってませんがね」

2人を見送って《起源》は渋い顔で呟き、復活した集団を眺め回した。

第18話B：夜宴 - Walpurgis Night (前書き)

こんにちは、こんばんわ。 GORE改め闇十郎です。
長い間ご無沙汰して本当に申し訳ありません。

何はともあれ幻象 - phenomenon、再開です。

第18話B：夜宴 - Walpurgis Night

「マジかよ。ちょっとイテえけど、オレ死んでねえぞ!？」

「信じらんねえな。あのガキの言ったこと、ホントだったんだな」
口々に驚きと感嘆の呻きを漏らす男達。

綾瀬に狂わされた男が放った銃弾は、どれも心臓や頭といった急所に当たっていた。それでも彼らは起き上がったのだ。

凶弾の痕は癒えず、生々しい傷口からは血を垂れ流しているにも関わらず痛みも大して感じていないようだ。

「ふむ……《幻象》はあの傷じゃもちませんし、《出来損ない》にしては再生が遅い。一体何なんでしょうねえ？」

《起源》は芝居染みた大げさな困り顔をしてアキラを見た。

「答えるわけないでしょう、と言いたい所ですが、主の命令なので教えます」

アキラが戦闘態勢を解いて、場の空気が少し緩んだ。

「自分の発明を自慢したくしょうがない、と。いつまで経っても子供でさあね」

《起源》はお見通しだ、と言わんばかりにせせら笑った。

「それは言えてます」

自然に肯定するアキラ。

「おつ、愚痴ですか？ あつしが聞きますよ。いくらでも」

調子よく喋る《起源》だったが、アキラの態度はつれない。

「結構です。これ以上は不敬だ。拷問されてしまう」

「それはまた物騒な話でさあ。いよいよ壊れてきたんじゃないですか、彼女は？」

「主を悪く言わないでください。あの方だって色々あるんです」

アキラは棘の無い調子で言葉を紡いだ。その表情はどこか悲しげだ。

「それが貴女を彼女の元に留まらせる理由ですか？」

「くだらん」

《起源》の言葉を絶ったアキラには、もう一分の隙も無かった。ただ主から仰せつかった説明を復唱するのみ。

「ほう……長年《幻象》を創ってきましたが、そんなことが起こるとは知らなんだ」

《起源》はやや感心した風に頷くと凶器を構えて自分を取り囲んでいる者たちを見る。しかし、もはや人間ではない彼らの心を窺い知ることはできなかった。

彼らもまた敵意を向けつつも、自分の正体を知ったことで何かしら感じていた。

ある者は一線を超したことをはつきりと理解して戦慄していた。ある者は人間を超えた存在に昇華できたと興奮していた。またある者は話の突飛さについていけず、何か悪い夢でも見ているのだと逃避していた。

考えは万別なもの、彼ら全てに言えるのはもう戻れないということ。

「う、あつ」

言い知れぬ渴きが全身をつつき回していた。米粒大の羽虫にたかられるような不快感。

「オレ、もうがまんできねえっす」

1人の男が進み出てアキラに話しかける。その眼は跳ね回り、どこを向いているのか定かではない。

「そうか」

突き放すような冷淡な返事。焦らせばそれだけ凶暴性を引き出すのを心得ている。

「ソイツ殺るんですよね？　そ、そうすればもらえるんですよね、あ、あの紅い……！」

飢えと乾きに急かされて焦ったような口調で男はまくし立てた。

最後のほうは言葉になっていない。

加えて声に出してしまつたがゆえに不快感の増大を留める術は失われた。

皮膚の下を這いずり回る畸形の幼虫。飢餓感なる名を持つ芋虫どもは、宿主を焦燥の極みへ追い立てる。

「……ああ」

たつぷりと間を空けてからの返事。

「り、りようかいです。オイ！ おまえら！ ぶつ殺せ！」

男は咆哮した。臨界に達した魂の枯渇とそれを潤そうとする欲望が声に乗って流出する。

餓鬼の群れに漂うそれは、彼らを覚醒させていく。同じ痒みに苛まれていた彼らは一も二も無く発起する。

機が熟したと見るやアキラは激励した。

「さあ行け！ 失うものはない。貴様らの前にあるのは」

「イエアアア！」

餓鬼達は何も聞いていなかった。じれっただけのプロパガンダなど耳に入らない。この気味の悪い感覚を紛らわせられれば何でも良かった。

一切の整然さを見せない唸りを上げ、彼らは《起源》に四方八方から雪崩れ込んだ。

「あんたらは哀れですがね」

《起源》がゆっくり腰を落としていく。瞬きの合間に左手には鞘に収まつた日本刀が現れ、右手はその柄を握っていた。

「劣化贗作をほっとくわけにもいかんのでさあ」

知覚不能、神速の居合が放たれる。銀の刃影は雷電を撃ち出し、正面にいた男達と店のもの全てを両断しながらアキラに迫った。

アキラは雷撃が発射される寸前、《起源》に向かって跳躍することとそれをかわしていた。

「はあっ！」

《起源》の目の前に降り立ったアキラは拳を振るう。空気が破裂する音を生むほどの豪打。

「《不壊》^{アイギス}」

けたたましい金属の衝突音と共にアキラの攻撃は見えない何かに防がれた。

防がれるや否やアキラはばく転して距離を取る。胴体を両断せんと引かれた剣戟の軌跡が一字に空を裂いた。

「オラオラオラ！」

そこへ左右に散っていた餓鬼達が拳銃を乱射する。それはどれも《起源》に届く前に中空で弾かれている。

「不可視の盾、か。厄介なものを」

それを殴ったアキラには凄まじい反動が返ってきていた。腕を覆う鈍痛はひびが入ったことの表れか。その痛みもすぐに痺れに変わり、やがてなくなる。《出来損ない》限定の超高速回復の賜物だ。

「正解でさあ。景品はありませんがね」

《起源》が刀を振ると、獣の慟哭のような音と共に刀身が蒼白い光を帯びた。

天井を突き抜けてきた落雷に外野が焼^けき払われる。死の光が収まったとき餓鬼達はほぼ壊滅していた。

火葬場の何倍もの悪臭に包まれながら、《起源》はアキラと向かい合った。

「あらかた片付きましたね」

「……」

アキラは無言で佇んでいた。時間をかけて力を溜めさせた拳句にこの結果。不甲斐ない。

「アキラさん、もうやめませんか？ あっしもね、平和に過ごしたいんでさあ」

「ふざけているのか？ 貴様があらゆる苦しみの元凶だろう」

静かな怒気を発するアキラを前にしても、《起源》は涼しいまま。「彼らは自分で望んでそうなったんで。だいたい貴女も仰ったでし

ようよ。『死にたくない』と」

「ペテン師が。そうなるように仕向けたくせに」

「ははっ、何ですか、その言い分は。まるで《復讐の女神》^{ネメシス}のようじゃあございやせんか」

「貴様……！ 遥まで馬鹿にするのか」

アキラは怒りに震えた。その憤怒に影がごぼごぼと泡立ち、アキラの肢体にまわりついていく。

「させませんぜ！」

鬼気迫るアキラの状態に危険を察知して《起源》が居合いの型をとる。

その時

「ウラアア！」

《起源》の頭上、脆くなった天井を破壊して大柄な刃物を振りかざした餓鬼が強襲してきた。

「む！？」

虚を突かれた《起源》だったが、反応力は段違いだった。集中力を欠いたため雷撃こそ出なかったものの、抜き放った刀で斬り上げ、男を両断する。

大量の血液が降り注ぎ、一瞬視界が奪われる。

それを隙と見たのか血煙の向こうから何かが突撃してくる。

「見えてまさあ！」

「グギヤ！？」

袈裟斬り。またしても血が噴き上がる。

視界を開くと次の相手がもう目の前に来ていた。

刀を反したのでは間に合わない。《不壊》を呼び起こし衝突を防ぐ。

悲鳴が無い。

「がら空きだ！」

《起源》はアキラの声を聞くと同時に、身体が宙を舞うのを感じた。

地面に叩きつけられる前に見たのは、身体から離れ離れになった両足と今まさに叩きつけられんとする魔獣の凶脚だった。

《起源》を上から襲う奴がいなかったら、こちらがギリ貧になつて敗北を喫していただろう。

血による眼くらましと同時に《起源》に向けて半死の男を投げつけ、間髪入れずに足元にあったテーブルの残骸も蹴り飛ばした。

初撃に刀を使えば勝ち、盾なら負けの賭け。アキラはこれにも勝利した。

そして、剣と盾も封じられた《起源》の背面に回りこむ。

怒りに流される者は話にならない。その怒りを力に換え、知略を纏つて制御をし、運も味方につけてこそこの闘い。

平和ボケした日本で魔人揃いの《幻象》相手に戦争してきたアキラの哲学だった。

アキラの脚に固着した影のブレードが《起源》の脚を寸断した。足払いをかけるつもりでもこの状態では切断になる。

アキラはすかさず立ち上がると、凶器そのものである脚を大きく振り上げた。

「でええ、りゃあ！」

一喝。そして《起源》の腹部に全身全霊を込めた踵落しが決まる。はずだった。

しかし、《雷霆》に巻きついてた紫電がまさしく電光石火のスピードでアキラに絡みついた。

それはまるで蛇の捕食、しかも千のいかずちを束ねたような破滅的な電圧。

「ぎやあああああああ！」

身体の水分が蒸発する。肉が焼ける。脳髓が爛れる。悲鳴が爆発する。

消し炭と形容されるような凄惨な姿で崩れるように倒れ伏すアキ

ラ。

舞い踊る雷は周囲に残っていた餓鬼を喰らい尽くして消滅した。

「げほっ……こんな大怪我、何年ぶりでしょうねえ……」

僅かに遅かった反撃。踵落しを完全に殺すことはできず、内臓を損傷したらしい。血反吐が止まらない。脚の出血も酷い。

この状況で軽口を叩けたのは、身体に刻まれた習慣のおかげに他ならない。

《起源》はしばらく半壊した天井を眺め、やがて意識を手放した。

キィ

死の静けさに包まれたファミレスの廃墟に物音1つ。隔離され戦火を逃れた空間から、少女がよろめき出でる。

少女の名は藍。擦れ違う兄妹の片割れ。

彼女もまた関わってしまう。《起源》とアキラの戦闘は回避できたが、次は無い。

夜宴の幕引きはまだなされない。ワルプルギスの夜はまだ始まったばかりなのだから。

第18話C：夜宴 - Walpurgis Night (前書き)

また間が開いてしまいました。 申し訳ない(汗)

第18話C：夜宴・Walpurgis Night

「はあ……」

藍は憂鬱そうに嘆息した。

苦しい。辛い。消し去りたい。

恋愛関係に過敏になる自分が。こんな所で1人になって、さらに
澱んだ暗情の沼に嵌る自分が。そしてなによりあの強姦の憂き目を。
「はあ……何やってんだろ」

何度目かの自問。答えは出そうにない。

忘れて明るく生きる。沈んだままでいる。人前では明るく、1人
のときに泣く。いつそ誰かに相談する。

色々と考えは浮かぶものの、どれも最善とは思えなかった。
きれいに掃除されたお手洗いの鏡を見つめると、見飽きた暗い顔
の自分がいた。

明日はまた学校なのに、こんな調子じゃ迷惑がかかる。

「い……」

無理やり口角を上げてみる実験。ばつかみたい。人来たらどうす
んだろ。

パンパンパパパン

「うわあああ!」「逃げろー!」

銃声のような音が聞こえ、すぐに悲鳴と動乱が捲き起こる。

藍は慌てて個室に逃げ込んだ。鍵を閉めて、耳を澄ませる。

強盗だろうか。でもこんな人の多い時間に?

兄さんたちは、大丈夫かな。ケータイは……バッグに入れたまま
外にある。

考えを巡らせている間にも、外からはまるで戦争でもしてるかの
ような轟音と崩壊音が響いてくる。

その時、照明が落ちた。思わずその場に座り込む。

「いやああ、んむっ」

叫びそうになって慌てて口を紡ぐ。

絶叫の衝動が過ぎると、目をつぶり耳を塞いだ。

真の闇の中、地響きだけが伝わってくる。恐怖は募るのみで、今にも得体の知れない怪物が入ってきそうなおぞましい予感までしてくる始末。

震えが止まらない。目の前の脅威のせいだけではない。暗黒が呼び起こすトラウマ、癒えぬ心傷が鎌首をもたげる。

「っあ、痛い……痛いよ」

嗚咽と共に声が出てしまう。藍はお腹に手をやっている自分に気付いた。

苦悶の幻影に惑わされ、心も身体も呻きを上げる。

「たすけにきて、さよちゃん……！」

藍は知らずその名を呼んだ。

気付くと音は止んでいた。

その間気を失っていたのか、起きていたのか、藍自身定かではない。完全な暗黒では諸感覚が狂ってしまうらしかった。

手探りで鍵を開け、壁伝いにそろそろとドアを目指す。

ノブはすぐに見つかった。

ドアを開けると、ぞっとする瘴気が風に乗って鼻腔を突いてきた。火葬場と錆の濃密な臭いに吐き気が込み上げる。

そんな忌避すべき汚臭に満ちたファミレスは、崩落した天井の穴から降る白い光で照らされあてている。映画に出てくる遺跡に迷い込んだ気さえするほど、異常な光景。

テーブルなどは跡形も無く、壁と柱は半壊。建物自体いつ倒壊してもおかしくなさそうである。

瓦礫の荒野を歩く藍の前に、黒い棒が生えていた。たとえるなら、5つの花弁を広げて月光を浴びる挿花。

たとえる？

それはまさに現実逃避だ。悪臭が立ち込めるているなら、その源も近くにあるのは自明の理。そうであるなら、この花の正体もまた……。

「ひいっ！」

いいかげんにしてよ。やすやすと出てこないでよ。あんなものがその辺に転がってるほど日本はおかしくない！

藍は声にならない喘ぎを発して全力で駆け出した。足場は最悪だが、恐怖で感覚が鋭敏化しているのかこけることは無かった。

途中あれを踏みつけたり、あれに引つかかったりした。その度に硬いのか軟らかいのか分からない肉塊の感触が靴越しに登りつめてくる。

藍は無我夢中で道路に転がり出た。そして、そのまま道端に泣き崩れた。

単に怖いものを見たから。その感情は何の混じりつけも無い純粹であり制御不能。

さつさと立ち上がってこの場を去ることがどれだけ賢明か、藍も痛いほど分かっていた。それなのに膝が笑い転げて言うことを聞かない。

藍は肩を震わせてうずくまっていたが、そう長くはなかった。人の気配が全く無い、異様な静けさに吞まれた無機質な街が自分を取り囲んでいるのに気付いたからだ。

その冷たく突き放すような気配は、藍に自分以外をあてにできないと悟らせるには十分だった。

藍はゆっくりと呼吸を安定させていった。両足で身体を支えることもできる。

まずは兄さんと連絡を取らないといけない。ケータイはガラクタの山に埋もれているが、探しだしてみせる。

すっ、と短く息を吸う。全身に気力が満ちるようだった。そうして改めて廃墟を眺め、自分が座っていた席の場所に目星をつける。

幸いそれほど奥まで行く必要はないようだ。

藍が1歩踏み出そうとしたとき、聞いたことのある曲が流れてきた。話題のアメリカンシンガーの最新曲。それはケータイの着うただった。

藍は臆することなく廃屋の門をくぐった。切れてしまいう前に見つけないといけない、その一心で。

瓦礫の隙間に明滅する光が見え、音も大きくなった。礫片をどかすとバッグ共々ケータイを発見できた。少なくとも兄の亡骸と対面することがなかったのは素直に喜ぶべきだろう。

藍はわき目もふらずに電話に出た。話しながら店を抜ける。

「もしもし」

「怖かったのによくがんばった」

「え……」

聞きなれない男の声に緊張が走った。

ディスプレイに表示されているのは、文字化けしたような奇怪な字面。

「誰なんですか？ どうして私の番号を」

「漏れ？ ネットの神こと《天網恢恢^{ウラノス}》さ。神なんで、知らないことはない」

返事は意味不明。真剣さの欠片もない、人を嘲ることに重きを置く声色だ。

「ふざけないでください。今大変なんです、切りますよ」

「死体ごろごろでもしゝんぱゝいないさー！」

「やめてください」

不快極まる相手だが、何故か切ることができない。異次元の磁力が切らせてくれない。それにこの感覚は以前体験したことがある気がした。

「そんなこと言っているのか？ サツとか呼びたくないわけ？ 今この街の情報網を支配してるのは他でもないこの漏れなんだが？」
「支配って、何の話ですか。もうなんでもいいですから、警察呼ん

てください」

「無理だなあ。サツはアイツが握ってる。今頃ラリってハイになってんじゃねえの、仕事なんかしやしないだろうし」

この街の警察全部が麻薬で汚染されてる。しかも相当重度に。

冗談にもなってる、と藍は思った。

そんなこと警官がするわけないし、できるわけない。

正義の御旗の直下で違法行為が横行していたとなれば、この国始まって以来の大スキャンダル。すぐさま一斉捜査で麻薬は根絶やし、職員は全員検挙されるのが道理。

藍の考えはそんなものだった。至極当前で堅牢な論理だが、この街にはすでに外法の根が張り巡らされているのを藍は知らない。

「わかんねえよな……」

《天網》が更に続けようとしたとき、異変が起きた。

この世のものとは思えない慟哭が夜を震え上がらせた。

夜さえ吃驚させるそれに、人間が耐えうるはずも無い。藍は腰が抜け、その場にへたりこんでしまった。

「何があった？」

毒素の抜けた真面目な声で《天網》が囁いた。

「……わ、わかりません……こっちに来る」

藍の目の前で起きた異常。それは例のレストランの中から噴出した。

凶悪な赤い光が2つ、廃墟の闇に浮かんだかと思うと、ゆらゆらと藍のいる通りへ進み始めた。

藍は気圧されて後退していた。間の抜けた光景だが、動けなくなるより幾分かマシだと思った。

月下に立つ異貌。三次元に現れた影。赤くギラつく双眸以外は全てが黒に包まれているが、それは人型をしていた。

「じつとしてる。そいつを刺激するな」

ケータイからは切羽詰った指示が聞こえる。

藍は素直に従った。冷や汗を滲ませながら影が去るのをじっと待

つことにした。しかし、影は立ち尽くしたまま動く気配が無い。

何もかもが静止しているこの場所では絶対的な時間の概念さえ狂い、体感時間は遅く長くなっていく。

そのとき、風が吹いた。冷たい夜気と一緒に焦げついた人の脂肪の臭いがやってきた。

「うっ」

反射的に嗚咽が漏れてしまう。それは小さな小さなものだったが、後悔してももう遅かった。

影が目の前にいた。いつ動いたのか分からなかった。少なくとも10メートルは離れていたのに。

影をぼろのように纏ったそれが、見下ろしてくる。巨大な壁が押し潰してきているような圧迫感。

凍りついたような沈黙の間を異臭が抜けていく。臭いは底知れない影の中から漂ってきていた。

「逃げる！」

《天網》の声と同時に動いたのは、影のほうだった。

影が霧消する。生まれたままの格好で、長身の少女が立っていた。一瞬の間をおいて少女が藍の方に倒れてきた。

支えようとしたのか、我が身を護ろうとしたのか自分でも分からなかったが、伸ばした藍の両手は虚しく空を突いた。

少女は膝を着き、自力で身体を支えた。

再びの沈黙。

なんと声をかけていいのか、藍には見当もつかなかった。

ただ阿呆みたいに少女の裸体を見ていた。

鍛えているのがすぐに分かる張りのある肢体。それでいて女性的な魅力は失われておらず、むしろさらに強調されているといったもいい。月明かりを反射してつやつや光る肌は、触れてみたいと思わ

せてくる。

それゆえか、藍は行き場をなくした手を少女の肩に乗せてみた。もちろん、声をかけるきっかけ作りも兼ねて。

「あの……」

思ったとおりのすべすべだった。それは良かったが、次の瞬間手のひらに異様な感触が生じる。触れている肩の皮膚下で何かが蠢いたのだ。

とつさに手を離して後ずさると、少女と目が合った。

「気味が悪いだろう……見ないでくれ……」

かすれた声で囁かれて、藍は申し訳なくいたたまれなくなった。

「そんなことないです！」

「っ!？」

藍は名も知らぬ少女に抱きついていた。

背中に回した腕にも、押し当てた胸にも得体の知れない蟲が蠕動するような感触が纏わりつく。それは嫌悪以外の何者でも無かったが、藍は必死に耐えた。

こういうのは偽善って言うのかな。ふとそんな思いがよぎった。

驚いて離れてしまったことを取り消したいと思わなかったわけではない。他の理由は、と聞かれても答えられない。

否、仲間意識。そういう答えがある。

この子も同じなんじゃないだろうか。

楽しいひとときを潰された者同士。凄惨な事件に巻き込まれた仲間。被害者というカテゴリー。

すなわち、傷の舐めあいがしたいだけ。悲劇の内容は関係ない。

巻き込まれたという枠があるということに意味がある。

「ありがとう、でも無理するな。もう大丈夫だから」

少女 アキラはそっと離れようとした。それでも藍は追いつがる。離れたくないかのように。

アキラは己の肌に水滴が落ちているのを感じた。

泣いているのか。

騒ぎを起こした張本人を慰めようとしてくれた彼女こそ本当に慰めを欲している。

なんとなくアキラはそう理解した。

異能を駆使し、《幻象》という人にあらざるものに近づくほどに人の痛み、気持ちが分からなくなっていく。

特にアキラは血霞の戦場にいた。心身共々痛み鈍感にならなければやっていけない。己が爪牙にかかる獲物の気持ちを考えていれば、敗北を喫することになる。

だから今のような感情を抱くことは珍しい。重傷を負った今だからこそ命ある人間に近づいたということなのだろう。

アキラは無言で藍を抱きしめた。

まだ『呼び鈴』は鳴っていない。気持ちだけでも人間でいられる時間は希少だ。そうだというのに……

「藍ちゃんから離れなさい！」

静寂を破る敵意に満ちた声。アキラには聞き覚えがあつた。

「……《月宮の天使^{セレナ}》」

名残惜しげに藍を放して、数メートル離れた所に立つ白蠟の少女と対峙する。

夜風に踊る灰白色の髪。その肌は陶器の如く白光り、包む衣は夜の黒。ただ意志に燃える深紅の瞳が、人形のような彼女を人間然とさせていた。

「藍ちゃんこつちに！ 急いで」

「え……？」

藍は戸惑っているようだった。小夜が来たのは喜ばしいことのようにだが、何をそんなに慌てているのか分かっていない。

「行ってやれ。彼女が待ってる」

アキラは背中を押してやった。

昔大事にしていた武人の矜持というやつだ。大儀は忠誠であるが、

命令にない戦闘は私闘。ゆえに無関係、否、人間の感情を多少なりとも思い出させてくれた少女を巻き込むのはアキラの流儀に反した。「悪いけど、人質にするんだと思っていたわ」

藍を背に庇い、小夜は少し意外そうに言った。

「そこまで堕ちてはいないさ。ところで、お前がその子を護るというのは叛意の表れか。もしそうなら、捨て置けないな」

アキラの全身を再び影が覆い尽くす。恥ずかしげもなく晒していた素肌は、闇の黒に染まる。

それは防具であり武器。彼女と同体をなす、暗き餓狼の変化した姿である。

小夜も即座に戦闘態勢をとる。闇を照らす一对の光翼が背に顕現する。

アキラは、戦意に満ちた小夜の顔に走った一縷の苦悩を見逃さなかった。

今の話を出されたのが原因であるのは間違いなさそうである。

「今夜は見逃してやる」

理由は3つ。第一に万全の状態ではない。

《起源》の雷撃は尋常の破壊力ではなかった。骨から内臓、筋肉、神経に至るまで全てがイカれている。今も外見を取り繕っているだけで、それらの修復が急ピッチで行われている。

そんな状態で戦って勝利が得られるほど、小夜は甘い相手ではないはずだと感じていた。

第二は藍についてだ。

その時、暴力的なほどの凶念の奔流が死んだような街を駆け巡った。常人でも不吉な何かを感じざるを得ない魔性の波動。

それが第三の理由である。彼女が、主が呼びなのだ。

自身の怪我など気にしてはいけない。《忠誠》たる彼女は、命令に対する絶対服従こそが最優先事項なのだ。

アキラは近くの背の低い建物に飛び乗り、そこから疾風さながらの速度でビル群を渡って夜の底に飛び去った。

取り残された藍と小夜は、しばらくアキラが消えた方をぼんやりと眺めていた。

「オーケー、話を整理しようか。まず……」

だんまりを決め込んでいた藍のケータイが意地の悪い声で何やら言いかけたので、藍は瞬時に電源を切った。

隠された真実に向かい合う時が、ついにやってきた。真実を掴めば変化は避けられない。破滅か救済、いずれかの未来が訪れる。

死線を踏み越える恐怖と答えを見出す期待とで震えが止まらない。

藍は重たい唇から、決意に揺れる言葉を紡いだ。

「……小夜ちゃん、話してくれるよね」

第18話C：夜宴 - Walpurgis Night (後書き)

ちよつと長かったですかね。 にはともあれ夜宴はお開きです。
しかしながら夜はまだまだ続きます。 濃いですね、ホントに。

第19話：五蛇 - subordinate swamp (前書き)

ワルブルギスの夜、遙サイドの物語。

第19話：五蛇 - subordinate swamp

「ん……？」

混濁した意識の中、遙は目を覚ました。

背中に感じるのはふかふかとしたベッドの感触。忌むべき力を使い、体力を根こそぎ奪われた身体に安らぎを与えてくれる。

ここ、どこだろう。アキラは？

周りを見ようとしたら首が動かなかった。

力が入らないわけじゃない。感覚は無いが何かで拘束されているようだ。

戸惑う遙のもとに薰り高い茶葉の匂いが漂ってきた。

アキラが紅茶を淹れているのかと思ったが、彼女の好みではないはずだ。遙も特に好きというわけではない。

「やつと、起きたのね」

冷たい声が聞こえた。どこかで聞いたことがあるように思えた。

そうする許可が降りたように、遙は声のしたほうに顔を向けることができた。

窓辺に置かれたガラスの円卓が月明かりを受けて静かに光っていた。その光を呑み込むようにセットの椅子に真っ黒の人影が腰掛けしていた。

「……私を覚えているかしら？」

細い指でカップを置いて、黒衣が向き直る。

白金の髪は夜天から注ぐ天然灯に輝き、蒼空の瞳は魔的な魅力を投げ掛ける。幼い容姿の女の子。

通常幼子が持ち得る無垢という概念は、立ち上る邪気としか言いようのないものに押しつぶされていた。

悪意で彩られた悪魔の子。

「死んだはず、そう思ってるでしょ？ ……低脳。この私が、アレくらいで滅ぶか！」

怒気の発露を我慢していたのだろう。無機質な仮面は一気に砕け散った。

遥は思いつきり身体を起こして立ち上がろうとした。一刻も早くこの悪夢めいた存在を消し去りたかった。

途中まで起きかけた身体、しかし物凄い力で引き戻され、次は縫い付けられたような感覚が全身を包む。

視界が暗黒に落ちた。否、そこには邪悪な光を灯す赤眸が2つ。遥の目の前で形を成したのは、ついさっき滅ぼした魔犬の寸分違

わぬ頭部であった。

牙を打ち鳴らし、いつでも噛み砕けるぞ、と威嚇する魔犬。首から下は実体を有する影となり、遥の身体を包み込んでベッドに縛り付けていた。

「ああ、一思いに殺してやりたいわ」

《魔姫》の声と共に魔犬の頭部が退いた。

それでも見えるものは赤と黒。深淵の娘、彼女の持つ黒鉄の大鎌とそれを飾る血の宝珠。

「なら、早くしなさいよ！」

「言われなくても」

闇の鋼が音をも殺し、弧の軌跡を描いて遥の喉元に迫った。

刈られる。我知らず眼を瞑る。

「……あ、イイコ思いついたわ」

鎌刃は停止していた。元から殺すつもりは無かったようだが、そこに慈悲などあるわけも無い。

《魔姫》はわざとらしく手を打つと、嗜虐の微笑を浮かべた。

「結局殺せないんだ。何もできない箱入りお嬢さん？」

「……ゴミクズは自分が《幻象》だってことも忘れたのかしら？
すぐ生き返るんだもの、死ぬことに意味なんてないわ」

悔し紛れの悪態を吐き、《魔姫》を見る。薄皮一枚隔てて、激情が煮えたぎっているのが分かる。短絡な部分も変わらないようだ。

「ゴミクズはお前よ！」

遙は脇に立つ《魔姫》に罵声を浴びせ、そのまま舌を噛み切ろうと歯を下す。

《幻象》は死を超越する。たとえ今この肉体が滅んでも、場所を変え再び己が血肉が生成される。

逆に言えば、今死ねば《魔姫》の拘束から逃れられる。態勢を整え、今度はこちらから仕掛けることもできる。

「自殺しよう、そう思ったんでしょ？」

お見通しよ、と暗青の瞳を三日月のように歪めて小さな悪神が嗤った。

遙の口には例の魔犬の一部が突っ込まれ、それに阻まれ歯は舌に届かない。

膨らませた風船の空気が逆流して口の中で暴れ回っているような、そんな感触。

「ざまあないわ。それより、この私を侮辱した罪は重いわよ」

鎌の刃に埋められた深紅の宝玉が一斉に輝きだした。それは一般人なら気が触れてしまいそんな鋭利な紅い狂光を発し、やがて止んだ。

身体に異常は感じられない。もっとも、《魔姫》の力を鑑みれば精神汚染の類である方が有力だが、その兆しも無い。

「フフ、なにビビってるの。これはただの呼び鈴」

「……呼び鈴？」

「もちろん、下僕を呼ぶものよ」

不吉な微笑を見ていると、おかしくなりそうだった。

「お呼びでしょうか、我が主」

その声が心臓に冷水を注いだ。それは勢いよく全身を駆け巡り、遙を凍えさせる。

ドアが開き、血の臭いが流れ込んできた。

「その格好は何。私の前でそんな醜態を晒すのかしら……いや、後にしよう。その虫けらに顔見せなさい」

死臭纏う少女が遥を見下ろす位置に来た。

ボロを纏うように影を身体に巻きつけた長身。今殺し合いをしてきたような格好と疲労と罪悪感をないまぜにした悲しげな表情。

それがどんなに異様でも彼女は遥にとって紛うことなき友達の一人である。

「……アキラ」

凶兆の予感は的中した。

果てしない絶望から泣きそうな声で遥がその名を呼ぶ。アキラもまた沈痛な面持ちを強める。

「ああ、そんな名前があつたわね。昔。今は《忠誠^{ケルベロス}》っていうの。それこそ犬のように忠実よ」

この暗鬱なる空間において1人だけ楽しそうな《魔姫》は、再び椅子に腰掛け脚を組んだ。

歪みきつた心は未だ満足することなく、新たな苦しみを味あわせんがため駆動していた。

「よく見たら靴が汚れてるじゃない。ほら『アキラ』、綺麗にしないさい」

「……はい、我が主」

女王然と君臨する《魔姫》の前にアキラは跪き、黒い光沢のある靴に舌を這わせ始めた。

「な、なにしてるの……!？」

眼を背けることもできず、遥は歪んだ主従を目に焼き付けられるしかなかった。

「ふふ、お分かり？ 《冥界の柘榴》に手を出したが最後、身も心も全部私のものなんだから。あ、もういいわよ《忠誠》。靴が汚れるから」

「ひ、どい……なんでこんな、こと……」

心に風穴を開けられ、そこから一切の善い感情が吸い取られてい

るようだった。

遙の瞳から流れた涙が、月光に光っていた。

「屈服の涙も見れたし、そろそろ私のものになってもらおうかな」

《魔姫》が遙の右に立った。その白く小さな手からは、ちゃらちゃらと音を立てておもちゃのような悪魔の紅玉が溢れ出していた。後ろに控えていたアキラは一瞬《魔姫》に手を伸ばしかけたが、瞼とともに静かにその手を下ろした。

「イヤア！ アキラ！ 助けて！」

もがいてももがいても魔犬の拘束は外れない。

「無駄よ無駄。うーん、そうね。意識があるうちに言っときましようか」

一瞬の間隙。それこそ悪性の極みだった。

「その犬の手綱、アキラが持っているのよ」

そう言つと《魔姫》は一步下がって、アキラを前に出させた。

遙は戦慄も覚えたがその胸には希望が宿った。

「アキラ、お願い。これを解いて」

遙の声にアキラは眼を開けた。戸惑いを秘めた瞳が薄闇の部屋を泳ぐ。

「待つのは嫌いよ。あと10秒で決めなさい。10、9……」

産み落とされる隷属へのカウント。

「こつちを見てアキラ」

落ち着きのある静かな声にふたりの視線が交錯する。ぶつかり合い、せめぎあうと友情と呪縛。

「……信じてる。だから私も信じて」

「1、0……友愛なんて、無かったわね」

魔犬は遙にのしかかっていた。そこを退く気などさらさらないようだ。

遙の身体は拒絶された絶望からか弛緩しており、《魔姫》がその口を開かせるのは簡単なことだった。

「さ、失望を抱いて暗き淵に沈みなさい……ん」

その時《魔姫》は気付いた。遙の左腕だけが、解放されていることに。

「そつちこそ」

瞬時に具現化する三つ首の銀蛇。

《魔姫》も回避に移ったものの、そのスピードは《怨疾毒蛇》エリニユエスに敵うべくもなかった。

しかし切っ先が心臓を刺し貫こうと迫るなか、《魔姫》は笑った。三日月に眼と口を曲げた冷笑。悪魔はあくまで悲劇の幕を降ろすつもりはないようだ。

遙に届いたのは刀身が骨肉を裂く感覚と押し殺した友人の悲鳴だけだった。

アキラは《魔姫》を庇う形で、自らの背に3本の凶刃を受け止めていた。慌てて引き抜こうとする遙だったが、アキラの背中から沸き立った魔犬の影に刀が押さえられてしまう。

無理に動かそうとするとアキラを傷つけてしまう。しかし超回復を誇る魔犬を振り払うにはそれが必要だ。

逡巡。

その隙に《魔姫》が躍り出た。小柄な体躯に不釣り合いの大鎌を振り上げ、一気に振り下ろす。

遙の左腕は床に転がった。

絶叫を吐き出すために無意識に開いた口にすぐさま《魔姫》の手が滑り込み、口の中に《冥界の柘榴》を流し込んだ。

血を甘くしたような恐ろしい味を認識するとすぐ、魔薬成分が粘膜に吸収された。

総身の神経が焼き切れたような苛烈な電流が駆け巡る。一度に大量摂取したせいか快感などなく、単なる苦痛の津波でしかない。

自分ではどうしようもない激しい痙攣が全身を襲い、遙の意識は

消し飛んだ。

「まったく非道よね。友達ってなんなのかしら」

悪魔が嘯く。

先の反逆と結末は出来レースだったと。

その呟きにアキラは沈黙する。

「だんまりは面白くないからやめて。裏切りの罪咎を噛み締めて、苦しむ声を聞かせてよ」

どうしようもない壞人の性。2年の間にさらに歪んできている。

「あたしは友達をこんな目に合わせてまで生きていたくない。でも死ねない。あなたも殺してしまいたい、でも」

応える言葉は明らかな殺意と憎悪、そして悔恨の塊。

主従関係を無視した言動にも、《魔姫》は満足そうに先を促す。

「でも？」

「できない。あなたが消えたら、あたしは生き地獄に堕ちる」

「その通り。あなたが消えたら、私は滅びる。最後まで付き合ってもらうわ、一緒に死ぬまでね」

異常な絆を確認する2人。

忠誠があるわけでもないのに《忠誠》。冥府の王であるのに生にしがみつく《墜落の魔姫》。

永劫不死の辛苦を中和するため、生きて食うため、絡み合うしかなかったカドウケウス。

「それで、《起源》は仕留められたのかしら？」

「重傷を負わせましたが、反撃にあって失敗しました。それに《天使》が裏切り、呼び鈴のこともありましたので追撃は断念しました」

2人は一瞬の間を置いて、いつもどおりの状態に戻っていた。

「あいつも私の魔薬が効いてるはず。裏切るなんて」

「ですが事実です」

《魔姫》の顔に困惑がよぎる。それを拭うようにアキラは語気を強めた。

「そうね。まあ、あいつらはこれに任せようかな。安定したら試運
転兼ねて殺してやる」

《魔姫》はベッドに横たわる新たな手駒を見てほくそ笑んだ。

第19話：五蛇 - subordinate swamp (後書き)

呆れるくらい悲劇吸引体質の人が多い。

沼でのたくる三つ首の蛇と二股の蛇。実は皆等しく隷属しているのかもしれない。

第20話A：結絆・bound by bond（前書き）

お待ちかねの小夜・藍編です。

第20話A：結絆 - b o u n d b y b o n d

「あの夜、藍ちゃんが犯されたのは私のせいなんです。私がそうするように命令したから」

凍結した街に1つの告白が生み落とされた。

でも、あれはそそのかされて……。そんな言い訳もやろうと思えばできる。

それでも結局、《魔姫》の与えてくれるご褒美に眼が眩んだ自分がやったことなのだ。

俯いている小夜に藍の反応は窺えない。それは幸せと呼べたかもしれなかったが、続く沈黙は終焉を告げている気がした。

藍に突き放されれば終わりだ。

《魔姫》の元へも帰れない。

いや彼女ならあるいは……。優しく包み込んでくれた悪魔の魅力は未だ小夜の内奥にくすぶっていた。

藍ちゃんの前でなんて不謹慎なんだろう。

胸にぞつとする冷気が噴き出し、ズタズタに切り裂いてしまったい衝動が頭を巡った。

「それに藍ちゃんのお母さんとお父さんも手にかけてしまった。それを綾瀬に隠蔽させたのも私」

何か言ったたびに藍から離れていつている気がする。それがあまりにも辛く苦しく、涙が異常に白い頬を伝っていった。

「どんな罰も受けます。私を憎んで、恨んで、殺してください。私死ねないから、生き返ってもまた殺して。死ぬまで赦さないで」

何を言っているんだろう。こんなの誰も喜ばないのに。

小夜はあまりの痛みに耐え切れず、泣き崩れてしまった。

「ああっ、ごめんなさい。泣きたいのは藍ちゃんなのに、あああ！ 藍ちゃんなんて呼んじゃダメ！ どうしたらいいの。早く殺して

ください」

小夜は正体をなくして悶えた。

身を裂く罪悪感。告白の先にある破滅か救済の未来。慈悲深い魔の包容。

小夜は圧死させんと肥大化していく軋轢からの逃げ道を模索し始めた。同時に逃げることしかできない自分の矮弱に目を向けることになり、余計に苦痛が増幅していく。

「顔上げて、こっち見てよ」

その時、だんまりを続けていた藍が口を利いた。

いかなる感情からか、その声には起伏が皆無だった。

「ごめんなさいもうしません赦し、うあ私は何を言って赦して、赦さないでください！」

小夜はその声を恐れ、藍を見ようとしめない。

「こっち向きなさい」

滑稽ともとれる狂態に、藍は苛立ち混じりで口調を強めた。

それでようやく小夜は顔を上げた。不憫なくらい涙でぐしゃぐしゃだ。

濡れた瞳の先には人型の暗黒が立っていた。明るい月を背負っているせいで藍は影に沈んでいた。

「ねえ、言ってる割に謝る気があるようには見えないんだけど。狂ったふりして逃げてない？　そういうの精神鑑定狙いの犯罪者っぽいよ」

普段の藍からかけ離れた容赦のない言葉に小夜は震え上がったが、気付いたこともある。

どんな罰も進んで受けると言いながら自己保身のために異常をきたした演技を続けるという大きすぎる矛盾だ。

「わ、私は……何をしたら」

人間とは思えない圧力に息を詰まらせて、小夜が喘ぐように聞いた。

返答はない。まるで自分で考えろとも言わんばかりに藍は押し

黙っている。少なくとも小夜はそう感じた。

そんな強迫観念が身を焦がし、罪滅ぼしても何でもいいから藍の傍に居たいという小夜の邪な望みを崩していく。

脳裏で悪魔が人懐っこく微笑んだ。

「……………っ」

一緒にいたいなんて言えない。

小夜はよろよろと立ち上がると、藍に背を向けた。滴った涙がアスファルトをさらに黒く染めた。

羽を広げる。心を映したように弱弱い。それでも彼女の元へ飛ぶことはできるはずだ。

「……………さよなら……………」

トン、と地面を蹴るとふわりと小夜の身体が浮き上がった。ここなら顔が見える。これが最後と、小夜は藍を顧みた。

藍もまた小夜を見上げていた。怒りや憎しみが見当たらない、別離の悲愴をさらけだした潤んだ目をしていた。

疑問と熱い感情が込み上げ、視界がぼやけた。

次の瞬間、小夜は手を引かれ藍の胸に抱かれていた。

「ごめんね。酷いこと言っで。だから行かないで、小夜ちゃん」

「……………どうしてなの」

自分にこの抱擁を受け取る資格はないと思ったが、振り払うだけの勇気もなかった。

「だって自分が赦せないよ。気付いてたのに、関係が壊れるのが怖くて言い出せなかった。それでこんなことに」

藍は自責していた。切り出せず、あまつさえ敵のもたらした展開で小夜に言わせてしまったことを。

「ホント意味がわかんない。おかしいよ。優しすぎるよ」
憎まれ口。

昔明ちゃんに似たようなことを言った気がする。この兄妹には救

われっぱなしだ。

「大切なものを犯して殺したんだよ。そんな私が……何の咎めもなくいてもいいわけない」

「咎めが欲しいの？　ならこんな汚い私と一緒に居てくれることだよ。天使さま」

曇りない冷天名月の下、傷だらけの少女達はようやく抱きしめあうことができた。

2人はしばらくの間、抱擁を交わし涙を流していた。溜め込んできた苦悩をお互いの熱で溶かし、絆へと昇華させていくかのように小夜は心の底から喜んでいたが、冷やかな目で事態を見ている自分がいることに気付いた。

はたしてこれは現実か。こんなに都合よく願いが叶うものなのだろうか。

陵辱されるというのは確かに辛い。絶望して自ら命を絶つ人だっているだろう。

それでも両親が殺されることよりは、軽いのではないかと小夜の冷静な部分は考える。

畜生児の小夜にとって親とは、呪われたこの肉体を生んだ存在。嫌悪こそすれ情愛を感じたことはないし、向こうもその気はなかった。

だが藍は違う。親の愛を一身に受けて育った。いくら強くてもこの一瞬で割り切れるはずがない。

疑心の灯が点る。吹き消そうとするとますます手におえなくなる。これは現実か。

小夜はやわらかな胸に埋めていた顔を上げた。どうしてもこの幸せの確信が欲しかった。

「私が藍ちゃんを犯したみたいなものなんだよ」

「それはもういいよ」

藍は、小夜が不安そうな顔をしているのを見て偽りのない微笑み

を返した。

「お父さんとお母さんも私が殺したんだよ」

やめておけばいいのに小夜は両親の話に繋げた。すると奇妙な反応が返ってきた。

「うん？ 言いたいことがあったら遠慮しないで」

藍は小首をかしげた。

「聞こえてないの？」

「聞こえてるよ」

かみ合わない会話。親の死に関する言葉は藍の耳に入る前に消えてしまっているかのようだ。

「おかしな小夜ちゃん。さ、おうちに帰ろっ。もう遅いし今日は泊まっていつてね」

憑き物のとれたような表情で藍は微笑んだ。

ぎこちなく笑い返す小夜の目が、藍の頭上に動くものを捉えた。

蝶が舞っている。蒼白く内光り、ガラスの砂のような鱗粉を振り撒いている。

これは現実か。

疑問に答えるように脳裏に《虚構の楽園》と呼ばれる少女の姿が浮かんできた。あれの近くにいると何が本当で何が幻想か分からなくなる。

私が掴んだのは、本当に仲直りする展開なのか。

ふっと意識が遠のきかけて、暗いもやが目の前を漂いだした。

奇妙な浮遊感に襲われた小夜の耳に、藍の悲鳴が幾重のベールを隔てて聞こえてきた。

「こうして白雪の肌のお姫様は醒めない眠りに落ちていったのです……バッドエンド！」

綾瀬が後ろから小夜の肩に手を掛けた。

突然のことに藍は悲鳴を上げてへたりこみ、小夜は電流でも走っ

たよ用に大きく跳ねた。

「別にあんたのためじゃないんだから。明人と妹ちゃんが悲しむからね、耳に入らなくしてるだけだよ。シロスケ」

耳元で綾瀬が囁いた。

「……ありがとう」

綾瀬自身は言葉通りの意味しか考えていなくても、小夜の味方になってくれた。再び雫が頬を伝い落ちた。

反応が面白くなかったのか、綾瀬はふんと鼻を鳴らして離れると助けを求める藍の元に駆け寄った。

「こ、腰が抜けちゃって」

「ビビりすぎだよ。妹ちゃんは」

小夜はそんな光景を見て、これが入るべき輪なのだと分かった。

藍と自分と綾瀬。そしてそこに加わろうとする新たな影。

「はあはあ、置いてくなよ……藍！ 大丈夫だったか」

明人が白い息を切らして合流した。

平気だよと頷くのを確認して、まだ少しショックの余韻に冒されている小夜に目を向ける。

視線がかち合う。旧知の仲だからか、それとも強い思念が伝わってしまうのか、それでお互い相手の主張が理解できた。

「小夜ちゃんもおいでよ」

藍が呼んでいる。その打ち解けた様子を見て、明人も警戒の色を薄める。

「綾瀬にいじめられたくらいで泣くんじゃない」

「かわいいからね。もっといじめちゃうよ」

小夜はその白い纖手で涙を拭いて、輝く輪に飛び込んだ。
輪は小夜を温かく迎え入れる。

「うつつ、私がんばるから。天使なのに、助けられてばかりは嫌だから」

いつかきつと本当のことを藍に打ち明けよう。

でも今は、この輪を大切にしていきたい。この恩に全力で報いて

いきたい。

小夜は初めて嬉し涙を流して、心に誓ったのだった。

第20話A：結絆 - b o u n d b y b o n d（後書き）

月1の更新になっているのが作者としても残念無念不覚の至り。
綾瀬にツンデレ疑惑。

そんなことよりお気に入り件数が増えて感激です。今後ともよろしくお願いします。

第20話B：結絆 - bound by bond

明人は灯りが点る部屋部屋を内包した地上12階のアパートを見上げて溜息をついた。

遥の呼び出しから始まり、小夜との対峙、家を追われ、帰ってきた綾瀬に驚かされる。妹と禁断の接吻を交わすし、《起源》と少女の戦闘に巻き込まれ、わけも分からず薄気味悪い連中がうろつく街を歩き回った。

濃密過ぎる非日常体験のせいで、ひどく懐かしい感じがした。

これで、最後だ。

明人はしみじみと家の雰囲気を読み締めながら、女子3人を振り返った。

「藍と綾瀬は先に戻っててくれないかな。俺は、コイツと話がしたい」

藍と笑いあっていた小夜の表情がにわかに厳しくなる。

とっさに不穏なものを感じ取った藍だったが、真剣な雰囲気に押されて言葉が出なかった。

「つかーれーたー。早く入れてよー」

「は、はい」

子供のように駄々をこねる綾瀬に促されて、藍は背を向けた。明人は心の中で綾瀬に感謝した。

「……夜食、作ってるから。2人とも早めに戻ってきて」

何かを危惧するような口調で言い残して、藍たちは自動ドアを抜けていった。

冷たい夜の秋風が枯葉を弄んで音を立てる。それ以外静まり返った街路を明るくはいえない電灯が照らしている。

「……お前のこと、信じていいのか」

ポツリと明人が漏らした。それは小夜に対する疑念というより、自らへの問いを反芻しているようだった。

「藍のことは分かってる。俺だって知らない仲じゃないんだし疑うようなことはしたくない。けど力のない俺たちが身を護るのにできることなんて、それくらいしかないんだ」

「証拠がないと信じてくれないんだね」

小夜はおもむろにポケットに手を入れた。そして取り出したものは、夜闇に包まれてもなお紅く輝く宝石に見えた。

「街を回ってたときにも見たが、それは何なんだ？」

一目見ただけで畏怖にも似た感覚を引き起こされ、冷や汗が背中に浮いてくる。それなのに触れてみたいという欲望を掻き立てられる。

「《墜落の魔姫》の使う薬。快樂と引き換えに隷属を余儀なくされる代物よ」 《魔姫》、薬、隷属。それは遥が悔恨と悲愴に震えながら語った出生との共通項。

だが何故、何故それを小夜が持っている？ 《魔姫》は遥に滅ぼされたと聞いたのに。

「《幻象》でも抗うのは難しいわ。まして人間なんて」

小夜の声が耳元で聞こえ、明人は我に返った。小夜は背後から明人の首に手を回していた。

「ッ」

冷やかな肌の感触に心臓が跳ね上がった。恐怖も加わり反射的に撥ね退けようとしたが、小夜は肢体を絡めてそれを許さない。

男がか細い少女を振り払えないという異常な構図を《幻象》の力が可能にしていた。

小夜は明人の口をこじ開けて、魔薬を1粒放り込んだ。

「げげげっ！」

白い月の抱擁から解放された明人は大きく咳き込んだ。魔薬を吐き出そうにも一瞬で溶けてしまい、おぞましい甘さが残っているだけだった。

「やっぱり騙してたのか！」

ぼうつとする頭で必死に怒鳴る。

酩酊感はすぐになくなり、五感、六感に至るまでの全感覚が鋭敏化していく。身体中の澱んだ気が全て消え去り、血流が全身を駆け巡る。世界はみるみる明るくなり、タガが外れたように気分のインフレが止まらない。

「くくく、ははははハはっ！」

何がおかしいのか自分でも分からないまま、明人は笑いながら拳を繰り出した。

《魔姫》の命令がない今、紅い魔薬はあらゆるリミッターを外す機能しか備えていない。自分と藍を裏切ったという怒りが増幅され、凶暴性を燃え上がらせていた。

「分かった？　これがたった1粒でも支配される、危険なものだったこと。そして私の能力は――」

風を切って振るわれる拳の連撃をかわしながら、小夜は右腕を光の刃に変えた。そのまま一抹の躊躇もなく明人の胸を刺し貫く。

「私那不浄と思うものを消し去ること！」

肉に埋まった刃が煌々と輝いて、明人は全身を支配していた魔薬が浄化されていくのを感じた。

しかし無償というわけにはいかない。たとえるなら、身体中の細胞に張られた根を力任せに耄り取られるような痛みが身を焼いた。

「ぐぐぐああええええ！」　明人はその場に倒れこむと思いつきり吐いた。脂汗がだらだらと流れ、異様な寒気に肌が泡立った。

「明ちゃん」

呼ばれるままグロテスクな吐瀉物から顔を上げると、小夜が見せ付けるよう例の丸薬を口にしていた。片手に盛るほどの量だ。

やめると叫びたかったが、総身がこわばって声が出ない。

ついに白い喉をゴクリと鳴らして、小夜は魔薬を嚥下した。

「あなたの両親を殺したのも、藍ちゃんを酷い目にあわせたのも、全部これが原因。」

でも悪いのはこんなものに溺れてしまった私自身。　私の覚悟、見せてあげる」

凄まじい快樂に冒されながら小夜は宣言した。

その間にも口角が釣りあがり、狂った笑みを作っていく。雪のよ
うな頬に赤みが差し、熱っぽい吐息を漏らす。

「おい、しっかりしろ」

ようやく余韻の抜けた明人が肩を揺すったが効果は薄い。焦点の
合わない目が時折まっすぐになる程度である。

《魔姫》の狂気に魅入られて変貌していく小夜を繋ぎとめる手段
など、一介の人間が持ちうるはずもない。

「待つてろ、今綾瀬を呼んでくる」

それは覚悟を見せると言った小夜への裏切り。誰かに助けられる
こと望んでいるはずがない。

「一人にしないで……もう一人ぼっちは嫌なの。何でもするから……」

必死に明人の手を掴む小夜。低い体温と共に離れるのを病的に恐
れる気持ちは伝わってくる。

薬が描き出したのは色を欠いた少女の深層。忌み嫌われ、拒絶さ
れ続けた孤独。

赤い瞳を濡らして訴える小夜を見てみると、辿ってきた道が分か
るような気がした。

認めてくれる誰かを探して、精神的、肉体的に異形揃いの《幻象
》の中に飛び込んだこと。《魔姫》に脅されて、命令を実行してい
たこと。

思わず支えてあげたくなる脆さ。例に漏れず腕を回した明人を、
なんと小夜は突き飛ばした。

「もう媚びたくない！ 対等でいる！ 藍ちゃんと一緒にいたい
の！」

そう絶叫して、自らの身体をかき抱く。

収めようもなく奥底から沸き起こる震えは、小夜の葛藤を如実に
表していた。

小夜の全身から光が零れた。体内に巣くう汚濁を浄化する聖なる

輝き。

「ッ！」

伴う苦悶もまた明人の比ではない。堪えられない悲鳴が上がる。鋼鉄の茨でがんじがらめにされて転がされるような激痛。快樂と依存の棘はどこまでも深く鋭く突き刺さり、抜こうとする手さえも貫き穢す。

『帰ってきたと思ったら、またどこかに行ってしまうのね』

頭の中で幼い声が響く。魔薬が活性化する。

《魔姫》の支配下にあった小夜は、投薬でその繋がりを取り戻していた。

叩きつけられる悪魔の誘惑を追い払うように、小夜は狂ったように頭を振った。

『聞きわけのない子。私が来いと言ったらすぐ来なさい』

命令と共に黒々とした夜空に紅い波動が迸る。

「何だ……」

それは《魔姫》の一端に触れた明人にも見ることができた。

アキラを呼び戻したあの呼び鈴。服従を強要する横暴の象徴。

「もうあなたには従わない！ 藍ちゃんと一緒にいるって決めたんです！」

光が輝きを増す。それは身を焼く焔に薪を投じることになるが、自由へのただ1つの道でもある。

苛烈を極める葛藤。衝突により生まれる痛みも否応無く高騰していく。

ぐらりと小夜の身体がバランスを崩す。いつ墮ちるとも知れない危うさが見て取れる。

「小夜！」

明人の叫びに小夜はほんの少し微笑んだ。この孤独な戦いにも手を差し伸べてくれたことが嬉しかった。

「けない」

小夜はなんとか態勢を整えて、うわ言のように呟いた。

『何？ あなた一度堕ちた分際で這い上がれると思っっているの』

《魔姫》が嘲る。もう虫の息だと見下した調子がありありと聞き取れる。

「あなたなんか、負けるわけにはいかないの！」

小夜は気概に満ちた声を張り上げた。包む光はもはや直視できないほど強烈になっていた。

『っ、お前の大切なものの全部奪ってやるから　！』

途切れる憎悪の声。天使の刃が呪われた戒めを断ち切った瞬間だった。

「頑張ったな」

明人は背中の小夜に囁いた。

ぐったりと脱力して目を瞑る小夜の顔はいつも以上に蒼白い。眠っているのかと思ったが、淡い笑みを口元に浮かべた。

「明ちゃんのおかげだよ」

ほとんど力が入っていない弱弱い声。あの後いきなり倒れたことといい、消耗が著しいようだ。

「俺は何もしてないだろ。小夜が1人でやったんだ」

「違う！　そうじゃなくて、名前、呼んでくれた」

「あ、ああ、まあな」

気恥ずかしい沈黙を従えて、エレベーターに乗り込む。

鈍重な動きで上昇していく箱に耐えかね、明人は墨に灯籠を浮かべたような街を見下ろしてみた。すると小夜が折れそうな声で鳴いた。

「……ごめんなさい」

「いきなりどうした」

「ちゃんと謝ってなかったから。お母さんやお父さん、藍ちゃんのこと。あと今日の色々。本当にごめんなさい」

「気にしなくていいよ。それより藍にはちゃんと説いたんだな？」

自分より藍を気にかける態度は褒められよう。しかし小夜は、自身を蔑ろないがしにしていそうな気配に言い知れぬ不安を感じた。

「うん。でも親が亡くなっただってことは《樂園》が伝わらないようにしてて」

「俺がそうさせたんだ。あんなこと、知らないほうがいい」

「そう……今は私も仕方ないと思ってる。でもそれじゃダメだよ。私はいつか本当のことを話す」

小夜は力強く言い切った。

意外そうな顔をする明人。

「もっと保守的な奴かと思ってたんだけど」

「それは明ちゃんのほうでしょ」

「そうかもな。それよりさっきから明ちゃんって」

「いいじゃない。せつかく仲直りできたんだし」

「そうだけど、綾瀬がなあ……」

脳裏に浮かぶのは包丁を持った大きなリボンの美少女。あれは刺激が強すぎた。

「ふふ、鬼嫁だよ」

「嫁じゃねえよ」

「そんなこと言うて怒るんじゃない？ 帰ったら嫁宣言ね」

なんで俺はいじられキャラになってんだと、つくづく思う。何か仕返しを……。

「お前だつて、なんからしくない台詞吐いてたじゃん。藍ちゃんと一緒にいたいとか負けないとか、帰ったらお姫あい様のナイト宣言な」
むず痒さを紛らわすために言い返す。

「……それは、言っちゃダメ……でも、ナイト……」

小夜は背中に顔を押し付けてそれきり黙ってしまった。

反応はかわいいのだが、何かあぶないものを目覚めさせてしまったのかもしれない。

「ただいま」

「おかえり！」

重なる2組の声。完成した輪。その半分が非日常の存在でも、それは強固で温かく回っていく。

第20話B：結絆・bound by bond（後書き）

良い最終回だった（嘘）

これにて中編は終了です。

次は幕間挟んで後編かな。ほのぼのしたのがあったほうが、ハデスさんの凄惨さが映える気がします。彼女にもアップが必要ですし（笑）

どうも日常会話が上手く書けないので次回が心配。

第21話A：狭間・intervalic moment

「月には不思議な力があるんでさあ」

和服の男がのんびりと空を仰ぐ。廃寺の縁側に腰を下ろし、あたりを取り囲む木々の先にある真円を見ている。

小夜もその隣で血のような赤の瞳に月を映していた。

「人工の灯が無い時分は月が人を惑わしていたんでさあ。妖怪なんてのは月の狂気にあてられた人間が見た幻想。今は妖怪なんていないでござんしょ？　こんな田舎でも街灯がありやすし、都会じゃ昼と夜の区別なんてありやせん。お月さんも狂気を失っちまいます」男は喋り続ける。何の目的があつてそんなことを語るのか、小夜には見当も付かない。

突然この寺に來た彼と何度かこんなやりとりをした。今だ理解はできないがちよつとした共感を持っていた。

「現代は逆なんですよ。太陽が人を狂わせてるんでさあ。日が長くなる春あたりにおかしな連中はうろつきますし、晴れた日に犯罪が多いと言います。逢魔が時なんてまるつきり太陽出てますぜ。」

命芽吹くあの季節に、夕焼け燃えるあの刻に、事故やら事件やらがたくさん起きるなんてお天道様も罪なお方でさあ。そうは思いませんか」

「……それで何が言いたいんですか？」

痺れを切らして小夜は聞いた。回りくどいのは嫌いだつた。いじめにしても直接的なものより間接的なものの方が辛い。

「まあまあ、最後まで聞いてください。そんでもって、お月さんは太陽がばら撒いた狂気をこの静かで清らかな光で浄化してるんだと思うんです。現代は。小夜さん見てて落ち着きませか？」

「まあ、少しは」

まだ続くのか、とうんざりしながらも小夜はちよつと考えてみた。昼よりも夜、太陽よりも月が好きだった。

色素欠乏症の体質的に紫外線を受け付けられないというもあるが、目立ちたくないという願望が夜を肯定していた。月はさしずめ穢土を見下ろす隠者のようだ。

気付けば小夜の抱く月と夜のイメージは、男のそれとよく似ていた。

「あなたもどうして分かってらっしゃる」
ずいっと男が顔を近づけてきた。

彫りの深い顔立ちにどこか生気の欠けた黒の瞳。若いとも老いているともとれる年齢不詳さが目立ち、そればかりで記憶に残りにくそうな顔だ。

「あつしのお月さんになつてもらえませんか」

「……はい？」

奇怪なプロポーズに小夜は目をしばたいた。お月さんとはこの男にとつて何なのだろう。

「あつしの仕事、知リたがつてましたよね。教えてあげまさら。あつしはいわゆるセーフィネット、救済措置つてやつでさあ」

次々と理解に苦しむ言葉を残していく男。

「生まれてきたことを後悔したことはありやせんか？ どうして自分だけが酷い目に遭わないといけないのだと恨めしく思つたことは？ もちろん誰にだつてありますでしょう。」

しかしね、時間を置いたり努力のしようによつちやあ人並みの幸せを得ることもできる」

それは私の努力が足りないと言いたいのか、と怒鳴りたくなつてくる。だが、何となくそういう意味ではないと感じてもいた。

「それができる人等はまだ幸福でさあ。世の中にや生まれながらにその権利すら剥奪された人がいますからねえ。あつしやあなたのよくな」

男は低く嗤つた。自分の生まれのことを嗤つたのか、そんな不幸を生んだこの世界を嗤つたのか。ともあれ男の笑みは何かを嘲っているようだった。

「あなたも同じ」

「さよう。あつしには他人の心、特に欲求が何もしなくても漫画のフキダシみたいに見えてしまう。綺麗な願いからドス黒い欲望まで、街を歩けばそこらじゅうに浮かんで見えるんでさ。おや、信じてくれないんで？」

「いきなりそんなこと言われて信じられるほうがおかしいです。証拠を見せてください」

露骨に疑惑の眼差しを送り、小夜は言った。「冗談とも本気ともつかないが、この男は底知れぬ何かを秘めていると直感した。それを見てみたかった。」

「うーむ、致し方ない。本当はやりたくないんですが……」

男はカツと目を見開いた。半死の眼に異様な光が漲っていく。

小夜は頭の中を覗かれたような奇妙な感覚を味わった。

「殺意の源は、猫、水。そういうここに住んでいた野良公が見えませんか。溺死ですか。むごい事をする」

男は次々と小夜の身に起きたことを釣り上げる。1つ釣りあげれば芋蔓式に関連する記憶や感情が引きずり出される。ブレインフィングープリントとマインドリードの恐怖の融合。

おぞましい感覚はうねりを上げ、数多の眼球に内側を嬲られるものへ変わっていた。

黒々と乱立する影。少女を捕らえて放さない腕。冷たい水しぶき。必死に這い上がろうともかく4本の足。静まる水面。正気とは思えない鬼の爆笑。冷たい毛の塊。

小夜の忘れようとする意志があまりに強かったため、記憶は強烈なシーンの細切れだった。それでも1度甦った精神的な痛みは容赦なく進行していく。

「求められたこととはいえ、申し訳ありませんね。止めておけばよかった」

男もまた傷ついていた。心を読んでもろくな事は無い、と改めて絶望したような顔をしていた。

「あなたが見たというのは地獄の一角に過ぎません。私が積み上げた12年は全部生き地獄です。そこから連れ出してくれるなら、なんでもします」

しばらくの後、落ち着きを取り戻した小夜は男の力を認めたようだった。まだ力が入らずへたりこんでいるが、一切の疑いを排除した真剣な顔つきで、今にも土下座しそうな勢いで懇願していた。

「ええ、ええ分かりますよ。伝わりませう。狂おしいほどの渴望が」男は小夜の手を取って立ち上がらせた。

「さあ、小夜さん。あなたは何を望みませう。これから始まる新しい人生に、常人は得られぬ第二の生に」

「私は……」

言えば現実になる。だが、私が本当に望んでいることは一体なんだろう。

色素欠乏症を治してもらったことだろうか。それとも私を追い詰めたクズを葬る力だろうか。……明ちゃんともっと仲良くなることだろうか。

分らない。望み、人生の道しるべをそんな簡単に決められるのか。永久に固着されてしまうのに……。

「私の思う悪を滅ぼしたい。世界に害しかもたらさない人たちを変えてみせる」

「つまり死による沈静ではなく、生きながらの浄化と」

「はい」

誰かが答え、誰かが頷いた。徐々に明るくなる世界。男も少女も森も寺も、全てあやふやになって渦に吞まれていく。

「了解でさあ。願わくは、その望み果たされんことを」

「さん、小夜さん」

「んんっ……《起源》？」

目を開けようとすると強烈な光が視神経を焼いた。目が慣れるのを待って、自分の状況を再確認する。

空を覆うように木が茂っていて決して明るいとは言いが、大小いくつもの木漏れ日の筋がオーロラみたく輝いている。

その一方で老朽化の進んだ木造の社屋が深い影を落としている。苔むした屋根に打ち破れた戸や障子、そこから覗く畳は日焼けで黒く変色している。その姿は失われた信仰をそのまま表しているようだ。

そんな夢とは昼夜を異にした世界の一角で居眠りをしていたらしい。木々の隙間から降る一条の日差しが、ちょうどスポットライトのように小夜の雪肌を照らしていた。

「おはようござえます。今日も御綺麗でさあ」

夢と同じ和服姿の《起源》が傍にいた。親しげな表情もそのままだ。

「ありがと。私が呼んだのにごめんなさい」

「いいんですよ。待つのも待たされるのも得意なのでね」

そこで小夜は《起源》の変化に気がついた。彼は空中にあぐらをかいて浮いていた。

「どうしたんですか」

「いや、昨夜手痛くやられちゃってますね。情けないことに、両脚がばっさりでさあ。治るまではこの盾が脚代わりでさあ」

何でもないことのように《起源》は語り、コンコンと不可視の盾を叩いて見せた。よく見れば

脚があるべき場所には布が漂っているのみ。

小夜は驚きを隠しつつ聞いた。

「誰にやられたんですか」

「アキラさんですよ。《忠誠》^{ケルベロス}とも名乗っていましたねえ」

「彼女は《墜落の魔姫》^{ハデス}の従者です。つい昨日まで私の同僚でした」

《起源》は合点がいったと頷いた。小夜が自分を呼んだ訳、昔頼

んだスパイ行為の結果を報告するためだ。

話題は小夜の報告へ移行した。

「最後に連絡があつてからだいぶ時間が経ちますね。あの魔薬のせいでござんしょ」

「はい。始めの内は意志で持ちこたえられましたが、だんだんと濃度が上がるにつれて全く身体が言うことを聞かなくなるんです」

思い出すだけでも怖気の走る生活を小夜はポツポツと語りだした。しかし支配されている間の記憶は曖昧で、まともな報告にはならなかった。

その中で1つ、小夜が罪悪感を抱えるものがあつた。

「《復讐の女神》^{ネメシス}を引き渡したのですかい？」

それを聞いた《起源》は見る間に表情を険しくさせた。その詰問するような口調には、いつもの余裕が消えていた。

「で、でもまだ《魔姫》の手中に落ちたとは……」

気圧されながらも何とか言い訳をする。まさかそんな反応が返ってくるとは思わなかった。

《女神》は《幻象》の敵で、《魔姫》も危険視されている。明人にメモを渡す時支配されてはいたが、2人をぶつけてどちらかが潰れれば脅威が減ると考えていたからだ。

「《魔姫》なら《女神》は勝てたでしょうが、《忠誠》というなら話は別でさあ。《忠誠》と《女神》は友人同士、しかも《女神》は自分が彼女を殺したと思っっているはず。もし仮に死んだと思っっていた親友が目の前に現れたら、どうしますか」

「それは……」

戦うという選択肢が出るわけがない。

「分かっていますね。もう《女神》は冥界に呑みこまれたと考えるほうが良いでしょう」

「でも、敵が一方にかたまつたのは良いことでは？ 三つ巴の乱闘は避けられます」

「《月宮の天使》^{セレン}、あつしは《女神》を敵だとは思ってませんぜ。

むしろ敬うべき、愛おしむべきと思っておりまさあ」

口調を和らげ《起源》は言った。

「なんでですか？ あいつは私達の仲間を何人も滅ぼしているんですよ？　いくらあなたの被造物といっても許されることではないと思います」

理解できないといった風に小夜は刺々しく言った。

「それも一理ある。いやまさしく正論でさあ。そういう言葉を聞く度にまた罪を重ねてしまったと身に染みますな」

懺悔者のような悲哀な響きを込めた声。

「どういう意味ですか、それ」

《起源》が内情らしきものを見せることは珍しかったので、小夜は突っ込んでみた。

「後悔はいつまで経っても先に立ってくれませんね。今回もまた繰り返すだけかもしれませんが、あつしはあつしなりの全力を尽くすつもりでさあ」

小夜の問いを若干無視する形で《起源》は話を続けた。

「《女神》を救出してください。あつしもサポートはしますが、これはあなたにしかできない。聖浄の月よ」

《起源》は頭を深々と下げた。どう答えようかと迷っている間も微塵も態勢を崩さない。

それを見ているとだんだんとむず痒くなってくる。どうも私はお願いというものに弱いらしい。

「顔を上げてくださいよ。元々私の軽はずみが招いたことです。私が責任を果たさないといけないんですから」

「ということは引き受けてくれるんで？」

「はい」

パツと《起源》の表情が明るくなったかと思うと、嬉し涙まで流しながら小夜の手を取った。

死灰から燃え甦る不死鳥の如き急変化に少し面食らう。

「ああ、ありがたいことでさあ。先ほどの《女神》に対する言い分

を聞いたときには、もはやこれまでと覚悟しましたよ」

「別にあいつのためじゃないです。敵に回ったままだと厄介だし、あなたが悲しむのも見たくない」

小夜にとって《起源》は自分を救ってくれた恩人。彼の力になれるなら何だってやるつもりだった。

《女神》も助けてくれた相手にすぐさま刃を向けるような真似はしないだろう。一時的に共闘も可能はずだ。

「なんと……」

言葉が出ない様子の《起源》。だがいつまでも感傷に浸っているわけにはいかない。感動に緩んだ表情をすぐに引き締める。

「現状、あつしらは後手に回るしかありませんでさあ。それに《魔姫》は短気ですから、何をするにもあまり時間は残されていないと思いますさあ」

「ではどうすれば」

「とりあえず、あつしは《天網》^{ウラノス}をあたって居場所を割り出しますあ。あなたは街の中毒者共を片っ端から浄化していつてくたせえ。

《虚構の樂園》^{エリュシオン}にも協力するよう言っておきます」

あの気まぐれな《樂園》が素直に協力してくれるかどうか、小夜はいささか不安だった。

協力するしないで揉めるならまだしも、享楽に身を任せてあちら側につく事だつてあるかもしれない。意外と気の抜けない相手だと思っているのだった。

「確かに彼女は信用には値しないかもしれない。あつしの力をもつてしても読めない人ですから。ですが逆に彼女ほど有事において力になる者もいませんぜ」

小夜の不安を読んで《起源》が言った。それが正しいことはだいたい理解できるが、胡散臭さを全て払拭することはできなさそうだ。そもそも何故私がこんなに警戒しているのかが分からない。概ね良好な関係だったと言っているはずなのに。

「《天使》……思いつめる必要はありませんぜ。注意を怠らないのは良いことですが、それを目的と勘違いするのは危険でさあ。いざという時、動けなくなりますぜ」

忠告を残して《起源》は去っていった。

和服が消えるのを見届けて、小夜は気合を入れなおした。まずは《楽園》を探さなければいけない。

第21話A：狭間 - i n t e r v a l l i c m o m e n t（後書き）

遅筆です。すいません。

ほのぼの書くとか言っていましたが無理でした。

『ふえのみな！』とかやりたいのに（笑）

第21話B：狭間 - i n t e r v a l l i c m o m e n t

深紅の鎖に緊縛された三つ首の銀蛇は、毒牙を振り乱し、身をくねらせ暴れた。

しかし鎖が築いた呪縛の歴史は恐ろしく深い。喰らうことを抑圧され続けた蛇とは違い、己の実力を遺憾なく発揮し、洗練してきたのだ。

飲み込まれるな、と蛇が喚いている。

それを跳ね除けて何になるの？ 遥は蛇を見つめた。

答えは自明である。見渡す限りの殺戮の荒野。血塗れた物語の続きを紡ぐだけだ。

殺しの苦悩と快楽に翻られるだけなら私は奴隷でいい。アキラと一緒に過ごせば、それで。

尾を引く絶叫は怨嗟にまみれて、蛇は鎖に絡め取られていった。

鎖の次の標的は無論遥だった。

足元から這い上がり、胸を、腕を、首を戒めていく深紅。遥は抵抗しなかった。むしろ進んで受け入れたというほうが正しいだろう。気付くと遥は跪いて、小さな指に口付けていた。

顔を上げると《魔姫》の蒼眼が見下ろしていた。見ている間に口元に三日月が刻まれた。

「今日からここがあなたの家よ。家族、そういうことになるわね」

そう言った彼女の顔は慈愛に満ちていた。遥はそう思った。

ケルベロス

「《忠誠》、彼女を開いている部屋まで案内なさい」

「はっ」

脇に控えていたアキラに手を引かれ、遥は《魔姫》の部屋を後にした。

遥は案内された部屋でベッドに寝転がって天井を眺めていた。

不思議な感覚だった。我が身を苛んでいた蛇の慟哭が露ほども感じられない。それでいて喜びもない。たゆたうような虚無があるだけだ。

果たして自分の選択は正しかったのだろうか。

堂々巡りの思考に陥りそうになった頭を現実に叩き戻す。

まだ始まったばかりだし、悩んでもしょうがない。今までの孤独に比べれば、アキラといられるだけでも幸運だ。

「霜崎様、いらっしゃいますでしょうか」

謙虚なノックが部屋に響き、次いで女性の声がドアの向こうから聞こえた。

遙が返事をする、黒の服に白いエプロンのいわゆるメイドが扉を開けた。

見れば自分と大して変わらない少女だ。そんな人に様付きで呼ばれるのは心地の良いものではなかった。

「お着替えの準備ができております。どうぞこちらへ」

「着替えて、何かあるんですか」

「霜崎様のための晩餐会でございます。あらかじめお伝えしなかったことをお許しください」

遙の疑問に答えて、メイドは深々と頭を下げた。

何だか気持ち悪かった。厭われるのには慣れているが、こうも丁重なもてなしをされるのは初めてだからかもしれない。

「晩餐会？ 何で私に？」

「それはお嬢様が霜崎様を家族と認められたからです。これまでも幾度となく行れてきた慣例行事でございます」

逡巡。断る理由は見当たらない。

私は誓いのキスをした。あの時から《女神》の名が聞いて呆れるほど一縷の憎悪も抱けなかった。

漠然とした畏敬と埋め火のような渴仰があるのみ。それも次第に形を得ていつているような気がする。

「よろしいでしょうか。では、こちらへどうぞ」

メイドは遙が心を決めたのを敏感に感じ取り、部屋の外へ促した。
「その前に1つお願いがあるの」
「何でしょう。なんなりとお申し付けください」
「敬語はやめてくれない？ 私と年も変わらなそうに見えるし」
「あいにく職業病でして。不治の病なのでございます」
「ニツ、とメイド少女はいたずらっぽく笑う。
遙も笑い返した。ここへ来て初めての笑顔だった。

「好きなのをどうぞ」

メイド少女 菜々子に連れてこられた部屋。

遙は目を見開いた。その瞳が失っていた無垢な輝きを取り戻すのに時間はかからなかった。

背の高いタンスが壁を埋め、煌びやかな衣装が所狭しと置かれた部屋。

「うわあっ……」

「ゆっくり決めてくださいね。時間はまだまだありますから」

あれこれ手にとって、試着をして、ポーズを決めてみて。途中からは菜々子も混ぜて、騒いでみる。

それは奪われた青春的一幕のよう。

「今夜は何着る？」

「そうですね、いつも黒ばかりなのでたまには違うのを着てみませんか。お互いに」

「なら私も白とかにしようかしら」

カチャリ、とドアが開く。

そこへやってきたのは、白金の髪を靡かせた悪魔と影のような従者。手を繋いで笑い合う姿は親子に見える。

両陣営ともその時まで気付いていなかったらしく、視線を交わしたまま固まる。

「お嬢様、《忠誠》様！？ ええーと、こういうときはなんて言え

ば」

「はあ、あなたの従者病も大したものね。そんなに畏まらなくてもいいのに」

「そうですけど、あつ、ドレスどうなさいます?」

「切り替え早いわね……」

《魔姫》があんなに親しげに……幻覚?

呆気にとられて見ている遥の肩にアキラが手を乗せた。

「あれくらいで驚いてちゃきりが無いぞ。対外的には厳しいが、身内にはあんな風だから変に力を入れないほうがいい。疲れるだけだ」
本当の子供のようにはしゃぐ《魔姫》を見てみると、頭を往来する《女神》と遥の立場のことも気にならなくなってくる。

「何してるの2人とも。決めないのかしら?」

「あのーお嬢様?」

「何、菜々子?」

「私もこの衣装着てパーティ出たいなあ、なんて」

「あなた不治の職業病はどうしたの」

「あーうー」

「仕方ないわね。あなたはなかなか優秀なメイドだし、ご褒美つてわけじゃないけど許してあげる。ただし、後で皆に自慢すること。分かった?」

「ほんとですか。ありがとうございます!」

「その方が労働意欲が湧くわよね」

異質な者のそれとは思えないほど、平和な空気が満ち満ちてくる。しばらく4人の無邪気な笑い声が止むことはなかった。

スイツチの切り替わる音と共に、遥の姿が複数のライトで照らし出された。

白いクロスが掛かった円卓群。そこに座る異邦同邦の老若男女が注目する。

マリンブルーのワンピースからすらりと伸びる足には白のパーティーサンダル。肩には黒花のコサージュ。

遙は照明に艶めくブラウンの長髪を波打たせながらその間を抜け、ゆつくりと、しかし力強く壇上へ向かう。

ステージの端には《魔姫》とアキラがいる。

レースの付いたアイボリーのボリウムドレスを着た《魔姫》。

子供っぽい可愛らしさを押し出しているように見えても、その内面が揺るぎないことを瑠璃色の瞳が物語っていた。

その一歩後方で影が紅蓮に燃え上がっていた。

深いスリットの入ったドレスが、アキラのたおやかな脚線を中心に全身のラインを強調している。煽情的な肢体を衆目に晒しながらも、炎は微塵も揺るがない。

「今日から家族の一員になった《復讐の女神》^{ネメシス}よ。異議ある者は、その由この場で述べなさい」

遙がステージの中央に立つと、《魔姫》がその名を告げた。透き通った声はどこまでも深く場に染み渡っていった。

所々でざわめきが起きる。人間と《幻象》の境界に住まう彼らが、首切り役人の名を知っていても不思議ではない。

遙の立つ舞台から程近い場所にいた菜々子も口元を押さえ、目を見張っていた。

「危険はないのですか!」

誰かが叫ぶ。

「無い。とは言いつれないわ。まあ、去勢はしておいたけど」

会場から笑いが漏れる。

遙は顔を赤くして俯いた。

「お、俺は反対だ! あんただって言ってたじゃないか。《幻象》は自分の欲望を最優先させるだって! じゃあそいつは生まれながらの殺し屋だろう。いくらあんたの支配力が強かろうが……」

今度は若い男の半狂乱になった主張が飛んだ。敬語すら忘れているところを見ると、最近《幻象》絡みで生命の危機でも感じたのだ

ろうか。

自分が男を追い詰めてはいないとはいえ、その言葉は胸を抉る。

「ならお前、ここへ登ってきなさい」

《魔姫》の冷たい声が響き、男は萎縮した。

「ぐずぐずしない！」

強制力を秘めた恫喝に抗える者はこの場にいるはずもない。

壇上に召し上げられた男は、いかにも気の弱そうなひよる長い男だった。

「知つてると思うけど、ここにいる人間は私の《柘榴》に適応して半分《幻象》になりかけてるわ。食べたことないわよね？ どんな味がするのかしらね？」

耳より流れ込み、霜崎遥という存在の根幹を揺さぶる呪詛。

氷杭を脊髄に打ち込まれたような悪寒。しかもその杭が貫いたのは感覚だけではなかった。

「……！」

鎖の呪縛を逃れた半身が、鎌首をもたげているのを感じた。

「お、おい！？ どういうつもりだ！？」

凶兆を察知した男がもぐく。身体は舞台に縫い付けられている。

およそ100通りの興奮あるいは恐怖でホールは静まり返る。

その静けさと反比例するように、蛇人混淆の叫びが頭蓋に轟き渡る。もはや意味などなく、抑制につぐ抑制で剥き出しになった《怨^{リニエス}疾毒蛇》の本能の咆哮だ。

「よいのですか。あのまま暴走されては、あたしでも止められるかどうか」

「ふふつ、誰がなんと言おうと彼女は家族なのよ。信じてあげるのが、私達の役目ではなくて？」

《魔姫》は視線を遥から外さず、自信ありげに笑った。

主人の意向に逆らわないのが従者である。アキラもそれ以上は言わなかったが、万一の時は親友として飛び出すつもりでいた。

遙に2人の会話を聞く余裕などない。

今までに無いほど凶悪にギラつく三刃がすでに発現している。猛烈な飢餓感と眩暈と絶叫が主導権を奪おうとしていた。

「寄るな！ 寄るなああつ！」

知らず右足を踏み出していたらしい。無様に腰を抜かした男が喚いている。

汗の臭い、怯えた声と挙動、脈拍の上昇。どれもが蛇を興奮させる。恐怖の染み込んだ獲物ほど舌をとろけさせるものはない。

左、右、また左。焦らすように旨味が増すように、ゆつくりと歩を進める。

音も無く銀の舌が伸びて、獲物に触れる。

「いえ、アアア、ア！」

振り切れた男は信じられないほど素早い動きで剣先をかくぐり、遙に飛び掛った。

予想外の反撃に対応できず、遙はそのまま押し倒された。頭を打ちつけた衝撃で全身が麻痺した。剣は真っ先に弾き飛ばされた。

男は泣き笑いしながら殴打と絞首で追撃する。細腕の血管が全て浮き上がり、尋常ならざる怪力を物語っている。

私、死ぬのかな。

ふとまともな考えが浮かんた。《毒蛇》の凶念が薄れたせいだろう。

視界の端を赤と黒の閃光がはためいた。

咄嗟に脚を曲げ、男の腹の下に入れて突き出す。男の身体が浮くと同時に身を起こし、男に覆い被さる。

暴行だけに心血を注いでいた男は、いとも簡単に立場を逆転される。

「ぐうつ！」

背中を黒のブレードが切り裂く。凍えるような痛みが神経に食い込む。

「大丈夫、ですか」

痛みに負けじと尋ねる。

男は酸欠でも起こしたように口を開閉している。驚きで目を白黒させている。

「遙、すまない。あたしは……」

駆け寄ったアキラは後悔を顔に滲ませていた。命令されて行動したわけではなさそうだ。

「分かってる。助けようとしてくれただけなんでしょう。ありがとう。幸い傷は深くない。遙は顔をしかめる代わりに、笑顔で立ち上がった。

「私の右腕に仲間殺しをさせないため。自分を罵った男を助けるため。なにより認められたいため。彼女は身を投げ打ったのです。同じことがあなた達にできます？」

その決意を見せてもらったからこそ、私も誓うわ。もし彼女があなた達に危害を加えるようなことがあれば、私が全力で守ります。

じゃあ改めて賛否を問おうかしら」

一瞬の間。会場からは割れんばかりの拍手が巻き起こった。満場一致の承認。

「言っておくけどこれは『やらせ』じゃないわよ。自分の意志も表明できない者をこの船に乗せたりはしないから。ま、こじつけがましいのは承知の上よ」

《魔姫》は真剣な眼差しで言った。

「どうした！？ 痛むのか？」

突然泣き出した遙を見て、アキラは慌てふためいた。

会場もざわめく。

「違うよ」

アキラのこんな姿はなかなか拝めるものではない。少しおかしかった。

「もう1人じゃないんだなあ、って思ったら、何だか……」

久しく忘れていた感覚。受け入れられる嬉しさ。

どうやって報いていこう。自分にできることなら、何だっでやるつもりでいる。

「ありがとうございます！これからよろしく願います」

まだ顔も名前も分からぬ家族を向き直って、遙は深くお辞儀した。

第21話B：狭間 - i n t e r v a l l i c m o m e n t（後書き）

これで終章入るとか言っていました。何だか半端。だらだらし過ぎかな…

第22話：聖沌・s a c r e d a n d s w i r l i n g（前書き）

お久しぶりです。長い間ストップしていたにも関わらず、多くの人に読んでもらえて感激しました。

佳境に入りつつあるこの物語、お楽しみいただければ幸いです。

第22話：聖沌 - s a c r e d a n d s w i r l i n g

緋森市街を囲む田園風景は、街の明るさとは裏腹に夜の帳を色濃く下ろしていた。

街の中では壊れかけのライト程度の光量しかない月も、この宵闇ではほんの少しだけ活躍していた。

いつからか夜に沈んだ森の一角がぼんやりとした光に包まれていた。飴細工の美しさ、儚さを体現した光だった。

その光の中は、日付も変わろうかという時間帯にも関わらず人で溢れていた。100人かそれ以上いるだろう。

全員が全員夢遊病を発症したような忘我の表情で立ち尽くす様は、不気味以外の何者でもない。

「順調……今夜で浄化が完了するのに、《墜落の魔姫》^{ハデス}たちが動く気配もない。綾瀬はどう思う？」

ゴシッククロリータ。黒と白のひらひらした衣装を着た少女が、不気味な群集に向かって手を翳しながら心配そうに言った。

日本人というより、白人にもいないような白すぎる肌。色こそ灰色であるが艶のある髪。眼は血液が透けて赤く染まっている。

少女は、いささか人の形を逸脱していた。
「邪魔がないのはいいことですよ」

綾瀬と呼ばれた女の子は、しゃがんで何かしながらしれっと答えた。彼女は先の少女　小夜に比べるとごく普通の人間に見えた。寒そうな格好の小夜とは対照的に、ジャンパーにマフラーを着ている。

外見で言えば、茶色の髪につけた大きめの赤いリボンが目立つことと、絶えず天真爛漫な笑みを浮かべていることくらいである。

その時、トランス状態で月光浴をしていた群集に変化が起きた。その中の1人が身体を折って苦しみだし、延焼するように伝播し

ていく。

浄化が第二段階に入ったのだ。

小夜の異能。月による浄化という独特の理論を実行し、彼らの体内に巣くう《魔姫》の《冥界の柘榴》を消滅させる。

重度軽度の違いはあれど、《柘榴》は心身に深く根を張っている。やめようとしても、生じる痛みで心が折れるという麻薬の性質が強調されている。

こここのところ毎晩浄化をして回っているが、他でもない自分の手で苦痛を与えているという感覚は相変わらず耐え難いものだった。

顔を背けそうになるが、集中しなければ彼らの苦痛を伸ばすだけなので、小夜はしかと見つめなおした。

「やな感じなのは分かるけど、仕事だって割り切っちゃえば平気だよ」

小夜の心中を察したのか、綾瀬は笑って言った。

言いながら綾瀬は群集の頭上に石をばらまいた。百何十の虚ろな目が、一斉に宙を舞う石を凝視する。

落下地点にいた人々は、我が口にと口をパクつかせて待っている。

鯉の池に餌を撒く光景を彷彿させる。

石に噛み付いた人たちの歯が砕けた。

「何してるの！」

小夜はぞつとして叫んだ。

小石を《魔姫》の《柘榴》に見立てて投げているのに気付いたからだ。

何故怒られているのかまるで理解できない。そんな苦笑にも似た微妙な表情で、綾瀬は小夜を見た。

「この人たちがどれだけ苦しんでるのか分かるでしょ？ 後悔しても後悔しても、やめられない薬に翻弄されて。今だって解放の代償に痛い思いをしているのよ。そんな気持ちを弄ぶなんて」

「自分でも試してみたいな言い方だね」

「ええそうよ。私もついこないだまで《魔姫》の所にいた。でも今

は、こうして過ちを正してる」

小夜はそう確信して言ったのだが、中身の見えない綾瀬の瞳を見ているとそぞろに不安を覚える。

「過ちね……。自分の願いに沿って行動してるだけなのに、そんな風に取りられて、彼女、心外だと思うな」

「《起源》は人間に危害を加えないように生きる、とも言ったわ。《魔姫》は害悪をばら撒いてるだけじゃない」

「でも薬がもらえたらそんなこと気にならなくなるんじゃない？
こんな風に」

いつの間にか、綾瀬の手にはルビーのような色合いの顆粒のようなものが乗っていた。

それこそ、ここに集まる人々を《魔姫》の奴隷に堕した《柘榴》であつた。

「何がしたいの。私はとくに卒業済みなんだけれど」
ピリツと走った微弱な電流を無視して綾瀬を睨みつける。

「あははっ、怖い顔。ならこんなのはどうか？」

綾瀬が指を鳴らすと、辺りに生える木々に続々と禁断の果実が実りだした。収穫が終わって閑散としていた田んぼでは、深紅の稲穂が夜風にそよいでいた。

気の触れそうな赤一色の誘惑界が顕現していた。

《虚構の樂園》^{エリュシオン}なる名前を持つ彼女は、世界を侵蝕する幻を操る《幻象》である。

浄化の対象を集めただけあつて、その出来は本物に勝るとも劣らない。

小夜は消し去ったはずの欲求がフラッシュバックしそうで、言い知れぬ恐怖を感じた。

それを誤魔化すため、月光で作り出した剣を綾瀬の喉元に突きつける。

「こんなことをして、何が目的なの？」

「私は邪悪？」

小夜が対象を邪悪だと認識しない限り、小夜能力は殺傷力を持たない。

今、小夜は怖くて剣を向けた。恐怖の源を邪悪と認知することは難しいことではない。だが、自分の勝手な都合で他者を傷付けるのは小夜の最も忌み嫌う行為であった。

いじめの記憶。彼らは小夜の異貌に恐れをなし、邪なものとして排斥しようとしていたのだろう。

それを知ってか知らずか、綾瀬は生命の危機などどこ吹く風と不敵に笑っているのだった。

「質問に答えなさいよ」

「目的かあ……明人から引き離すことかな。なんか邪魔だし」

ふざけたような答えを述べて、綾瀬は赤い幻景を引っ込めた。

小夜は溜息を吐いて刀を霧散させる。

無駄な争いなんかしている場合ではない。気持ち切り替えて浄化に専念しなければ。

「ふん、ふん、ふん」

どこにそんな要素があったのか。機嫌が悪くなったらしい綾瀬は鼻歌を歌いだした。あまりに前後の整合性を欠く行動。

彼女を理解できる人物などこの世にいないのではないか。そう思わせるほどに、不安定で捉えどころのない性質が露呈していた。

早く終わらせて帰ろう。今夜で魔薬に汚れたこの街はもとの姿を取り戻す。そうすれば明日からは綾瀬と一緒に行動する必要はないのだから。

「ただいま」

午前1時すぎに2人は帰宅した。

リビングに入ると、藍が淡いピンクのパジャマを着て、セミロングの髪を適当に縛ったラフな格好で出迎えた。

「おかえり」

明日も学校があるのだし寝ているだろうと思っていたので、嬉しい驚きだった。

「2人ともお疲れさま。あ、ちょっと待ってて」

藍は台所に向かうと、すぐに湯気の立つマグカップをトレイに乗せて戻ってきた。

「ココアだあ。妹ちゃん気が利くね」

綾瀬が子供のようににはしゃぐ。

小夜は胡乱な眼差しで彼女を見ている自分に気付いた。

もうやめようと思う。全部思いつきと反射で動いているような人だから、1つ1つを掘り下げても袋小路にしかない。

「はい、小夜ちゃんにも」

「ありがとう」

冷えて疲れた身体をほころばせるにはぴったりの飲み物である。渡されたカップを包むようにして、手を温めつつ小夜は言った。

「藍ちゃんもこんな時間まで起きてなくても良かったのに」

「ううん。小夜ちゃんたちが頑張ってるから、私にもできることがあればいいなって思ったただだから。これくらいしかできなかったけど」

「十分だよ」

容姿のせいで疎外され続けていた小夜にとって、些細なことでも自分に気を配ってくれるのはありがたかった。

《起源》に認められ、《幻象》として過ごすうちにコンプレックスは改善されてきた。《幻象》という元は傷を抱えた人々が生んだ、同病相憐れむといった風土で過ごせたことによる所が大きい。

そして紆余曲折を経たものの、藍というかけがえのない親友もできた。

人間に戻れたら……。最近ではそう思うことも珍しくない。

ココアを一口啜る。それだけで全身に幸せな温かさが浸透していくようだった。

「ごめん、うとうとしてた」

黒のスウェットを着た明人がリビングに入ってきた。

「妹ちゃんは何で待っててくれたのに、明人が寝てるってどういうこと。体たらくじゃん」

綾瀬がむすつとした表情で明人を見る。

「悪かったってば。でも藍だって昨日も一昨日も待ってたわけじゃない。言い訳しない」

「何で私を引き合いに出すの」

「藍ちゃんはいいいんです」

3人から予想外の反撃を受けて、明人はたじろいだ。

「り、理不尽だ。小夜のなんか理由にもなってるねえし」

「はいはい。そうだ、兄さんもいる？ ココア」

まだ何か言いたそうな明人を無視して、藍が聞く。

「じゃあもらおうかな……何だその指は」

藍はニコつと笑って明人の後ろ、台所を指していた。

「自分で淹れるってことじゃないかな」

「正解です」

「何の仕打ちだよ！」

それ以上言う前に、話は逸れていった。

「やった。賞品があるんだよね、妹ちゃん」

「えっと……」

「それなら明ちゃんが用意してくれますよ」

真面目に問い詰められて、困り顔の藍の代わりに小夜が答えた。

「助け舟出してんじゃねえ」

「ほんと？」

突っ込みも虚しく、話を鵜呑みにした綾瀬がじいっと見つめてきた。

「ち、ちなみに何が欲しいんだ？」

「私に言わせるの？」

いつの間にか茶番の空気は消え失せていた。綾瀬は真剣に答えを引き出そうとしているようだった。

藍も小夜も展開を飲み込めないようで、身じろぎもできず困惑するばかりである。

「……なんだ、俺か……って、は？」

明人は内なる何かに導かれるように口が動くのを感じた。

「ぴんぽーん。大正解！ 景品として、私をあげるよ」

言うが早いか、綾瀬は抱きつくようにして明人を押し倒した。

「じゃ、じゃあ兄さん、綾瀬さんおやすみなさい」

「置いてかないでー」

金縛りが解けたように藍がそそくさと出て行くと、小夜も慌ててその後を追っていった。

部屋が急に静かになった。

「ねえ、私は何を考えてるか、分かる？」

さあ。明人はそうはぐらかせて、今度こそ綾瀬に言わせようとした。

しかし、先ほどと同じく自己の内側から湧き出るものがあつた。

それが何なのか確かめようとして、明人は口を嚙んだ。

「もうすぐ分かるよ」

そんな明人を見て、綾瀬の瞳が妖しく閃いた。

今や2人の身体は完全に密着して、心臓の鼓動すら同調していくように思われた。

「1つになろう、明人」

第23話A：紅霧 - scarlet disorder（前書き）

最終章に入ります。

第23話A：紅霧 - scarlet disorder

「この場合三平方の定理を使つて、うん、できていますね」

1限。清水という若い男性教師が生徒に書かせた問題を解説している。この授業は解説しかないので、最初の指名さえ抜ければ退屈な時間が続く。

明人も例に漏れずそんな生徒の1人だった。

予習をしていないせいで、元から複雑な問題が何をやっているやらさっぱり分からない次元に昇華していた。

今から黒板のを写そうかと思い、いやいやそんなことしても力は付かないと却下する。かといって後でやるはずもないのだが。

葛藤というのもおこがましい怠惰な思考。原因は分かっていた。

《幻象》の強烈な印象に比べると、今までの世界が空虚に思えてしまうからだ。

綾瀬、小夜、遥……彼女らのような存在を垣間見、その力の一端に触れた。日常は砂上の楼閣で、ふとした拍子に倒壊してしまうのではないか。

だから何も手に付かない。いつか訪れる可能性のある世界の反転を前に、この日常にしがみつく意味があるのだろうか。

明人は吐息した。

馬鹿か。悪口ではないが、綾瀬のような病的な妄想をするのもし加減止めなくてはいけない。

彼女とは住む世界が違うのだ。影響を受けすぎるのは、日々の生活に齟齬をきたすかもしれない。

そういえば、結局昨日は何もなかったな。

薄く結露した窓の外を見やり、懐古する。

甘い囁き。熱い吐息。誘惑していたのかもしれないが、綾瀬はあのまま寝てしまった。

疲れていたのだろう。毎晩小夜と出掛けては、遅くまで浄化を手伝っていたのだから。

それで明人も睡魔に身を任せることにした。

滲んでいく夢と現の境界線。おぼろげな色のヘアピンがゆらゆらと漂って……。

ガタンッ

椅子が倒れる音で明人は目を醒ました。

いつの間にか眠っていたらしい。時間的には5分も経ってはいなかった。

見れば、教室の真ん中辺りで男子が席を立っている。机と椅子がひっくり返っていた。

藤堂は大抵クラスに1人2人いる、所謂素行不良だった。授業もサボりがちで、今日も1限から出てきているのは珍しい。

そんな生徒だから、清水も何か問題を起こされるのではないかと構えたようだった。

クラス中の視線を浴びながら、藤堂は土下座でもするように身体を折り曲げて床に座り込んだ。静まり返った室内にゼイゼイという荒い息遣いが漂う。

「具合が悪いなら、保健室に……」

本当に体調が悪そうなのを目にして、清水は藤堂に歩み寄った。

しゃがみ込んで肩に手をやった清水が、静電気でも受けたように跳ねた。

「どうしたんですか？」

「いや、なんでもありません」

近くの女子の問いに、冷や汗を垂らしながら答えた。清水は明らかに動揺している。

「保健室に連れて行きますので、静かに自習していなさい」

腹を括ったような表情で藤堂の脇に腕を入れ、肩を貸しつつ清水は立ち上がった。

だが体格が良い上にほとんど力が入っていない藤堂の身体は想像

以上に重く、逆に清水がぐらついた。

「先生、手伝いましょうか」

「いけません！」

滅多に大声を上げない清水が物凄い形相で拒絶した。手を差し伸べかけた男子生徒は驚いて引き下がった。

何が気弱な教師をここまで駆り立てるのか、明人には分からなかった。しかしただ事ではないという空気は感じられた。

周りでも好奇や不安が入り混じったざわめきも大きくなる。

それでも何とかドアの前まで来た時、藤堂が目を覚ました。死人のような顔で何か言いたそうに清水を見る。

「大丈夫ですか？ 1人で歩けますか？」

聞いた瞬間、藤堂が血煙を浴びせかけた。

あまりのショックに藤堂を投げ出し、清水は煙から逃れた。藤堂は床にうずくまり、喘息のような呼吸と共に不気味な赤い気体を吐き出し続けている。

「早く出なさい！」

清水が叫んだ。

半ばパニックに陥った生徒達が前の扉に殺到した。外れた扉が倒れ、大きな音を立てる。

窓側にいた明人は、それを見て逆に冷静になった。

廊下に出ると追撃を掛けるようにガラスが割れる音や絶叫が木霊した。

見れば隣に並ぶ教室からも、生徒と教師が逃げ出してきた。

「決められた通路を使ってグラウンドに避難！ くれぐれも落ち着いて移動するように！」

現場の声に少し遅れて、逆にパニックを招きそうな警報と校内放送が鳴り始めた。

肌寒い風が吹き抜ける校庭に緋森高校の生徒と教員が集まってい

た。何が起きたのか理解できている者は1人として居ない。

教員達は各々のクラスの点呼を繰り返している。

錯乱して校外に逃げた生徒が何人もいるらかった。

どこへ逃げようが関係ない。

明人は街を見て、叩き落された気分になった。

住宅地も商店街もオフィス街も、街中至る所から赤い煙が立ち上っている。少なくとも徒歩で行ける範囲に逃げ場は無いように思えた。

それならここで集まっていたほうが、不安を共有できて多少気も紛れるだろう。

明人は藍の安否が気になっていた。

生真面目な藍が指示に従わずに行動することはないだろうが、やはり自分の目で確かめたい。かといってちよつと見てこようと出歩けるような雰囲気でもない。

回線が混雑しているらしく、メールも電話も繋がる様子がない。どうしようかと決断しかねていると、担任が出席簿を持って点呼に回ってきたので、明人は小声で話しかけた。

「先生、ちよつと確認してもらいたいことがあるんですけど」

「何ですか」

「1年4組の榊原藍のことなんですが」

「確か君の妹だったね。分かった。聞いてきます」

忙しいだろうに担任は二つ返事で聞き入れてくれた。

明人はお礼を言つて、ほつと一心地つけた。

それから校外に逃げた生徒が何人か戻ってきたり、教員達が今後のことを話し合っていたりしたので大分時間が経った。

体育館でも例のガスが発生しているので、今しばらくはここで待機。そんな救いような指示が出たところで、担任が戻ってきた。

「榊原君、言にくいのですが……」

そう切り出した担任の顔はかなりやつれているように見えた。もう結果は見えていたが、彼の言葉を待った。

「藍さんの行方は確認できていないそうです。でも気を確かに持って、先ほどから校外に逃げた生徒も帰ってきていますし、すぐに会えますよ」

気休めのような助言を残して、担任は教師の集まりに戻っていった。

考えまいとするほどに嫌な予想が膨れ上がっていく。

血のような息を吐き出していた藤堂。藍がああなっってしまったら、そう考えると震えが止まらなかった。

いつもと変わらない1限目終了のチャイムが鳴った。異変の只中において何か意味があるとすれば、それは恐怖劇が次なる幕に差し掛かった合図でしかなかった。

第23話B：紅霧 - s c a r l e t d i s o r d e r

キヤアアアア！

つんざくような金切り声が整列して座っている学生達の間で次々と上がった。

藍のことで上の空だった明人の後ろでも悲鳴が上がった。

電流が走ったように、明人を含めほぼ全員が一斉に起立した。そのまま押し合いへし合いしながら悲鳴の中心から離れようとする。

殺人的に揺れ動く人波の隙間から見えたのは、苦しげに蹲る女生徒だった。押さえた口元からは紅い煙が漏れ出している。

同じことがグランドのあちこちで起きている。

「さっきまで何ともなかったのに……どうして!？」

急変を目の当たりにしたらしい女子が別の友達に泣きついている。もはや避難できる場所はどこにも残されてはなかった。

次は誰がああなるのか。

疑心暗鬼に駆られていることを表すように、他人と距離をおいて立っている者も少なくはなかった。

教員らは必死に集合を呼びかけているが、集まる者は目に見えて減っていた。

じりじりと後退しながら明人は煙を眺めていた。

我を忘れて逃走するほど理性を失っておらず、かといって状況を冷静に分析するほどの余裕があるわけでもない。

緩慢な思考停止の中で気付いたこともある。

煙には空へ上る流れと地を這う流れがあるのだ。

だからどうした。

明人はその発見を一笑に付した。

いたぶるような緩やかさで、前方から煙が這い寄ってくる。

そして背後には校舎の異容が聳え立つ。窓の隙間や換気口から紅煙が流れ出し、白塗りの壁を伝う様はまるで血を流しているように

見える。

前後を挟まれ、周りの町も同じく紅に煙っている。
進退窮まった。このまま煙に巻かれ、あそこに蹲る生徒と同じように生殺しの恐怖を味わうしかないのか。

ヴヴヴ

ポケットの中でケータイが振動した。藁にも縋る気持ちで明人はケータイを開けた。

送信者：藍。本文：助けて 屋上

たった二言が鈍器で殴られたような衝撃を生んだ。

明人は紅霧に包まれた学校の屋上に目を凝らした。

人影は確認できなかったが、明人は走り出していた。

結局は吹っ切れるきっかけが欲しかったのだろう。

人間いつかは死ぬ。どうせ死ぬなら、足掻き切って死のう。

そんな達観を明人は持ち合わせていない。

ただ、唯一残された肉親が助けを求めているのなら、全力で手を差し伸べなければいけないと思ったただだった。

校庭に繋がる渡り廊下の前で、明人は思わず立ち止まった。風に乘ってやってきた香りに既知感を抱いたのだ。

そこで決心を固め、ある確信を持つて校舎に乗り込んだ。

爛熟した果実を思わせるねっとりした甘さが総身に絡みついてくる。

やはり。

明人はこの紅霧を知っていた。

《冥界の柘榴》。《墜落の魔姫^{ハデス}》が用いる隷従の魔薬である。

形は違えど、小夜が決意を示すのに使ったものと同じだ。あの時明人も不本意ではあるが、この薬を口にしていた。

つまりこれを吸っても死にはしないということだ。

そうと分かれば、躊躇うことなどなかった。粘つくような空気を

押し退け、進む。

3階まで駆け上がり、屋上に続く別の階段へ向かうため廊下をひた走る。

自分の足音のほかに、喘息をこじらせたような呼吸音が滞留している。

途中開け放たれた教室の扉から明人は中を見た。

1人の男子生徒が土下座の姿勢で蹲っていた。その背中には肥大化した肺とでも形容すべき肉塊が乗っていた。否、生えていた。

その肺状器官が収縮するたび、人間部分の口が大量の魔薬の霧を吐き出している。

あんなものがクラスに1人はいると思うと嘔吐感と鳥肌が止まない。

あれは《魔姫》の奴隷どころか、紅霧を維持・拡大させる装置でしかないのだろう。

確かに死にはしないが、自分もあなる可能性がある。

明人はすでに手遅れの生徒達に心の中で祈って先を急いだ。

屋上前のスペースの空気はいくらか澄んでいた。

ドアが少し開いており、風と一緒に話し声が聞こえてきた。

放置された備品に隠れるようにして、明人は隙間から様子を探った。

校舎内ほどではないが、空気は薄く染まっていた。薄紅のボールの向こうに2つの人影が見えた。

明人に背を向けて男子生徒が立っており、彼にやや距離を置いて藍が対面していた。

一触即発の事態を予想していたが、どうやらそこまで差し迫っているわけでもないようである。

とりあえず何か武器が要るな。

幸い、備品の影に折れた机の脚が転がっていた。心もとないが、

他を探す時間はあまりない。彼が背中を向けている隙に先手を取ることのほうが大切だ。

慎重にドアを開け、最小限の隙間に滑り込む。

彼我の距離は約10メートル。完璧な不意打ちを狙うなら、もう少し距離を詰めなくてはいけない。

息を潜め、足音を忍ばせ接近する。

急激に速まった心音。気取られるのではないかという恐怖が身を強張らせる。

藍と目が合った。目が見開きそうになるのを押し殺した様子で、藍は視線を戻した。

「先輩の気持ちは分かりました。けど、今はこんな状況なので返事は落ち着いてからじゃだめですか？ 焦って決めても良くないと思うんです。私にとっても先輩にとっても大事なことから。それに……」

注意を引くつもりなのか藍はいつになく長舌だ。演技とも思えないが、部分部分で言いよどむのも引き付けるのに一役買っている。

その間に明人は3メートルまで近づくことができた。この際内容については気にしないことにした。

この距離なら勘付かれたとしても反撃されることはないだろう。凶器を握る右手と両脚に力を込めた時、眼前の男子の背中が動いた。

しまったと思うより早く、明人は飛び込むように姿勢を低くして駆け出した。

だが、標的は一般人とは思えない滑らかな動きで藍の脇をすり抜けた。そのまま組み付く。

「藍ちゃんのことは何でも知ってる。やっぱり君は嘘がつけないな。そこも可愛いんだけどね。」

で、誰かと思えば教祖様じゃないか」

「山下！ 藍から離れろ！」

怒りに任せて叫んだが、藍が人質にされているためそれ以上何も

できない。

打開策を求めて思考を張り巡らせる。

山下の登場には少々驚いたが、少し考えれば彼の動機も理解できた。

藍のファンが魔薬でネジが飛んで暴徒化。つまりそういうことだろう。

「触らないで！」

藍が猛烈に抵抗しているが、山下はびくともしない。

「手荒なことはしたくないが、僕も男なんだ。それに嫌がってるフリなんかしても、僕にはバレバレなんだな」

山下の言動に常軌を逸した色が滲む。

藍が悲鳴を飲み込むように口を噤んで、戦意を喪失してしまった。山下は獣のような眼で明人をねめつけながら、藍の髪に顔を埋めた。

「ああ……いい匂いだ」

藍は込み上げる悪寒にただただ身震いするしかなかった。

「やめろっていつてんだろ！」

明人は一歩前に出た。

「聞こえなかったのかよ、『教祖様』？ お前が焚きつけたんだ。分かってんだろ」

山下がいやらしく口元を歪めた。

怯えていた藍が疑惑の目を明人に向ける。

最も知られたくない事が最もまずいタイミングで露呈しようとしている。

「藍ちゃん、君のお兄さんは君を売ったんだ。2年の間じゃ有名な話なんだよ？」

「……どうということ？」

藍を盾にされている以上、続く告発を止める手立てはなかった。

明人は歯を食い縛って、我が身を引き裂きなくなる衝動に耐えた。
「こういうこと」

山下がケータイを藍に見せた。

「これ……私……」

「可愛い水着だなあ。笑顔も素敵だ。場所はアメリカのどっかだろうな。他にもいっぱいあるんだけど？」

明人が渡した画像を見せているらしい。

藍は戦慄を抑えきれないようだが、目線はディスプレイから離さない。それが汚らしい肉親から目を逸らしているように思えてくる。

「かわいそうに。藍ちゃんはいつのくだらない人気欲しさかなにかの餌にされたんだよ。こんなのと一緒には居させられなうわあああー！」

奇声。一人語りに夢中の山下のケータイを藍が叩き落としたのだ。よほどデータが大事なのか、山下は半狂乱になってケータイを弄っている。

拘束を逃れた藍が明人の横を走り抜けた。逡巡はなく、一瞥もない冷淡なスピード。

明人は追いかけれなかった。

ここに残るより行って説得したほうが何倍も良いのは分かっている。だが身体が言うことを聞かない。

憤怒を表したような灼熱の塊が身体中を駆け巡っている。

「榊原アアアア！」

山下が吼えた。人を人たらしめる大切な何かが壊れた顔をしているた。

そしてだらりと弛緩した姿勢から驚異的な速さで突っ込んできた。明人は鉄棒を振り下ろし迎撃した。だがまともに受けた山下は怯まず、もろともに倒れこんだ。

マウントポジションを奪った山下が拳を滅茶苦茶に振るう。

赤白赤白。視界が明滅する。不思議と痛みはない。ただ熱い。

身体は動かないだろうと思っていたが、何の障害もなく軽々と動いた。身を起こすついでに山下の顔面に頭突きを食らわせ、脱出す

る。

「オオオオオ！」

明人の口から獣の言葉が迸る。

同属に堕したのだろう。山下の、いやこの紅霧が生む魔物の行動原理が分かった。

それは衝動であり反射であり本能。至極単純化された、思考とも呼べないものが生物のリミッターを破壊し続けている。

再び向かってきた山下と真っ向からぶつかり合う。

衝撃で死に体になるも、わざと身体を痛めるように無理矢理体勢を戻す。

一切の知略、防御、回避が存在しない、狂人の争いが始まった。

箍が外れた攻撃はどれも骨を砕く威力を持つ。防いでも折れるなら、蹴って殴って折れたほうが良い。

その帰結としての攻勢一点張り。

両の拳はとうに砕けた。骨が皮膚を突き破っても殴り殴られ、押し倒され。破れた鼓膜は音を拾わず、ザーザーとノイズが流れている。

脱臼した肩。割れた顎。アバラは清々しいほど粉々で、いくつか内臓に突き刺さっている。

潰し合いは次第にスピードを失い、かろうじて機能する部位を使い捨てる醜い消耗戦と成り果てても終わらない。

赤い泥沼でのたうちだけの無様な独楽と化し、お互い意志の力でどこまでできるレベルの負傷を超えたおかげで、意味のない戦闘は幕を降ろした。

明人は仰向けに倒れていた。

稼動しているのかも定かでない肺腑を酷使し、息を吸う。

失った大量の血の代わりに紅くて甘い霧を循環させる。

魔薬の過剰摂取で全身の神経は、焼き切れんばかりに敏感になっている。それでいて痛みを感じないのは、感じた傍から快楽に置き

換えられているのだろう。

おかげで精神だけなら踊り狂えるほどに元気だが、満身創痍の肉体はついていけない。

仕方なく空を見る。

恐らく顔はスクラップになっているので本当に見えているのか怪しいが、空は紅かった。飽きるほど網膜に焼き付けた血と霧の色。

紅い暗闇の中何かが動くのを昂った感覚が察知した。

擦るような振動を背中に感じる。

すぐ近くで気配が止まった。

空気の微弱な揺れ。そいつの独り言だろうか。

金属質の物が静かに傍に置かれた。静電気のようなざわめきが過敏な神経を伝う。

久しぶりに痛痒が感じられた。

そいつはしばらくじっとしていたが、空気を渦巻かせて去っていった。

無音全盲の孤独が訪れた。今までの躁狂が嘘のように静まり返っていて、逆に総毛立つほどだった。

明人は正体不明の存在が自分の内で犇めき合っている他なかった。

第23話B：紅霧 - scarlet disorder (後書き)

山下?な人は第12話参照。重要なことはあまり書いてないけれど
作者ツイッターもよろしく。
<http://twitter.jp/usher/yamijyuro>

第23話C：紅霧 - s c a r l e t d i s o r d e r

「大変なことになりやしたねえ」

主のいない榊原家で《起源》はソファに腰掛け、呑気に煙管を弄んでいた。

人の家ということで一応は我慢しているらしい。

「落ち着いてる場合ですか。はやくこの霧をなんとかしないと」
それを注意する小夜はもどかしそうに窓の近くをうろろしていた。

あちこちから上がる紅い狼煙が、空前の大異変の始まりを告げていた。

その数は尋常ではなく、人口密集地を中心に凄まじい速度で拡散している。

地上8階の榊原家からその様子を見ていることしかできない。

小夜は唇を噛んだ。

「確かにあなたの力ならこの霧 というか《冥界の柘榴》に対抗できますあ。しかし、この霧のシステムはちよいとあつしらの手に負えない」

「システム？」

「ここに来る前に見たんですがね、霧を吸った人間が霧の発生装置に変わるんでさあ。それも見るに堪えない醜い姿になって」

息をのむ小夜。

つまり街中の人間を浄化しなければ霧は消えず、霧を消さなければ装置になった人を浄化しても何度でも機能を取り戻す。人も霧も一度に浄化しなければ、終止符を打てない。

不可能だと絶望しかけた小夜だったが、あることを思いついた。

「でも《魔姫》の居場所は調べがついているんでしょう？ 彼女さえどうにかできれば……」

廃寺で会った時、《起源》はそれを調べていたはずだ。

《天網》は気に入らない人物だが、その能力は高い。あらゆる情報網を見張る彼ならば、人1人の居場所を特定するくらい容易い。

「それがね、いや、分からないんですよ。《天網》はどうやらあちらに加担しているようで、一切連絡が取れないんですさあ」

やはり焦った様子もなく《起源》は小夜の希望を切り捨てた。

「……だったら私達はどうすればいいんですか？ このまま指を啜えて見ているとでも？」

「それしかありません」

《起源》は抑えがきかなくなつたのか、ついにマツチを擦って煙管に火をつけた。

紫煙を吸い込んで満足げに吐き出す。

小夜には理解できない刺激臭が部屋に漂う。

「どうしてそう能天気なんですか！」

その態度があまりに悠長で、小夜は声を荒げた。

「あなたはもつと冷静な人だと思っていたんですがね、《天使》。今は座して待つ時だと思いませんか」

《起源》はやんわりと小夜を諷めた。

「《魔姫》はこの霧を広げるので手一杯。おそらく彼女が姿を現すのは自分に有利な場が整ってからであ。

ですが、彼女の性格からしてそれまで大人しく待っているということはないでしょう。《復讐の女神》の能力をもつてすれば、あつしらの位置を特定するのは容易い」

小夜の中でパズルがどんどん組み上がっていった。

「つまり私たちを狙ってきたところを返り討ちにすると？」

「御明察。《女神》の洗脳を解きさえすれば、おのずと異変は終わりますよ。《女神》の手で」

果たしてそううまく事が運ぶだろうか。

小夜が不安を抱くのも無理はない。

偶然の積み重ねで成り立つ計画。綻びはいつどこでも生じ、結

果全てを破滅させるだろう。

「心配いりませんぜ。何年彼女に付き添っていたと思います。それ故悲しくもありませんがね」

《起源》は憂いを漂わせる表情を浮かべた。彼の中では異変などとつくに終わっているかのようだ。

小夜は思う。彼は《魔姫》らを滅ぼすつもりなのだろうと。

それは仕方のないこと。これほどまでに大規模な異変を起こせば、人間・《幻象》双方に深い傷痕を残すだろう。

それならば私はどうなのだろう。

榊原家に不幸をもたらしした罪は決して許されるものではない。

粛清されたところで未練はあれど文句は言えない。だが自分だけが残されたのでは、あまりに後味が悪い。

「ところで《楽園》はどうしました？ 襲撃に備えて準備してもらいたいのですが」

「え？ さっきからそこに座って……！」

小夜は《起源》の隣を指差した。

彼女はそこでテレビを見ていたはずだった。

だがその姿は影も形もない。

「くく、彼女らしいと言えばそうなんですしょうが、いやはや困ったものだ」

呆れを通り越した《起源》の苦笑。

それが小夜には何か満足げな響きに聞こえたのだった。

目を閉じ、遙は視ていた。

黒いフィールドの中で一際輝く光点が2つ。自分のすぐ傍にいる。

「どう、視えているかしら？」

幼い声に是と頷き、遙は視界を広げていく。

この建物を出たところから、急にフィールドが薄く霞んだ光に包まれた。

言うなれば《魔姫》の一部である魔性の霧のせい。私の目が捉えるのも無理はない。

索敵に支障はないので、視覚可能域を一気に拡大する。薄明るい視野に、光る点2つ接触しているのを発見した。

《起源》？ 《天使》？ それとも《楽園》？

誰かは分からないが位置は特定できた。

遥は瞼を開けた時、別の点に気付いた。

不安定に明滅を繰り返す弱い光。それで今まで認知できなかったらしい。

《幻象》しか映りこまないフィールドにあるのだから、その点もそうなのだろう。だがそんなものを見るのは初めてで、遥には正体が分からなかった。

頭の片隅にでも置いておこう。

そう思い、遥は改めて目を開けた。

「見つけたか？」

しなやかな肢体に密着する黒のスーツを着込んだアキラが確認する。

「うん」

「なら行つてきなさい。《起源》は滅ぼしてもいいけど、《天使》は連れて帰つてね」

《魔姫》は足を組んで椅子に座ったまま命じた。

「了解」

遥とアキラは連れだつて紅い外界に赴いた。

初動から約5時間。時刻は午後2時をまわった。

魔薬の霧は緋森市をドーム状に覆っているが、《魔姫》が言うには密度はまだまだなのだという。

それでも太陽の光はほとんど通らず、冬の境界に踏み込んでいることもあり気温は極端に低い。そのうち紅い雪が降るかもしれない。狂気じみた冷氣と快楽にあてられて動けなくなる魔境が広がっている。

常人には耐えがたいが、《魔姫》の僕と化した者にとっては、自動で燃料を補給してくれる天国である。

そんな魔界の恩恵を賜って、獏犬と毒蛇は獲物目掛けて疾駆する。

第23話C：紅霧 - scarlet disorder（後書き）

待たせた割に内容薄くてごめんね。
次回波乱の予感……！

「アキラ、寒くない？」

遥は長袖の制服の上に黒のロングコートを羽織っているが、アキラは肌に張り付くような奇妙なスーツだけ。胸や関節部分には装甲があるものの相当寒そうに見える。

「大丈夫だ。これは機動性を最大限に活かす造りだが、見た目より頑丈だし保温性も上々だ。ちよつと恥ずかしいのが難点だけど」

「セクシーなボデイレインがくつきりだよ？」

「言うな！ ああもう余計恥ずかしくなってきた」

顔を赤らめるアキラ、くすくすと悪戯っぽく笑う遥。

紅い霧に満ちた住宅地に人影はなく、道端には人体を冒涇したような歪な発生装置が転がる。そしてこれから殺し合いに出向くようには見えない2人の無邪気さ。

それらを異常と感じる者はすでにいない。

しばらく歩くと目的地が見えてきた。

「ここよ」

遥が指差し、アキラが見上げる。

紅いベールに包まれたマンションはゲームの中の魔物が巢食う塔のようだ。待ち受けるのが人間ではないあたり、その形容もあながち間違いいではない。

ふとそんなことを考え、遥は瞼を閉じて索敵を開始した。

やはり光点が2つここにいる。

俯瞰的な見方でしか場を捉えられないため、何階に標的がいるのか分からない。遥の能力はこういった多階層の構造では真価は発揮できない。

だがここには1度、明人と来ていた。おそらく彼の家が拠点になっているのだろう。

遥とアキラは武装の最終点検を手早く済ませた。

「ついてきて。たぶん8階にいる」

遥の声は少し強張っていた。

2人でエレベーターに乗る。

遥は明人と仲直りした後、彼の家にお邪魔したことをぼんやりと
思い出していた。

あの時もこうしてこの狭い箱に乗っていった。

お互い利用しあう欺瞞的な関係。

彼の《天使》抹殺計画は頓挫した。

遥も偽の情報に踊らされた結果、仇敵の下僕になっている。《魔
姫》に従うのは今でも違和感があるが、アキラと再会し家族のよう
な粹に入れたことは素直に嬉しかった。

彼はどうしているだろう。

チンと音が鳴り、思考は中断された。

エレベーターの扉が開く。

遥が先に降り、敵の気配を探ろうとした瞬間だった。金属のロー
プが切れる音がした。

「アキラ！」

目の前でアキラを乗せたままエレベーターが落下した。

脳髓に突き刺さるような金属同士が奏でる不快音が響き渡る。

慌ててシャフトを覗き込むと、暗い縦穴に火花を散らしてエレベ
ーターは落ちて行くのが見えた。

罨？ 襲撃が悟られていた？ 何故？

「分断は成功よ」

声が耳に届くか否かの刹那に遥は三つ又の剣を振り抜いた。

空ぶった銀色の刃の向こう。そこには白い翼を展開し、霧中に浮
く小夜の姿があった。

ゴスロリ風の黒装に包まれた白蠟の身体。霧と同じ色の瞳が無表
情に遥を見ている。

小夜は手にしたケータイをポケットにしまった。

金属がひしゃげる轟音と衝撃がマンションを揺らした。

「何故《魔姫》に従っているのですか？ あなたの出生を鑑みれば随分おかしい気がします」

小夜が遙に問いを投げかける。

すぐには仕掛けてこないらしい。だがアキラを助けようにもこの狭い縦穴に入れば、上からくる小夜を止められない。

考えた末、遙は時間を稼ぐことにした。アキラの治療力と破壊力をもつてすれば、脱出にそう時間はかからないはずだ。

「あなたこそ戻らなくていいの？ 《魔姫》さまはお怒りよ」

「お断りします。それでこっちにつく気はありませんか？ 私は《柘榴》を無効化できるので、その心配しなくてもいいですよ」

「……何が目的なの？」

「もちろん《魔姫》を滅ぼしてこの毒霧を消すためです」

遙は眉をひそめた。

《魔姫》を滅ぼす。その言葉に眠っていた毒蛇が静かに目を覚ますのが感じられた。

「私にメリットがあるとは思えないわ。どうせ《起源》の差し金でしように」

「……やっぱり、あなたが言ったとおりでしたね」

小夜が溜息をついて、妙に弛緩した体勢をとる。

とつさに迎撃の構えをとった遙を、側面からの重撃が襲った。

「な……！？」

見えない何かに弾き飛ばされ、廊下の端の壁に押さえつけられた。逃げようにも上半身がちりとホールドされていて動けない。

「だから言ったでしょう。《天使》早くしなさい。彼女が戻ってきまさあ」

忘れもしない声が遙の耳に届いた。

「《起源》！」

胸を圧迫する不可視の盾のせいで遥の声は掠れていたが、より怨嗟を強調する形となった。

不倶戴天の男が通路の奥から悠然と歩み寄ってくる。

黒い羽織が紅い風にゆらめく。灰色の着物の袖から伸びた細腕が煙管を弄ぶ。平素の生氣に乏しい目がいまや爛々として歪光を滾らせている。

真っ向から視線をぶつける両者の間に、小夜が降り立った。そして浄めの月光で構築された剣が遥の右腕を貫いた。

「ぐあ、うううっ！」

神経が焼切れるような痛みに襲われ、思わず《毒蛇》を落としてしまう。

「《魔姫》の呪縛から解放してあげます。もう少し辛抱してください」

盾越しに小夜が遥を抱擁する。

光り輝く翼に包まれて遥は声なき声で絶叫した。

赤熱するワイヤーで縫われるような痛みが全身を苛む。

頭や両足が勝手に暴れている。背後の壁に打ち付けたせいで後頭部からぬるりとした液体が滴った。

そのうちに苦痛の中に別の感覚が生まれてきた。

錆が落とされ、がんじがらめの鎖が緩むような解放感。あるべき場所に帰りつつある安心感。

それらに身を任せようとした時、地獄の底から溢れ出す鬼の咆哮を聞いた。

「《天使》！」

エレベーターの天井が破壊される音を聞きつけ、《起源》が警告する。

「あとちょっとなんです」

小夜は遥から離れようとしない。

《起源》は小夜に駆け寄った。

「ここであなたを失うわけにはいかないのでさあ！」

背後でシャフトの金属壁が挟られる音が高速のビートを奏でる。

《起源》は小夜を無理やり引きはがして抱えると、通路の格子を飛び超え空中に身を躍らせた。

触れるもの全てを切り刻んで、今いた場所に黒い暴風が到達するのとはほぼ同時だった。

「遙！ 大丈夫か、しっかりしろ！」

軽く頬を叩かれて、遙は意識を取り戻した。

「あ……か……っ」

息ができない。喉の奥がカラカラに干上がっている。

アキラが素早く《柘榴》を何粒か取り出し、遙に飲ませた。

窒息しそうになりながら何とか飲み下すと、気分が落ち着いた。

「ありがとう」

「アタシがもっと注意していればこんなことには……戦奴が聞いて呆れる」

「油断した私が悪いんだから気にしないで。それより今は」

遙は立ち上がると眼下に目を走らせた。

下の駐車場に2つの影が立っている。

「やっと見つけた。アイツを滅ぼさないと」

「みんなの仇だからな」

もう戻れない日々の映像が脳裏をよぎった。アキラにしても同じなのだろう。

「行こう」

どちらからとも言わず、2人は中空へ身を投じた。

地上で待ち受ける小夜は翼を羽ばたかせた。舞い散る純白の羽根が弾幕となり発射される。

紅霧を割断する光の洪水が落下する2人を飲み込んでいく。

遥の剣が3つの鎌首を振り立てて光弾を両断する。怨敵を前に強化された身体能力と剣の防衛本能が、バランスの取れない空中において驚異の剣捌きを披露する。

アキラは壁を強く蹴って、さながら砲弾のように突撃した。

魔犬の護りを無効化する弾。被弾の苦痛は想像以上だったが、一直線に小夜へと向かう。

「おりゃあああ！」

右腕にブレードを形成し、推進力に乗せて振り下ろす。

アスファルトを砕く一撃は避けられたが、結果として小夜は弾幕を中断せざるを得なかった。

その間に隙の大きい着地・受け身を完了させ遥は、《起源》との

距離を詰める。

「《起源》！^{オリジン}」

「来なさい《復讐の女神》^{ネメシス}。あなたの目を覚まさせてあげましょう」
力の限り《怨疾毒蛇》^{エリニユエス}を叩きつける。

強烈無比の一撃を見えざる《不壊》で受け止め、その衝撃を利用して《起源》は後方に飛び退った。

遥の右手に伝わる衝撃は思わず剣を手放してしまいそうになるほどだ。

今はそんなことを憂慮している暇はない。紅いベール越しの日光に輝く刃を自在に伸縮させ、刺し殺さんと追い続ける。

側面、頭上、アスファルトを突貫しての真下からの攻めも難なく全て弾かれてしまう。

「どうしました？ あっしを貫くための牙でしょう。仕留めてみな

せえ」

《起源》もやられてばかりではない。攻撃の合間に不可視の盾を飛ばし、殴りつけてくる。

「ふっ」

一度受けた攻撃であり、霧のおかげで気流が読みやすい。当たることはない。

勝負は膠着状態に入ってしまった。

「相変わらず堅いわね。『外側』は」

「ふふ、あなた方の狙いは分かっていますさあ。だが……」
「分かっているからこそ焦るんじゃない？」

自信に満ちた言葉が《起源》を遮った。

チラとアキラの方を見遣った。

アキラは《出来損ない》の回復力にものをいわせ、攻撃に対して一歩も引かない。

対して打たれ弱い小夜は遠距離戦に持ち込もうとしているようだが、距離を詰めることを念頭に置いた立ち回りをされて思うように動けない。

大振りの回し蹴りを躲した小夜は、その隙に空へ逃れようとした。
「逃がすか！」

いやに冷たい感触が右足に絡みついた。

見れば、アキラの身体からどす黒い影の触手が生えている。

地面に叩きつけられる寸前に切り離すことができたが、逃げの手というわけにもいかないようだ。

四肢に生えた漆黒のブレードと臂力を活かし、アキラは隙あらば退避しようとする小夜を追撃する。

一見アキラの優勢に見える戦い。その内実は逆である。

切り結ぶ度に小夜はアキラの得物を打ち消す。それはアキラの核を為す《柘榴》を揺るがす大打撃である。

並みの外傷ならものともしない屈強な肉体でも、裂かれた心の傷

からはどくどくと血を流しているのだ。

小夜が攻勢に転じれば、防御する術がない。

敗北も覚悟の上。それでも接近戦を維持しなければいけない。

遙に《起源》を滅ぼすチャンスを与えるためにも。

アキラは拳を握り締め、小夜に食らいついていった。

アキラ、負けないで。もうすぐだから。

心の中で祈りながら、遙も攻め手を緩めない。

むやみやたらと攻撃しているように見えて、《起源》を小夜の方へ移動させないように《毒蛇》の三つ首を振るっている。

もう何十発と打ち込んでいるが、息が切れることはない。

「く……」

平静を保っていた《起源》の顔が陰った。

遙はその瞬間を待っていた。

「効いているようね」

《起源》は忌々しそうに眉間に皺を寄せ、遙をねめつけた。

紅霧もとい《冥界の柘榴》は《魔姫》に身を委ねる意志のない者には毒と同じだ。

特に《幻象》は自我が固まっているため、他者に従属するのを嫌う傾向にある。それが毒性を強めることになる。

ふいと《起源》が目を逸らした。

「やああああ！」

集中の糸が切れたのだと悟り、3つの刀身を束ねて跳躍、刺突する。

《起源》の心臓を狙った渾身の一撃。

盾と剣がぶつかり合う壮絶な音が木霊した。

防がれはしたが、今までの頑健さが僅かながらも失われているように感じた。

「何のこれしき！」

盾に押し返され、傍にあった車に礫にされる。

「芸がないのね」

遙は冷ややかに笑うと、剣を握る手首を軽く動かした。

あっという間に車は解体され、崩れ落ちた。

「それでも時間稼ぎにはなりませう」

《起源》は小夜へと距離を詰めていた。小夜もその意思を汲んで向きを変えた。

「させない！」

拘束の最中にピンを抜いておいた手榴弾を間に投げ込む。

爆発物に怯んだのは小夜だった。まっすぐ合流しようとしていたのを軽く軌道修正した。

そこへアキラが割り込み、更に阻止する。

それを見た《起源》は早々と退避に移った。

同時に乾いた音とともに手榴弾が炸裂する。仕方ないこととはいえ、爆風と破片がアキラごと《起源》を襲う。

アキラは纏っていた魔犬を背面に集中させ、防御した。そして影が飲み込んだ破片を小夜目掛けて撃つという離れ業をやったのけた。

一方の《起源》も《不壊》で背後の爆発から身を守る。

「これで終わりよ！」

背後に気を回している《起源》に、遙は鞭のように剣を振るった。これまで以上に多角的な攻めを展開する。

その都度弾かれてしまうが、それくらい想定の内だ。

遙は腰に付けたマシンピストルを抜き、引き金を引いた。

《起源》の頭から足先まで限なく掃射する。空の葉莢が大量に零れ落ち、軽やかなリズムを奏でる。

遙の読み通り、致命傷になる《毒蛇》と頭部への銃撃は防がれた。だが防衛の的が前後左右に分散していることと魔薬の干渉が功を奏し、数発だが両脚を撃ち抜くことができた。

「おおあ……」

《起源》が苦痛に呻き、膝を着いた。

遙は身震いした。《毒蛇》が我慢ならないように激しくのたうつ。

躊躇せぬよう、怖気づかぬよう。深淵から湧き出す破壊衝動に遥は身を任せることにした。

「そんな……《起源》……」

今まさに決着がつかんとしているのを目の当たりにして、小夜の動きが鈍った。

アキラはがら空きの腹に黒い拳を叩き込んだ。

命令なので消し去るわけにはいかない。ダメージもあつて十全といえる威力ではなかったが、小夜の身体は地面に崩れ落ちた。

「遥！」

友人の元に駆け寄ろうとした時だった。視界が暗転し、前のめりに倒れてしまった。

起き上がろうとするが、腕に力が入らない。体内の《柘榴》を大量に削られたせいらしく、魔犬を呼び出すこともできない。

「くそ……」

あの男は最後まで油断はできない。遥も分かっているだろうが、2人でいた方が対処しやすいに決まっている。

霧だけでは足りない。持ってきた《柘榴》を全て噛み砕いて嚥下する。

痺れるような快感に至福の酩酊を覚える。

だがいつまでも酔っているわけにはいかない。自らを叱咤し、立ち上がる。生まれ変わったように身体が軽くなっていた。

低く轟くような雷鳴が紅い空気を震わせた。

感じる違和感。その正体は突如、世界を白く塗りつぶして落ちてきた。

目を潰す烈光に続き、立っていられないほどの揺れが襲ってきた。手榴弾など及ぶべくもない、爆音と熱風を孕んだ衝撃波に吹き飛ばされた。

気付けばアキラは無様に打ち捨てられていた。

数秒ほどで五感が戻り、アキラは変わり果てた風景を目にした。

遙と《起源》がいた場所を中心に、まるでミサイルでも落ちたかのようなクレーターができていた。

その傍で豪快にひしゃげた車両が炎上し、空気は火事場のように熱を持っている。

そんな戦場跡に2つの人影が立っていた。

「凄いや、明人。流石に才能はあるね」

「……」

血塗れの制服を着た榊原明人。生気のない立ち姿。その手に握られた日本刀だけが刺すような光を帯びている。

表情の無い、鳥類のような目がアキラを捉えた。

心底楽しそうに明人の周りを跳ねていた綾瀬も気付く。

「お前たち、何をした？」

修復中の身体から絞り出すようにアキラが聞いた。

榊原明人。今回の作戦の鍵。すでに変容が始まっているらしい。

少女の方は会ったこともない。

「アキラちゃんとか言ってたっけ？ あなたは知らなくても私は知ってるよ、君のこと」

「なに……」

心を読まれたみたいで不快だった。

「でも今はあんたに付き合ってる時間はないんだよね。おへそもろとも消えてしまえ！」

嫌な予感がして綾瀬が言い終わる前に、アキラは死ぬ気で綾瀬へ跳躍した。

今までいた場所に光の塔が聳えていた。超高圧の電気エネルギーが地面を抉り飛ばしている。

「おっと！」

すれ違いざまに綾瀬を斬りつけたが手応えがおかしかった。綾瀬は何食わぬ顔でアキラを見ている。

攻撃はどうあれ、あの雷を避けられたのは僥倖だった。

だが次はないのは明らかだ。

「無差別攻撃も楽しいけど、ちゃんと狙って当てる練習もしなきゃね。それっ」

綾瀬の合図で、明人が刀を振った。

獰猛な唸りを引き連れた雷速の槍が、アキラを貫いた。

身体が石になってしまったようだった。耳も聞こえず目も見えず、叫ぼうにも口舌が硬直して呼吸さえ不可能。体機能は軒並み危険域で、死の淵まであと僅かだ。

この感覚、夜の街で《起源》と引き分けたあの時と同じだ。

違うことといえば治し方を覚えているのか、回復速度があの時の比ではないことが。

ますます化け物に近づいている。

ふらふらと立ち上がりながら、アキラは嗤わずにはいらなかった。

「やっぱり《出来損ない》は無駄に頑丈ね。あんたは度を越して変態性能みたいだけど」

まあいいや、と綾瀬も笑う。

「仕事は済んだし、もうひいていいよね」

エンジンを噴かせて突っ込んできた黒いワゴンがアキラを撥ね飛ばした。

着地もままならずボロ雑巾のように地面に叩きつけられた。

「ごめん、もう退くから許してね」

綾瀬は明人を引っ張って、意気揚々と車に乗り込んだ。

朦朧とする意識を現世妄執の治癒力で繋ぎ留め、アキラは見た。後部座席で昏々と眠る遙の姿を。

遙が奪われる。

痛み、憎しみ、怒り、友と居たい気持ちも。ありとあらゆる感覚や想念が《起源》への殺意に置き変わっていく。

体内の《柘榴》が負感情と欲望を増長させ、暴走状態に陥ってい

く。それを止められる余力は残されていない。

力なく横たわるアキラの周りに3匹の魔犬がうろついている。

彼らは互いに溶けて混ざり合い、紅霧を吸い込んで更に大きくなっていく。

やがて無抵抗のアキラをも取り込んだ巨大な闇の塊が、不気味に胎動を始めるのだった。

第25話A：逃避 - e s c a p e j o u r n e y

紅霧が滞留する道路を黒いワゴンが進んでいく。

視界は最悪で2、3メートルすら覚束ない。明らかに霧の濃さが増してきている。

事故車が放置されていたり、変態が完了した人間が蹲っていたりするため無闇にスピードを上げるわけにもいかない。

いずれアキラも追ってくるはずなので、何重にもじれったく感じてしまう。

「ん……う、ん」

助手席で気を失っていた小夜は、ぼんやりと目覚めた。

倒してあるシートから起き上がろうとした途端にアキラに殴られたお腹に鈍痛が走り、顔を歪めた。

「目が覚めましたか。早速で悪いんですがね、浄化をお願いします」

「は、はい！」

状況を思い出して一瞬で頭が切り替わった。

小夜は《起源》の胸に淡い光を帯びた右手を乗せた。

聖浄の月の力が流れ込み、《起源》は苦痛とも解放感ともとれる大きな溜息を漏らした。

「辛くはないですか？ 今日のあなたは力を使いすぎている」

疲れの浮いた顔で《起源》が言う。

「それはこっちの台詞です。侵蝕も深い所まできてますし、酷い怪我じゃないですか。起こしてくればよかったのに」

脚の銃痕からはまだ生温かい血が流れている。時折、苦患の表情が垣間見える。

アクセル・ブレーキは器用に《不壊》を使って行っているようだが、その姿は痛ましい。

「あなたには休めるときに休んでおいて欲しかったんですあ」

「気持ち嬉しいですが、《柘榴》の処置は早い方がいいんです」

「それは分かってますがね……ありがとうござんした。後ろの方にもしてあげなせえ。もちろんあなた自身にも」

後ろを覗き込むと遥の姿が目に入った。

「《女神》は後回しでいいですね」

「ええ、ここで暴れられては困りませう」

小夜は言われた通りに動き出した。

後部座席で明人はドアに靠れていた。目を瞑り、血塗れの格好で人形のように微動だにしない。死んでいるのかと錯覚してしまうほどだ。

こちらもちちらで痛ましい。一体何があったのだろう。

小夜は綾瀬を盗み見た。

綾瀬は起きる気配のない遥のコートをひっくり返して何か探していた。

「彼を浄化してもいいわよね」

「ん？ ああ、どうぞ。ただ《柘榴》だけにしとかなないと痛い目に合わせるよ。すぐ分かるんだから」

いつもの笑顔で遥の持っていた小銃を突き付けられた。

だけど、言うからには他のものもあるのだろう。

明人の手を握りながら、探りを入れてみる。

漠然と3つの力を感じる。《柘榴》は確定としてあとは《樂園》だろうか。もう1つは力が強いのに掴みどころがない。

「私を殺したのはこのピストル？ それともこのサブマシンガン？ はたまたこの手榴弾かしら」

綾瀬は遥の得物を並べて、怪しい笑みを浮かべている。

「殺されたことがあるの？」

明人の浄化を進めながら、小夜が聞く。

「あれはあなたが日本に帰ってきた日かな。撃ち殺されたらしいんだよね」

「らしい？」

「私じゃないからね。……あれ、理解できてないみたいだね」

曖昧な顔をしている小夜に、その方が理解できないという顔をしてみせる。

「《幻象》の再生能力を応用すれば、分身することができるって知らないの？ 殺されたのはその1人」

「は、初耳よ。知っていましたか《起源》？」

「理論的には。あつしにはできませんがね」

驚いた小夜が《起源》に聞くとそっけない答えが返ってきた。

「分かりやすく言うと細胞分裂みたいなものかな？ あれは細胞内の染色体を一時的に倍にして分かれるけど、私たちは身体の一部を千切ればそれが元の姿に戻ろうと再生するんだよ」

綾瀬は得々と話し出した。

《幻象》の自己再生能力は単に傷を癒すものではないらしい。

例えば髪を抜いて放置しておけば、そこからもう1人の自分が再生される。

だが普通は抜けた時点で、現在もそれが自分だと正確に認識できる者は少ない。

《幻象》になったとはいえ素体は人間。爪でも髪の毛一本でも身体を離れれば、それも自分だという常識など持ち合わせていないのだ。

自分が何人もいればと、誰しもが夢想したことだろう。だがそれは大抵分身を便利な奴隷としか見ていない。

実際は分身を生んだはずの自分が、いつのまにか分身に取って代わられる。それは珍しくもない茶飯事。

人はアイデンティティーの危機を無意識下で忌避し続ける。まして自分殺しを敢行する狂気も持ち合わせてはいない。

そういう認識が障害になって普通は分身できない。

「でも私はできるんだよね。互いに干渉だけど、全員の経験と記憶は共有財産として使わせてもらってるわ」

こんなの見たこともないけど扱いはお手の物よ、と自慢げに銃を

弄んでみせる。

「……スケールが大きい話ね。はい、次は綾瀬の番よ」

ひとまず明人は安静にして、綾瀬の横に移動する。

「痛くない？」

急に不安になったのか綾瀬が尋ねてきた。こういうしおらしい一面もあるのかと、少し意外に思う。

「大丈夫。まだそんなに定着してないから」

「そっか」

肩を寄せると綾瀬は安心したらしく身を任せてきた。

やわらかな燐光が繭のように2人を包み込む。

「この霧もさ、同じ方法で生まれてるんだよ。ただ私みたいに放任主義じゃないだけで」

「どういうこと？」

「霧の一粒一粒がすごく小さい《魔姫》なの。再生が抑えられてるから霧みたいに見えるだけで」

「それじゃ《魔姫》を吸い続けてるわけ？」

小夜は素っ頓狂な声を上げた。

「あはは、まあ血とかだと思うけどね」

それが体内で増殖・分裂して人間を紅霧発生装置に変貌させてしまつらしい。有り体にいえばウイルスと同じである。

「だからアイツがやろうと思えば、お腹を突き破って出てくるとかもできるんじゃないかな」

「うっ……」

少し想像して気分が悪くなった。

《魔姫》と対峙する時は、浄化を欠かさないようにしないといけないかと、肝に銘じた。

「まあ無理だろうけど。アイツみたいなやつは自分が世界に2人もいるのを認めるわけないんだから」

「はい、完了。さっきから《魔姫》のことやけに詳しいみたいだけど」

「ああ、それはあつしがスパイをさせていたからであ。あなたは早々に魅了されてしまったようですから」

「え……、あ、すみません」

申し訳ない気持ちになつて小夜は白い頬を朱に染めて俯いた。

「なに、謝ることはありませんぜ。あなたは立派に役目を果たしたじゃあないですか」

何かできたことがあつただろうかと、記憶を反芻してみるが思い当たらない。これ以上恥ずかしい思いをするのも嫌なので、小夜はそこに追及しなかった。

第25話B：逃避・escape journey

小夜たちを乗せた車は先ほどから高架上を走っていた。

ここでも街中ほどではないが片側二車線の道路に壊れた車やバイクが乗り捨ててある。

午後3時も半ば過ぎ、冬の太陽は早くも傾き始めたらしい。血を吸った綿のような雲の切れ間から斜陽が射し込んでいる。

高所から見ると緋森の町は紅いダム湖に沈んでいるようだった。

「どれほど範囲を広げたんでさあ。終わりが見えませんぜ」

小夜の隣で《起源》が呆れたように呟いた。傷はだいぶ塞がったようで、今は普通に足でアクセルを踏んでいた。

「仕方ありませんな。《女神》を浄化してやってくだせえ。脳に直接電流を通しましたんで、途中で起きることはないでしょう」

綾瀬に武装解除された遥はシートベルトできつく緊縛されていた。初動を少しでも遅らせることができれば上出来という程度の拘束でしかないだろうが。

「了解です」

小夜が早速取りかかろうとした時、洞窟の崩落を思わせる音が車を揺さぶった。

激しくも大きくもないが、生存本能を脅かす部類の超重音だ。

「見て！」

後部に座っている綾瀬が緊張した様子で叫んだ。

トランクの窓の外、紅い霧の中に追跡者の全貌を確認する。

2メートル強はあるだろうか。影を凝縮した巨大な何かが四つん這いに近い体勢で迫ってきていた。

狼とも虎ともとれる頭部には炎が2つ燃えている。異様に発達した前肢に備わった大振りの鉤爪がアスファルトを抉り、進路にある車両を薙ぎ倒す。

力強く荒々しい前面に対して、下半身は気化しているようにおぼるげだ。陽炎のように揺らめいてマント状に広がるっている。

戦車と幽霊。影の魔物は別種の恐怖を同時に体現していた。

「見るも無残というべきか、流石の忠節というべきか」

《起源》はバックミラーで確認して嘯いた。

「ちようどいいのもあるし、獣狩りと行きますか」

遥から取り上げたハンドガンをジャキツと構える綾瀬。

「トランクを開けませあ。しっかり狙ってくださいえ」

「オッケー」

ドアが開くや否や綾瀬は獣の頭に狙いを定めて引き金を引いた。

銃弾は狙い通り額に吸い込まれていったが、何の痛痒も与えられないようだ。

逆上した影の獣はおもむろに單車を驚掴むと、投げつけてきた。

「《起源》右！」

身も竦むような急な動きで車が車線を変える。すぐ左で單車がアスファルトに衝突して派手に爆発した。

「ひゃあ!？」

「浄化に集中して！ あれを滅ぼせるのはそいっただけなんだから」
思わず頭を庇った小夜に、綾瀬は振り向きもせず鋭い注意を飛ばした。

綾瀬の背中からは冷たく研ぎ澄まされた闘気が立ち上っているように思われた。

そう、ここはまだ紅の領土。気を休めていい時間などないのだ。

小夜は遥の胸に軽く手を当て、清めの月光を巡らせる。

やはり他の人に比べて侵蝕が進んでいる。自分から求めてしまったこともあり、中枢が冒されているのは明らかだ。

相当の痛みを伴うのだろう。遥は無意識に小夜から離れようと身動きしている。

迅速に、慎重に。小夜は気を引き締め己が職務を全うしにかかった。

もう数発撃ち込んでみたが、手応えが感じられない。ならば、と綾瀬は手榴弾のピンを抜いて放った。

沼に石を投げ入れたような感触と共に、爆弾は怪物の腹に吸い込まれていった。

空隙の後、破裂音。相克する黒煙と赤炎の様相が呈される。

怪物が巨体をよじり上半身が弾けた。まるで花が咲いたような形状になっている。

闇の花弁の中央に腰から下が埋もれた状態でアキラが据えられていた。

「そこにいたんだ」

何の呵責も感じさせない滑らかな動きで綾瀬は銃口を向け、弾を発射した。

命中するたび黒い衣から血がしぶく。無抵抗なアキラは衝撃で身体を揺らすだけが、影の魔物は痙攣して追跡を緩める。

「やっぱりあんたがコアなの。なんだかゲームみたい」

狂える微笑みを浮かべながら綾瀬はマガジン1本を使い切った。

リロードの際に怪物はアキラを包み込んで横に跳躍した。黒い尾を引いて高架下に消えていった。

「やった！」

ガッツポーズを決める綾瀬を小夜は複雑な目で見ていた。ためらいもなく人を撃てることがショックだった。

「浄化は終わりましたか？」

ふっと一息ついた《起源》が尋ねてきた。

「ほとんど完了しました」

マンションで強引に浄化したのが幸いした。あの時、蓄積し固く定着していた部分を崩していなければこうも簡単にいかなかっただろう。

アキラが与えた数粒の《柘榴》と霧では鎖の補強には足りなかったようだ。

遙の体内にもうほとんど《柘榴》は残っていないはず。

あとは精神力次第だ。体力が回復しさえすれば、目も覚めるだろう。

小夜は汗を拭き、息抜きに窓の外に目をやった。紅霧が薄くなっているように感じるのは気のせいだろうか。

何かを暗示するような空隙があった。

次の瞬間、車の左側、高架外の中空から黒い津波が押し寄せてきた。

「くそっ！」

《起源》は思いつきりハンドルを切り、影から逃れようとした。

その甲斐なく金属のドアを紙か何かのように貫いて、影の爪牙がなだれこんできた。車は左へ引き摺られ、妙な浮遊感も伝わってきた。

「ぐっ！ん……」

逃げ場のない車内。小夜の左肩を漆黒の爪が抉った。

鋭い痛みが刻み込まれる。だがそれ以上の快感が押し寄せ、逆にとろけてしまいそうになる。

一度《魔姫》に従属した身。意識で依存から抜け出ようと、味をしめた小夜の身体はすんなりと快楽を受け入れてしまう。

「やああああ！」

倦怠な吐息を振り払い、気合いの声を上げて小夜は光の剣を振るった。

スッパリと裂かれた闇が痙攣し、侵攻を止めた。

「早く！」

綾瀬と明人はトランクから、《起源》は運転席のドアから脱出した。

影を食い止めながら、小夜は遙を縛るシートベルトを外すのに四苦八苦していた。

影は車を覆い尽し、金属の骨組みが鈍い悲鳴を上げている。汗がじつとりと浮かび、心臓が破裂しそうになる。

何とかシートベルトを外し、遙を抱える。ドアを塞ぐ影を斬り裂いて外に飛び出した。

間一髪。歪んだ音を立てて車はスクラップに変わり、巨大な影に飲み込まれていった。

息つく暇もなく、小夜は異変に気付かされる。

小夜たちは高架から引きずり降ろされ、空を舞っていたのだ。

「いやああ！ 死んじゃうううう！」

綾瀬の悲鳴が下から聞こえてくる。

スカートを押さえながら、落下していく綾瀬が見えた。

即座に純白の翼を展開。霧を退けながら急降下し、綾瀬を捕まえる。近くにいた明人の手も掴む。

能力を使ったことで麻酔が切れ、焼けるような痛みが左肩に再来した。

体勢を元に戻そうとしたのだが、3人分の体重が小柄な身体にかかり、翼から力を奪っていく。

「も、無理……！」

翼が霧散し、4人の身体が自由落下を始める。

地上でとぐるを巻いていた影から4人を槍玉に挙げるべく触手の群れが突き上がってきた。

小夜の両手が塞がっている。防御も攻撃もままならない。

綾瀬の幻覚もこれを止める即効性を持たない。明人への命令も同じだろう。

軽い風切音がして、目も開けられないほど鋭利な風がすぐそばを通り抜けて行った。

明人と綾瀬を掴んでいた感触が消える。

ゴオオオオアアア！

暗闇の中、魔物の慟哭が聞こえる。

「あぐっ！」

背中から地面に落ちて、呼吸が止まりかけた。

何とか身体を起こすと、痛みに混乱する視界に影法師が揺らめいていた。

「はあ……やっとな解放されたわ」

その声が、気配が周囲の温度を墜落させていく。

《柘榴》による暴走よりも厄介な存在に今更気付いた。

冷気を帯びた硬質なものが小夜の首から頬をなぞっていく。

「震えてる。うふふ、かわいいそうに」

指一本動かせないほど硬直している身体。その中で行き場を失った恐怖が暴れている。

ようやく視力が戻ってきた。目の前を白刃が生物的な滑らかさで主の元へ戻っていった。

伝承にある復讐の3女神、その蛇髪のごとき死毒の剣がゆったりと身をくねらせている。

友のため復讐の道を歩む彼女とは違う。冷めたようで熱い心を持つ彼女とは違う。遥とは別の何か。

無の地平に血生臭い欲望だけが聳え立つ。唯一《幻象》を討滅でき、そのことしか頭に無い者。

「……ネメシス」

呻きに似た呟きが零れ落ちた。

第26話A：開戦 - outbreak Gods war

「あなたは食べごたえがなさそう。今殺しても困るし、そこで見ていればいいわ」

血の通わない声が小夜に猶予を告げる。

女死神の背後で黒獣が咆哮した。筋骨隆々とした腕を振りかざし、ブレーキが壊れたトラックの勢いで最愛の友に突進してきた。

「こないだ殺し損ねた奴か。私のために肥え太ってくれたの？」

斬撃に風が泣き叫ぶ。

杭のような爪を備えた巨腕がやすやすと切り裂かれ、粘度の高い墨汁を思わせる体液が滴った。

それでも獣の勢いは死なず、巨体が遥の身体を押し潰したかに見えた。

だが遥の周りを高速で踊り狂う蛇剣が、触れるそばから獣の身体を解体していく。獣は自らミキサーに飛び込んだも同然だった。

遂に影の獣の胴体は突貫され、風穴が空いた。

音もなく影の獣は地に伏した。形を維持できなくなったのか、もはや巨大なスライムにしか見えない。

「次は誰？」

細められた目が舐めるように動く。

凍りついたように動かない小夜。離れたところで警戒している綾瀬と彼女に付き従う明人。

「あなたは……」

明人を見たとき、何か言いかけて遥は口を閉ざした。

軽い溜息を漏らし、遥は目を閉じる。

それが見開かれた時、何も変わっていないにも関わらず、もう人間らしさは残っていなかった。

確実に視覚以外の情報を取得している異形の眼。それが再び明人

を捉える。

その視線を遮るように綾瀬が前に出た。全身をスキャンされているような不気味な感覚に鳥肌が立った。

「いつか想像していたことになったわけね。容赦しないわよ？ この娘の情なんかには流される私ではないわ」

「絶対殺させたりしないわ。護つてみせる」

綾瀬が真っ向から受けて立つ気概を見せるも、それを気にした様子もなく遥は視線を外した。

重圧が消えて綾瀬が安堵の吐息を漏らすのが聞こえる。

しばらく何かを探していた遥の眼がある一点で止まった。

高架付近の交差点、車が玉突き事故を起こしている場所。無残な金属の墓石の群れに和服姿の魔人が靠れていた。

「待ち侘びたわ。この時を」

恨み呪った運命の相手を前に遥は舌なめずりをした。

これだけ我慢してきたのだから、手にかけて時の悦楽たるや尋常のものではないはずだ。《復讐の女神》はそのために存在しているのだから。

「それはもう、焦がれるほどでさあね」

殺戮と復讐の眼差しを一身に受け止め、《起源》は身震いした。

遥が歩を進める。《起源》もゆったりと車から背を離れた。

因縁の戦いが幕を上げようとしている最中、急速にエンジン音が接近してくる。

「だけどもたお預けのようね？」

「そのようで。くく、あつしとしてはもう慣れましたがね」

「気が合うじゃない。私もよ」

遥が悪戯っぽく笑い、《起源》も唇を歪めた。

《起源》の後ろの潰れた車をジャンプ台にしてバイクの連隊が次々と飛び出してきた。先頭の1台が乱暴に着地を決めると、鎖を振り回しながら遥に向けて突撃してきた。

だが鉄の鞭が遥の肌を裂くことあたわず、騎手もろとも人の形を

無くした。派手に横転したバイクが血の海を滑っていく。

それを目の当たりにした他のライダー達は、威嚇するように遥の周りを旋回しはじめた。所詮獅子には敵わぬハイエナ。彼我の実力差は承知しているようだった。

そこへ割り込むクラクション。見れば道路の向こうから大型バスが走ってきていた。

バスがブレーキを響かせて止まる。アーマーとメットで武装した黒ずくめの兵士が靴底を鳴らしながら降車し、バスの横に整列した。その数20。

一層濃い瘴気が満ちてくる。窒息しそうなほど甘く、快樂信号を絶え間なく流し込んでくる。

紅い世界の支配者は黒のドレスを身に纏い、ダンスホールに出向くような優雅さでタラップを降りてきた。真つ黒なフード付き外套に身を包んだ側近がすぐ後ろに付き従う。

「おまたせ。さあ、舞踏会を始めましょう。私のために踊り狂いなさい」

独然とした命令が下る。統制のとれた動きで兵士たちが一斉にマシンガンを構えた。

綾瀬と明人の姿がぐにやりと歪み、陽炎の向こうに溶け消えた。盾を持つ《起源》は余裕に構え、遥と小夜はそれぞれ手近な車の陰に身を隠した。

けたたましい音と共に鉛玉が撒き散らされる。車体やアスファルトで跳ね返り、恐ろしい弾幕を形成する。

防御手段を持たない小夜は、消えた2人と《起源》がこの状況をどうにかしてくれるのを待つしかなかった。

「時間稼ぎなどさせないわ」

《魔姫》の声が鈴の音のごとく、紅い大気を渡っていく。

小夜はハッとアキラの方を見た。

黒い塊は大きく脈打ち、魔薬の霧を吸収して獣の形を取り戻しかけていた。銃弾が飛び交う中でアレと戦うなど分が悪すぎる。

恐怖心を払い、小夜は飛び出していた。地面と水平になりつつすれすれを飛ぶ。

空気抵抗を極限まで殺し、今まで感じたこともない速域に達する。全身に月光の力を纏った姿はまさに彗星。

そのまま再生中の影の獣をぶち抜いた。

「!？」

確かにそのビジョンが映った。だが、実感がない。

小夜を影が覆っていた。影の魔物の影。

魔物は跳躍していた。

不定形の塊は《魔姫》の傍に着地した。銃を構える近衛を踏み潰して。

恐ろしい人体損壊の濡音が響き渡る。鮮血に濡れる骨肉や臓腑を無遠慮にかき混ぜる音。

潰した兵士だけでは足りないのか、触手を伸ばして捕まえては闇の中に引き摺り込んでいく。

優秀な近衛兵とは《柘榴》が詰まったタンクと同義なのだ。血肉はもちろん悲鳴さえ飲み込んで、黒獣は身体を取り戻していく。

一瞬啞然としていた《魔姫》がニヤリと笑って言った。

「お腹が空いていたのね？ でも私の家族を食べちゃうのは許し難いわ。まあ、その分しっかり動きなさい」

「承知しております。我が主」

我を取り戻したアキラの身体に影の獣が吸い込まれるように消えた。

ぬめる光沢に覆われた骨と銃器がバラバラと零れ落ちる。

アキラは小山をなすほど積まれた死骸を無造作に崩し、静まり返った戦場を見渡した。

「邪魔よ」

銃撃が止むと同時に行動していた遙は、黒の主従のすぐそばに来ていた。

姿勢を低くして接近する。アキラにむかって《毒蛇》を下から振

り上げた。

だが白い刃は黒い手に握られ、友に届くことはなかった。

「放せ！」

「遥、今ならまだ間に合う。あたしと来てくれ」

アキラの真剣な眼差しを遥は真っ向から切り捨てた。

《毒蛇》は本物の蛇のように暴れるが影の獣が変じた籠手はビクともしない。

「聞こえてないわよ。私を生んだ敵2人を前にして私を抑えようなんて、見くびらないで」

遥は《毒蛇》を置いて距離を取った。

アキラの手元から三又の剣が消え、再び遥の右手に戻ってきた。

「だつてさ、殺してしまえばいいわ。《女神》も欲しいけど本命じゃないし」

「それはできません」

「なに？」

思わぬ反逆に《魔姫》の声が低くなる。紅霧の中で蒼く輝く瞳がアキラを突き刺す。

「遥が意識を取り戻せば、我々の元に帰ってくるはずです。今は《女神》に乗っ取られているだけです」

「ふうん、で？ そんな甘いこと言つてて勝てるの？」

いつの間にか《魔姫》の手には大鎌が現れ、アキラの首にかけられていた。鎌を引きよせて首を顔の前に持つてくる。

「勝ちます。あなたの右腕を信じてください」

《魔姫》の眼を見据え、アキラは言い切った。

「……好きにしないさ」

「ありがとうございます」

アキラは一礼して遥を向き直った。

「今の間に何回死ねたのかしらね」

嘲笑う遥の言葉を黙殺し、真っ向から視線をぶつける。

例え《魔姫》の元での偽りの安息でも遥は喜んでいた。もはや変

えようのない《幻象》としての生を少しでも変えてやりたかった。

「遥、手を貸すから戻ってきてくれ」

「そんな血塗れの手で私が救えるの？ やってみせてよ！」

「……いくぞ！」

剣であり鎧である影を纏いアキラは地を蹴った。三つ首の《毒蛇》を従え、遥がそれを迎え撃つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0226g/>

幻象-Phenomenon

2011年7月7日03時33分発行